武田勝頼 (三) 空の巻

新田次郎

武田勝頼 (三) 空の巻

新田次郎

武田勝頼 (三) 空の巻

新田次郎

講談社

0093-306777-2253 (0)　980円

武田勝頼

㈢空の巻

新田次郎

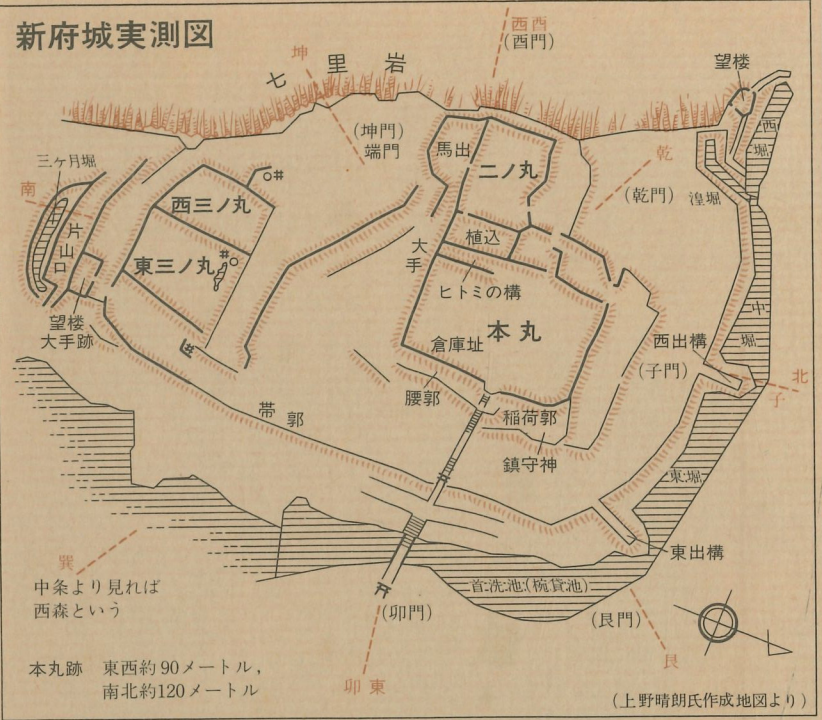
講談社

武田・織田・徳川領土図

（天正三年＝1575年）

能登
越中
越後
陸奥
上野
下野
武蔵
上総
下総
安房
相模
伊豆
甲斐
信濃
駿河
遠江
三河
尾張
美濃
飛騨
伊勢
志摩
近江
伊賀
加賀
越前
若狭
丹後
但馬
丹波
播磨
摂津
河内
和泉
大和
淡路
紀伊
遠州灘
富山湾
若狭湾
伊勢湾
三河湾
大阪湾
琵琶湖
浜名湖
上杉謙信
春日山城
川中島
大町
上田
諏訪湖
諏訪
箕輪城
高遠城
福島城
伊那
武田勝頼
天目山
躑躅ヶ崎
新府城
古府中（甲府）
飯田
駒場
富士川
北条氏政
小田原城
江尻城
大井川
天竜川
長篠城
設楽ヶ原
徳川家康
三方ヶ原
浜松城
高天神城
駿河湾
犀川
千曲川
信濃川
九頭竜川
一乗谷城
高山
岐阜城
小谷城
織田信長
清洲
桶狭間
長島
安土城
京都
石山本願寺
木曽川
伊良湖水道
0
50km

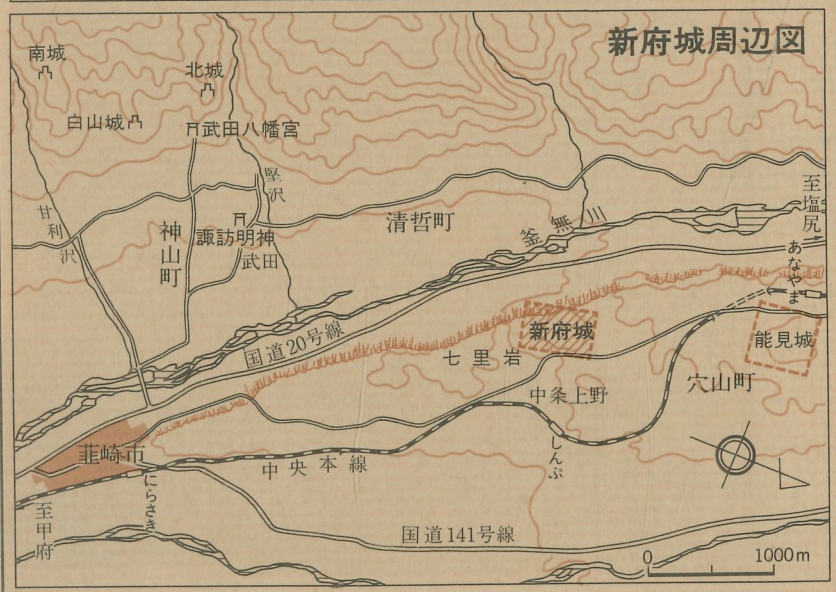
新府城実測図



本丸跡　東西約90メートル，
南北約120メートル

(上野晴朗氏作成地図より)

新府城周辺図



城位置図

新田次郎

武田勝頼

㈢空の巻

講談社

目次

岡崎三郎信康 7
徳姫様 17
信康自刀 27
海将陸上で死す 37
武田水軍敗る 46
抜け駆けの功名は切腹に価す 55
穴山梅雪、離叛の心を決めること 65
亥の刻出撃 75
嗚呼高天神城 85
先方衆の悲哀 94
鎮(しずめ)の城 104
血ぬられた上棟式 114
笠原新六郎 123
伊豆仕置と穴山金山 133
人質御坊丸の事 142
酒屋小僧騒動の事 152
『伊勢物語』の行方 160
木曾義昌逆心の事 170
鳥居峠の敗北 179
貞女願文 189
高遠城血染の桜 199
落人(おちゅうど)の道 209
武田家滅亡 219
あとがき 230

武田勝頼 ㈢ 空の巻

装丁　川田　幹

岡崎三郎信康

天正七年（一五七九）三月、上杉景虎が自刃したころには、武田勝頼は大軍を率いて遠州国安（静岡県小笠郡）に出陣していた。徳川軍は袋井に本陣を置き、前備えを馬伏塚（静岡県小笠郡大須賀町横須賀）に置いて武田軍の動きを見守っていた。

国安は高天神山の南東に当り、馬伏塚は南西に当る。国安と馬伏塚はおよそ、二里半（約十キロ）ほど離れていた。国安も馬伏塚も、海からほど遠くないところにあった。

双方共に盛んに物見を出して敵の陣容を偵察し合っていた。袋井で軍議が開かれた。席上、徳川家康の嫡男、岡崎三郎信康（長男であるのに三郎と号したのは松平家の代々のしきたりに従ったのである）は自ら希望して馬伏塚方面に出動して物見をしたいと申し出た。

「前線に出て、この目でしかと武田軍の陣立てを見て来たい」

そう云う信康を家康は、

「それは物見がすることであって、そちがやることではない。大将は本陣にあって軍全体の動きを見るべきである」

と諭した。

「父上は総大将であるからそれでいいが、私は大将と云っても、名ばかりの大将、もし父上が私を、本当の意味の大将になされたいと思うならば、馬伏塚へやって下さい。実戦を経験しない大将などというものは、絵に書いた大将のようなものです。私はそんな大将ではありたくないと思います」

信康は理窟を云った。

家康も信康の言葉には一理があると思ったので、まず、宿老の酒井忠次にそれについて訊いた。

「戦は、遊びごとではありません。大将があああしたい、こうしたいというのをいちいち取り上げていたのでは、軍の統制が取れません、三郎（信康）様もそれくらいのことはお分りと存じます……」

と反対した。大久保忠世もほぼ同じような意見を述べた。石川数正は黙っていた。

「そちたちは、この信康を何時までも飾り物にして置こうというのか。戦を知らぬ凡庸な武将に仕立て上げ、徳川家の実権はそち等重臣が握ろうとでも思っているのであろう」

信康は二人に向って云い放った。信康は激しい気性だから、このくらいのことは度々云った。しかし、武田軍を前

にしての軍議の席上での放言は家康としても黙っているわけには行かなかった。

「信康、言葉が過ぎるぞ、忠次等はそちのためを思って云っているのになんということを云うのだ」

「ほんとうにこの信康のためを思っているならば、今日までに、ああ、あの時は忠次に世話になった、この時には忠世に厄介をかけたと思い出に残るようなことが幾つかあった筈だ。ところがそういうことは一度だってない。天正三年の設楽ケ原の合戦の時だってそうだ。余は、何回となく前線に出て武田軍と戦いたいと申し入れたが、その二人に反対されて、終に出番は与えられなかった。武将の子としてこれほどの屈辱はない」

信康は二人の重臣の顔を交互に見ながら云った。今日はいままでと違う、云いたいことは云わせて貰うぞという、気魄のようなものが流れていた。

「あの時は三郎様はまだ……」

と忠次が云いかけると、

「年齢のことだろう。たかが十八歳では軍を率いて敵と懸け引きはできなかったと云いたいのだろう。だが、十八歳以下で出陣して功を上げた者は数えきれないほどあるぞ、彼等は、それぞれ、その年齢にふさわしい部署を与えられ、それ相応な働きをしている。ところがどうだ。あの戦いでは、初めから終りまで余は、馬鹿面をして牀几に腰かけていただけだ」

それからのことだって、云いたいことは山ほどあるぞと信康は云った。その云い方があまりにもすさまじいので家康は、しばらく信康の云い分を聞いてやろうという気になった。

「天正四年の秋、勝頼が三千の兵を率いて現われた時、やはりこの袋井で軍議を開いた。余は、いまこそ勝頼と決戦をする時だと主張した。敵は設楽ケ原の合戦で大きな痛手を負っている。しかも小勢だ。敵は三千、味方は五千、戦えば勝てる可能性はある。それなのに、決戦をやろうとせず、まるで敵が引き上げるのを見守るような作戦を強く主張したのは、その二人ではないか」

信康は忠次と忠世を指してそう云った。

「いったい、わが徳川軍は本気で武田軍と戦う気があるのか。敵の兵力がわが軍より圧倒的に多い場合は援軍を織田に求めるのは当然だが、天正四年の秋の如きはわが方が、数においてはるかに有利であった。同じようなことが、天正五年にも天正六年にもあった。勝頼はここから三十里（約百二十キロ）も離れている甲斐の古府中から出て来ている。ところがどうだ此処から浜松城まではたったの五里（約二十キロ）しかない。しかも昔は知らず、今は兵力が伯仲しているのに戦おうとはしない。高天神城が敵の手中にあるということは、徳川家の庭に敵城の存在を許しているようなものだ。だからこそ、何時まで経っても、織田殿にばかにされているのだ」

信康は更に言葉を継いだ。

「わが徳川家がその実力を天下に示すには、独力で武田に勝つことである。それ以外に方法はないのだ」

信康はそこまで云ったが、少々云い過ぎたことに気がついたのかそこで言葉を切った。

「飽くまでも武田軍と決戦したいと申されるのか」

忠次が信康に訊いた。

「そうは云っていない。今は、ただ敵情の見分をさせてくれと云っているだけのことだ。五百そこそこの武田の兵をその六倍の三千という大軍で平らげたことを自慢したり、織田殿の鉄砲に追われて逃げ出した武田軍の拾い首を狙うような考え方しかできない大将が放った物見は、やはり、大将が考えているようなことしか見て来ないだろう。それではいけないから自分自身が行って見て来ると云っているのだ」

と信康は云った。五百の敵に三千の兵が向ったというのは酒井忠次が指揮を取った鳶ノ巣山の戦いを云っており、拾い首云々は大久保忠世をさして云っているのだが、この発言は軍議の席にいる諸将を顰蹙させた。本多忠勝や榊原康政などは、思わず乗り出して、抗議の姿勢を示したほどだった。設楽ケ原の合戦では、徳川陣の多くは柵を出て武田軍と白兵戦を演じた。武田軍が総崩れになってから拾い首的な手柄を上げたのは、むしろ織田信長に従って来た部隊の将兵だった。

まともな大将でない者が放った物見はまともな報告は持って来ないという信康の暴言も大物見、小物見を出した部将に取っては腹立たしいことであった。が、本多忠勝や榊原康政が結局発言しなかったのは、信康の言葉の中にいくつか同感すべきものがあったからであった。

確かに、酒井忠次が信康を見る目は他の重臣とは違っていた。言葉は三郎様と云っているが、心の中ではなにを考えているか分らなかった。

「三郎様はいささか変り者だから……」

などと、子供のころから信康を変人扱いにしていた忠次が、信康の元服が済んでからは、

「お世継ぎ様にはそれ相応の心掛けこそ、肝要でござる」

などと云って、高く持ち上げることのみを考えているようだった。その反発が、このような形で現われたのだと思えば、なんとかこの場の様子も理解できるような気がした。

「信康様が望まれるとおりになされたらいかがでしょうか、ただし脇将としてしかるべき者が必要でしょう。信康様はそれすら迷惑だとは申されないでしょう」

と石川数正が口を出した。

三河の国は、石川数正と酒井忠次の両勢力によって代表されている。その均等勢力の頂上に立って三河をまとめて来たのが松平氏であった。酒井忠次が、強度の織田寄りの柔軟な姿勢に対して石川数正は、どちらかというと三河武

士らしい一徹頑固なところがあった。その石川数正には信康の云うことがある程度分るのである。

「さよう。大物見となると、なかなか面倒です。もしものことがあると、たいへんですので、この本多忠勝が脇将としてお供いたしましょう」

と本多忠勝が口を出した。

「忠勝の同陣には異存はないが、脇将はごめんだ。余は余のやりたいようにする。余の命令どおりに付いて来るというなら、同陣はさし支えない」

信康は見栄を張った。本多忠勝ほどの大将を顎で使いたいと云う信康の言葉には並いる部将もさすがにあきれたようであった。

「同陣で結構です。信康様の云うとおりに動きましょう。して、大物見の人数は、いかほど連れて参りましょうか」

と云った。総大将の家康がいいとも悪いとも云わないうちに話がとんとん拍子に進んで行くのをあきれ顔で見ていた忠次が、

「お館様……」

と声を掛けると、家康はようやく口を開いた。

「忠勝がついておればまず大丈夫だろう。しかし信康、けっして出過ぎた真似をするではないぞ。忠勝を父だと思い、忠勝が引き返せと云ったら引き返せ」

家康は最後の方に力をこめて云った。

信康は、返事をしなかった。彼は、一文字に唇を結び、鋭い目を家康と忠次に向けてから黙って席を立った。

軍議はそれをしおに解散となった。

信康が軍議の途中で口を出したのは、武田軍に関する情報が適確でない不満からだった。

一、武田勝頼は三千の精鋭を率いて大井川を渡って国安に着陣している。

一、勝頼着陣と共に、高天神城には盛んに兵糧が搬入され、兵も一部交替している。

一、高天神城を取り囲んでいる徳川方の城砦は一応兵を撤収し、横須賀の馬伏塚と袋井に集結した。

一、武田軍はいままでになく活発な動きをしている。おそらくこれは、越後の上杉と講和した際、貰った多額の軍資金の影響であろう。

信康の知りたがっているのはこんな大ざっぱなことではなく勝頼が確実に敵陣中にいるかどうか、勝頼は、いままで同様、徳川軍との決戦を望んでいるかどうか、の二点であった。もし勝頼自らが先頭に立って徳川軍に決戦を挑もうというならば、受けて立つべきだというのが信康の考えだった。

「敵がわが軍と決戦に出るつもりならば、わが軍もそれを覚悟でかかれば必ず勝つと思うがどうか」

信康は馬伏塚の城砦へ行く途中で馬を本多忠勝のそばに寄せて訊いた。

「必ず勝ちます。そこのところは信康様のお考えと同じです。敵が決戦しようというのに、逃げることはありません」

「いままでは逃げた」

「未だに、武田の騎馬隊をおそれている者が多いようです。設楽ヶ原の合戦であの大勝を博した今でも、武田の騎馬隊には勝てないと思いこんでいる者が多いのは困ったことです」

「酒井忠次がそうだ。ああいう男がのさばっている限り、徳川はほんとうの強さが出せないのだ」

「お言葉をおつつしみ下さいませ。二度とそのようなことを申してはなりませぬ。ことと次第によってはお命にもかかわります」

忠勝は馬を止めて云った。怖い目をしていた。信康のためを思う目であった。

「分った。もうそのことは云うまい。云ってもどうにもならぬことだ。結局は自分でやるしかない」

その言葉が、忠勝にはまた気になった。

「自分でやるとは？」

「いや、ひとりごとだ。なにごとも、他人には頼らず独力で処置しなければならないと云っているのだ」

信康はそれまでになく慎重な言葉使いであった。しかし忠勝には、自分でやるしかないと信康が云った言葉の中に、不穏なものを感じた。

（信康様は重臣酒井忠次を亡き者にしようと考えているのではないだろうか）

そんなことはあり得ないのに、そんなことがふと頭の中に浮び上ったのである。

現在における、酒井忠次は徳川家康より同等またはその上にあった。三河の半分を握る大名だということもあるが、織田信長の気に入りであったからである。なにかあれば信長は忠次を呼んで相談した。そこで決ったことは、織田信長の命令として家康に伝達されていた。家康は一言もその決定に口出しすることは許されなかった。家康は信長との力の差以上に、家臣団の頭領としての酒井忠次に気を配っていたのであった。忠次は益々信長に接近し、家康は、信長忠次路線の前に従伏していた。

「敵が決戦に出るつもりならばとさきほど仰せられましたが、そのような場合は、不思議に兵たちの気が張り、たとえば、物見の出合なども、普通の場合ならば、物見が物見を見ると双方が避けて通るものですが、決戦を意識した物見は、そうはせず、必ず、打ちかかって来るものでございます」

と本多忠勝が云った。

「なるほど、そうもあろう。そういう実戦の匂いのようなものをおれは嗅いで見たかったのだ」

信康は忠勝に云った。

信康は百騎、忠勝も百騎率いていた。大物見というよりも、ちょっとした部隊であった。

馬伏塚の砦は文字通りの砦であって、千人ほどで囲んで攻められたら、一日とは持たないようなものであったが、一応は砦としての形をしていたから、信康と忠勝はその日はそこで馬を休ませることにした。その夜である。遅くなって下弦の月が上ったころ、忍びの者が帰って来て、信康と忠勝に報告した。

「寺部のあたりにおよそ五十騎ほどの敵がかくれております。どうやら物見らしく、足軽は従えておりません」

寺部は馬伏塚から東方へ一里余（約五キロ）のところにあった。高天神山の南に当っていて、寺部の西部は低い山陵地帯になっており、東部は小笠川が南北に流れ沼沢地の多い水田地帯になっていた。

「おそらく武田軍はそこに五十騎を伏せて置き、いざという場合、遊撃隊として使うつもりであろう」

物見の報告を聞いた信康は云った。

「まずは、その御観察は正しいと存じますが、相手は武田勝頼、油断はなりません。なにごともそうと決めてかかることは危険でございます」

と本多忠勝が云った。

「その他にどのような見方があるのだ。云ってみるがよい」

信康は、自分の意見にけちでも付けられたかのように開き直った云い方をした。

「誘いという手がございます。五十騎を餌にわれ等を誘い出して討ち取ろうという策謀でないと云い切れましょうか」

「だが、そこには五十騎しかいないという物見の報告だ」

「わが方の物見の目に発見できないようなところに隠れているかもしれませんし、またほかの何等かの手立てを考えているかもしれません」

本多忠勝は云った。

「誘いなら、誘いに乗ったように見せかける手もある。要は敵が決戦を望んでいるかどうかだ。もしそうだとすれば、こちらが動けば、必ずや何等かの反応が現われる筈だ。そのようなことを、きのう、そちも云ったではないか」

「軍全体が決戦の気構えでいると物見もふだんと違って好戦的になると申し上げました。寺部にいるのが敵の物見なら、わがほうも少しまとまった物見を当てて、つつき出してみるのもよい方法です」

「その物見を余がやろう」

「それは困ります。三郎様は大将です。大将自ら物見に出るなどということは許されません」

「なんだ。それでは袋井での議論の蒸し返しだ。とにかく余は明朝寺部を襲って、武田の騎馬隊を痛い目に合わせてやるぞ。敵がどう出るかは、その後の動きで分るだろう」

信康は忠勝がいかに止めても聞こうとしなかった。強情な男だった。

「では、私もお供をしましょう。しかし、私が退けと云ったら、私の云うとおりにお退き下さい。これだけはお館様の言葉どおりにすると約束していただけなければ、私が腹を切らねばなりません」

信康はそれを承知した。

翌朝未明、信康は騎馬武者百騎、足軽三百人、本多忠勝もほぼそれだけの人数で、寺部へ向って繰り出した。この辺の地理にくわしい者を道案内人に立てての進撃だった。

寺部の近くまで来ると、先に物見として出して置いた数騎が駈け戻って報告した。

「寺部には敵の姿がありません」

「そんな筈はない。少なくともわれらが馬伏塚を出発する直前まではいた筈だ」

と本多忠勝は一言洩らすと同時に、ほとんど反射的に、

「敵の罠だ。まさしくこれは敵の陥穽だ……」

忠勝は、そう云うと馬に鞭を当てて、信康の傍に駈けつけ、

「すぐ馬伏塚にお退きください。われらは敵の罠にはまりかけています。はや、お退きください」

と云った。しかし信康は、大して驚いた顔を見せず、

「敵が居なくなったからと云って、われ等が敵の陥穽に落ちたという証拠がどこにあるのだ。落ちたかどうか、確かめるまで退かないぞ」

信康は強引に馬を進めようとした。

この時である。海岸方面へ出して置いた物見が帰って来て、

「敵の大軍、浜野のあたりを海岸沿いに西に向って攻め寄せて参ります」

と報告した。

緊急の場合だから大軍という表現を使った。それほど来襲は急のようであった。

国安から馬伏塚に通ずる道はあるが、馬二頭が並んで走るのもやっとくらいの狭い道である。この道を通って大軍の進撃は不利と見て、武田軍は海岸沿いに進撃を開始したのである。敵の目的は馬伏塚の砦を封鎖し、信康と忠勝の二隊を取り囲むためであった。

敵の大軍が海岸沿いに攻めて来ると聞いた信康は、はっとした。その時になって彼は自分たちが敵の陥穽にはまりこんだことを知った。彼は顔面を蒼白にして云った。

「退くか、このまま進んで血路を開くか」

「敵の大軍が浜野のあたりを西に向って前進したというならば、おそらく今ごろは、馬伏塚のあたりに達しているでしょう、われ等は退路を断たれている」

忠勝が云った。

「では進もう。それ以外に道はないだろう」

信康は云った。

「おそらく、前方にも敵が待ち受けているでしょう。しかし、今となったら北に進むより道はございません」

忠勝は云った。
信康と忠勝の率いる部隊は寺部に入った。予想したとおり、国安から派遣されて来た武田軍が進路を遮断していた。
「今だ。今のうちなら、通り抜けられる。沼沢地の間を斬り抜け、土方に出て、小笠山の峠を越えて袋井へ抜けよう」
と忠勝は進路を示し、それぞれの部隊に案内者を立てた。
寺部に五十騎を置いたのは武田軍の計略だった。その計略に引っかかって、信康と忠勝が出て来たという情報を摑んだ勝頼は主力を海岸沿いに西進させて馬伏塚の砦を包囲し、内藤修理亮昌月が指揮する三百騎を寺部に向けた。
勝頼の考えでは、信康、忠勝の部隊は、必ず馬伏塚に引き返すと思っていた。そうなれば、馬伏塚の城砦にこもる徳川軍は信康、忠勝の軍を救うために城砦を出て戦うだろう。その兵力合わせておよそ、千五百ほどになる。勝頼の率いる二千五百の兵はこれを押し包んで討ち取ることになるだろうと考えていた。だが、徳川信康と本多忠勝の軍は馬伏塚には帰らずに北に逃げようと決意した。従って、内藤昌月の率いる上州軍と信康、忠勝の三河軍とが血みどろな戦いをすることになった。
内藤修理亮昌月は名将と云われた内藤修理亮昌豊の子である。彼は設楽ヶ原で戦死した父の名を継いで大将になったが、実戦の経験には乏しかった。もし彼の父昌豊がこの場の大将だったら、沼沢地の要所要所を人数でかためて、信康や忠勝の軍が土方方面に抜け出る道をふさいだであろう。相手と戦って首を取ることを考えるより先に、退路を遮断することをまず考え、やがて、本隊が到着した時、袋の中の鼠となった敵を討ち取ろうと考えたに違いない。そうするには絶好の地形だった。
しかし昌月は若かった。彼はなにかと云うと名将内藤昌豊の子だと云われた。だから名将の子にふさわしい手柄を早く立てたいと思っていたところに、好餌が現われたのである。
「進め、進め、敵を一人も逃さず討ち取れ」
と彼は号令した。敵の退路を遮断せよという命令を出さずに進んで戦えと命じたのであった。
田植え前の田圃には水を張ったものもあり、そうでないものもあった。合戦は沼沢地をさけて、田圃の周辺で行われた。
騎馬隊がその能力を自由に生かすことのできるような地勢ではなかったが、両軍とも馬を主体としての戦争をやった。
内藤昌月は三百騎に足軽九百人、合計千二百人であった。これに対して信康は百騎に対して足軽三百人、本多忠勝もほぼ同数だったから、合計八百人であった。人数の差はたちまち表われた。徳川軍は次々と討たれて行った。

信康自身も太刀を抜いて、敵と渡り合った。馬を寄せての斬り合いだった。
「加藤駿河守景忠……」
と名乗って斬りこんで来た相手の太刀が、頭上に振りおろされたのは知っていたが、次の瞬間、信康は落馬していた。馬が槍に突かれて棒立ちになったからだった。
「はや、わが馬に」
信康の家臣の太田三郎左衛門が、自分の馬に信康を乗せると、その馬の尻を槍の柄で力いっぱい叩いた。馬は信康を乗せたまま田の中を走って道に出た。その周囲を数騎が守り、二十人ほどの足軽が取り囲んで、土方に向って一路退いて行った。
「こら、引き返せ、忠勝を見殺しにするな」
と信康が怒鳴っても、家来たちは見向きもしなかった。信康の乗った馬の手綱を引いている足軽は、耳が聞えぬかのように無表情であった。
入山瀬まで来たとき、本多忠勝が追い着いた。彼は全身に返り血を浴びていた。
そこらあたりで兵をまとめたいけれど、追撃が急で休むことができなかった。重傷を受けた者は敵に討たれるのをいさぎよしとせず、その場で自刃する者もいた。彼等は小笠山の峠についてようやく軍をまとめた。生き残りは十三騎と百八十三人であった。
信康は夢を見るような気持だった。いったい、なにがあったのかも、はっきり分らなかった。大将でありながら、味方を指揮したおぼえもなかった。ただどっと押し寄せて来て、彼を取り囲んだ敵兵を相手に無我夢中で太刀を振り廻し、そして馬から落ちたことだけを覚えていた。そのような混乱の中にも、本多忠勝が、あっちに廻れ、こっちを助けろ、などと怒鳴っている声はよく覚えていた。
「面倒をかけたな」
袋井からの援軍の姿が見えたとき、信康は忠勝に云った。反省と感謝をこめた言葉であった。
「敗戦のことは気にさらぬように、今日の戦いを基にして明日の戦いのことを考えなされよ」
と忠勝は信康に教えた。
袋井の家康の本陣には既に敗戦の報が入っていた。だが、信康が無事であったのを見ると、家康は自ら出迎えに出たほどであった。信康の兜の鍬形の片方が落ちているのを見た家康は、思わず声を上げたほどだった。鎧には返り血がついていた。
緊急軍議が開かれた。
物見の報告によると、武田軍は馬伏塚の砦はそのままにして、隊伍を整えて前進の気構えであるということだった。
「飽くまでも決戦を望もうというのか、勝頼め」
と家康が云った。その言葉の中には、怒りがあった。相手がそのつもりならばという敵意がにじみ出ていた。家康

は諸将の顔を見渡した。勝頼が敵陣内にいることはほぼ間違いないし、彼が決戦を望んでいることも確実だった。

（やろうか。わが徳川家の名誉にかけて武田と一戦をここころみようか）

という家康に対して、部将の多くは姿勢を正して答えた。だが、酒井忠次ひとりは違っていた。

「勝頼とはまともに戦うな、放って置いても武田は自滅する、と日頃から云われている織田信長様のお言葉を、みなの衆はよもや忘れては居ないだろう。かかる場合は、敵をして奔命に疲れ果てせしめるこそ上策、早々浜松に引き上げましょう」

忠次は結論を云った。それに対して反対意見を云う者はなかった。云いたくとも、織田信長の名が出た以上云えないのである。

「忠次！」

と大きな声で酒井忠次の名を信康が呼んだ。いくら家康の嫡男であったとしても、その呼び方は不謹慎であった。せいぜい雅楽頭と呼ぶべきだった。

忠次もむっとしたような顔で信康の顔を見た。

「忠次は徳川家康の家臣なのか、織田信長の家臣なのか」

これには忠次も返事ができなかった。忠次は、苦り切った顔で信康を睨めつけると、

「常に云いたい放題を云い、常にしたい放題をしていながら、まかり通ることができるほど世の中は甘くはござらぬ、三郎様、そんなことをしていると、この次は兜の鍬形だけではすまされぬようなことが起こりまするぞ」

酒井忠次はそう云うと席を蹴立てるようにして外へ出て行った。

家康はその忠次の後姿を心配そうな顔で見送っていた。

徳姫様

信康はずっと無言だった。浜松城には立ち寄らず、真直ぐに岡崎の居城に向う道中もほとんど口をきかなかった。彼は少年のころから、はしゃぎ出すと、限り無く騒ぎ廻り、黙りこんでしまうと二日も三日も人と口をきかないような性格を持っていた。長ずるに及んで、その明暗二重の性格の差は無くなったように見えたが、それは見掛けだけでほんとうはいささかも変ってはいなかった。彼は袋井の本陣で軍議が為されて以来、武田軍の包囲を脱して危うく帰陣して、酒井忠次に向って暴言を吐くまですこぶる饒舌であった。しかし、袋井を離れ岡崎城に向ってからの彼は、なにか淋しげな顔をして黙りこくったまま馬を進めていた。家臣がなにか云ってもただ頷くだけだった。

彼の心の中は反省でいっぱいだった。なぜあんなことを云った。なぜあのような軽率の行為をしたか。そのため多くの家臣を殺した。その責めは負うべきである。忠次に対しても云い過ぎたことを後悔していた。彼が最後にこの次は兜の鍬形だけでは済まされないぞと云った言葉の意味を考えた。

（兜の鍬形なら落ちても、また付け直せばよい。しかし人間の首は、そういうわけにはいかないぞ）

忠次はそう云いたかったのではあるまいか。忠次は信長に近い人だ。信長には父家康以上に信用されている男だから、忠次の考え一つで、自分の命などどうにでもなると考えると、忠次にたてついたことが悔やまれてならなかった。

（以後、あのようなことは絶対にしてはならない。おれは徳川家の跡取りなのだ。しっかりしなければならない）

彼はそのように自分に云い聞かせていた。

（そうだ。岡崎城についたら、平岩親吉とよくよく相談して、改めて忠次のところに、詫を入れよう）

そこまで彼は考えると、幾分気分も楽になった。

信康は岡崎城に入ると、広間に家臣たちを集めて、馬伏塚から、寺部、土方、小笠山峠にかけての武田軍との戦いについて洗いざらい話した。

「これは小競合いというふうなものではなく、明らかに合戦であった。味方八百に対して敵は千二百という不利な情勢にも関わらず、味方はよく戦った。そして敵の重囲を破って帰って来たが、この戦いで討死した者は多い。家来たちは余のために命を投げ出してくれたのだ……」

彼はその後が云えずに、涙を拭いた。

「戦死した者が独身ならばその一族の者を、もし子供があ

ればその者を、いままで同様な待遇を以て迎える。また戦死した遺族には夫々その死を飾るにふさわしいはなむけの金品を与えるであろう」

と云った。家臣たちは、粛然としてそれを聞いていた。

「余は、徳川家の嫡男としてわがままに育った。そのために時とすれば、常軌を逸するような行動をすることがある。そんな時は、遠慮することなしに、余の悪いところをただして貰いたい」

信康は沈痛な顔で云った。彼は家臣たちの前できわめて常識的なことを話した後で、奥の間に平岩親吉を呼んで、なにがあったかを更にこまかく話して、

「どうも今度ばかりは、余が悪かった。雅楽頭（酒井忠次のこと）には、折を見て謝罪して置いた方がよいと思うがどうか」

と訊いた。

「おおよそのことは早馬を以て聞き知っておりました。そしてここでまた、三郎様からことの次第をくわしく聞いて、私は、若様よく云われました、よくなされましたという気持でおります。なんで雅楽頭殿にわびを入れる要がありましょうや、むしろお世継ぎの若様に対して、鍬形云々の言葉を吐いて立ち去った雅楽頭殿こそ糺弾されるべきです」

と云った。

「するとお前は……」

信康はむしろ意外な顔をした。

「若様を戦場に出さず、供え物の御曹子のようにしているお家の重臣たちの考えは間違っています。今度のような合戦の経験こそ、若様には必要なものです。大将になるために、血の雨の中をくぐらねばなりません。お館様（家康）さえ、三方ケ原の合戦では自ら刀を抜いて敵と戦ったのです。若様がそれをしてはいけないということはございません」

と平岩親吉は云った。

「だが、雅楽頭にはひとことだけ挨拶して置いたほうがいいのではないか」

「そんなことをすればあの男は益々つけ上るでしょう。今でさえ織田殿を笠に着て、時にはお館様以上な振舞いをしている、あの酒井雅楽頭に、なんで頭など下げる必要がありましょうか」

親吉は声を荒げて云った。

平岩親吉にそう云われると、信康としても、それ以上強く云うことはできなくなった。三郎信康の悲劇はこの瞬間に決ったようなものであった。そして、その悲劇を書く前には、ここまでになった経過を説明しなければならない。

平岩親吉は松平家に代々仕えた平岩親重の子であり、家康と同年輩であった。家康の側近として常に傍にいた。家康が信康の傅役として平岩親吉を指名したのは、その誠実

な人間を信頼したからであった。

確かに親吉は誠実であった。彼は人に仕えるには適した人であったが、人を導き、人を教えるということにかけては、不足しているものがあった。彼は家康に信康の傅役を命ぜられたとき、立派な武将になるよう育ててくれと云われた。彼はその一言にこだわった。彼は家康の言葉を誠実に履行するため、信康の人間形成に重きを置くべきところを、ひたすらに武将たるべき人として作り上げたのであった。

親吉は、信康に対して幼いころから棒を持たせ、刀を持たせた。弓矢を教え、鷹狩を教えた。つまり、親吉は強い武将として信康を育て上げるために、精神教育をおろそかにして、乱暴者に育て上げてしまったのである。

信康が七歳の時だった。子猫が信康にじゃれついて、腕に爪を立てた。血がにじんだ。信康が痛いと云って泣いたら、

「若様は武将の子です。猫などに負けてなんとなさる。さあ、この刀で見事、その子猫を殺しなされ」

と云い、子猫の首に紐をつけて庭の木に繋いでから、脇差を抜いて信康に渡して、子猫を殺せと云った。

信康ははじめは恐れていたが、親吉に云われるままに、刀で子猫を突いた。子猫は悲鳴をあげた。子猫の血を見た信康はその血に昂奮したかのように、逃げ廻る子猫を追って突きまくりとうとう殺した。

「よくぞ、なさいました」

と親吉はその信康を讃めた。親吉は、信康を強い武将に育て上げるためには、このようにしなければならないと考えてのことだったが、このようなしつけ方が信康を粗暴な、時には狂暴と思われるような性格にしてしまったようであった。

酒井忠次はこの傾向を憂えた。忠次が家康に傅役を交替させよと上申したのは、信康が十歳の時、侍女の云ったことが気に入らないから殺すと称して、刀を抜いて、邸内を追い廻した事件の直後であった。家康もこのことを聞いて、さすがに驚き、平岩親吉を呼んで厳重に注意した。

「忠次は傅役を変えろとまで云っているぞ、信康のわがままをこれ以上許してならぬ」

家康は、もし平岩親吉に傅役を止めよと云ったら、彼が切腹して果てることを知っているから、注意だけに止め置いたのである。しかし親吉は、

「もともと、女の方が悪いのでございます。若様にいたずらばかりなさらず、もう少し本を読めなどと、余計なことを云ったのです。だから若様が怒ったのでございます。家臣が主人に対して非礼を働けば罰するのは当然です。若様が刀を持って追い廻したのは、武将の御子として当然なことをされたまでです」

と云って信康をかばった。親吉は信康に対する甘やかしがこのような事件を起したことには気がつかず、傅役を免

ぜよと家康に上申した忠次をひたすら憎んだ。
その夜、家康は築山御前（家康の正室、信康の母）のところへ行ったとき、こう話をした。生みの親としての意見を訊いたのである。
「お館様は、竹千代（信康の幼名）がそのようなことをしたわけをお聞きになりましたか」
築山御前は家康に云った。
「いやそれは聞かなかった。いったいなにがあったのだ」
「竹千代がおたけという侍女の着物の裾をまくり上げたのでございます。だからおたけが、そのようないたずらをなさらずに、本でも読みなさいと竹千代に云ったのです」
「そうだったのか、それで竹千代は刀を抜いて、そのおたけを追い廻したのか、よくないな」
家康は首を振った。
「よくないのは竹千代ではございません。そのような、いやらしい性格を植えつけたあなたにあるのです。そういうことは父親の性格がそのまま子供に移るものです。あなた自身が、私以外の女に手当り次第、お手をつけられるようなふるまいをなされるから、竹千代もまたそれを見習ってそのようなことをするのです。竹千代を叱る前にまずあなた様が品行を改めることです」
それこそ筋違いの云い分だと家康は云おうとしたが口には出なかった。もともと家康は正室の築山御前には頭が上らなかった。
家康は今川義元の人質として駿河にいた長い年月を思い出した。彼は八歳にして人質として駿河に送られ、十五歳の時、関口刑部少輔義広の女のつる（今川義元の姪に当る）と結婚した。つるは一つ年上の十六歳であった。結婚してからつるは駿河御前と称せられるようになった。後の築山御前である。
当時、家康はまだ人質の身であったから、今川義元の姪であり、年上の駿河御前には、一目置いていた。なにかにつけて駿河御前が主導権を握り、家康は小さくなっていた。二人が結婚して三年経って信康が生れ、そしてその次の年に亀姫が生れた。家康が十九歳、駿河御前が二十歳の永禄三年（一五六〇）のことであった。この永禄三年は家康の運命を変える年であった。この年の五月、今川義元は西上の途上、桶狭間において織田信長の奇襲に遇って討死したのである。
家康は今川義元の死によってようやく三河の岡崎城へ帰り、家族や家臣たちと生活を共にすることができるようになった。駿河御前は岡崎に来て築山に建てた御殿に住むようになってから、築山御前と呼ばれるようになった。永い間の苦労の末、家康主従はようやく安定したように外見的には見えたが、実際は主家の今川義元が織田信長と交替しただけのことであった。むしろ、織田信長の方が、きびしい態度を以て家康に臨んでいた。出兵の催促が連続した。合戦では、常に先方衆として戦わねばならなかった。多く

の家臣が死んだ。
織田信長は徳川家から人質は要求しなかった。そのかわり、自分の女の徳姫を信康の正室として送りこんだ。信康、徳姫共に九歳の年のことであった。
「年端も行かぬ嫁御を送りこんで、わが家を名実共に織田家の被官にするつもりでしょう」
その話を聞いた築山御前はすこぶる機嫌が悪かった。
彼女は今川義元の血を引く家柄を自負していた。今川義元を殺した相手の織田信長の女を吾子の信康の正室として迎えるなどということは考えていなかったことである。彼女はこの縁談の仲立ちをした酒井忠次をひどく憎んでいた。
「忠次が平岩親吉の傳役を免ぜよとあなたに上申したというのはほんとうですか」
築山御前の声で家康ははっとした。現実に返った彼はしばらく呆然としていた。
「なにを考えていたのです。また新しい女でも引張りこもうと考えていたのでしょう」
築山御前の嫉妬のはげしいのには困ったものだと家康は思った。
「そうではない」
「ではなにを考えていたのです。やはり、忠次の云うことを聞いて、親吉を傳役から除こうと考えていたのですか。それほどまでに忠次に義理立てする理由はなんですか。信長が怖いのでしょう、あの尾張のうつけ者がそれほど恐ろしいのですか」
築山御前はまくし立てた。家康は嫌気がさした。とてもこのような女の傍で一夜を共にすることはできないと思った。彼は立ち上った。
「どうなさるのですか」
「ちょっと気になることがあったから、今夜はこのまま帰る」
「いえ、帰しません。その足で、他の女のところへ行くことはちゃんと分かっています。その顔に書かれています」
家康はそういう築山御前のところを逃げ出すようにして外へ出た。嫉妬深い彼女から側室達を守るために、別に築山に御殿を建てそこに彼女が住むようにしたのが、彼女の嫉妬心をかえって煽り立てたようであった。
家康はなるべく早く、この城を信康に任せて他に移りたいと思っていた。築山御前の許から逃れ出ることが、今川義元の人質からほんとうに解放されることだと思っていた。
それから二年経った元亀元年（一五七〇）に、竹千代は岡崎城において元服式を挙げた。当時の元服式は十五、六歳であった。十二歳の元服式というのは異例であったが、家康が戦略上浜松に移るために、止むを得ない処置であった。竹千代は元服して岡崎三郎信康と名乗った。三郎は松平家代々の名前であった。

竹千代（信康の幼名、父家康の幼名と同じ）と徳姫は九歳で名義上の結婚はしたが別居していた。時折、顔を見合わせるぐらいのものであった。

「信康様は元服されたのだから、徳姫様と、もっと親しくなされるようにしてはいかがでしょうか」

と徳姫の侍女が申し出たが、築山御前がそれを許さなかった。信康が元服して、家康が浜松に去ってから、岡崎城では築山御前の発言力が強くなっていた。

「十二や、十三の子供を一つところにおいて、飯事遊びでもさせようというのですか。信康は東海一の弓取り今川義元公の血を引く者、そのような俗人の遊びなど用なきことです。傅役の平岩親吉が申しているとおり勇武を尊ぶ遊びこそ男子の遊びと思います」

築山御前は信康と徳姫の接近をさまたげた。信康と徳姫はそのまま別々に育って行った。徳姫が十五歳の春初潮があった。そのことは早速、築山御前に報告された。築山御前は嬉しそうな顔もせず、

「女である以上年頃になれば初潮があるのは当り前のこと」

と云った。信康の身体については親吉から、

「もはや、嫁殿を迎えるにふさわしい身体になりました」

と報告があった。当時は性的能力の出発時は女性は初潮、男性は発毛をもって標準としていた。政略結婚の場合は、女子は初潮、男子は発毛を待って結婚させられたものであった。

築山御前はその報告を受けると立ちどころに云った。

「それは大人になりかけたということで、大人になったということではない。もう一年待って、両人がほんとうの大人になってから一緒に住まわせるがよい」

築山御前の云うのは正しかった。二人に取ってはその方がよかったのだが、織田信長は、徳姫の侍女からの報告を受けると、

「築山御前という女は、自分の子供の結婚にまでやきもちをやくのか」

と渋い顔をしていた。信長としたら、早いとこ、徳姫と信康の正式結婚を成立させたいと思っていたのである。

徳姫は信長に似て美しい女だった。信康は家康の少年の頃に似て凛々しい少年だった。二人は周囲の者に云われて、それぞれの配偶者たるべき相手に関心を持つようになった。築山御前は双方が会うことを禁じていたが二人の側近者は、なにかにかこつけて二人を逢わせた。二人は強く相手を意識し合った。恋のような感情が芽生え出したころ、二人はようやく真の結婚式を上げた。信康、徳姫共に十六歳であった。

二人は他人がうらやむほどの仲のむつまじさであった。信康は徳姫の傍をかたときも離れなかった。粗暴な性格が改まり、やさしい若者となった。家臣にもやさしい声を掛けるようになった。

徳姫は十七歳で女の子を生んだ。

女子誕生を聞いた築山御前は、

「女では後継ぎにならぬ」

と一言云ったきりだった。

徳姫は、十八歳のとき引き続いて妊娠した。そして十九歳の春、また女の子を生んだ。

「女の子を二人も続けて生むというのは、よほど甲斐性のない嫁と見受けられる。おそらく世にいうところの女腹というのであろう」

築山御前は信康を呼んで云った。

「女腹とはいかなることですか」

と訊く信康に、

「男の子は生めない女のことです。おそらく徳姫はこれから何人生んでもすべて、女の子でしょう。世継ぎを望むことは無理です。嫁は世継ぎを生むためにあるのであって、世継ぎが生めないような女はどうにもしようがないというほかありません。信康はもう十八歳、徳姫だけに熱を上げている年齢でもないでしょう。側室を入れて、早々に世継ぎを生ませることです。お家を安泰にするために、それがなによりです」

と築山御前は云った。家康が側室を持ったのに徹頭徹尾反対し、側室たちにもつらく当っていた築山御前が息子の信康には側室をすすめたのである。

「いまは徳姫が産後の床にあるのだから、ちょうどよい。実は側室として信康にふさわしい女御をこの母が見立てて置きました」

築山御前は信康を連れて別室に行った。そこに十七、八の娘が坐っていた。

「武田信虎殿の家臣日向昌時殿の女の八重と申される。日向殿は信虎様が信玄によって駿河に追放されるとき、一緒に駿河に参られた御仁で、私が駿河に居たころからの知り合いです。立派な御仁だった。この八重殿を私のところにお世話下さったのは医師の若瓊殿です」

と築山御前は八重を信康に紹介すると、しばらく話でもしてみるがよいと云い残して部屋を出て行った。今でいうところの見合いであった。

八重は初めは固くなっていたが話し出すと、素直になんでも答えた。浪人暮しの父が貧苦の中に死んだので、母が随分苦労した話などをした。苦労して育てられた女としては八重は明るかった。なによりも信康の気を引いたのは、徳姫のような華奢な身体つきではなく、長刀でも持たせたら、五、六人の男を相手に戦えるような体格をしていたからだった。

「武術の心得があるのか」

と訊く信康に、

「いささか、長刀を……」

とうつむきながら答える顔も可愛らしかった。

「余と試合をしてみないか」

信康は、うっかり云ってしまった。まさか女と試合をしようなどとは思ってもいなかったが、なんとなくその言葉が出たのであった。

「仰せとあらば」

八重はいささかも悪びれずに云った。

信康は家来たちに命じて、用意をした。信康は木刀、八重は木の長刀を持った。二人が木刀と長刀で試合をするというのを聞いた築山御前も観戦に出て来た。

「八重殿が長刀を使うとは知らなかった。能ある鷹は爪を隠すとは、こういうことを云うのでしょう」

築山御前はいよいよ八重が気に入ったようであった。

試合が始った。意外なことが起った。八重の長刀を信康があしらい兼ねて一歩一歩退って行くのである。もう一歩で信康は池の中に飛びこまねばならないところまで追いつめられたところで、八重は、二歩ばかり飛び下り、長刀を捨てて、信康の前に平伏した。

「参りましてございます」

誰が見ても信康の負けであったが、八重は勝を信康にゆずったのである。

「八重殿、その長刀の術は誰に学んだのか」

という築山御前の問いに、

「母でございます。母は長刀を教えて、生計を立てておりました」

八重の母即ち日向昌時の未亡人は長刀を武士の女たちに教えて生計を立てていたのであった。築山御前は、八重を絶讃した。信康には八重を直ぐにでも側室にするように云った。このような女に男の子を生ませたいとも云った。信康は、八重の中に、徳姫にない女性の美しさと強さを見た。額に汗をにじませて打ちかかって来る長刀の鋭さと、その時の八重の澄んだ目が美しかった。

八重は築山御殿の一室に局を設けられ、そこに信康が通うようになった。

信康には、新しく八重を迎えたことで新しい人生が始ったように思われた。八重が側室となって迎えられてから、たった一度だけ、信康は、長刀との試合を望んだが、八重ははげしく首を振って云った。

「若殿様のお情けを日夜受けている私が、どうして、長刀を持って戦えましょうや」

八重は赤い顔をして云った。

信康が築山御前の八重のところに昼となく夜となく通っているということは、間もなく正室の徳姫の知るところとなった。

「側室を持ってはならないとは云いませんが、持つなら持つで一言ぐらい挨拶があってもいい筈なのに」

侍女の於富字が徳姫に云った。於富字は酒井忠次が徳姫の腰元として送りこんだ女であった。

徳姫は黙っていた。父の信長も母以外に側室を幾人も持っていることを知っている彼女は、いつかそういうことも

あるだろうと想像していた。産後の肥立ちがいいから、やがて床払いが出来るようになったら、信康はきっと自分のもとに帰って来るだろうと思っていた。

やがてその日がきた。床払いが済んだ徳姫はあでやかに化粧して、信康に迎えを出した。一声で来ると思ったが、信康は来なかった。次の夜も、その次の夜も信康は側室八重のところに足を運んでいた。

於富字が、このままでは徳姫様があまりにもお可哀そうですからと、信康のところに申し出て、ようやく徳姫のところを訪れたのは床上げの祝いがあってから十日目であった。

「三郎様はもはや私をお忘れになったのですか」

徳姫は信康の顔を見るなり云った。信康も、すぐ来ないで悪かったと謝ろうと思っているところに、いきなりそう云われたので、カッとなって、

「ああ忘れたいよ、お前のことなど忘れたいと思っている」

と心にもないことを云ってしまった。徳姫は激怒して、昂奮して自分の云っていることが分からなくなった。

「このことを岐阜の父上（信長）に云いつけて、あなたなど切腹させてあげる」

と云った。徳姫も信長の娘だという意識が常にあったから、ついこんなことを云ってしまったのである。これは信康にとって聞き捨てならないことだった。

信康は足を上げて徳姫を蹴った。姫の呼び声で人々が集って信康を別室に運んだ。信康と徳姫の間には深い溝ができた。

於富字の知らせで酒井忠次が岡崎城に来たのは、それから十日後であった。その時、信康は矢場で弓の稽古をしていた。酒井忠次が来たという知らせを受けると、すぐ徳姫のさしがねだと直感した彼は、

「用があれば、ここに来るがいい」

と家来に云いつけた。徳川家の重臣を矢場に呼びつけるなど、家康でもできないことだった。家臣たちはおろおろして結果を見守った。

忠次は、矢場に来ると、信康の弓の上達を讃めたあとで、

「すでにお察しのことと思うが、徳姫様との間にもつれごとなど起せば、みなみなが困り申すゆえ、いい加減に仲直りあそばされるように忠次からお願い申し上げる」

と云った。

「みなみなが困りますと云ったが、困るのはそこもと一人であろう、恐らく、今日ここに来たのも織田殿の指図であろう」

と云った。

「何を申される。今徳川家と織田家が不和になったら、いったいなにが起るとお考えになりますか」

忠次の言葉に、信康はくるりと身体の向きを変えると、

矢をつがえたばかりの弓を、胸いっぱいにひきしぼって、矢の先を忠次の胸もとにぴたりと向けた。

「その時は、こうするものぞ」

忠次は、弓も矢も怖くはなかった。信康の眼が恐ろしいと思った。正常な眼ではなく狂った目に見えた。狂っていないとすれば、積年の恨みをこめた殺意の目であった。この場でその矢を放つようなことが無くとも、他日必ず、自分を殺すに違いないと推測される目であった。忠次の頭の中に築山御前の姿が浮んだ。信康は幼少の頃から母の築山御前の話を耳にしている。おそらく、酒井忠次が織田信長と組んで、徳川家を乗っ取ろうとしているのだと吹きこまれているに相違ない。信康は十九歳の今になっても、そのように考えているのに違いない。そうでなければこのように露骨きわまる殺意を示すことはありえない。

酒井忠次は額から汗を流していた。

「さあ、矢を放たれよ、そして浜松のお館様がなんというかをよくその耳でお聞きめされ」

と忠次はかろうじて云った。

信康は、ふんと一言云って、その矢を的に向って放った。矢は的の中心に立った。

酒井忠次は額の汗をも拭わずに岡崎城を後にした。彼はこのことを家康には云わなかった。信長にも云わなかった。彼は心に秘めた。

(信康はいつか必ずこの自分を殺すだろう。そうならないまえに打つべき手を打って置かねばなるまい)

忠次は心の中でそう決めていた。岡崎の於富字には徳姫と信康のことをくわしく報告するように命じたばかりではなく築山御前のところに入れてある腰元のおゆきにも、念入りに築山御前の身辺を見張るように命じた。

酒井忠次は織田信長に信用されていた。名指しで呼ばれるから足しげく信長のところへ出入りしていた。だが、信長と近づいて、家康の地位を奪おうなどと考えたことは露ほどもなかったし、信長もそんなことをさせるつもりはなかった。忠次はひたすら主家のためにいままで働いて来たのに、次代を約束されている信康が自分を誤解していることは心外であった。

(誤解であってくれればいい。なにかの折にすまなかったと反省の気持を表してくれれば、それ以上のことは求めない。しかし、信康が飽くまでも、自分に対して誤解の目を向けることを忘れないようなら、こちらも考えねばならぬ。火の粉は自分で払う以外に方法はないのだ)

忠次は岡崎城を後にしたときそう考えていた。

信康自刃

天正七年(一五七九)五月五日、酒井忠次は浜松城で平岩親吉と会った。たまたま、親吉が所用があって浜松城に来た折に顔を合わせたのである。忠次は親吉に声を掛けて、一室に呼び入れると、声をひそめて訊いた。

「その後若殿はいかがされておられるかな」

信康のことを訊いたのである。この春の袋井の陣以来、或は平岩親吉を通じて、詫びを入れて来るかもしれないと心待ちに待っていた忠次であった。

(どうしたのだ親吉、まさか、袋井の陣での信康の暴言を知らないとは云わせないぞ)

忠次は、そんな気持をこめて、信康のことを訊いたのであった。

親吉はびくっと眉のあたりを動かして、

(ははあ、袋井の陣のことを云っているな)

とすぐ感づいた。しかし親吉は素知らぬふりをして、

「若殿は相も変らず、鷹狩りなどに毎日のように出かけておられます」

と答えた。

「それは結構なことだ。……」

忠次は考えこんだ。親吉はわざとすっとぼけているのか、それとも、信康が、そうしろと云ったのか、そのあたりが気になった。

「若殿はこの春の袋井の陣のことを、そこもとに話したことはなかったのかな」

忠次はかまを掛けた。こう云われれば親吉としても黙ってはおられないだろう。

「お聞きいたしました。倍に近い敵と戦って重囲を切り抜けられたこと、あっぱれ至極、これこそ次代を継ぐ御殿と思いました」

親吉はとぼけた。信康の暴言については飽くまで知らんふりをするつもりのようだった。忠次もここまで来ると、押えていた思いが表に現われて来る。

「いい加減にしないか。そんなことを訊いているのではない。袋井の陣以来、若殿にはいくらかでも反省の色があったかどうかを訊いているのだ。そちは若殿の傅役であった。今でもそうだ。若殿が、袋井の陣でなにを云ったかすべて承知の筈である。あのような席で、あのようなことを申されるのは、正気の沙汰とも思えぬ。お館様も心配しておられるから、その後どうしておられるかと訊いたのだ」

忠次は親吉に向って、そこもとと云っていたのがそちに変った。忠次は重臣である。平岩親吉とは身分が違う。そ

ちでいささかもおかしくはない。しかし親吉は、そうは考えてはいなかった。

（重臣を鼻にかけて失礼なことを云う奴だ。確かに今は重臣だ。しかし間も無く信康様の時代になる。そうなれば地位は逆転するだろう。その時はおれが、そちと呼んでやるぞ）

親吉は忠次の目を真直ぐ見て云った。

「袋井の陣でなにがあろうとも、三郎様にとって雅楽頭殿（酒井忠次のこと）は御家来筋に当る。まさか御家来が言葉使いなど取り上げてその主人に対して、謝れなどと云われるのではないでしょうな」

忠次は言葉につまった。理窟を云えば確かにそのとおりであった。しかし、このままでは済まされぬものがある。

「では、三郎様には袋井の陣の件については、いささかも反省の色がないと考えて間違いないか」

忠次は念を押した。

「その件について若殿は、雅楽頭殿より、しかるべき使者を立てて謝罪に来るのが当然なのに、なにをしているのかと申されております。家臣がその主人に対して非礼を働いて、そのまま通るなどということは、絶対に許されないことです」

平岩親吉は、その言葉がやがては信康の死につながるなどということは露知らずに強がりを云ったのである。

「わかった。さがれ。もはやなにも云うことはない」

忠次は親吉に云った。そのとき忠次の腹は決っていた。

忠次は平岩親吉と胸襟を開いて話し合いたかった。それができなかったことはかえすがえすも遺憾であった。

忠次が平岩親吉と分かれて屋敷に下ると、於富字からの書状が届いていた。信康が、築山御前の進めによって、第二の側室を迎えたという知らせであった。第二の側室はおつぎという名で、第一の側室八重の従妹に当る女であった。紹介したのは医師の若瓊であった。第二の側室もまた、築山御殿に住むようになった。こうなると、信康の足はいよいよ足繁く、築山御殿に向うことになり、正室の徳姫の局へはめったに行かないようになる。たまに行っても、気が強い徳姫との間にいさかいが起きて、そのまま泊らずに帰ることが多い。

《徳姫様はひどく腹を立てておられます。すべて築山御前様の悪だくみだと申され、いっそのこと、築山御前様や信康様のことを織田殿に申し上げるなどと、口走っておられます》

と、したためた於富字の筆の跡はやや急いだ跡があった。忠次はそこまで読むと、目を書状から離して虚空を見るような目で、

「そうだ、そうしよう」

と大きな声でひとりごとを云った。

忠次はその日のうちに服部半蔵を呼んで、ひそかに、築山御前のところに出入りする者たちの身許を調べるように

命じた。特に第一、第二の側室及び医師若瓊の身許についてはくわしく調べるように命じた。

三日も経たないうちに服部半蔵がこの件について自ら出頭した。

「手の者をやってくわしく調べさせました。若瓊は明国から二十年ほど前に参りました鍼医で、駿河、遠江にかけて、その名は広く知られています。築山御前殿は腰痛をわずらっておられるため、月に一度は若瓊を呼んで治療に当たられております。そろそろ六十歳に近い、ほとんど日本人と変りのないほど日本に馴れた医師で日本人の妻子もございます。若瓊が築山御前殿に紹介した側室八重の方は、元武田信虎の家臣日向昌時の女であり、八重の母かつは長刀の達人として駿河では名が通っています。側室おつぎの方は、八重の母かつの姪に当り、父は駿府に住む刀剣商人岡田三郎兵衛の女でございます。その他、築山御前に仕える者は……」

と云いかけるのを忠次は制して、

「医師若瓊は駿河に住んでいる武田方の諸将のところにも出入りしているか」

という問いに対して、

「駿河探題江尻城主、穴山信君様のところにもしばしば治療のため行っておられるとのこと、信君様は、痛風の持病があるという噂でございます」

忠次は服部半蔵の報告でほぼ満足した。その夜、忠次は遅くまでかかって、徳姫の腰元於富字宛の密書をしたためた。その最後に、

《すべてこれはお家のためであり、徳姫様のためである。迷うことなくことをすすめるように、あとのことは忠次がすべてうまくまとめるから心配ないように》

と書き添えた。

天正七年六月十日、安土城からの急使が徳川家康宛の書状を持って来た。

《岡崎の徳姫より上訴のことについて訊きただしたい。酒井忠次をただちに参らすように》

と書いてあった。

家康は悪い予感がした。信康のことに違いないと思った。信康が築山御前のすすめで、側室を次々と入れていることを知っている家康は、徳姫が信長に訴え出たのはおそらくそのことだろうと思った。

「なにか無理難題を持ちかけられねばよいが……」

と家康は忠次に云った。

「女の訴えごとゆえ、信長様も、本気でお取り上げになるようなことはないでしょう」

私が行ってなんとか云いくるめて参りますと云って、忠次は安土に向った。

『信長公記』によると、信長と忠次が会ったのは天正七年六月十六日のことである。

忠次が現われると、
「まずこれを読んでみよ」
信長は徳姫が上訴した書状を忠次の目の前に突き出して云った。
それは前文と後文の間に十二項目を上げて築山御前と信康の非を責めるものであった。忠次は一読した。於富字に密命を与えたとおりの内容のものであった。
「まずその十二項目を読み上げた上、それに答えよ」
と信長は云った。忠次はゆっくりそれを読み上げた。

一、築山御前は嫉妬深い女で、信康と徳姫との事実上の結婚を一年半も遅らせたこと
一、築山御前は徳姫が続けて女児を出産したのに対して、彼女は女腹である、もはや男子は生めないと云ったこと
一、築山御前は仇の女に世継ぎを生ませたくないと云ったこと
一、築山御前は織田信長のことをしばしば美濃のうつけものと云っていること
一、築山御前は、自ら側室を探し出し信康にすすめて、徳姫との間をほとんど別居状態にしてしまったこと
一、築山御前は医師若瓊を通じて、密かに武田方の武将穴山信君と通謀していること
一、築山御前の世話した信康の側室は二人とも武田方にゆかりがある者であること
一、信康は狂暴な性格であり、産後まだ日の浅い徳姫を蹴って気絶せしめたこと
一、今年の春、袋井の陣において、信康は酒井忠次の諫言に対して、そちは父徳川家康の家来かそれとも織田信長の家来かと暴言を吐いたこと
一、先年信康は、岡崎城の馬場において酒井忠次に向って矢をつがえた弓をひきしぼって暴言を吐いたこと
一、信康はこのごろ築山御前に同意して、武田方に通ずる気になったらしいこと
一、信康は織田家に対して反感を持っているから、将来必ずや織田家を敵として戦うことになるだろう

忠次が読み終るのを待って、信長はその項目の一つ一つについて、それが真実かどうかを問うた。
「残念ながら、ここに書かれてある十二項目のうち、始めの十項目は真実でございます」
「知っていたのか」
「家臣として、なんとかおさめようと努力いたしましたが、その甲斐もなく、このようなことになり面目次第もございません」
「とかく女というものはうるさい者だ」
「はっ？」
「女の云うことなどいちいち取り上げるわけには参らぬと

申しているのじゃ」
信長は云った。信長は何時になく冷静であった。
「だが、築山御前のなされ方は……」
と云いかける忠次の口を封ずるように信長は、
「女は誰でも嫉妬深い者よ、また女は口うるさき者である。たとえ、築山御前が余のことを美濃のうつけものと云ったところで余はいっこうに腹が立たぬ。むしろこのようなつまらぬことを掻き集めて、徳姫に上訴させようとした者こそ、うつけものである」
信長はじろりと忠次を見た。
（お前だな、こんな芝居を打ったのは）
信長の目はそう云っていた。
「築山御前殿が武田と通謀した件はいかがなされますか」
と忠次は云った。
「証拠はあるのか。ないだろう。医師若瓊を通じて穴山信君と交わしている書状でも手に入れたというならば別だが、単なる噂など信用できぬ。またたとえ築山御前一人が武田と通じたところで、いったいなにができると云うのだ」
「築山御前様お一人ではありません。十一項に書いてあるように信康様も……」
忠次は追いすがるように云った。
「その証拠があるのか、ないであろう」
「だが、その可能性はございます。日頃、織田様をないがしろにしている言動から察すれば、将来、必ず織田様に弓を引くお人になられるでしょう」
「十二番目の項目のことを云っているのだな」
と信長は念を押してから云った。
「他の十一項目などどうでもよい。最後の項目が問題だ。それについて、そちが考えていることをかくさずに申すがよい。だが左衛門（酒井左衛門尉忠次）、私情を交えてはならぬぞ、そちと信康が仲が悪いからと云って、その尻をこの信長に持ちこんで来るのは迷惑だ。信康は余の婿であり、余の二人の孫の父でもある。根もないことで信康に罪を着せるわけには参らぬ」
信長は徳姫の上訴十二項目は忠次が書かせたものであることを、すでに知っているようであった。
忠次の額に膏汗が浮んでいた。なにもかも見通している信長が怖かった。しかし、今になって後には引けなかった。
ここまで来て、下手な妥協をしたら自分は将来、必ず信康に殺されるだろうと思った。
（信康を切腹に追いこむか、この忠次が切腹するか二つに一つだ）
忠次はそこまで考えていた。
「信康様については家臣のわれわれはほとほと困り果てております」
忠次は信康の性格について語った。
「幼少のころ猫をなぶり殺しにして以来、年とともにその

狂暴性ははげしくなりました。十七歳のとき、鷹狩りにでかけられての帰途、諸国行脚の僧に出会いましたるところ、本日獲物がなかったのは、この坊主のせいだと申され、その僧を縛って、縄の端を馬の鞍につけて、引き摺り廻してとうとう殺してしまいました。十九歳の折、ちょっとした言葉の行き違いから腹を立てて、産後間もない徳姫様の腹部を蹴って気絶させたのは、信康様の持って生れた性格でございます」

忠次は次々と信康のことを話した。今年の春、忠次の止めるのも聞かず、武田勝頼の軍に立ち向って重囲におちいり多くの家来を殺した話や、袋井の陣での話をした。

「私やお館様が織田様のことにちょっとでも触れると、信康様は、それほど織田殿が恐いのかと必ず申されます。織田の属国に何時まで甘んじているのだなどと家臣たちの居る前で平気で口になされます。この一言を取り上げても信康様は織田様に対して逆心ありと云われても仕方がないと思います」

ちょっと待てと信長が云った。

「信康が家臣たちの面前で、織田の属国に何時まで甘んじるのだと云ったことは事実か、左衛門一人の聞き違えではないだろうな」

「聞き違えではございません。確かにそう申されました。その時以外でも、ちょいちょいそれに類することを口にされています」

「信康は若い。若い時はえてして強がりを云うものだ。しかし、その強がりも許すことのできるものとできないものがある。左衛門、もう一度訊くからよくよく考えて答えよ。信康が、徳川家の家臣のいる前で、織田の属国に何時まで甘んじているのだと云ったことは、左衛門一人の聞き違えであろう。な、そうであろう」

信長はいままで曾つてないような目をして云った。徳姫の身を思う、父親の目であった。忠次の答え如何によっては、徳姫に一生寡婦としての生涯を歩ませねばならない。だからこそ信長は忠次に念を押して云ったのである。忠次に、聞き違えかもしれないと一言云って貰えば、今度の件は、譴責処分で済むことであった。

しかし忠次はその信長の心を知り切っていながら、はっきりと云った。

「忠次の聞き違えではございませぬ。信康様は確かにそのように申されました。これは、神明に誓って間違いないことでございます」

それを訊いた信長は深い溜め息を一つついて、

「徳川家第一のとしのもの（年寄・重臣の意）の云うことだから、よもや間違いではあるまい。信康の処置については、よきようにはからえ」

信長は云った。

「築山御前の方はいかがいたしましょうか」

「よきように計らえ」

「もう一度お訊ねいたします。信康様には切腹おおせつけられる所存でございましょうか」

忠次は喰い下った。よきように計らえでは、あとあと問題が残る。その処断をはっきりと信長の口から云わせたかったのである。

「止むを得ぬ。切腹を申しつけよ。築山御前は斬れ」

信長はそう云うと、さっと席を立った。信長は自分が決めたこの決定に必ずしも、満足してはいないようであった。

忠次は安土の城を出ると途中岡崎の城には立ち寄らず真直ぐに浜松城に急行して、家康に信長の意向を伝えた。

忠次は徳姫が信長に上訴した十二項目を家康に示し、

「残念ながら十二項目のうち最後の二項目を除いて、他はすべて認めざるを得ませんでした。織田様の方も忍びの者を入れて或る程度の証拠を握っている故、嘘を云えば、ことは信康様だけではなくお家の浮沈にもかかわって参ります故、私が聞き知っている最初の十項目については認めざるを得ませんでした」

と忠次は云った。

家康は、そのひとことで、本件について忠次は信長に対して、積極的に申し開きをしなかったことを知った。

（おそらく、忠次は、日頃不仲の信康を徳姫を利用して織田殿に讒訴したのであろう）

と家康は思った。目がくらむような口惜しさであった。

その場で酒井忠次を斬ってしまいたい気持だった。が、家康は我慢した。忠次を斬れば、信長を敵にすることになるであろう。信長と戦って勝つ公算はなかった。また、三河衆のうちその半数を勢力下に置いている酒井忠次を斬るなどということは、自らが自らの片腕を斬り落とすことと同じであった。家康はいかんとも為すことができなかった。

（ただ一つ残っている方法は処刑を遅らせ、この間に信康を逃がすか、信長の怒りをやわらげるなんらかの手を考えることであった）

八月一日、家康は織田信長に書状を送って、築山御前と信康を処刑することを誓った。

八月三日、家康は三河の岡崎城に入ると、信康を三河大浜郷（愛知県碧南市）の称名寺に幽閉した。と同時に兵を出して称名寺の警戒を厳重にした。

次いで、三河の諸豪や、諸将を呼び寄せて、信康に味方することのないように誓書を取ったが、どうも不穏な動きがありそうなので八月九日には信康の身柄を厳重な警戒のもとに遠州の堀江城に移した。信康にとっては思いもかけないことになってしまったのである。

家康は岡崎城主に本多重次を任命してひとまず浜松城に帰着した。

徳姫は父信長が信康に対して切腹を命じたと聞いて驚いた。せいぜいお叱りか、悪くて、謹慎ぐらいにしか考えていなかった姫にとっては青天の霹靂だった。あわてふため

いた徳姫は父信長に、今度は、信康の罪を許してくれという哀願状を書いた。だが、父信長からは信康が切腹するまで一通の返事もなかった。

信康の傅役の平岩親吉は、信康に切腹の命令が出たと聞いて、家康の前に出仕して、

「三郎様をこのような結果にしたのは、傅役の私が悪いのですから、私の首を織田殿に送って若君の命だけは助けていただくようお願いしていただきたい」

と云った。しかし、家康は、

「もし、それができるなら親が替ってやりたいのが人情というものだ。いまさら、なにを云ってもすべて悔いというものである」

そう云って深い溜め息をついた。

平岩親吉はそのころになって、浜松城で酒井忠次に若殿はどうしているかと訊かれたときのことを思い出した。あの時、信康の非礼を詫びておけばこんなことにはならなかったのにと気がついたがもう遅かった。

平岩親吉は忠次を恨んだ。忠次こそ、除くべきであると思ったが、親吉の力ではどうにもならなかった。酒井忠次の実力に抗し得る者は、ただ石川数正しかいなかったのである。親吉は数正のところへ走って、なんとかして信康の命を助けて貰いたいと哀願した。

「今となればすべてが遅い。ただ一つ信康様のお生命を救う道は、若君自身のお力で城を抜け出すことである」

と石川数正は云った。そのころ信康は堀江城から二俣城へ移されていた。

親吉はただちに二俣城へおもむいて、大久保忠世に面会を求めた。若殿を逃がしてやれと云うつもりだった。しかし、大久保忠世は、

「信康様のことで参られたならば酒井忠次様か、お館様（家康）の許可書がある筈だ。それがなければ信康様に会わせるわけには行かないし、この大久保忠世が会うわけにも行かない」

と云って追い帰した。

大久保忠世は、石川数正の系統に属する人であった。家康が二俣城にわざわざ大久保忠世を派遣して、特に信康の監視に当らせたのは、

（お前の裁量によって、信康を逃がしてやれ）

という下心があったからである。しかし、酒井忠次は家康の心を知って、大久保忠世に、

「もし信康様を逃がすようなことがあれば、織田様は黙っていないぞ。そちの切腹は間違いないし、大久保家の断絶は決定的なものである。いたずらに目先の忠に溺れることなく、徳川家百年のことを考えて行動せよ」

と云った。ていのいいおどかしであった。大久保忠世は、家康と並ぶほどの実力者酒井忠次の命にそむくわけにはいかなかった。

築山御前は事件発生と同時に、遠州敷智郡富塚の寺に幽

閉され、剃髪して尼となった。

天正七年八月二十九日、家康は岡本平右衛門時仲と野中三五郎重政の両名に築山御前の首を討ち取って来るように命じた。その岡本と野中が城を出ると、その後を追うように酒井忠次の使者が来て、築山御前がたとえどのように姿を変えていても、必ず首を携えて来いと命じた。

二人が富塚におもむくと築山御前はすでに覚悟していたらしく暫時の許しを乞うて、死装束に着替え、薄化粧をして、死の座についた。野中重政が一太刀で築山御前の首を打ち落とした。

岡本と野中の二人は築山御前の首を洗い清め、首桶に入れて浜松城に持ち帰って、この旨を報告すると、家康は、ただひとこと、

「女のことだから、なんとかしようもあろうのにほんとうに殺したのか」

と云った。家康は岡本と野中の二人が、既に髪を落として尼となっている築山御前の首は討てませんでしたと云って、帰って来ると思っていたのである。

九月十五日になって、家康はいよいよ信康処断を決意した。信長に信康を切腹させると復命して以来丁度一月半になっていた。これ以上死刑執行を延ばすことはできなかった。

家康は検死役として、服部半蔵と天方山城守通綱を派遣した。

信康が切腹の場に臨んで云った言葉として『松平記』には次のように書き留められてある。そこを意訳して次にかかげる。

最期に臨んで信康公が云われるには、余は父に弓を引くようなことはした覚えはない、それは全く年寄の讒言である。しかしこうなったらもうなにも云うまい。ただ心に残るのは二人の女のことである。この者たちの将来はよろしく頼む。余の死骸は大樹寺に葬って貰いたい。そして信康公はそれまでに親しかった家臣にそれぞれ形見の品を残してから、静かに念仏を唱えられ、腹十文字に切り割いて、半蔵、介錯申せと云われたが、半蔵はなんとしても太刀を振りおろすことができなかった。そんなことをしていれば信康公をいたずらに苦しませることになるので、天方山城守通綱が服部半蔵に替って介錯した。天方と服部の二人は浜松城に帰ってこの場の様子を報告した。家康は終始無言であったが、そこに居並ぶ武将は皆涙を流した。本多忠勝と榊原康政の二人はこらえかねて声を上げて泣いた。この年、信康公二十一歳、家康公三十八歳であった。

徳川家の歴史の中で岡崎三郎信康の切腹ほど、わけの分らぬものはない。これに関する資料としては『玉輿記』『武徳編年集成』『改正三河後風土記』『柳営婦人伝』等の比較的史料価値の低いものがあるだけで、『松平記』や『三河物語』などの史料価値の高い

ものに残されている記述は簡単過ぎて要領を得ない。

これ等の俗書の築山御前に対する評価は、「生得悪賢嫉妬深き女」「無類の悪賢嫉妬深き婦人也」「其心偏僻邪佞」「傲慢妬奸の女」等、口をきわめて築山御前をこきおろしている。信康については「英邁、勇猛、果断」と書かれている本もあるし、「粗暴、残忍、放恣」と書かれたものもある。

これらの俗書は太平の世に入って書かれたものが多いので、真相とはほど遠いものである、半ば創作されたものであろう。信康自刃の真相について一部の史家の間には、

（信長は嫡子信忠と、家康の嫡子信康とを比較して、信忠があまりにも劣っているのを気にしていた。このままにしておけば将来、必ず信康が織田を亡ぼすことになるだろう。それなら今のうちに信康を始末して置いた方がよいと思って、無実の罪を着せて殺した）

という説がある。まことにうがったような史観だが、これは全く見当違いも甚しいものである。なぜ見当違いかについて、私の意見を述べると、

一、信康が飛び抜けて優秀だったという証拠も、信忠が凡夫だったという証拠もない。

一、当時信長は近代的な武家の組織編成に取り掛っていた。信忠が凡将であっても基礎さえ固めておけば家来たちの補佐によって、組織全体として充分やって行ける。

一、信康は信長の婿である。よほどの理由がなければ、簡単には殺せない。

信長が信忠との比較の上で信康を殺したというような説が一時流行して、今は定説になってしまったのは、信長が残忍な性格を持った男であったから、その性格の延長線上に信康切腹事件を乗っければ説明しやすいからであろう。

信康切腹事件の真相は、酒井忠次と岡崎三郎信康との確執にあったと私は断言したい。忠次が信長の前で信康のために弁護しなかったということは、信康を亡き者にしたほうがよかったと考えたからであろう。家康がこの決定に従ったのも、こうしなければお家がつぶれるからという憶測だけではなく、家康自身も信康の将来に気がかりなものがあったに違いない。つまり信康は性格的に尋常でないものを持って生れたのではないかと思われる。だが家康は親として信康を処刑するには耐えがたく、なんとかして生かしておいてやろうと考えていたこともまた事実であろう。当時の徳川家の実情から考えると、酒井忠次とことを構えるなどできない相談であった。息子より重臣の方が大事な時であったのだ。

後日、関ヶ原の合戦の折、家康が、

「信康が生きていたら、こんな苦労はしないで済むのに」

と酒井忠次や大久保忠世に向って嫌味を云ったという話や、更にその後、酒井忠次が自分の息子に加増してくれと頼んだとき、

「そちも自分の子は可愛いのか」

と皮肉を云ったなどということは、すべて後世の人が作り上げた話であろう。

真相はもっともっときびしく悲しいものであったのであろう。

海将陸上で死す

嫡子信康を失った家康の悲しみは大きかった。家康はその悲しみを持って行きようがなかった。信康を死に追いやった張本人の酒井忠次にその怒りを向ければ、忠次は今より以上に信長に傾き、果ては三河衆の分裂さえも起きるかもしれなかった。信康に直接切腹を命じたのは信長であったが、その信長に盾つくことはできない相談であった。

家康は、忍耐する以外に生き方はなかった。心の中では、何時の日にかという思いがあったにしても、今は怒りを、こらえるより仕方がなかった。

家康が高天神城奪還作戦に力を入れるようになったのは、信康の処刑が確定的になって以来であった。悲しみを忘れるための出陣だった。

家康の戦法は武田信玄によく似ていた。後世の人に信玄を見習っていると云われたほど似ていたが、それは本質的なものであって、けっして家康が信玄の戦法を真似ていたものではなかった。家康は四十歳を目の前にしていた。若い頃のように無茶はもうやらなかった。

彼は高天神城総攻撃というふうな戦法は取らなかった。味方の損害をかえり見ずに無理押しに落そうとすれば、できないことではなかった。しかし家康はそうはせず、正攻法をもって高天神城に向った。正攻法こそ武田信玄のもっとも重んじたところだったが、家康もまた、彼の生涯の合戦の多くはこの正攻法であった。時間は多少かかってもいいから、必ず落ちること間違いなしという戦法を取ったのである。

家康は信康が自刃した翌日の九月十六日に兵三千を率いて浜松城を出た。じっとしてはいられない気持だったからである。行く先は高天神城というふれ込みだった。家来たちは一人残らずそれと信じていた。高天神城攻撃は再々のことだった。この城を攻めれば、城兵は援軍を求める。すると勝頼が大軍を率いて出て来る。徳川軍はさっさと浜松に引き上げればよかった。こうすることによって、武田軍を奔命に疲れさせ、結局は高天神城を自落に追い込むことになると信じていた。

九月十七日家康は掛川城に来た。しかし彼は高天神城に立ち向っている大須賀康高等に激励のための使者を送っただけで、高天神城には寄らず、掛川から大井川を渡って駿河に入ったのである。

このような突然の方向変換はいままでないことだった。家臣たちはあわてた。いったいお館様はなにをなされるのだろうかと内心考えていた。

「田中城へ」
と家康は掛川城を離れると同時に行き先を云った。田中城には、武田軍約一千がこもっていた。高天神城を後廻しにして、先に田中城を落そうとする家康の気持は分らないことはなかったが、駿河は敵地であった。武田領である。そこにいきなり攻め込むことは危険であった。大将たちは誰もそう思っていたが、一人としてそれに反対する者はなかった。家康の気持を察していたからだった。嫡子信康を失った家康が、その悲しみと怒りに変えて、なにかにぶっつけようとしていることがすべての人に分っていたからだった。
「お館様は何時ものお館様ではない」
と家臣たちは話し合った。普通ならば大井川を越したあたりで誰かが、諫言めいたことを云う筈だったがそれを云う者もなかった。
「できるかぎり多くの物見を、できるかぎり遠くに出せ」
家康は各大将にこのように命じて、その方向をそれぞれ指図した。
(田中城を攻撃するに当って、敵の情勢を探るにしてはちとおかしい)
と、この命令に疑問を持つ者があった。深く探れと云ってもきりがない。どこまで探ればよいか分らないが、ひとまず田中城から一里ほど先まで探ることにした。
本多忠勝は、家康に海ぎわを深く探れと云われたのをそのとおりに受け取り、大物見、小物見合せて五組ほどを安倍川の近くまで送った。
安倍川の河口近くに用宗城があって、三浦兵部義鏡が守っていた。
本多忠勝は、家康が深く探れという命令をこのあたりまでと解釈した。本多忠勝が出した物見五組の中に大江直政を頭とする五名の物見があった。彼等は本多忠勝の命を受けて、主として海岸線に沿って用宗城下に侵入しようとした。
大江直政等が用宗についたのは九月十八日の夕刻どきであった。用宗の城には五百ほどの敵兵がこもっていた。
大江直政は五名をそれぞれ分散させて、用宗城附近を探り一刻後には海辺で会うことを約束した。
月が出るまでには、おおよその目的は達するだろうと思っていた。
大江直政は用宗城の大手門の近くの物陰にひそんで中の様子を窺っていた。二人の男が大きな声で話をしながら、城の方から降りて来た。
「だいたい水軍の将を城の副将にするなどということは聞いたことがない」
「まったくだ。水軍は海でこそ働けるが陸に上ってなにができるというのだ。おそらくは、文字通り陸に上った河童でしかない」
「副将になった向井伊賀守正重という人は、一応、槍や刀

の振り方は知っているだろうが、家来の衆はどうかな、彼等はもともと舟子だ。舟を漕ぐのは上手だろうが、弓矢の使い方は知らないし、槍を取っての合戦などやったこともないだろう」
「全くそうだ。総勢五百人のうち、河童連中が二百人もいるのだから、いざという時には心配だな」
二人の声は遠ざかって行った。
大江直政は今聞いたことを頭の中で整理した。これは重大な聞きこみをしたものだと思った。彼は一刻後海辺に帰った。既に他の者も偵察を終って、集って来ていた。彼等は一人を見張りに立てて、用宗城で探り得たことを話し合った。用宗城に水軍の大将が副将として居ることを知ったのは大江直政ひとりで、他の五人は、主として用宗城の警備状態を見取って来た。
「守備兵は少ない。追手と搦手の両方から、攻めこんだら、まず半日で落ちるだろう」
というのが彼等の結論だった。
彼等はそこで二人ずつに分れて、月夜の道を田中城に向って走った。おそらく、味方は田中城を包囲しているだろうと思った。ところが、味方はおよそ、千人ほどを田中城の見張りとして残し、本隊は海辺に寄ったところで休止していた。既に野営に入っていた。
大江直政は本多忠勝のところに来て、用宗城のことを報告した。忠勝は、敵の海将向井伊賀守正重が用宗城にいると聞いて驚き、本陣に大江直政を同道した。家康は、未だに帰着しない物見の報告を聞くため起きて待っていた。彼は武装したままで牀几に腰をおろして、本多忠勝と大江直政に会った。
「水軍の大将向井伊賀守正重が副将となって用宗城に居るというのは間違いないか」
家康は思わず大きな声を出して念を押した。大きな声を出さずにはおられないほどその情報は重大なことであった。徳川軍がそれまで調べたところによると、武田水軍の多くは、清水湊に集結し、一部は安倍川の河口にいるということだった。軍船がそこにある以上、水軍の大将も軍船に乗っているか、その近くに居所を与えられて住んでいる筈だった。関係のない城に舟子まで率いて入りこんでいるとはまず考えられぬことであった。
武田水軍は小浜景隆、向井正重を両大将とする伊勢水軍、間宮武兵衛、間宮造酒丞を両大将とする伊豆水軍、伊丹大隅守、土屋貞綱(岡部)を両大将とする旧今川系の水軍の三者によって成っていた。大型軍船総数五十隻を有し、水軍とすれば毛利氏に次ぐもので信長の率いる九鬼水軍とはほぼ同じぐらいの勢力を持っていた。
だが、これ等の水軍は結成以来、あまり目ざましい活躍をしたことはなかった。武田方は必ずや水軍が大活躍するときもあろうと、これを温存していたのであった。だが、設楽ケ原の敗戦以来、徳川氏の進出が目立って来たので、

水軍の将兵を遊ばせて置くのはもったいないことだと、穴山信君の命令によって、向井正重等は一時的に用宗城の応援に廻されていたのであった。

「向井正重が用宗城にいることをよくぞ探って来た。天晴れである」

と家康は声を大にして讃めた。

そして各大将を緊急に呼び集めた。夜中のことだから、なにごとが起きたのかと集って来た諸将に家康は命じた。

「翌朝未明にここを出発して、用宗城に打ち掛かる、それぞれ遅れを取るな」

それだけであった。なぜ、用宗城に奇襲を掛けるかなどということはひとことも云わなかった。

そこから用宗城までは、およそ四里（約十六キロ）の道のりだった。未明に出発すると、途中で夜が明ける。食事を摂っている暇はないから、糒食（米を炒ったもの）でも用意するしかない。それにしても、なぜ用宗城などの小城に大軍を向けるのだろうかと諸将は考えていた。

十九日の朝、まだ星が輝いているころから徳川軍の宿営地は騒然としていた。家康の本陣が出発したのである。その後を本多忠勝隊が追った。

総大将が真先に出発するなどということはめったにあることではなかった。これでは陣容もなにもあったものではなかった。

織田信長が今川義元を桶狭間に奇襲して討ち取った時、信長自らが未明に出陣して、将兵等は急ぎ後を追ったと伝えられていた。それは武将たちの間に一つの美談として伝えられていた。

（お館様がまさか桶狭間の合戦を見習うての行動とも思われませぬが）

本多忠勝以外の大将は不審に思っていた。最前列を行く本陣の足は速かった。ほとんど小走りだった。

夜が白々と明けたころには徳川家康の率いる二千の部隊は用宗城まで一里のところに来ていた。

家康はここで部隊に休止を与え、食事を摂らせた。携行食の乾飯に水をかけて食べたり、炒り米を噛んで水を飲む程度の食事だった。この間に本多忠勝隊からの物見が出された。

「用宗城の兵はようやく起き出たところでございます。われ等の接近に気がついた様子はございません」

物見が帰って来るまでの間に、家康は諸将を集めて用宗城攻撃の作戦計画を練っていた。ここではじめて用宗城に海将の向井伊賀守正重が副将として在城中であることを明かにした。

「向井伊賀守正重は、もと伊勢水軍の出である。同じく伊勢水軍の大将小浜景隆と共に武田信玄に従った男である。武田水軍の中心的な人物であって、この向井正重の一声によって、軍船五十隻が動かせる。彼は、織田殿の九鬼水軍と堂々戦える実力を持った人である。なに故に向井正重の

ごとき海将が、山城の副将になぞなったのか、その理由は分らないが、今ここで用宗城を攻め亡ぼし、向井正重を討ち取れば、武田水軍の大将を討ち取ったと同様なことになり、おそらく武田水軍に取っては取り返しのつかない痛手となるであろう。よいか、今朝の合戦は、武田水軍との合戦と心得よ、必ず、必ず向井正重を討ち取るのだ」

家康は常になく声を高めて云った。

諸将はこの期になって、ようやく家康の心を知った。

用宗城は海を見おろす山というよりも小高い丘の上にあった。付け城的な存在だから、それほど堅固な城ではなかった。守兵もせいぜい五百人ほどであった。このような城は城というよりも砦に等しい存在であり、大軍を支えて戦うというよりも、敵の動きに従って臨機応変に働く城であった。大軍が現われたら、さっさと本城に兵を引き上げるし、そうでない場合は、ここに兵を置き見張りの役を果していたのである。

用宗城は、あっという間に四方を包囲された。まさか朝っぱらから敵の大軍がこんな近くまで来ているとは気付いていなかったから、その驚きは非常なものであった。

家康の率いる二千の将兵は乾堀を乗りこえ、鹿垣を引き倒し、土居を越えて、用宗城に突っ込んで行った。

二千対五百の戦いだった。勝負ははじめから決っていたようなものだった。

「一人も討ち洩らすな、残らず討ち取れ」

家康は本陣にあってこのように云い続けていた。

用宗城は急を駿府城に知らせようとしたが、その使者はことごとく斬られた。孤立無援となった用宗城の将兵は死にもの狂いで戦った。だが多勢に無勢、次第次第に追いつめられ、大将の三浦兵部義鏡は戦死し、そして副将の向井伊賀守正重もまた重囲に陥った。

向井正重は長巻きの使い手であった。長巻きは槍の穂のかわりに、長刀を取りつけたような形のもので、南北朝ころまでは使われていたが、取り扱いが不便だから、槍に取ってかわっていた。長巻きを使いこなすには、よほどの体力のある人でなければならなかった。向井正重は六尺豊かな大丈夫であった。彼は常々、

「舟と舟とが接近した戦いになった場合は、敵の足を撫で斬るには長巻きがもっとも有利である」

と云っていた。確かに海戦の折には、長巻きは有利な武器だったかも知れない。

向井正重はいち早く城の外に出て戦った。長巻きは狭いところでは使えないからだった。彼は、向井正重と自ら名乗った。それ向井正重はあそこにいるぞ手柄にせんとむらがり集って来る徳川勢を前にして、ハゼの大木を背にして長巻きを振った。

ハゼの木の葉は真赤に紅葉していた。その木を背にして、彼は縦横に長巻きを振った。正重が長巻を地面すれすれに一振りすると、一度に三、四人、多いときには、五、

六人が、足首を斬られて倒れた。
足首を斬り落すのではなく、立ってはおられない程度の傷を相手に負わせるのである。兵が一度に二、三人も倒れるので、思わず動揺する敵陣に踏みこんで、更にそのうしろに立っている兵たちの脛を狙って長巻きを一掃すると、五、六人が倒れるという様であった。
あっという間に向井正重一人のために二十名ほどの者が傷を負うと、後は遠巻きにしてわあわあ騒ぐだけであった。
「不甲斐なき者どもよ」
と躍り出した一名の武士があった。
「横須賀一党野間善兵衛」
と名乗った武士は、長槍を構えて、向井正重の前に進み出て行った。
善兵衛はよほど槍に自信があると見えて、槍の穂先を向井正重の眼にぴったりと付けてじりじりと寄って行った。向井正重は長巻きを右肩高くかまえて善兵衛の動きをじっと見つめていた。
善兵衛は足を止めた。彼は槍の長さと、長巻きの長さを目で測っていた。長巻の方が一尺は長かった。一尺の長さに勝つためには踏みこんで突かねばならなかったが、正重の眼が怖くて、それ以上踏みこめなかった。彼は、正重の攻撃を誘い、まずは、長巻きの一太刀をかわし、踏みこんで討ち取ろうと考えていた。
善兵衛は、槍の穂先をゆっくり廻した。穂先の円の中に長巻きを誘い込もうとした。だが正重はその誘いに乗らなかった。
「来い。若者、そちの槍先は震えておるぞ」
正重は叫んだ。野間善兵衛は震えているという一語にこだわった。
善兵衛は正重の胸もとを狙って、えいっと一声鋭く突いてかかった。同時に長巻きが一閃した。善兵衛の伸び切った小手先が長巻きに斬られた。善兵衛は退いた。
(充分に殺せるのに、なぜ正重は相手に手疵だけを負わせるのだろうか)
徳川の将兵にとって、それが疑問であった。水軍の戦法というものが、そうであろうかと考える者もいた。舷と舷を寄せて戦う時、まず相手に疵を負わせて、戦闘能力を失わしめることを第一と考えるから、このようなことをするのだろうかとも思われた。海戦は敵の舟を奪い取ることであった。舟を取れば、負傷したものは舟と共に勝った方に所属することになる。だから、人の命を無駄にしないのだと考えれば、向井正重のやり方が分らないことはなかった。
野間善兵衛が退いてからは、われこそと向井正重に打ちかかる者はなかった。
「手強ければ、弓を揃えて、討ち取れ」
と本多忠勝が命令した。忠勝は敵の援兵が現われること

を恐れていた。
その声を聞くと、向井正重の態度が変った。真赤に紅葉したハゼの木を背にしていた正重は長巻きを振りながら、家康の軍の中に斬り込んだのである。弓を揃えてこられらどうにもならなかった。敵がそう出るならば、その前に斬って斬って斬りまくって血路を開こうとした。
向井正重が斬って出ると、その後から、やはり、長巻きを持った正重の嫡子向井勝政が斬って出た。親と子は適当な間隔を保ちながら、徳川勢の中におどり込んだ。向井親子に続いて城兵も一気に出て戦った。既に用宗城には火が掛けられていた。これ以上持ちこたえることはできなかったからである。
あちこちに人のかたまりができた。一つの塊りの中に一人の城兵が取りこめられ、その男が死ぬと、その塊りは次の餌を探して動いて行った。
向井正重、向井勝政は容易なことでは討ち取ることはできなかった。しかし、次々と立ち向う新しい兵に、正重、勝政は次第に疲労していった。
親子は大手門まで逃げた。だがそこには三十余の銃口が二人を待っていた。
向井親子は大手門で、銃弾を身体中に受けて戦死した。城将の三浦兵部義鏡も既に討たれていた。
用宗城から立昇る煙に駿府城の兵が気がついたころには戦いは終っていた。用宗城を守っていた五百人はほとんど徳川軍に討たれていた。
しかし、徳川軍にも五百人近い損害があった。負傷者も多かった。
家康は、敵の追撃をかわすために、急遽、掛川城に向って退いて行った。途中田中城を囲んでいた千名が合して、ようやく陣容が整ったとき、家康は側近の者に、
「我責めは二度とやるものではない」
と云った。我責めとは無理押しのことである。味方の損害を度外視しても、敵の城を取らねばならないような作戦上、やむを得ないときに使う手であった。用宗城に我責めをかける理由はなにもなかった。あったとすれば海将、向井正重、勝政の父子を討ち取ることであった。
「おしいことをした」
と家康は掛川城に帰ったときに云った。ひとりごとのようだったから、側近の者は黙っていた。家康は言葉を補足した。
「向井正重、勝政を生け捕ればよかった。海将には海将らしい死に方があったものだ。彼を味方につけて、わが水軍を強化することになぜ気がつかなかったのだろうか」
それは家康の愚痴であった。その家康が向井正重の長巻きを振っての戦いぶりを聞いたのは浜松城に帰ってからだった。
「それこそ人を殺さずして、敵の舟を取る水軍の極意であろう」

と云った。家康は水軍らしい水軍は持っていなかった。だから、向井正重の死は惜しくてたまらなかったのである。

「お館様（家康のこと）はこのたびの我責めによって用宗を落したことを後悔なさっておられるようだ」

と本多忠勝に告げた者がいた。

「それはそうだろう。あんな小城一つを落すのに五百人に近い死傷者を出したのだから、……しかしあのときのお館様の心は、ああでもしなかったらどうしようもなかったのだ。九月十五日に信康様を失った直後のことだからな」

忠勝は半ばひとりごとのように云った。家康の家臣の多くは、家康の用宗城攻撃は常規を逸したやり方であり、これによって多くの者を失ったことを反省していた。諫言すべきであったと悔いている者もいた。

九月二十五日になって安土城の信長から使者があった。使者は信長のお気入りの丹羽長秀であった。丹羽長秀のような大将を使者としてさし向けて来たのだから、よほど重大な用件だと家康は思った。おそらく出兵の催促だろう。武田軍を前にして、何処へ出兵せよと云うのか、家康はふと加賀を頭に思い浮べていた。

「この度の用宗城の勝利のことまことに、祝着至極のこと、大納言様（信長）も心からお喜びになっておられます」

と云った。なんだそのことかと家康は、あまりにも期待していたことと違うので、驚いた顔をしていた。

（ひょっとしたら、機嫌取りのための使者派遣かな）

とも思った。嫡子信康を死に追いやった信長は、少々やり過ぎたなと思って、丹羽長秀をさし向けたのかもしれない。今さら信康を生き返らせることはできないのに、そんな小細工をなぜ使うのだろうか。そんなことを考えていると、丹羽長秀が、思ってもみないことを云った。

「用宗城の副将、向井正重を討ち取ったことは、武田水軍を滅亡に追いこんだも同様なことである。その手柄はたとえようもないほど大きなものである。よくぞ、向井正重が用宗城にいることを探り出したものである。そして、不意を衝いての奇襲攻撃はまことに鮮やかなものであった。これで武田水軍はもはや恐るるに足らなくなった、と大納言様は云っておられる」

丹羽長秀は信長の言葉を更に誇張して、向井正重を討ち取ったことが如何に重大な意味があるかを述べたあとで、

「ついては、今回の勝利のお祝いとして、しかるべきものを持参しましたので御受領を願います」

と前置きし、金百枚を差し出した。

信長はなにかにつけて、金貨で解決しようとする癖があった。金貨が万能の力を発揮していた時代だということもあるが、信長ほど金貨を政略に使った大名はなかった。彼は金貨で大納言の地位を得、左大臣にまで登った。地方大名を手なずけるのにもよく金貨を使った。

天正二年（一五七四）、高天神城が武田勝頼に奪われそうになったとき、信長は家康に援軍を乞われながらも、わざと合戦に遅れた。そして家康に対しては慰撫料として金貨二駄を送っている。

今回の金貨百枚も、用宗城を落した報奨金の形でありながら、実は家康の御機嫌取りのためのものであった。

家康は、その金貨を有難く頂戴した。大納言殿にはよろしくお伝え下さいと、丁寧に使者を送り出した。

家康は耐えていた。なにがあっても、どうされようと、信長にそむくことはできなかった。彼は、その金を、用宗城攻撃の際に死んだ者、傷ついた者、手柄を立てた者たちに分かち与えた。

「一文も残さず、分かち与えよ」

それが家康の厳命だった。そうすることによって、いくらかでも我責めの犠牲者が救われればよいと思った。一方では、信長から貰った御機嫌取りの金を傍に置きたくないという気持も働いていた。

用宗城陥落の際、海将の向井伊賀守正重と向井勝政が戦死したことは、武田水軍に重大な影響を与えた。水軍の中心的人物だった向井正重を海上でなく陸上で死なせたということで、水軍の将たちは、そのようにさせた穴山信君に恨みを抱いた。

「穴山信君という人は水軍の使い方を知らない大将だ。このままだと、われわれ水軍は、すべて陸に上った河童となって憤死するようになるかもしれない」

このようなことを考え出す者も出て来た。武田水軍の中核をなす、伊勢水軍が動揺しだすと、間宮水軍も動揺を始めた。

間宮水軍はもともとは北条水軍に属していた。北条氏政はこの機を狙って間宮水軍に北条復帰を呼びかけた。

武田勝頼は向井正重、勝政両海将の死をやはり重視した。早速、穴山信君に仔細を報告するように命じた。

これに対して信君は、

「用宗城の兵力が足らないから一時的に向井正重を守備に当てたものである。もし、本国からかねて要求通りの兵力を増強してくれていたら、こんなことにはならなかったと思う。このようなことが他でも起らぬよう、至急兵の増強をお願いしたい」

と、逆ねじをくわせるような書状を勝頼へ送った。

勝頼も、この傲慢な御親類衆筆頭の穴山信君には手の打ちようがなかった。

武田水軍敗る

天正八年（一五八〇）の春まだ浅きころ、武田勝頼は自ら兵を率いて上野に出征した。

従来、西上野は武田氏の支配するところとなっていたが、東上野の沼田、厩橋（現在の前橋）は上杉氏の支配下にあった。しかし、勝頼が上杉家の相続争いの際、上杉景勝に味方をした代償として東上野は武田氏が治めることになった。勝頼はこうして得た新領地の見分のためと、勝頼が景勝に味方をしたことによって敗死した上杉景虎の実兄、北条氏政との、境目の城の取り合いを指揮するための出兵であった。

北条氏と武田氏は、天正七年の暮れには完全に国交は断絶し、北条氏は徳川氏と攻守同盟を結ぶことになった。

武田勝頼はこうなることをもともと承知の上でしたことだったから、さして驚いてはいなかった。もともと、北条氏政と同盟を結んでいても武田氏は利用されるばかりでさっぱり得をすることがないから、思い切っての断絶であった。

勝頼は厩橋に入城し、ここで兵を整え、武蔵と上野との境目の広木城（埼玉県児玉郡美里村）と、大仏城（同じく美里村、現在この地方にだいぶつという地名がある）へ武田信豊を大将として五甘（後閑）衆、長根衆、白倉衆等の上野勢を先方衆とし、小幡豊後守、多田治郎右衛門などが兵を率いてこれに続いた。軍目付には初鹿野弥五郎が派遣された。

広木城、大仏城とも山城であった。この城を取ったからといって、大して名誉なことではなかったが、もともと両城は、境目の城というよりも、上野武蔵両国の国境から四里（約十六キロ）も、武蔵国に入りこんだところにあった。だから、武田勝頼が行ったこの作戦は城取りが目的ではなく、北条氏に対する示威戦争とも見做された。北条氏政が徳川家康と同盟して、伊豆から駿河にかけて進出の気配を見せているので、武田氏も、

（しからば、関東の北部を侵略するぞ）

という姿勢を見せたのである。

北条氏政は氏康以来、関八州を統治するが、それより外へは出ないというのが、家憲であった。氏政とすれば、上野を武田氏に取られ、更に武蔵まで侵出して来られたら容易ならぬことになる。北条氏にとってもう一つ気になる存在があった。常陸の佐竹氏であった。佐竹氏と北条氏とは一応友好関係を保っていたが、それは佐竹氏が中立主義を続けているということであり、もし佐竹氏が武田氏につい

たら、それこそ関東における北条氏の存在は危うくなるのである。勝頼が上野の中心地厩橋と、北部の沼田を押え、その勢いを以て武蔵へ進出を開始したことは北条氏にとって容易ならぬことであった。

北条氏政は伊豆や駿河に多くの兵を出すわけにはゆかなかった。北条氏は、大仏、広木城を死守せよと厳命を発し、多くの兵を送った。

勝頼の作戦は成功した。大仏、広木両城を攻めて、一応の成果を収めた典厩信豊を総大将とする上野衆の諸隊が引き返した後には上野衆の手で境目付近の城を強化した。

勝頼は厩橋で、上杉の臣北条高広と会見した。高広は上野厩橋城にあって、北条家と上杉家の間の取り持ちをした人であった。

北条氏政の実弟を上杉謙信の養子にすることによって北条、上杉間に和平をもたらした人であった。だがこの和平も、御館の乱によって、景虎が死んだことによって終りを告げた。上野は上杉景勝と武田勝頼の盟約によって武田氏の所有となった。この変動に対して、北条高広は上手く立ち廻った。勝頼に全面服従することによって、その地位を保ったのであった。

勝頼にしても、厩橋城から北条高広を直ぐ追い出すわけには行かなかった。合戦で取ったのではなく、上杉家から武田家への譲渡であるから、あまり無体のことはできなかったし、景勝との間に、沼田城、厩橋城を守る将士はそのまま安堵して貰いたいという依頼もあったので、しばらくはそのままにしてあった。

勝頼としては新領土には、自分の気に入りの将士を送りこみ、それぞれに栄達の目を見せてやりたかったが、高天神城の将兵の交替も簡単ではなかったほど、設楽ヶ原の敗戦以来将兵の数が少なくなっていたから、上野在住の上杉の旧臣はそのまま武田側に受け入れることにしたのである。上杉と緊密に連合するにはこうすることも必要であった。

勝頼は多くの旗本たちを従え、厩橋城、沼田城と馬を走らせた。得意の絶頂であった。

（やはり、北条と縁を切ったほうがよかったのだ）

彼は馬上でそう考えていた。

勝頼が沼田城から箕輪城に戻った夜、早馬が駿河探題の穴山信君からの書状を持って来た。

《北条氏が大軍をもよおし伊豆方面から駿河に進出の模様である。兵力はおよそ、三千から四千、黄瀬川（現在の狩野川）のあたりに集中して、一気に駿河へおし込もうとしている。なお、この作戦には、北条の水軍が総出で援助しているから、わが方も水軍を動かそうと思っているが、水軍だけでは戦にならぬから、至急、四郎殿が自ら兵を率いて出向せられるようお願い申す》

という内容のものであった。

信君の書状はいつもながら、どこか尊大ぶったところがあった。勝頼と従兄弟同士の関係にあり、同時に義理の兄

弟でもある。しかも、穴山家と武田家とは代々血縁関係にある。そんなことが頭の中にあるのか、それとも年上の従兄だという感情が、四郎殿と親しく呼ばせているのか、いままで、お館様というような言葉を勝頼に使ったことはなかった。

過去の血筋はどうであっても、勝頼が武田信玄の後を継いだ武田家の頭領であることは自他共に認めるところである。いくら御親類衆筆頭の実力者であっても、この行為にはいささか常識を逸脱したものがあったが、勝頼は特にこれを取り上げてどうこうは云わなかった。問題は四郎殿という呼び方よりも、文章の内容である。なにか北条氏出兵に際しての軍兵催促が、人ごとのような書き方でしたためられていた。このような場合は、敵の動きに対して、わが方はこれこれこのような手を打っている。しかし、容易に支えられるような敵ではないから、援軍をさし向けられたいというのが、ごく当り前の云い方である。信君は駿河探題であるにもかかわらず、その責任のすべてを勝頼に任せ切ったが如き書状の書き方に、勝頼は、いささか気になるものがあった。

勝頼はその書状を信豊に見せて、意見を訊いてみた。彼も勝頼と同じように考えていた。

「だが、やはり出兵せずばなりますまい、北条氏が徳川氏と連携を取っての軍事行動と思われますが、放っては置けません。この際、北条氏を徹底的にこらしめて、箱根以西には出て来られないようにするのが、まずは当面の策でしょう」

と信豊は云った。

勝頼は、上野を上野衆にまかせて、古府中に帰ると、早速、駿河方面への出兵の命令を出した。ここのところ、年に二度、三度という出兵で将兵の疲労はその極に達していた。上杉から貰った二万両もまたたく間に使い尽してしまうという状態だった。

勝頼は軍議を開いた。

「高天神城を放棄すれば、遠江を完全に徳川氏にやったことになる。その次には駿河も同じ目に合うだろう。もう少し頑張って、この危機を切り抜ければ、再び、武田の時代が来る。徳川氏の後押しをしている、織田信長も、毛利と上杉という二大敵国を向うに廻して困り切っているところだ。やがて織田の陣営にも動揺でも起れば、徳川氏は、三河に引っ込むだろう」

勝頼は云った。織田陣営に動揺が起るという兆候は今のところなかった。しかし、信長のやり方に恐怖感を抱いている者は多かった。信長の部下さえ、いつか自分も殺されはしないかと、疑念を持つ者もいるという噂は甲斐にまで聞こえていた。

「わが武田にとって今が一番苦しい時だ。しかし、この苦境を切り抜けられたら、われ等はずっと楽になる」

勝頼は同じことを再度云った。諸将の多くは若かった。

設楽ケ原の合戦以来、若返った諸将であるから、勝頼の言に従う者が多かった。しかし、設楽ケ原の合戦の生き残りの御親類衆は度重なる出兵には明らかに反対を表明していた。

勝頼は二千の兵を率いて駿河に向った。駿河で待っている一千の兵を合せて、三千あれば北条軍に勝てる自信があった。

既に梅雨の季節に入っていた。雨の中を駿河大宮の浅間神社まで来て、そこで兵を休ませているとき、浅間神社の老杉の頂から煙が上るのを認めて、これを勝頼に報告した者がいた。

「珍らしいことがあるものだ。いったいこれは吉凶何れであろうか」

勝頼は浅間神社の大宮司富士兵部少輔信忠に下問した。

「老杉に落雷して、中のうつろの部分が焼けて煙を上げることが、時々ございますが、今年になってまだ雷はありません。おそらく神木から煙が上るのは、古書に言う『軍盛んなること火勢の如し、煙たちまち四関を覆いて敵ひれ伏す』の煙と解すべきでしょう。おめでとうございます、この度の戦は必ずお味方の勝利でございます」

と述べた。勝頼はその言葉で大いに気をよくしていた。

ところがその翌日、吉田神道家の一族と称する吉田守警斎という者が、老杉に煙が立つについての吉凶を占った結果を、御大将の耳に直接入れたいと申し出て来た。

側近の者がこのことを勝頼に告げると、勝頼はその者に会いたいと云った。

吉田守警斎は白い長髪をたくわえた老人であった。彼は勝頼の前に出て、悪びれることもなく、

「老杉から煙が上るのは、不吉な前兆です。かつて桶狭間の合戦の前日、今川義元公が、これと同じようなことを経験され、翌日、戦死されました。私はその折、今川義元公と同道したからよくおぼえています。また、唐の時代に書かれた本の中にも、老樹煙を吐くは大凶なりとあります。願わくは、この度の合戦は中止された方がよいのではないかと思います」

と云った。吉田守警斎の目は炯々と輝き、人を射る勢いがあった。

勝頼は、守警斎の云ったことと、富士信忠が云ったことの食い違いに疑問を持った。勝頼はひそかに諸国御使者衆の一人、大月平造を呼んで、この話を告げ、吉田守警斎の身元を洗うように命じた。大月平造は父大月平左衛門の代からの忍者であった。彼は手下数人を使って、吉田守警斎の泊っている室を包囲し、静かに近づこうとすると、突然、室内から煙が上り、煙が消えた後には人は誰もいなくなっていた。吉田守警斎の姿はどこにもなかった。大月平造は念のため、手下を老杉に登らせて調べて見ると、中は空洞になっていた。その根本の方に、ボロ切れや木片などが投げこまれ、それが燃えていたのであった。

「おそらくは吉田守警斎と名乗った男は北条の忍者と思い

ます。お館様の心を不安におとし入れるための策かと考えられます」

大月平造は勝頼の前に手をつかえて云った。勝頼はそのことを富士信忠には云わないでおいた。云えば富士信忠は嘘を云ったことになるからだった。

勝頼は老杉の煙の謎が解けたことで心が晴れた。しかしながら、北条氏がこのような手の込んだ方法まで使って勝頼の心を乱そうとしている事実を見逃すわけには行かなかった。

武田軍は富士川沿いに南に下り、吉原で穴山信君の軍一千と合体した。信君の姿はなかった。

「徳川氏と北条氏は連絡を取り合いつつ作戦を進めています。わが軍が浮島原へ進出すれば、徳川軍は必ず高天神城か田中城攻略に来るでしょう。私はそのほうに備えます」

というのが穴山信君の云い分であった。信君は江尻城（現在の清水市）から動こうとしなかった。

（おそらく昨年の用宗城―持舟城と書いた文献もあるーのことを根に持ってのことだろう）

と勝頼は考えていた。用宗城の副将として水軍の大将向井伊賀守正重とその子勝政及びその家来二百が、徳川家康の奇襲に会って戦死したことについて、勝頼がその真相を問うたことに対して信君が不満を持っていることは承知していた。だが、全然顔を出さないのは、解せないことであった。

信君からは、家臣の曾根与一郎が信君の代理として勝頼の下に参加していた。曾根与一郎は名門曾根一族の一人であり、信玄に奥近習として仕え、のち穴山信君の側近となった人であった。

曾根与一郎は穴山信君の言葉を勝頼に告げたあと、

「水軍はいつにても出航できるよう、用意がしてございます」

と云った。与一郎は北条側が水軍を利用して盛んに、兵や物資を駿河に送りこんでいる実情について説明したあとで、

「このたびの戦いも、どうやら敵は水軍を使って、勝負に出ようという気がまえのようにございます」

と云った。

「去年、用宗城で向井伊賀守正重が戦死したのを知り、わが武田軍の水軍弱しと見たのであろう」

と勝頼は云った。

「おそらく、そうでしょう。あれ以来敵はわが水軍の間宮一党に対して、しきりに北条側へつくようにと誘いをかけているようでございます。もともと間宮水軍は北条水軍の出でありますから、誘われると、中には心の動く者もあるかと存じます。なにしろ北条水軍の中には間宮と同族の者や縁につながる者が多うございますから」

曾根与一郎は頭に白いものを戴いていた。年だけに、そ

の一言は人情の機微にふれているように思われた。

「しかし敵の水軍とわが水軍とを比較すれば、まだまだわが水軍が優勢であることには、自他共に疑いを持つ者はないだろう」

と勝頼が云うと、

「ところが問題は間宮水軍です。間宮水軍がいまのところ敵に付くようなことは考えられませぬが、いざ水軍と水軍との戦いになった場合、同族と争うのを嫌って、不本意な戦しかできないということになれば、戦いの結果がどうなるかは分りません」

与一郎は云った。

「わが水軍が負けるというのか、わが水軍は安宅船を一艘持っているのだぞ、敵にはそれはないだろう」

「確かに、わが水軍には安宅船のごとき大きな軍船がございます。しかし、それも使い方如何によっては、期待通りの役に立たないことがあります」

と与一郎は云った。

安宅船のような大型軍船は、戦う相手がやはり安宅船のような大型船の場合に有効であって、もし、敵が船足の速い小舟を用意して、かかってくれば、小廻りのきかない大船は案外もろくやられてしまうことがあると与一郎は説明した。

「そちは、ずいぶんと水軍にくわしいが、その他に、なんぞ云いたいことがあれば云ってみるがよい」

と勝頼に訊かれた曾根与一郎は、

「現在、武田家に取って、諸国に誇り得るものは水軍を第一といたします。徳川には水軍らしい水軍はないし、織田殿の九鬼水軍も武田水軍にはまだまだ勝てないでしょう。用宗城で、水軍の将向井親子を失ったとしても、船は失ってはいません。敵がなんと云おうが、武田水軍が健全であるということが、武田の大きな力になっております」

勝頼は曾根与一郎の話を聞きながら、ひょっとしたらこれは穴山信君の考え方ではなかろうかと思った。

与一郎は武田水軍について、ひととおり述べ立てた末に、

「北条氏が今回水軍を持ち出して来たのは、わが武田水軍の実力を試そうとするものだと思われます。おそらくは、織田、徳川からの指図でしょう。この策にうっかり乗ってはならないと思います」

「北条水軍が暴れ廻るのをわが水軍はだまって見ていろということか」

「そうではございません。ことと次第によっては出て戦わねばならないでしょうが、敵の手に乗って、誘い出されないことが第一と存じます」

曾根与一郎は武田水軍を江尻の津（清水港）に置くことが、敵に対して、大いなる牽制策になる。やたらに出て、北条の小舟を相手に戦うべきではないことを力説した。

たしかにその議論には理があった。しかし、梶原備前守を長とする北条水軍は、最近強大になっているという報告

もあった。

勝頼は曾根与一郎に、敵の水軍の様子を探るように命じた。

いつもどおりのことだったが合戦が始まる前の物見の活躍はめざましかった。

武田軍による物見の偵察によると、北条軍は黄瀬川の東側に集結しており、その数、およそ、三千ということであった。

「敵も三千、わが軍も三千ならば数において不足はない。なんとかして、敵を浮島原に引っ張り出して雌雄を決したい」

と勝頼は云った。三千と三千なら、武田軍は絶対に勝てる自信があった。ここで北条を徹底的に痛めつければ、今後はそうちょいちょいと、駿河に顔を出さないだろうと思った。

「敵を浮島原へ誘い出す工夫はないか」

勝頼は軍議を開いて諸将に問うたが、これと云って名案は出なかった。

敵が出て来ないなら、こちらが黄瀬川を渡って攻めこもう、という者もなかった。折からの梅雨で黄瀬川は増水して、容易に渡れるような状態ではなかった。

曾根与一郎から、北条水軍が沼津の浦つづきの、香貫、志下、志師浜、真籠、江浦、多飛、口野に水軍を待機させているという報告が入った。

北条側の水軍の総大将は、梶原備前守であり、各水軍の大将は清水越前守、富永左兵衛尉、山角治部少輔、松下三郎左衛門尉、山本信濃守であり、軍船の総数はおよそ三十隻であった。

「おそらく敵水軍の狙いは、わが軍が黄瀬川に近づいたならば、われらの後方に廻って、兵を上陸させ、後方を攪乱しようというのだと思います」

というのが曾根与一郎の見方であった。

「それならば、わが水軍を出動させて、敵の水軍基地を襲わせ、北条水軍を壊滅させたらどうか」

勝頼が云った。

「それは事実上、むずかしいことだと思います。それよりも、敵水軍を浮島原沖に誘い出して、海に沈めた方が良策と存じます」

曾根与一郎は、そこで献策した。

いままでの物見の報告によると、北条水軍は、小型船ばかりだから、数は多いが、恐れるには足らない。まず武田水軍の半数を浮島原の沖の辺りに出して、敵を牽制すれば、北条水軍は必ず現われるであろう。そこへ、隠れていたあとの半数が出て敵船団を取り囲んで討ち取るというのであった。

「絵に画いたような策だな」

勝頼は云った。やや不安であった。水軍の将がここに一人もいないことが更に不安だった。

「いかがでしょうか」

曾根与一郎が云った。

「余はいままで勝手なことを云っていたが、海のことは海に明るい大将でないと分らないのではないかと今になって考えるようになった。そちは至急、江尻の津に出向し、海将の岡部（土屋）豊前守、小浜景隆、伊丹大隅守、間宮造酒丞等と会って策を立てるように。余の命令は北条水軍を討ち平げよという一語につきる。それについての作戦はいっさい海将らにまかせると、申し伝えるように」

勝頼は目付役として、小山田八左衛門尉を曽根与一郎に同道させた。

浮島原沖の大海戦はそれから五日後に行われた。

四十艘余の武田水軍が四段になって沖に現われると、それを待っていたように東から、北条水軍三十艘あまりが、これも四段に分れて現われた。

双方共に十人ほどの水夫を左右の舷に配置し、船矢倉には五十人ほどの銃砲隊が乗っていた。帆は揚げてはいなかった。手漕ぎであったが、矢のような速さであった。それぞれの帆柱高く旗が掲げられていた。

「おや間宮水軍がいないぞ、安宅船もいない」

浮島原にいた武田の将兵は沖の方を見ながら叫んだ。それほど近いところに武田水軍は出て来たのである。

「だが数にしたら武田水軍の方が多いし、そのうち、必ず、間宮水軍や安宅船が現れるだろう。これはきっと作戦だ」

そう話している男もいた。

だが、安宅船が出現したのは武田方ではなく、北条方からであった。小さな島の陰から、突然二艘の安宅船が現われたのを見て、武田軍の将兵は声を上げた。

「北条軍が安宅船を持っているとは聞いたことはないぞ」

武田の兵たちは目を見張った。

安宅船は五百石積みから千石積みまでの軍船を云う。左右両舷に五十丁から百六十丁の櫓を用意し、これに、一人ないし、二人の水夫がついていた。船の長さは二十間から三十間もあり、大筒（大砲）三門と鉄砲百五十挺によって武装され、兵を五百ないし、千人も乗せることができた。

北条軍は二隻の中型安宅船を用意していた。安宅船は全速力で、自軍の船団に追いつくと、この中央を通り抜けて先頭に立ち、武田水軍目がけてまっしぐらに向って行った。

武田水軍の総大将土屋豊前守が乗っている軍船の帆柱に人が登り赤旗で円を描いた。武田水軍の四つの集団はそれぞれ距離をおいて離れた。北条軍の安宅船に備えての分散であった。北条軍の安宅船一つは伊丹水軍の集団を目ざして突っ込み、大筒や鉄砲を利用しての攻撃を開始した。

伊丹水軍は快速を利用して、大筒や鉄砲の的となるのを避けながら、北条水軍の小型軍船を攻撃した。

海戦が始ったが、追いつ追われつの戦いだった。舷と舷

とを寄せ合っての斬り合いはなかった。沈没する船も、焼かれる船もなかった。双方が秘術を尽しての海上での追いかけっこが長いこと続いた。こうしている間に自然とこの海戦の成り行きがきまりつつあった。やはり安宅船は大きな力を持っていた。北条水軍の安宅船とその周辺で戦う北条側の快速船に追いつめられ、ついに、戦列から離れざるを得なくなった武田水軍の船が三隻あった。三隻はやがて火に包まれて沈んだ。海戦が始って以来、二刻（四時間）は経過していた。薄暗くなっていた。武田水軍は夜の闇によって救われた。これ以上戦っていたら、更に大きな損害を出したかもしれなかった。武田水軍は江尻の津へ逃げ帰った。武田水軍は北条水軍に敗北した。想像もしなかったことが起きたのであった。

勝頼は、つぶさに海上戦を見たというよりも、武田水軍が北条水軍の安宅船に敗けたのを見たのであった。

「それにしてもわが安宅船はどうしたのだ」

勝頼は初鹿野伝右衛門（加藤駿河守の末子、初鹿野伝右衛門の姓名をそのまま継いだ人）を江尻の津へやって、真相を調査させた。

間宮水軍と安宅船がこの海戦に参加しなかったのは、海将を交えての軍議の席上、曾根与一郎が、お館様（勝頼）の命令と称して、出撃を許さなかったからであった。もともと間宮水軍には、北条方から調略の手が伸びているという噂があったので、間宮造酒丞は、その疑いを晴らすためにも、ぜひ出撃させてくれと云った。しかし、これは許されなかった。安宅船の出撃についても、海将はすべて、出撃を希望したが、曾根与一郎は勝頼から固く止められているからと云った。同席した、目付役の小山田八左衛門は、そのことは聞いてはいなかったが、曾根与一郎があまりにも自信を持って云うので黙っていたのであった。

初鹿野伝右衛門は、曾根与一郎が、水軍の将を交えての軍議が始まる半刻ほど前に、穴山信君の急使と話していたことを海将の伊丹大隅守から告げられた。その急使に会った直後の与一郎の顔は蒼白だったと伊丹大隅守は云った。おそらく軍議の席上で曾根与一郎が勝頼の名を出してまで、間宮水軍と安宅船の出撃をこばんだのは穴山信君の指図と思われた。

勝頼は曾根与一郎を遠州小山の城に閉じこめた。人をやって厳重に問いただしたが、与一郎は間宮水軍と安宅船を出撃させなかったのは、全く、自分の一存でやったことであると言い張った。穴山信君の名はついに出さなかった。曾根与一郎が、初鹿野伝右衛門と小山田八左衛門の検死のもとに切腹したのはそれから間もなくであった。

天正八年春の浮島原沖の海戦についての資料は、『甲陽軍鑑』（品第五十五）と、『北条五代記』（第五期の二）の二つがある。『甲陽軍鑑』には、八年の三月末に武田水軍と北条水軍が船戦（ふないくさ）をした。勝頼公は浮島原でこれを見物された。武田水軍は北条水軍に

比較して小勢であったから、はじめは苦境に立ったが、後になって勢を盛り返して北条水軍を追い払ったと書かれている。これに対して、『北条五代記』の方は、この海戦をかなり詳細に述べている。天正八年の春、浮島原の沖で、北条水軍と武田水軍が船戦をした。勝頼は海岸に立ってこれを眺めていた。北条水軍は安宅船を持っていた。この安宅船を先に立てて、浮島原に押しよせて、大筒で陸上にいる武田軍に被害を与えた。武田水軍は、はじめのうち清水の湊にこもっていてなかなか出て来なかった。そのうち、武田水軍は小舟ばかり多くを整えて北条水軍に打ちかかって来たが、北条水軍とはまともに戦えず、逃げ廻っているばかりであった。勝頼はこれを見て、非常に腹を立てた、と書かれてある。

『北条五代記』も『甲陽軍鑑』も徳川時代に入って書かれたものである。両書とも史料として価値高いものではないが、どうやら、このまぼろしの海戦では、武田水軍が敗けたらしいことが推察される。

結局武田水軍は日本一の大艦隊でありながら、武田が滅亡するまで役に立たなかった。この武田水軍は武田氏滅亡後は将兵、船もろとも、徳川氏の傘下に編入された。

抜け駆けの功名は切腹に価す

徳川家康は高天神城奪還に本格的に取り組む決心をした。武田、北条間の同盟が破れ、伊豆方面を北条軍がかためて、駿河進出を狙うようになったので、武田軍は駿河、遠江方面の兵をそちらへ向けねばならなくなったことと、高天神城救援のための、度々の出征で、武田軍の軍費がかさみ、武田軍の内部に、高天神城防備の方針に批判的な者が出て来たという情報が入ったからである。

駿河探題、穴山梅雪（信君）は江尻城にいるから、高天神城の情況がよく分っていた。彼は、古府中の勝頼に書状を送り、

《これ以上、高天神城を持ちこたえることは戦略上無理と思われる。ひとまず、高天神城はあきらめ、将兵を駿河の田中城に引き揚げさせ、駿河の守りを厳重にしたほうがよいであろう》

と意見具申をした。

この意見具申に対して、古府中の躑躅（つつじ）ヶ崎の館で重臣たちが集って軍議がなされた。甲論乙駁、なかなか結論は出

なかった。穴山梅雪の案に賛成するものと、そんなことをすれば、田中城も、高天神城と同じ運命になるから、棄てるべきではないと主張する者があった。

高天神城死守説を主張した者は、長坂長閑斎であった。

「高天神城を援助するために毎年甲斐の国から出兵していたのでは、なんとしても軍費がかさんでやり切れない。今後は浜松城から家康が兵を高天神城に向けたと聞いたら、江尻城、田中城から援軍を送るようにすればよい。駿河探題ともあるお人がそのくらいの才覚がなくては困る」

と長閑斎が発言した。

一年前ならば、或はこうすることが可能だったかもしれないが、北条氏を敵にしている現在ではそれは無理であった。が、長閑斎は、そのつもりになればやってできないことはない、駿河探題は駿河を守ればよい、隣りの高天神城は本国で守備すべきであるというような考え方をしているから、このように、追いこまれた状況になったのだとも云った。

長閑斎はもともと御親類衆筆頭の穴山梅雪と仲が悪かった。しかし、軍議の席で、長閑斎がはっきりと、穴山梅雪をなじったことは、これがはじめてであった。そこには梅雪は居なかった。梅雪は、何時北条氏の侵入があるかもしれないので江尻城を離れることはできなかった。梅雪の代理として、市川四郎兵衛が軍議に列席していたが、何も云わずに黙って聞いていた。梅雪にそうせよと云われていたからであった。

長坂長閑斎の説は、要するに、高天神城を棄てることはまだ早い。駿河は武田領だから、駿河から援軍は出せないかどうかもう一度検討すべきだという意見であった。それを大げさに云うと、駿河探題の才覚云々になるのである。

軍議は一刻半（三時間）に及んだが、結論はつかなかった。いよいよ勝頼が最後の断を下さねばならなくなった。

「玄蕃頭殿（穴山梅雪）の言はもっともなことなれど、今すぐ高天神城を棄てることは、天下に武田の非力をさらすようなものである。しかし、本国からしばしば援軍をさし向けるのは確かにむずかしい故、ひとまずは駿河にて兵を集め、高天神城を救援すべく思案するように江尻城へ書状を以って申しつけることにしよう」

勝頼は長坂長閑斎の説を取り上げたのである。

軍議の模様は市川四郎兵衛によってことこまかに穴山梅雪に報告された。

「古府中の館にはなんと愚かな者ばかりが揃ったものだ。このような情勢下において、駿河の諸豪にこれ以上の兵を出させることは、駿河をも敵につかせることになる。四郎殿にはそんなことが分らないのだろうか」

梅雪は云った。駿河の国の諸豪には、税だけではなく、多くの夫役を課している。軍兵として徴用されている者も二千人近くはいる。これ以上、軍兵を出せと云えば、諸豪は怒って徳川方か又は北条方につくだろうというのが梅雪の考えだった。中央と地方の見識の相違であった。

（それは分り切っている。そこをなんとかやって貰いたい。そしてこの非常時を乗り切りたい）

という勝頼の気持は通ぜず、一片の命令書は、梅雪の心をいままで以上にかたくなにした。

「こんなことをしておれば、近いうち武田は亡びてしまうぞ」

梅雪は口にしてはならないことを云った。云ってしまってはっとしたが、もう遅かった。そこには市川四郎兵衛の他、侍臣が数名いた。家来の前で、主家滅亡を口にするなどとんでもないことだった。梅雪はふと不安になった。このようなことが、敵に洩れてはたいへんだと思った。梅雪はそこにいる侍臣たちの顔をいちいち丁寧に見廻した。六人のうち三人は甲斐から連れて来た家臣であり、三人は駿河の今川家の旧臣だった。

六人のうち三名は、梅雪の顔を睨みつけるように見詰めていた。

（なんということを云われるのだ）

と責めている目であった。

二人は俯いていた。梅雪の発した言葉に恐れをなして、顔は上げられないでいる様子だった。

一人だけが平然と坐っていた。どこ吹く風かという顔付だった。

「源左衛門、そちはいま余の云ったことをどう考えるか」

梅雪は山本源左衛門に訊いた。

「おおせのとおりだと思っております」

源左衛門はけろりとした顔で云った。山本源左衛門は元今川義元の重臣、朝比奈兵太夫に仕えていた山本源左衛門政信の子であった。父の名を襲名して、穴山梅雪に仕えていた。

「武田が亡びると思うか」

「そう簡単には亡びないでしょう、しかしこのまま、じり押しに押されて行ったら結局は亡びるでしょう」

「どうしたらよいと思うか」

「思い切って駿河を棄て、甲斐信濃にこもって戦えば、そのうち必ずや再び戦機は武田方に巡って来るでしょう」

山本源左衛門は恐るべきことを云った。梅雪は、あっけに取られた。高天神城撤退だけではなく、駿河からも撤退せよというのである。

「ばか者……」

梅雪は怒鳴ったが、その声には力がなかった。江尻城内でのこのことは間もなく徳川家康の知るところとなった。江尻城内には、既に徳川方に心を寄せる者がいて、それ等の人が徳川方の密偵と繋がっていた。

梅雪が武田は亡びるかもしれないと云ったということは、梅雪の心の中に、武田勝頼に離反する気持が根ざしているということでもあった。家康は、元、今川方に仕えていたことのある小笠原右京進義頼を招いて、江尻城内にい

る元今川の旧臣で知っている者はないかどうかを訊いた。
「山本源左衛門という男を知っております。その源左衛門の父源左衛門は拙者の従兄に当る間柄です」
と答えた。
「それは好都合だ。なんとかして、その源左衛門に連絡をつけることはできないか、いやそち自らでなくてもよい……」
家康は小笠原義頼の顔をじっと見詰めて云った。義頼には、家康がなにを求めているかよく分っていた。臣下としてこれをことわることはできなかった。義頼は及ばずながらと答えた。
服部半蔵の手の者がその日のうちに、小笠原義頼のところへ来た。一刻ほど密談が続いた末に、小笠原義頼は、山本源左衛門あての書状を書いた。
そろそろ暑くなりかけた頃であった。
山本源左衛門は、いつものとおり釣竿をかついで海へ夜釣りにでかけていた。江尻城は海を見下す山の上にあり、彼が住んでいる屋敷はその麓にあった。海はすぐそこだった。
釣好きな彼は寸暇を利用して釣りにでかけていた。以前には非番のとき釣に出たが、このころは、非番であっても外出は許されなかった。夜釣りも外出と云えば外出であったが、屋敷のすぐ近くだし、居場所は分っているので、上役も大目に見ていたのである。

その夜はさっぱり釣れなかった。山本源左衛門はそろそろ引き揚げようとしたときに、やはり夜釣りに来たらしい男が近づいて来た。
「さっぱり釣れませぬな」
男は話しかけて来た。月明りで見ると、町人らしい服装をしているが、かまえ方が武士のようであった。
(怪しい男……)
と源左衛門が思ったとき、相手は低い声で笑いながら云った。
「私は、あなたの親戚筋に当る小笠原義頼殿の書状を持っています」
と云った。源左衛門ははっとした。確かに親類に小笠原義頼という者はいる。しかしそれは徳川家の家臣であった。
「あなたの父源左衛門殿の従兄小笠原義頼殿から依頼されて参った者でございます」
相手は姻戚関係をくわしく述べた。源左衛門は身を退いた。義頼は徳川方の侍大将である。
「すると、貴殿は……」
「そうです。徳川に仕える者です」
「書状とか申したな」
「書状は二通持って参りました。一通は、小笠原義頼殿より、貴殿あてのもの、もう一通は、浜松のお館様(家康)から駿河探題様への密書です。それをあなた様から、駿河探題様へ、内密にお渡し願いたいのです。この仕事はぜひともお引き受け願いたい。御返事が無くとも、私はそれを置いて行きます。お身の大事、お家の大事のことゆえ、ゆめゆめおろそかになされぬように、お返事は明後日ここにて」
男はそれだけ云うと、さっさと遠ざかって行った。
「あの男、密書と云ったな、密書と云いながら、その密書を忘れて行った。おかしな奴じゃ」
山本源左衛門はそうつぶやいてから、ふと魚籠(びく)の中を見ると、その中に油紙に包んだ密書らしいものがあった。
(おそらくは徳川方の忍者でもあろう。すばしっこい奴じゃ)
身のこなし方の敏捷さから考えると、どうもそのように思われてならなかった。
山本源左衛門はまず小笠原義頼からの書状を読んだ。想像したとおり、武田は行先短いから、今のうちに徳川方に心を寄せていた方がよいだろうという意味のことが書かれていた。
山本源左衛門は一夜考えたが、結局家康から穴山梅雪宛の密書はそのまま渡すことにした。しかし、梅雪はひとりでいるということはめったになかった。周囲には誰かがいた。その前で渡すことはできなかった。
山本源左衛門は使番衆(戦時は参謀のような仕事、平時は秘書役)の一人としての役目を生かす工夫をした。
彼は駿河の各所から出て来る訴えごとや上申書を下読みして、それを分類し、それぞれ担当の役職に渡す仕事をしていた。現在で云えば文書掛のような仕事であった。その中には、直接穴山梅雪へ提出しなければならないようなものもあった。例えば地方豪族から梅雪に宛てた親書の類など、勝手に披見するわけにはゆかなかった。
「富士浅間神社大宮司、富士兵部小輔信忠殿より親書が参りました」
源左衛門はそう云いながら家康からの密書を盆の上に載せて梅雪の前に差し出した。
梅雪はそれを受け取った。宛名も差出人も書いてない封書であった。一見して密書と分った。梅雪は、源左衛門の顔を見た。源左衛門の眼がなにかを訴えるように輝いていた。
梅雪はその場で封を切って読んだ。
徳川家康からの書状であった。
《そこもとが勝頼公のために尽そうとしている気持は分るが、武田家はもはや、信玄公時代の武田家でないことは明らかである。現在の勝頼公が当主としている限り、武田家は間も無く亡びるであろう。もし武田家を残したいと思うならば、武田家と深いつながりがあるそこもとが勝頼公にかわって采配(さいはい)を振らねばならないだろう。そうなった場合は、わが徳川家ともすべて円満にことが運ぶだろうし、大納言殿(信長)にも、よしなに取りなすことができるであろう。いま、ただちに心を決めよと申しているのではな

く、少なくとも、この家康と梅雪殿との二人の間だけは、温い心を持って通じ合っていたいと願うものである。尚この書状は、拙者の家来の小笠原義頼とそこもとの家臣山本源左衛門殿とがたまたま姻戚関係にある故を以てさし上げたものである。できることなら、一筆御返事をお願いしたい》

という内容のものであった。要するに、梅雪に対して内応をすすめたものであった。

「この書状の使者は帰ったか」

と梅雪は、源左衛門に云った。

「使者はそのまま止っているものと思います」

と源左衛門が答えると、梅雪はすぐその言葉に続いて、

「返書を寄こせと書いてあるから、使者は待っている筈だ。いま返事を書く」

と云うと、早速筆を取って、

櫂ありて舟を漕ぐ手の行く末に
松の平や春のあけぼの

と歌を書いた。他には一言も書かず、封をして源左衛門に渡して云った。

「使者には、そちからねぎらいの言葉の一つも掛けてやるがよい」

穴山梅雪はそう云うと、密書を懐中におさめてその席を立った。

梅雪が書いたその歌は翌々日には浜松城の家康のもとに届いていた。

「櫂ありてのかいは甲斐であろう。松の平は松平、つまり徳川家のことであろう。大意は、甲斐の国があり、そこに武田家があるから、主家のために舟を漕いで来たが、眼前に徳川家が現われたのを見て心は春のあけぼののように明るくなった、という意味であろうが、どう思うか」

家康は、酒井忠次にその歌を見せて云った。

「歌をそのまま訳すとそのようになりますが、この歌の中には徳川家につくということは、いささかも匂わせてはおりません。春のあけぼのに、僅かながら色気を見せているに過ぎません。しかし、梅雪が、条件によっては、わが徳川家に叛る可能性が出たことは確実ですし、既に勝頼を見棄てている心情は明らかです。この歌を得たことは設楽ケ原の勝利に次ぐものだと思います」

酒井忠次は珍しく声を大にして云った。

駿河に頑張っている穴山梅雪との間に交渉の道が開けたことだけでも徳川家に取っては嬉しいことであった。

「これで心は決った。早速、高天神城の総攻撃にかかる。おそらく駿河の敵は動くまい」

家康は言った。穴山梅雪が密かに徳川に心を寄せているとしたら、高天神城攻撃を本気で妨害する筈はなかった。

家康は自ら横須賀城に出向いて、高天神城攻撃のための

準備にかかった。横須賀城は天正六年（一五七八）、高天神城攻撃用の付城として築城したものであり、この近くには馬伏塚城があった。高天神城より僅か一里余（約五キロ）のところにあって、城主として大須賀康高を置き、兵およそ千名をもって守っていた。

横須賀城に入った家康は、そこにしばらく止って高天神城包囲の策を練った。

高天神城は周囲を断崖にかこまれた堅城であった。力攻めに押してこれを落そうとすれば多大な人命の損失を招くおそれがあった。城内にいる八百余人の武田勢を降参させるためには少なくともそれと同数以上の死傷者を見込まねばならなかった。長期戦になれば更に味方の損害は増える。

家康は高天神城を落すためには、まずその周囲を城砦で包囲し、高天神城を孤立させようとした。

もし、武田軍がいままでのように、しばしば大軍を率いて本国からやって来れば、それらの小さな城砦はひとたまりも無く落されてしまうけれど、武田軍が、本国から救援に来ないし、駿河の穴山軍も動かないということになれば、城砦を持って高天神城を包囲することは可能であった。

高天神城は城としての地の利はよい上に城の周辺はことごとく水田だったから、それまで糧食の心配がなかった。

家康はまずその糧道を断とうと計ったのである。高天神城の周辺を城砦でかため、附近の農民を押えてしまえば、高天神城は飢える。理詰めな戦法であった。

家康は、高天神城の南方二十余町（約三キロ）ほどへだてたところの三井山にまず砦を構築した。山の頂の平屋の砦は高塀によって守られ、平屋の上には見張り用の楼を設けた。高塀の外には、土居を設け、さらにその外には深い堀を幾重にも掘り巡らせ、さらにその外側は鹿垣を設けるというような砦であった。この砦には、常時百名ないし二百名の兵を置いた。

これと同様な砦が、高天神城の南東の中村砦、東側の鹿ケ鼻砦、北東の火ケ峰砦、北側の能ケ坂砦、北北西の風吹峠砦、北西の小笠山砦、と次々とでき上り、城砦の兵たちが絶えず連絡して高天神城の動きを見守った。もし高天神城の兵が城から出ると、砦から砦へは知らせが走るか、鉄砲によって合図することになっていた。

高天神城は徳川方の城砦によって封鎖された。

天正八年の夏になると、家康はさらに新たな戦術に出た。青田刈りの戦法である。それまで高天神城の支配下にあった田の稲は青田のまま刈り取られた。農民は泣く泣く田を捨てて、この地から逃散しなければならなくなった。

高天神城は青田刈りによって完全に糧道を断たれたのである。高天神城から青田刈りを防ごうと兵を向ければ、近くの各城砦から徳川軍が現われ、さらには横須賀城、馬伏塚城からも増援隊が出て来るので、高天神城の将兵は涙をこらえて、この青田刈りを眺めていなければならなかっ

た。

高天神城の城主岡部丹波守真幸は何回となく使者を駿河探題穴山梅雪へ、或は本国の武田勝頼へ送って、救援を乞うたが、そのうち必ず大軍を率いて行くから、もうしばらく待てという返事があるばかりであった。

十月に入ると徳川家康は、本多忠勝、榊原康政、鳥居元忠、石川数正等の大将等と共に高天神城攻撃に出向いて来た。横須賀城にいる大須賀康高の軍を加えると、総数は三千五百人に近い大部隊であった。これに対して高天神城の兵力は僅か八百余名である。

家康は横須賀城に本陣を置くと、諸将を呼んで軍議を開いた。その劈頭に家康が云ったことは、

「高天神城が落ちるのは時間の問題である。ここまで来て、一ヵ月や二ヵ月早く落したところで、大勢には影響しない。問題は如何に上手に城を落すかということである。功を争うあまりに、徒らに将兵を死傷させては、戦下手として後世の物笑いになるものと心得ることだ。だからと云って、高天神城の糧食が尽き果てるまでじっと待っていたら、臆病者としてのそしりはまぬがれないだろう。敵は小勢なれども、なかなかの武勇の士の集りであるから、よほど気をつけないと、いらざる失敗を招くことになる。全軍が軍律を重んじ行動すること。特に抜け駆けの功名を挙げようなどとする者があれば、厳罰に処することをここに明らかにしておく」

更に家康は、この際抜け駆けの功名はいっさいならぬと、諸将より全員に通達するように云いわたした。

徳川軍は高天神城を包囲し、周囲に柵を設けて、城兵が出られないようにしてから、北方の橘ヶ谷口と東方の龍ノ谷口そして西口の三方から攻めかかった。だが高天神城は堅城であり、各口は自然の要害に守られ、その上、各所に堀や高土居や塀を巡らせているから、容易に近づくことはできなかった。

徳川軍は、盾を並べて前進し、武田軍の掘った堀や濠を埋めることからまず始めねばならなかった。これは合戦というよりも土木工事に近いものだった。木を切り、穴を掘り、その土で堀を埋めたりするのは時間のかかる仕事だった。

この仕事中に、突然城兵が現われて、徳川軍の仕事を妨害することがあった。死傷者は毎日出た。

高天神城は東と西にそれぞれ頂を持つ小高い山の上にあり、西方を除いて三方は断崖になっていた。攻めるとすれば西側の斜面を押し登るのがもっとも有利のように考えられていた。だから守る方もこの西口には三重の堀と二重の土居を設け、さらに内側には柵を設けていた。このような情況のもとでの徳川軍の進攻は、けっしてはかばかしいものではなかった。しかし家康は、時間がかかってもいいから、堀を埋め、土居を破壊して、本城に肉迫して行く戦法を取った。将兵の損害を少なくして城を落すにはこれが一

番だった。

大須賀康高の軍に康高の甥大須賀弥吉（別名小吉）という者がいた。

弥吉は足軽数名を持つ武士ではあったが、まだ侍大将としてまとまった兵を動かすところまでは行ってはいなかった。彼は伯父大須賀康高のように、早いところ一軍の大将になりたいと思っていた。侍大将になるのが先決だが、そうなるためには特に目立つような功績がなければならなかった。戦国時代は、誰にも認められるような手柄を立てねば、出世はできなかった。

大須賀弥吉は抜け駆けの功を挙げようと考えた。それは固く禁ぜられていたが、自分がやらねばきっと誰かがやるだろう。手柄を立てれば、それが抜け駆けの功名であっても、結局は実績として記録され、その場ではたしなめられるけれど、いつかはそれが出世の糸口につながるものだということを知っている彼は、今度に限って例外はないものと判断して、ひそかにその機会を狙っていた。

高天神城西口の堀のうち外側の二つの堀が徳川軍によって埋められ、いよいよ三番目の堀にかかったころであった。弥吉は、敵側の柵の内側の望楼から時々狙い撃ちに味方を殺傷している敵兵の存在に腹を立てていた。

（よし、あの望楼小屋に火を掛けたうえ、敵の鉄砲隊の首を取ってやろう）

と思った。

彼は部下の五名にこの話を洩らして、どうしたらそれができるかを密かに研究した。

十月の終りに近い豪雨の降る夜であった。大須賀弥吉は、五名の部下と共に雨の中に出て行った。彼等は手に鉤のついた縄や縄梯子を持っていた。彼等はまるで忍者のようなふうをして、堀を渡り高土居を乗り越え、そして柵を取り除いて、敵の望楼小屋に迫った。柵は支柱の根本を鋸で切って、引き倒した。

嵐の中だからこのようなことができたのである。彼等六名がこのようにして、望楼小屋にたどりついたのは、夜明け間際であった。そのころ、雨は止み、風だけが残っていた。

弥吉は望楼小屋に近づいて中を覗いて見た。はっきりとは分らないが、どうやら三人ほどの兵が眠っているらしかった。

彼等は灯油に浸したぼろ切れに火をつけて、小屋の内部に投げこんだ。間もなく火事だと気付いて逃げ出して来る敵を小屋の入口に待ち受けていて討ち取った。敵は三名だった。彼等は敵兵の首三つを携げて、急ぎ陣中に引き揚げた。

早朝の西口望楼小屋の奇襲は、敵、味方の夢を破った。城内では鉦を叩いて、全員を起床させ、西口に繰り出したほどであった。

徳川方の見張りも明け方近く西口に上った火の手を見

て、緊急事態発生とばかり各大将に報告した。この報は大須賀城の本陣にいた徳川家康にも報告された。

「誰ぞ抜け駆けの手柄をくわだてたな」

と家康は咄嗟に云った。瞬間にそう感じたのであった。家康は、寝不足もあって、その朝はまことに不機嫌だった。

朝食を摂っていると、さらにくわしい報告があった。大須賀弥吉ほか五名の抜け駆けの奇襲だったと分ると、家康は真赤な顔をして云った。

「ただちに大須賀弥吉を召し取れ」

そのただならぬ顔付きに近習たちは、ひどく驚いて、このことをまず大須賀康高に通じた。康高は自分の配下であり、しかも甥のしでかしたことでもあるから、早速、家康の本陣に出頭して、

「わが手の者大須賀弥吉が、今度軍律に違犯したることまことに申しわけないことと存じます」

と云った。すると家康は血相を変えて、

「詫びを云う前になぜ弥吉をさし出さないのか」

と怒鳴った。大須賀康高はほうほうの体で馳せ帰ってみると、大須賀弥吉は本多忠勝の陣に逃げこんでしまった後であった。弥吉は、伯父の康高は必ず自分を捕えて家康のところへ差し出すだろうと思ったからであった。

本多忠勝は、あまり自信はなかったが、とにかく家康の本陣まで、弥吉の命乞いに行った。しかし、家康は、忠勝が言葉を発する前に云った。

「抜け駆けをやるなと固く固く云いつけてある。これは軍律である。それに違犯した者は処罰しなければならぬ。もしそのような者を強いてかくまう者があれば、その者にも切腹を命じねばならぬ。合戦は遊びではないし、個々の功名争いのためでもない。それは戦いに参加する全将兵の責任において進められねばならないものだ。弥吉の抜け駆けによって、敵は弱点を指摘されたことになり、その弱点の補強を充分にするであろう。即ち弥吉の抜け駆けの行動により、わが軍の作戦はいちじるしく齟齬を来たしたことになるのだ。忠勝、そちも武将なら、この辺のことは分るであろう。直ちに弥吉に腹を切らせ、その首を大須賀康高に届けるようにせよ」

本多忠勝は一言も云えなかった。

確かに家康の云うとおりだった。西口攻めの手懸りは、まず望楼小屋を奪うことだとは誰でも考えることだった。小屋を奪うと同時に、まとまった兵を入れて、その一区画を占領すれば、高天神城西の丸攻撃は容易になるのである。そのあたりに、高天神城実力奪取の鍵があった。それを弥吉の抜け駆けによって、ぶちこわされたのであった。

その日、家康は大将、侍大将等、主なる家臣五十八名を呼んで、大須賀弥吉の事件の真相を明かにし、重ねて抜け駆けを禁ずると共に軍規の粛正を命じた。

弥吉は本多忠勝のところで切腹したが、弥吉の部下五名

にはとがめはなかった。家康は西口攻撃の方針を変え、いよいよ高天神城包囲を厳重にした。

穴山梅雪、離叛の心を決めること

高天神城主岡部丹波守真幸は再三にわたる援軍申請にもかかわらず、勝頼からなんの音沙汰もないので、城主以下八百余名の連署の嘆願をしたためて、使者鷺坂甚太夫に持たせて古府中に送った。鷺坂甚太夫は忍者ではないが、忍者におとらぬ手練を積んだ男であった。彼は黒装束に身をかためて、暗夜、一本の綱にすがって、絶壁を降り、一間ごとに一人ずつの割合で、見張りを立てているその間をくぐり抜け、古府中に走ってこの連署状を差出した。

勝頼はそれを読んだ。書状には絵画が添えてあり、高天神城周辺における徳川方の城砦やその中の人数、高天神城を取りかこんだ徳川軍の配置がくわしく書きこんであった。岡部真幸はまず敵情をくわしく説明してから、味方の守備の状態を述べ、最後につぎのように書いた。

《もはや、味方は一歩も外へ出ることは不可能になりました。一間に一人ずつの割合で立っている見張りの中をくぐり抜けて鷺坂甚太夫がこの書状をお館様までおとどけできるのは十中八、九はむずかしいと存じます。しかし、鷺

坂は決死ですから或はこれがお館様のお手元に届くかもしれません。その折はどうかこの城を守る者どもの苦労をお察しくだされ一日も早く援軍を送られるようお願い申上げます。城にはあと一ヵ月の食糧しかございません。われらは一日二回の粥にてようやく生きている状態です。粥腹ではろくな戦はできませんが、防がねばならないので、ただ気力のみにて戦っております。もし、援軍が来ない場合は城兵一同飢えて死ぬか、それとも、討って出て死ぬかどちらかを選ぶしか方法はございません。われら一同は、武田家のために死ぬことをいささかも悔いてはおりませんが、救援に行くと申されたまま棄て置かれるのはなんとしても腑に落ちないことです。事情があって救援ができないというならば、そのわけをお洩らし下され、われ等の取るべき処置をご指示下さるようお願い申上げます。今となっては、もはや逃れる術はございません、死ねよと命ぜられたら、喜んで討死する覚悟でございますから、どうぞわれ等の取るべき道をお示し下さるよう重ねてお願い申上げます》

そしてその文の後に城将以下八百余名の連署があった。

勝頼は、胸に熱いものを感じた。孤立無援となった高天神城の将兵の一人一人の顔が見えるようであった。彼は、たかぶる胸を押えて、鷺坂甚太夫に向って云った。

「よくぞ、この書状を……」

と云いかけたが、鷺坂甚太夫のあまりにも憔悴した姿を見るとあとが云えなかった。彼は労咳でも患っている者のように痩せおとろえていた。日に焼けて黒い顔の底に光っている眼が一層痛ましく思われた。身には襤褸をまとっていた。おそらく、乞食の姿に身を変えて遠路を旅して来たものと思われた。

「鷺坂甚太夫に着替えを与えよ、腰のものは余のものを取らせよう」

勝頼は近習に命じて刀を取り自らの手で鷺城甚太夫に与えた。

鷺坂甚太夫はその刀を推し戴いてから、

「おそれながらお館様あてにもう一通の書状がございます」

と云って、ふところから油紙に包んだ、封書を差出した。

勝頼は驚いた顔でそれを受取った。軍監横田尹松からの書状だった。なぜ別々に出したのだといぶかしげに見る勝頼の目に甚太夫は答えるように、

「お館様が城主様の書状を読み終ったあとでさし出すようにと軍監殿に指図されましたので、そのとおりにいたしました」

と云った。

勝頼はそれに頷いてから横田尹松の書状を披いた。

《拙者も城内の将兵ともども救援懇望の書状に連署をいたしました。これは城中一丸となっての嘆願に異存はないことを示すものであって、拙者個人としては別の考えを持っておりますので、その所信をここに披瀝するものでございます。高天神城は、城主よりの書状のとおりであり、今本国よりの救援がなければ自滅すること間違いないという情況になっております。この城を救うには、少なくとも一万以上の来援が必要でしょう。しかし味方が一万を動員すれば、必ず織田、徳川は連合してその倍の二万を繰り出すでしょう。味方がたとえ二万を動員できたとしても、敵が四万の大軍を集めることはそうむずかしくはないでしょう。そして、その結果は、必ず設楽ヶ原の合戦と同じような終末を迎えることになるでしょう。今や鉄砲によって完全武装された織田、徳川軍は、味方の騎馬隊を以てしてもたやすく打ち破ることはできないような堅固な兵団に成長しています。高天神城を救わんとして出撃することは、敵の誘導作戦にひっかかったことになります。この段階まで来たら、高天神城はお棄てなさるべきだと思います。救援できないから、思うがままにせよというお言葉を頂ければ、城内の将兵は、おそらく玉砕を覚悟で敵と戦うでしょう。おめおめと城を敵に渡して、落ちのびようなどとは考えないでしょう。しかし、この横田尹松は、最後の最後まで望みは捨てません。必ず敵の重囲を破って、お館様のところまで帰って、高天神城最期の様子を報告いたす所存でございます。夢々一時の感情におぼれて軽々しく軍を動かさないようお願い申し上げます》

勝頼は読み終って目を上げた。城主の岡部真幸と軍監の横田尹松との意見は正反対であった。

勝頼は、鷺坂甚太夫に改めて訊いた。

「余の返書を持って、再び高天神城に帰りつくことができるか」

それは死せよと云うに等しい言葉であったが、甚太夫は既にその言葉を覚悟していたように、

「この鷺坂甚太夫生きている限りは、必ずお館様の書状を高天神城までお届けいたします」

と云った。

勝頼は、侍臣に命じて、鷺坂甚太夫を充分にねぎらうように申しつけた。

勝頼は高天神城を救助したかった。そうすれば、いやおうなしに織田、徳川連合軍との決戦を強いられることになる。合戦の場が敵の本拠地に近いということで、味方には常に不利であった。

勝頼は重臣たちを呼び集め高天神城からの二通の書状を見せて意見を問うた。

「これほど急に追詰められることになるとは思わなかった」

武田逍遙軒信綱が云った。

「横田尹松の申すとおりである。城を徳川に明渡して、城兵たちは田中城につぼむか、それとも敵と決戦するかは城の将兵たちの判断にまかせるのが上の策と思われる」

と武田信豊が云った。

「このようになったのは、駿河探題の責任である。高天神城をあきらめる前に、駿河の兵を総動員して一押させてみたらいかがであろうか」

と長坂長閑斎が云った。これ等の諸説の中に一人だけ、織田、徳川連合軍との決戦を主張する者があった。真田昌幸であった。

「横田殿の見方は一部は正しいが正鵠（的の中心）を外れている。わが軍が出撃すれば、徳川、織田連合軍は必ず出て来るであろう。設楽ヶ原の合戦では、敵の謀略にかかったがために負けたが、今度は設楽ヶ原の場合とは違う。敵の鉄砲に対してどう処置すべきかは、この前の合戦以来、充分に研究し尽されている。われ等は高天神城を僅か八百で守っている将兵たちの士気を見習うべきである。たとえ、一万と二万の合戦であっても、やりようによっては充分勝てる見込みがある。このまま、じりじりと追いこまれるよりも、むしろ、この決戦に武田の浮沈を賭けるべきである。そのためには、上杉景勝殿をはじめとして、西国の諸将にも檄を飛ばして、織田軍を牽制すべきである。今度こそ武田が勝つ番である。今度こそ、連合軍を痛い目に合わせてやるべき時である」

昌幸は、武田の浮沈を賭けるべきだという言葉を発したが、これに対して抗議する者はなかった。誰もが、そのような危機感を持っていた。

若手の武将で、昌幸の言に賛成する者はあったが、御親類衆は、一人として昌幸の意見に賛同する者はいなかった。

勝頼は昌幸の意見に同感だった。設楽ヶ原の合戦の敗北の原因が想起された。佐久間信盛の謀叛を信じたのは穴山梅雪であった。そして、合戦の最中梅雪は本陣の命に従わず、独自の行動を取り、真先に戦線を離脱したがために、味方が総崩れになったのである。

あれから既に五年経った。今や武田の陣営も、あの頃からみると若返っていた。御親類衆の発言力も前ほどではない。今なれば、勝頼の命に従うだろうし、従わせるように陣容を整えることもできる。

（思う存分の戦争がしてみたい）

勝頼はそう思っていた。設楽ヶ原の合戦までは、御親類衆と父信玄の育てた家臣団の発言が強くて、思うことの三分の一もできなかった。今は違う。

（織田、徳川の連合軍と決戦するのは今を置いてはない。今なれば勝てる）

彼は、真田昌幸を使番衆頭取（現在で云えば参謀総長）としての合戦を考えていた。昌幸が立てた作戦を若い部将等に実行させたら、武田軍はいままで見られなかったような働きをするだろう。

（だがいまこのように反対意見の多い中で真田昌幸の提案を取り上げることはできない。ことがことだけに反対派の

諸将が納得するまで、戦えば勝てるという見通しを明かにしなければならない）

勝頼は、昌幸に向って静かに云った。

「そちの案について、もっと内容をつまびらかにしたものを提出するように。敵、味方の軍勢、諸国の情勢をも併せ考え、作戦計画を立てた上での軍議を開こう。中三日を置こう。それまでには用意ができよう」

「中三日では充分ではありませんが、おおよその作戦の大要はできます」

真田昌幸は、勝頼が乗気でいることに気をよくした。

その日の夕刻近くなって、駿河から穴山梅雪が来たという先触れが勝頼のもとに届いた。

高天神城から鷺坂甚太夫が書状を持って来たということは早馬で駿河の江尻城に知らせたが、それにしては梅雪の到着は早過ぎるし、出て来いという命令を下した覚えはなかった。北条氏の軍勢を前にして、梅雪が古府中へやって来るということはよほどのことでなければならない。

勝頼はなんとなく不安になった。

梅雪が古府中に来たのは鷺坂甚太夫とは関係がなかった。ましてや軍議に列するためではなかった。強いて云えば、彼自身の心を決めるためであった。

梅雪は山本源左衛門を通じて、家康から二度ほど書状を貰っていた。徳川方に叛るかどうか早く心を決めて貰わないと、大納言殿（信長）に推薦のしようがない。何分大納言は短気なお方だから、時期を失すると取り返しのつかないことになる。その点をよくよく考えられよと書いてあった。信長は降参した者でも降参したのが遅いというだけの理由で殺すことがしばしばあった。家康はその点に触れたのである。

いざとなって梅雪はやはり考えた。武田御親類衆の筆頭が主家を裏切るということにこだわったのである。それに、今の時点で武田が亡びるという決定的なものはなかった。少なくとも徳川家と比較したら、武田の方が家柄といい、領地の広さといい遙かに勝っていた。徳川と武田とが一対一で戦ったら必ず武田が勝つし、織田対武田の一対一の戦いをやっても武田が勝つ可能性があった。徳川と織田が連合軍を形成した場合にのみ、武田と戦うことができるほどの大国であった。

例えば織田、徳川との間にひびが入った場合とか、北条氏との間に再び講和が成立した場合などは戦局がどう転ずるか分らなかった。ただ一つだけはっきり云えることは、もし穴山梅雪が徳川氏に降れば、武田は亡びるだろうということだった。それは、武田家を人間にたとえて、右腕を切断したようなものである。そのときこそ武田家の滅亡は間違いないと思われた。

梅雪は、いままでどおり主家に付くべきか徳川方に叛るべきかの岐路に立ったままの気持を以て古府中に帰って来たのである。

古府中には梅雪の正室奈津の方がいた。勝頼とは一歳違いの異母姉であった。奈津の方は、久しぶりで梅雪の顔を見ると真先に云った。

「勝千代と勝頼殿の息女於徳姫とのお約束ごとはいまのうちにはっきりと決められた方がよろしいかと思います」

勝頼は正室雪姫が生んだ信勝の他に男はなかったが、側室美和の方が生んだ於徳姫がいた。於徳姫は勝千代より二つ年下の七歳であった。いまのうちに決めよというのは許婚の仲にして置けということであった。当時は許婚の仲になることは結婚したと同様に考えられ、場合によっては式を上げて、女の方はその夫たるべき家に引取られて、十四、五歳になり、初潮を見てから婚儀を行い、同棲という順序を踏む場合が多かった。於徳姫を勝千代の嫁にしたいというのは穴山家のかねてからの要望であって、於徳姫が生まれて間も無いころ、穴山信君が勝頼にこのことを申入れたことがあった。

〈さよう、それはよい話だ。考えておこう〉

勝頼の側室、お福の方の生んだ真樹姫と梅雪の嫡男信千代との許婚の話が、信千代の夭逝によって反古となったこともあったので、勝頼はむげにことわることもできずにそう答えたのである。なにしろ、於徳姫が生まれて間もないころだったから、約束というところまでは行ってはいなかった。しかし、穴山家ではこれを了承と思いこんでいた。特に奈津の方は、固くそう思いこんで今日に至ったのである。

「そのこともあったので実は、急に帰って来たのだ」

梅雪は奈津の方に云った。そのことも云ったように他にも大事なことがあったのだ。

梅雪は、勝頼の次女於徳姫を勝千代の嫁に迎えることによって、穴山家の血筋をいよいよ武田家に近くしようとした。もしこの結婚が成立すれば、穴山家は武田家と三代に渡って結ばれることになり、いよいよ御親類衆筆頭として家柄は格づけられるのである。

梅雪は、この話を勝頼が受けるか否かによって、武田に付くか離れるか決めようとした。この話を勝頼が喜んで受諾するならば、彼は表面で梅雪を嫌っているように見えても内心では御親類衆筆頭の実力者として認めていることを証明するものであった。もし、このことを彼が断ったときは、もはや武田家には未練を持たずに去ろうと考えていた。

梅雪が勝頼を訪ねた日は、今にも雪が降り出しそうに重く灰色の雲が垂れ下っていた。

勝頼は躑躅ヶ崎の館の書院で梅雪を迎えた。わざわざ駿河から出て来たのだから、なにか重要なことであろうと、近習を一人傍に置いただけだった。

梅雪は幼いころ疱瘡を患ったために醜い容貌をしていた。その梅雪が強いて微笑を浮べると、いよいよ以て気味の悪い顔になった。それでも梅雪は勝頼に対して精いっぱいの親近の情を示すつもりであった。

「御無沙汰をいたしました。四郎殿にはなにごともなく、御壮健の御様子、なによりです」

梅雪は挨拶した。

「そこもとも無事でなにより。戦局ただならぬ中にあって、さぞかし気苦労なこともあろうに」

と勝頼は挨拶を返した。ここまではあり来たりの挨拶だった。

一通りの挨拶が終ったあとで、梅雪がさて、とひとこと云ったとき、勝頼はかまえた。なにを云われても動じまい。感情をあらわに出すまい、結論はその場ですぐ出さないようにしようと自制した。相手が相手ゆえにそのように警戒したのであった。

「実は、かねがねお耳に入れておいた勝千代のことだが、来年は十歳になる、そろそろ於徳姫との間の婚儀の取りきめをしておきたいと思うが、いかがかな」

と梅雪は云った。

勝頼には意外な申出であった。於徳姫が生まれて間もないころ、勝千代と結ばせたいというようなことを梅雪から云われたことは確かにあったが、どう答えたのか覚えていない。なにしろ生まれて間も無い姫の行末など決めるべき時ではなかったから、上の空で聞いていたのであった。

「於徳の婚儀となな、そう云われてみると姫が生まれて間もないころ、そのようなことをそこもとから云われたことは覚えているが、約束とまでは行かなかったようだが……」

勝頼は記憶をたどるような目をした。

「いや確かに、その時貴殿は、それはよい話だ考えておくと申された。つまり、その時点で約束なされたものとみて、わが方はいままで待っていたのである。勝千代も来年は十歳になる。先のことはちゃんと決めて置いた方がよいと思うて参ったのでござる」

参ったのでござると云ったのは、この要件が主で、わざわざ駿河から出て来たのだと梅雪は云いたかったのである。

「余が、それはよい話だ考えておくと云ったのは、飽くまでも考慮してみたいと云ったのであって、勝千代と姫とを結婚させると約束したつもりではなかった。実は姫の嫁ぎ先は信豊の次男、小次郎に決め、云い名付く（許婚）の儀は来春、早々取り行う手筈になっている」

勝頼はその事実をそのとおりに述べた。武田信豊は勝頼とは従弟同志の関係にあり、特に親しい仲であった。信豊の父信繁が兄信玄と非常に仲がよかったのと、信豊、勝頼の仲の良さはしばしば比較されるほどであった。

「なにしろ、姫の幼少のころの話だったので、そのまま忘れていて、このことをそこもとに相談もしなかった。許していただきたい」

勝頼は梅雪に頭を下げた。

梅雪は不満だったが、勝頼にすまなかったと云われる

と、約束違反だと云って怒るわけにもゆかなかった。もともと、いい加減な口約束だったし、その後一度も、このことを確かめなかったのが悪かったのだ。落度はむしろ穴山家の方にあった。

それに、勝頼と梅雪が長いこと対立関係にあったこともこの縁談にわざわいしていたことを梅雪自らも認めざるを得なかったのである。

「信豊殿の小次郎を選ばれたのか、それは重畳至極のこと、決ったからには、なにも申さぬ。そのかわりと申しては、いささか勝手過ぎるとは思うが、貞姫をわが子勝千代の正室として申し受けたい。ご承知いただけるでしょうな、四郎殿」

梅雪のこの云い方にはかなり押しつけがましいところがあった。

それまでは勝頼の顔色を見ながら話していたが、於徳姫がだめだと分った途端に、御親類衆筆頭の勢力を肩にかけて、承知いただけるでしょうなと云ったのである。その言葉の裏には、この縁談をことわったら、たいへんなことになるぞという、威嚇さえも含まれていた。

勝頼の眉のあたりがぴくりと動いた。梅雪のその云いようが、かちっと来たからだった。

「貞姫は四歳でござる。云い名付くの儀には少々早すぎると思う。その話はしばらく、あずかりおきたい」

「ことわると云わるるのか？」

「そうではない。よい話だと思っている。しかし、なんと云っても貞姫は四歳じゃ、せめて、物心がついてから話を固めたいと思っている。これは親の心じゃ」

「親の心は分り申した。しかし、武田家統領としては、この婚儀に不服はなかろうと思う。云い名付くの儀は後でよいから、せめて、この件で誓書でも交しておきたい」

梅雪は飽くまでも食い下った。その強引さが勝頼にはなんとしても我慢できなかった。

「貞姫はまだ四つだ。いまここで誓書だの約束だのと申すほどのことはない。それほど先の先まで考えていたら世の中は窮屈になる」

「この穴山家と縁談を結ぶのは窮屈だと申されるのか」

「そうは云っていない。明日のことさえさだかに分らないような、乱れた世のことだ。もっと、足が地についた考え方を致したいと思っているのだ」

勝頼は云った。

「つまり、勝千代と貞姫との縁談はことわると申されるのだな」

梅雪は早急に結論を求めた。

「玄蕃頭殿がそう思いこまれるならばいたし方がない」

勝頼は云いわけをしなかった。彼は梅雪の顔を睨めつけていた。これでも我慢しているのだという顔だった。

梅雪はそれ以上はこのことについては触れずに、この日は帰って、翌日、再び勝頼に会った。勝頼はああ云って

も、心では少し云い過ぎたと反省しているに違いない。そこでもう一度貞姫のことを持ち出してみたいと思った。

しかし勝頼は梅雪の顔を見ると、彼が貞姫のことを云い出す前に、

「貞姫のことでお出になられたのなら、余の気持は昨日といささかも変ってはおらないと申すより他になにもござらぬ」

と云った。

梅雪は勝頼のその言葉を武田家が穴山家に対する不信任を表明したものと聞いた。今後穴山家とは縁を切るというふうに聞いた。梅雪は心の底から発する怒りを丸飲みこみにした後で、改めて云った。

「あのことはもうあきらめている。話は城のことじゃ、四郎殿」

梅雪は、もし貞姫との縁談をことわられた場合のために用意していた言葉をその場に出した。武田家との縁談が成立しなかった場合は徳川家に付くつもりだった彼は、徳川家に対する土産物として、築城案を考えていたのである。これは武田家を守るための築城案ではなく、亡ぼすための築城のすすめであった。

「城？　高天神城のことか」

「それも、ございます。まず拙者の云うことをとくとお聞き下され」

梅雪はそう前置きをしてから話し出した。彼は、高天神城を持ちこたえることがいかにむずかしいかを説き、今大軍を発すれば、連合軍も大軍を発するだろう。勝負は時の運だから、負けるか勝つか分らない。しかし、たとえ味方が勝ったとしても、勝つ為に費した軍費と人の命は多大なものとなり、それが武田家を根本的に揺がすことになるだろう。そこへ行くと連合軍は、たとえ負けたとしても、すぐ立直って、今度こそ直接甲斐の国へ攻めこんで来ること間違いない。そうしたとき、いったいどうして敵を防いだらよいか。甲斐には一つとしてこれと自慢できるような城はないではないか。そこまで話してから、梅雪は、

「高天神城を救うことより、まず城を作ることが大事です。それに直ぐ取掛ったらよいでしょう。幸いその候補地が韮崎の片山七里浜（韮崎市中田町）にございます。ここは台地になり、断崖をへだてて西側は釜無川になり、東から北は沼沢地になっております。ここに城を築いたら、幾万の敵が来ようとも、容易に落ちるものではございません」

そして梅雪は、北条氏が亡びないのは小田原城という堅城を持っているからだということを述べてから、

「真田昌幸に縄張りを命じ、用材は木曾殿に命じて調達すれば、一年もあらば立派な城ができ上るでしょう」

と云った。

真田昌幸に縄張りを命じたらよいと梅雪が云ったのは、昌幸が連合軍との決戦を主張している中心人物であること

を知っていたからだった。昌幸は勝頼がもっとも信頼している部将である。その昌幸を戦場に駆り立てず、築城へ能力を集中させることが、武田家を自滅に導く第一歩だと梅雪は考えていた。木曾義昌に木材の調達を命ぜよということは、木曾に良木があるのに目をつけ、木曾衆に材木調達の夫役を命じたら、必ずや不平不満が出るだろうし、これが原因で木曾義昌と武田勝頼との間が不仲になるだろう。その折を見て、木曾義昌を連合軍に誘いこもうと考えたのであった。もし、木曾義昌が勝頼の要求に応じ、木曾の住民もその夫役に堪えて、城ができ上ったとしても、それまでに、武田家全体が消費する軍費は多大なものとなり、おそらく武田家は経済的破綻を招くだろうと考えていた。

「昌幸に縄張りをさせるのはいいとして、木曾に用材の調達は少々酷ではないか」

勝頼は梅雪の話に乗って来た。

「木曾には檜が捨てるほどござる。切り倒して、曳いて来るだけのことです。たいしたことではありません」

梅雪は勝頼に是非そうするようにと、進言した後、坐り直して明朝の軍議にはぜひ出席したいと云った。

梅雪はその日のうちに主だった御親類衆の間を説いて廻って、築城案を固めた。多くは深く考えずにこれに賛成した。梅雪は御親類衆をまず固めて置いて、次には、跡部勝資と長坂長閑斎に働きかけた。跡部勝資は容易に賛成しなかったが、長坂長閑斎は日頃仲の悪い梅雪のこの案に賛成したのである。

梅雪が一日の間にひとりでこれだけのことをしたのではなかった。御親類衆や部将の中で穴山梅雪とつながりのある者すべてを動員しての、根廻し作業であった。

翌朝軍議が始まると同時に雪が降り始めた。寒い日であった。

軍議の席で、真田昌幸と曾根内匠の二人は築城説に徹底的に反論した。既にその機は失っている。今となっては信玄公以来の伝統的戦法「出でて戦う」以外に生きる道はないことを強調したが、この意見に賛成する者はなく、全面的に築城説に傾いて行った。

「高天神城は見捨てるのですか」

昌幸は声を高くして云った。

「大事の前に小事はやむを得ないこと」

梅雪が云ったその言葉に昌幸は食いついた。

「その大事とはいかなる大事」

「勿論、城を築くこと」

そう云う梅雪の顔をじっと見詰めながら、昌幸は、この男臭いぞと思った。或は徳川家に内通しているのではないかという疑心を押しつぶそうとすればするほど、梅雪の顔が反逆者の顔に見えて来るのである。

「では、玄蕃頭殿の案のとおりに事をすすめることにしよう」

勝頼の結論が下った。

雪は止まずに降っていた。初雪としては珍しく大雪になりそうであった。館が雪の重みできしんで鳴った。

勝頼公御料人を穴山殿御子息勝千世殿へ御約束なれ共、長坂長閑、跡部大炊助、大龍寺の麟岳和尚へ典厩音物をつかひなさるる故、穴山勝千世殿とは御相生(性)悪しとて典厩の次郎殿を聟になさるべきと有故、穴山殿御前殊ノ外御腹立は御尤にて候(『甲陽軍鑑』品第五十七)

〈註〉音物＝この場合賄賂、穴山殿御前＝穴山信君(梅雪)の正室、信玄の女、勝頼よりは一歳上の異母姉。

亥の刻出撃

高天神城主(正式には城代)岡部丹波守真幸は、代々駿河の岡部郷に住む豪族岡部美濃守入道常慶の次男として生れた。

五郎兵衛尉、治部右衛門、元信、長教、長保などという呼称を持っている。今川義元に仕えていたころから、その勇名を知らぬ者はなかった。元信の元は戦功によって今川義元から与えられた名前である。

彼の運命は、今川義元が敗死してから大いに変った。彼は兄岡部正綱と共に今川氏真を守って善戦したが及ばず、武田信玄に降り、三千貫の領地を与えられ、五百騎の大将として遇されるようになった。

真幸はその経歴が示すように、数多くの合戦に出て刃の下をくぐり抜けて来た人であった。合戦における駆け合いや呼吸を充分に知っていた。

勇将の下に弱卒なしで、高天神城に籠った八百余名の多くは駿河と信濃の出身者で、甲斐の国の人は軍監、横田尹松(正確には父親の代までは浪人)ほか数えるほどしかい

なかった。

岡部真幸は、武田信玄に降った人である。その彼が高天神城を捨てて徳川方に降ったとしても、その行末は目に見えていた。よくて先方衆として、前線に出され、矢・弾丸の盾となって死ぬか、生き残ったところで、変節者よ、臆病者よと云われるのが関の山であった。生涯を武将として生きて来た真幸には耐えられないことであった。彼が、高天神城を死守しようとするのはこのような背景があり、武田方が、その彼の気持を知って、この城の守りをまかせたとも云えた。

岡部真幸は勝頼からの返書を待った。あの鷲坂甚太夫が無事城を抜け出したかどうかも分らないのに、返書を持って帰って来るとは、とても想像されないことだった。しかし、鷲坂甚太夫ならば、それができるような気がした。

天正九年（一五八一）に年が変ってから、はじめて雨が降った。久しぶりの風雨だったので、攻城軍も城を包囲したままでしばらく攻撃の手をゆるめていた。その夜鷲坂甚太夫は高天神城へ帰りついたのである。

彼は勝頼からの書状の他に、勝頼の城兵に対する贈りものとして、鰹節五十本ほど入った袋を背負っていた。

「どこから、どうしてこれを背負って……」

いぶかる岡部真幸に、甚太夫は云った。

「犬戻り猿戻りの嶮を通って参りました」

そこは城の西北部にある痩せ尾根で犬も猿も通れないような嶮岨なところであった。ここを通った人は皆無であった。そこを鷲坂甚太夫は、大きな荷を背負い、しかも風雨の中を帰って来たのであった。鰹節は濡れないように、一つ一つ油紙に包んであった。

犬戻り、猿戻りの嶮を通り越すのもたいへんだけれども、敵の包囲陣の中をくぐり抜けて来るのは、もっとたいへんだった。しかし、甚太夫は見事にその任務を果したのである。

甚太夫が帰ったと聞いて、城兵たちは喜び合った。帰って来た以上、よい知らせを持って来たに違いないと思ったのである。しかし、勝頼が岡部真幸に宛てた書状は城兵が期待していたものとはいちじるしく相違していた。

勝頼は、岡部真幸の武勇と忠節を最大限な表現で讃めたたえてから、現在の軍事情勢を説明し、高天神城救援のために大軍を発することは、設楽ヶ原合戦の二の舞を演ずる可能性があるので非常にむずかしくなったと述べ、

《ここまで来た上は、そこもとの城将としての任務は充分つくしたことになる。もし二月までに救援隊が到着しないようならば、城を棄てて徳川方に降るのもよし、敵の包囲の一角を切り崩して小山城につぼむもよし、田中城（藤枝市）につぼむもよい。すべてはそこもとの判断に任せよう。このような結論をそこもとに伝えるのは非常に苦しい。この書状をしたためている間も、何度か筆を止めて、泪を拭いている。すべては余の才覚が足りなくて、このような結果になったものである。許して貰いたい。そこもとが、どのような処置を取っても、余はそこもとを恨むようなことはしない。それどころか、ただただ、義理にそむいて悪かったことのみ、繰り返し思い返している。そこもとと心を同じゅうする将士の末々までに余の苦衷を伝えて貰いたい。願わくはもう一度そこもとと等に会って、この日のことを詫びたい》

勝頼の自筆の書状はそれで終っていた。

真幸はそれを何回か読みかえしてからそれを軍監の横田尹松に見せた。尹松は一読して、さもありなんという顔で云った。

「していかがなさるるおつもりか」

しかし、真幸はすぐに結論は出さずに、主なる将を集めてこの書状を回覧させた上で、この書状の写しを取って、各足軽大将に渡して、城兵のことごとくに読んで聞かせた上で、城全体として結論を出すことにした。勝頼から城兵に送られた鰹節は、いざという時に各隊の頭数割に比例して分配することにした。いざというときこそ、城の運命が決まる日であった。

真幸の心は決っていたが、その気持を将兵におしつけるよりも、将兵等が自らその気持になってくれることを望んだ。

一縷の望みは、勝頼の書状の中にあった、二月までに救援隊云々という一句だった。二月までという言葉を一月いっぱいと解釈する人と二月いっぱいと読む者がいた。その間を取っても二月半ばが一応、援助の可能性の限界点であった。

二月までというのは気安めで、文脈を案ずると、既に救援のないことはほぼ確実であるから、最後のぎりぎりまで待たず、今のうちに、討って出て、活路を開こうという者もあった。しかし、全体としては二月いっぱいまで待とうという空気が強かった。

今までも毎年のように、城がかこまれると救援隊がやって来て、敵を追い払い、城内に食糧を充分に運びこんでから帰国していた。今度にかぎって救援隊が来ないとは考えられないことだという者も多かった。

真幸は将を呼んで各隊ごとにまとめた結論を訊いた。

「二月いっぱい待って救援がないときは討って出るということに話がまとまりました」

という答えが圧倒的に多かった。

城の様子がおかしい、という情報が攻城軍の石川数正のところに入ったのは、一月の半ばを過ぎたころだった。

どのようにおかしいかと訊くと、なんとなく、落ち着いているということであった。それまでのように、挑戦に対して神経質に応じて来ない。どうも、腹が減っているという原因だけではなさそうだということだった。

「救援隊が来るという情報でも入ったのではあるまいな」

と石川数正は疑いを持って、この旨を浜松城にいる徳川

家康に報告した。
「救援隊が来るというならば、活気がでる筈だ。城兵が落ち着いたというのは、救援隊の望みが薄くなったがために戦う気力を失ったのではないか」
家康はそう云った。もしそうだとすれば、今攻めれば、城は落ちるかもしれない。家康の言はそのまま、攻城軍に伝えられた。
積極的な攻撃が始められた。城兵は勇敢に戦った。攻めれば受けるが、そうでなければ、じっとしているという持久戦を絵に書いたような応戦の仕方であった。強いて攻めれば意外に死傷者が多く出た。
二月に入って甲斐方面の間者から、武田勝頼が二万の兵を率いて、高天神城へ救援に向うらしいという情報が入った。軍兵催促が、地方郷士の家にあったのを探知したのである。その軍兵催促の規模から見て、二万という数が割り出されたのであった。
浜松城はかなり緊張した。家康はこの情報を確かめるため、甲斐方面の探索を強化すると共に、織田信長にもこの旨を知らせた。
織田信長からは、
《いよいよ勝頼の運命が尽きるときが来たと見える。勝頼が高天神城に出兵するというならば、何時にても、一万や二万の兵はさし向けられるように手配してあるから、安心しているがよい》
という返事があった。
家康は江尻城の穴山梅雪に、山本源左衛門を通じて、勝頼救援説の真偽を確かめさせた。
《以前に報告申し上げましたように、勝頼は既に高天神城救援を断念しております。おそらくそれは誤報かと思われます。もしそれがほんとうなら、当然、この江尻城へもその旨通達がある筈です。ただ一つだけ考えられることは、戦好きな勝頼のことだから、じっとしてはおられず、北条氏との境の城を攻めるため上野方面に出征するための出兵かとも思われます》
という返事があった。穴山梅雪が徳川家康に内通してからは、武田の動きは手に取るように見えていた。まず、梅雪の云うことにほぼ間違いないものと家康は断定した。
二月半ばを過ぎてから家康は高天神城奪取を決意し、横須賀城に本陣を置いた。彼はまず、無血占領を狙って行動を起した。二俣城攻略のときもそうであったように、使者を送り、相手の条件を聞き、血を流さずに、受け渡しをしようと思った。二俣城のときは城主依田信蕃と交渉して、城兵一千の生命を保障してやるという条件で二俣城を手に入れた。依田信蕃は一千の兵を率いて、堂々と城を出て、一度は高天神城に退き、のち田中城の城主となった。
家康は、岡部真幸を知っている旧今川家の家臣を使者に立てて敵に降伏を勧告しようと考えた。人選の結果、布目惣兵衛が選ばれた。惣兵衛は岡部真幸の竹馬の友であった。家康が布目惣兵衛に示した降伏の条件は、次のようなものであった。
一、城を開け渡すならば、将兵の行先は自由である。徳川に従いたい者があれば、徳川家では喜んで抱え、現在の待遇以上に用いるであろう。いままでどおり武田家に従いたい者があれば、小山城なり、田中城へつぼむまで攻撃はしない。
一、もし、降伏せずに飽くまでも戦うというならば、城兵は皆殺しにする。後になって命乞いをしてもそれは許されないことである。
軍使布目惣兵衛はこの二ヵ条を持って高天神城に乗りこんだ。
岡部真幸はこの条件に答えて云った。
「われ等が城を出て小山城なり田中城へつぼむとした場合は高天神城を包囲している徳川軍は一兵も残らず、城砦から出て浜松城まで退くと約束していただきたいが、いかがかな」
「それはむずかしい。それでは徳川方の云うことは信用できないと云うのと同じでござる」
「信用するしないの問題ではない。もし徳川殿が、心からそう思っておられるならばその実を示されたい。われ等は、物見を出して、それを確かめた上で、この城を出て小山城なり田中城へつぼみましょう」
岡部真幸は堂々と云った。徳川軍に城砦から出て浜松城まで退けと云ったのは、高天神城から、浜松城までの距離と小山城までの距離がほぼ同じだったからである。そこまで徳川軍が後退したならば、高天神城から小山城までの退却は可能である。しかし、現在のままで城を出たら、途端にこの城の周辺の城砦にこもっていた敵が出て来て、取りかこまれ、皆殺しに会う可能性を否定できないからであった。
依田信蕃が二俣城を徳川方に明け渡した時と事情が違っていた。現在は城を出たら最後、なにをされてもいたし方がないのである。
「高天神城の将兵が立ち退く前に、まず、われらが城を棄てて立ち去れと申されるのか、それはちと虫のよすぎる要求ではござらぬか。それではいったい、どっちが勝って、どっちが負けたのかも分からない。真幸殿、よっくお考え下され、浜松のお館様はあなた方将兵の生命をお助け申そうと云われているのですぞ」
布目惣兵衛は少々腹を立てて云った。
「これはしたり、いま貴殿は勝負を口の端に乗せられたが、勝ち負けはまだついてはおらぬ、今の段階では五分五分に戦っておる。それに、こちらから先に生命を助けてくれなどと頼んだ覚えはござらぬ」
岡部真幸ははっきり云った。惣兵衛は少々云い過ぎたのに気がついて、
「いや、拙者の云い方が悪かった。許していただきたい。

そもそも和平とか講和というものは、双方が信用し合っての上なされるものである。相手を疑ってかかったら、講和は成立しない。浜松のお館様は、二俣城明け渡しの時も依田殿を裏切らなかった。今度も、御貴殿が心配しているようなことは起らない。必ず小山城なり、田中城までお送り申そう」

軍使布目惣兵衛はそのことを熱心に繰り返した。

「徳川殿がたとえ信義を以って城明け渡しをなさろうと言っても、果して、織田殿がそれを許すかどうかは分らない。織田殿は、講和条件を出して城を取り、降伏した将兵をみな殺しにするのが常套手段である。美濃岩村城主秋山伯耆守信友殿以下将兵のことごとくはこの手で惨殺された。伊勢長島の本願寺門徒衆二万はこの手で焼き殺された。数え上げたらきりがない」

な、そうであろうと真幸は軍使布目惣兵衛の顔を見てから、更に云った。

「城を囲んでいる徳川軍の中には、西尾小左衛門、長谷川藤五郎、猪子兵助等の織田殿軍監がいる。この人たちは、岩村城落城の際にも軍監に従って行った人たちである。どうすれば、織田殿に讃められるかを百も千も承知の人たちである。その軍監が、われらが城を出たのを見て、みな殺しにせよと一言云ったら、徳川殿はそれをこばむことはできないだろう」

「いや、大納言殿（織田信長）は、この高天神城のことは万事お館様（徳川家康）にまかせている。軍監殿もそれくらいのことは存じておられる筈だ。もし、かりに軍監殿が、降伏した将兵を殺せと云っても、お館様はそれをことわること間違いない。お館様は……」

と云おうとしている、その鼻先へ叩きつけるように岡部真幸が云った。

「無実の罪に問われた嫡男信康を殺せと云われて、はいかしこまって候とばかり殺した家康が、なんで織田信長の軍監に盾つくことができようぞ」

岡部真幸は、高々と笑った。その声は空虚であった。軍使布目惣兵衛はその後が云えなかった。岡部真幸は、なにからなにまでも知っているのだなと思った。それにしても織田信長から派遣されている軍監の名前まで知っているのには驚いた。城は完全に包囲されてはいないのだと思った。

「いや、よく分かりました。拙者は軍使として参ったのですから、一応はこのまま帰ってお館様にそこもとの意を伝えた上でまた参上いたしましょう」

布目惣兵衛は高天神城を出た。使者が大手門を出るまでは、攻城軍は遠くに退いていた。軍使が城を出ると、城門は閉じられ、そして再び戦争状態に入ったのである。

布目惣兵衛は、横須賀城の徳川家康の本陣に駒をすすめながら高天神城を無血占領することはむずかしいだろうと思った。そして、彼は織田信長から派遣された軍監の一人

一人の顔を思い出していた。彼等は城砦の一つ一つを見廻って歩き、城砦を守っている将兵たちの挨拶が悪いの、饗応の仕方を知らないのとけちをつけた。なにか云いわけらしいことでも云おうものなら、しからばその通り大納言殿へ言上いたすなどと開き直るのである。信長を笠に着た鼻持ちならない軍監ばかりであった。

信長が、なぜこのような軍監を派遣して来たのかよく分からなかったが、家康の側近の者の観測では、軍監の処遇についてなにか失敗があった場合、それを盾に、信長は新たに無理難題を徳川家へ押しつける腹ではないかということだった。その無理難題がなんであるかは分からなかった。想像もつかないほど暗いことかもしれないので、一同身の縮まる思いで軍監たちの振舞いを見詰めていたのであった。

布目惣兵衛は家康の前に出た。軍使が帰ったというので軍監西尾小左衛門がその場に列席した。こうなると、なにもかも明らさまに云うことはできなかった。

「岡部真幸はなんと申した」

という家康の問いに対して、

「充分遠くまでお味方の兵を引いて貰えるならば小山城へつぼみたいと申しておりました」

惣兵衛は言葉を加減して云った。

「それはそうであろう。城を明け渡すというならば、味方も兵を引こう。して、何処まで兵を引けと申したか」

それがでございますと惣兵衛は口ごもった。彼は岡部真幸と竹馬の友であった。なんとかして、彼の生命を助けたかった。

「小山城なり、田中城までつぼむことができるよう、充分な時間が欲しいと申しておりました」

惣兵衛は頭を下げた。これ以上は云えなかった。

「はっきり申せ、何処何処まで兵を引けと申したのであろう。それを云え、云えぬ筈はないぞ」

軍監の西尾小左衛門が口をさし挟んだ。

こうなればもう逃げることはできなかった。惣兵衛は岡部真幸の云ったとおりのことを云った。

「なに浜松まで引けとな、ばかもの、そのような出放題を黙って聞いて参ったのか」

軍監西尾小左衛門は惣兵衛を怒鳴りつけた。

「申しわけございません。まず交渉の取り掛りはおだやかにと存じまして」

と云いわけをすると、

「ここまで来たら無条件降伏以外に手はないだろう、なにを愚図愚図しておるのだ」

しかし、軍監の云うのを顔色一つ変えずに聞いていた家康は、

「さし迫れば、敵もまた考え方を変えるだろう。もうしばらく様子を見よう」

と云った。

三月十日布目惣兵衛は再び軍使として、高天神城に乗り込み城主岡部真幸と会談した。

前のときと比較してさほどの進展はなかったが、別れ際に一言、真幸は惣兵衛に向って云った。

「城内の将兵にも、一応は使者殿の言葉を伝えて置こう。たとえ、だまし討ちに会ってもいいから、降参して城を出たいと申す者があれば、その願いを聞いてやって貰いたい。いざという時には矢文をもってお知らせする」

惣兵衛はその言葉を持って帰り、家康に、

「城兵の中には降参したいと考えている者も多少は居るようでございます。そのような者を送り出してから討って出ようと考えているようでございます」

と告げた。

三月十一日から高天神城将兵一同の食事はそれまで粥食一ぱいずつ二食だったのが、粥食二杯ずつ三食になり、三月十四日からは朝、昼二食は粥の他米飯一杯ずつが与えられた。長い間の粥で胃が衰弱しているところへ普通の飯を与えると、胃痙攣を起す者があるから、このような処置を取ったのである。

三月十七日からは、一日二食の米飯になったが、その量はまだ充分ではなかった。

三月十九日からは一日二食の米飯に味噌汁が添えて出された。量も腹いっぱいとまではゆかなかったが、ほぼ平常の量が支給された。

「いよいよ、この世ともお別れだな」

兵たちの中には、その米飯を食べながらそんなことを口にする者がいた。誰一人として、それを知らない者はなかった。城に残っている米を一粒残らず食べつくした時が出撃の日であることは確実であった。兵たちはその日は二、三日後と計算していた。

十九日の夜であった。駿河先方衆の侍大将安西八郎兵衛の組の者で森仁衛門という者がいた。仁衛門は不覚にも飯を食べながら、はらはらと涙をこぼした。安西八郎兵衛がそれを見て不審に思って問いただすと、

「腹が減っているときは、女房子供のことを思い出しませんでしたが、今充分に飯を食べさせていただきますと、女房子供が飢えに泣いている姿を思い出します」

と答えた。森仁衛門は駿河安倍郡の百姓であった。地主ではないが、一家どうにか食べて行けるだけの自作農であった。

自作農以上は、兵役の義務を負うか、納税の義務を負わねばならない。彼の場合は、一度夫役として戦場に出れば、三年間は夫役を免除されるし、免税もされるという布令を信じて、隊に入り、始めは夫役をつとめていたが、いつの間にか槍、刀を持たせられ兵としての員数に加えられたのである。もともとは百姓出身だから、堀を掘ったり、柵をこしらえたりというような仕事ばかりさせられていた。

仁衛門にとっては、どちらが勝っても負けてもよかった。はやいところ戦争が終って、妻子のいるところへ帰りたかった。そういう男が、彼の他に百人や二百人はいる筈だったが、それを口には出せなかった。出せば、卑怯者として、おおぜいの前でなぶり殺しに合うことが分かっていたからだった。誰でも命がおしいのに、いよいよどん底のどん底に追いつめられると、へんに意地を張って、城を枕に討死するのだと叫び廻っている城兵たちの中にあって、彼だけが特別でいるわけにはゆかなかった。

彼もまた死なばもろともだと騒いでいた。そうすることによって死の恐怖から逃れようとしていた。その彼が、腹いっぱい飯を食べた瞬間、つい本心が涙となって表われたのである。

安西八郎兵衛は森仁衛門のことを、そのとおり城主の岡部真幸に報告した。

「その者に子供が何人ある」

真幸は云った。

「五人もおります。それに両親がいます。彼が免税の恩典に浴するため夫役に応じたのも、なけなしの米を上納したら子供に食わせる米がなくなるからでございます」

と調べたとおりのことを云った。

岡部真幸は、しばらく考えていたが、

「森仁衛門が涙をこぼしたのは、おそらく死ぬのがいやだ、妻子のもとへ帰りたいと思ったからだろう。そのような者も他に二十人や三十人、いや百や二百はいるかもしれない。そういう者は城から出してやったほうがよいだろうが、今そのようなことをすれば、それこそ敵は、われ等の出撃を今明日中と見て準備するだろう。さすれば、斬り抜けて出るのに支障を来たす」

岡部真幸は敵の軍使布目惣兵衛に矢文を送ると云ったことを思い浮べていた。命を助けてやりたいにはやりたいが、その方法は全くなかった。

三月二十日になった。桜の花は既に散り、いっせいに若葉が萌え出していた。

二十日の朝からは食べたいだけ食べてよいということになった。味噌汁の中には、若草の芽が、野菜がわりに入れられた。その味噌汁も食べたい放題であった。

いよいよ、明日の朝こそ、討って出るものと思い込んだ兵等は、身辺を整理した。城内の警戒が厳重になった。この期になって脱走する者が出たら、出撃の計画が相手に知られるからだった。

三月二十一日が明けた。

兵のことごとくは、この日こそ決戦だと思いこんでいたが、この日も出撃命令はなく夕刻に及んだ。

「城門を開いて降参するのではないだろうか」

と兵たちはささやき合った。そうなった場合、大将たちは殺されても、兵たちは殺されずに済むだろうと、虫のいい考え方をしている者もいた。

三月二十二日の夕食に武田勝頼から贈られた鰹節が各隊に分配された。鰹節はけずられて、味噌汁に入れて出された。兵たちは久しぶりのことなので声を上げて喜ぶ者もいた。

「明日の朝こそ、いよいよ出撃だぞ」

兵たちは今度こそ間違いないと話し合っていた。出撃ではなく、降参するのだという噂もやはり囁かれていた。

夕食が済むと同時に各隊に焼き米が配られた。携行食として各自が身につけるように命令された。

そして、戌の刻（午後八時）の半ばを過ぎて、そろそろ眠りにつくころ、

「あと半刻後の亥の刻（午後十時）を期して、出撃する」

という命令が各隊に伝達された。各隊の侍大将たちは兵たちに云った。

「敵はまさか寝入り鼻に討って出て来るとは思っていないだろう。そこを斬り破って外に出るのだ。敵の囲みを破ったら、あとはそれぞれの工夫によって安全と思われる方向へ落ち延びよ」

と云い渡された。

敵軍の配備情況がくわしく説明された。東に向って逃げれば、大井川沿いに張ってある敵の網にかかり易いから、北か西に向って逃げるほうがむしろ安全だ。舟を漕げる者は南に逃げて、海岸に出、舟を拾い駿河に落ちるのがよいなどと具体的に指示された。

城を枕に討死せよという命令は出なかった。

「斬って斬って斬りまくり、自分の命は自分の力で救うのだ。その日のためにここ十日ばかりの間に体力をつけて来たのだ」

そのように部下に向って説明する侍大将もいた。

実際は、逃れることは十中八、九困難であるのに、意外に悲愴感はなかった。生きる道が発見できたような錯覚にとらわれたのである。

空は曇っているので、鼻をつままれても分からないような闇の中で高天神城将兵八百余名は勢揃いをした。

「合い言葉は生と死だ。死ぬ覚悟で生きよ、合い言葉は生と死だ。いいか、生と死だぞ」

その言葉は将から兵に伝えられて行った。いよいよ、最後の時が来たのである。

時に天正九年三月二十二日亥の刻であった。

鳴呼高天神城

天正九年（一五八一）三月二十二日午後十時、高天神城の将兵は二手に分かれて討って出た。

本丸から北に向って討って出た大将は、軍監江馬右馬允直盛であった。

その下に孕石元恭、森川備前守、三浦右近進、朝比奈孫六、松尾若狭守、油井加兵衛、近藤与兵衛、武藤刑部、三浦雅楽介、名郷源太、六笠彦三郎、栗田刑部丞、栗田彦兵衛、栗田彦三郎、栗田彦四郎等の侍大将がいて、それぞれ兵三十名ないし、四十名を率いていた。

西の丸から城の北西部の林の谷に向って討って出たのは城将岡部真幸であった。

これに従う侍大将は岡部帯刀、神尾但馬守、安西八郎兵衛、山上備後守、櫛木庄左衛門、勝俣主税助、利根川雅楽助、大戸丹波守、福島本目助、福島嘉助、浦野右衛門、依田美作守、依田杢左衛門、依田武兵衛、大子川原三蔵、江戸嘉助、土橋五郎兵衛等であり、何れも二十名ないし四十名を率いていた。

本丸から討って出た軍監江馬右馬允直盛の軍勢はおよそ三百五十名、そして、西の丸から討って出た城将岡部丹波守真幸の率いる軍は四百五十名ほどいた。

大きく分けると、本丸と西の丸の両方から討って出たのであるが、西の丸方面には、軍監横田甚五郎尹松が率いるもう一つの小隊がいた。侍大将は相木市兵衛、安西平左衛門の二人でこれに属する兵併せて五十名ほどの一隊であった。横田尹松は自ら希望して、城の南西部に張り出している痩尾根、犬戻り猿戻りの山稜を選んだのである。どの口も敵が守っていて、斬り破って通るのは困難であったけれども、そのうち、犬戻り猿戻りの尾根通しの山稜は、痩尾根を歩いて渡れるかどうかが問題であり、たとえそこを無事通過しても、そこには、高力清長が守っている馬伏塚城があり、敵兵に包囲されることは間違いがなかった。この脱出路はもっとも危険であり、もっとも生還の可能性は少なかった。従って、侍大将の中で横田尹松に従ったものは、相木市兵衛と安西平左衛門の二人だけであった。鷲坂甚太夫がこの道の案内者になったのがせめてもの心安めであった。

本丸から北口に討って出た軍監江馬右馬允直盛は、飛驒の神岡城主、江馬時盛の子であった。武田信玄が信濃から飛驒に進攻した際、人質として古府中に連れて来られて以来、数々の武勲を上げて侍大将となった人であった。飛驒の出身ではあるが、信玄・勝頼に仕えて功があったから直

参同様の待遇を受けていた。無口な男だったが、戦上手と抜群の太刀さばきでその名は敵味方に知れ渡っていた。

江馬直盛が討って出た本丸の北東寄りは切り立ったような絶壁だから討って出ることはできなかった。どちらかというと、搦手門に寄った本丸北西部の一部が絶壁ではなく、降りようとすれば、どうやら降りられるような地形になっていた。

そういう場所だから、攻城軍も、ここには守兵を置かず、堀を二重に掘って置いただけであった。この様子は鷲坂甚太夫が既に調べ上げて絵図に描いていた。江馬直盛はこの敵の手薄なところを突いたのである。

午後十時に城を出た江馬隊は、城の頂上から下げおろした五条の綱にそれぞれすがって急斜面を降りた。斜面を降りて、森林の中をくぐり抜けたところに第一の堀があった。その堀割りには水が張ってあった。堀割りに沿って、右に移動すると、一ヵ所だけ、堀の幅が狭いところがあった。彼等は用意して来た板を渡して、第一の堀を渡った。第一の堀を無事渡って、第二の堀を渡り掛けたとき、一人の兵が水に落ちた。堀の向うで警戒していた石川康通の兵がこれを見付けて、

「敵だ！　敵が来たぞ！」

と叫んだ。だがこの敵も三声までは上げられずに江馬直盛の太刀によって斬り伏せられた。

暗夜の中で死闘が始まった。江馬軍は第二の堀をようやく渡り終ったところで、石川康通の軍に遮られた。

鉄砲の音が城の西の方で聞えた。岡部隊もそのころ大久保忠世の軍と衝突したのであった。

石川康通は鉄砲隊を前に出して、江馬軍を狙い撃ちしようとしたが暗いために、それができず、いらいらしているうちに、手柄を立てようと競う兵たちがいっせいに江馬隊に斬り掛って行ったので混戦になった。暗夜での戦いは敵味方がはっきりしないから不利であった。

「敵を包囲して明け方まで待て」

と使番衆が叫びながら走り廻ったが、夢中になっている将兵を引き止めることはできなかった。攻城軍にとってみれば、長い間待っていた絶好の機会である。この場で大将首でも上げれば出世は間違いない。大将首でなくてもせめて首一つぐらい取らないと、なんのために合戦に出て来たのか意味がない。彼等は一所懸命であった。

各所で組みうちが始まった。敵味方組んだまま濠に落ちる者があった。

「味方だ助けてくれ」

と手を伸ばすので引き上げてやると、その者が濠から這い上った途端、いきなり助けた兵に斬り掛るような光景が見られた。敵味方がはっきりしなくなった。そこへ、搦手門を守っていた、水野勝成隊と東側を守っていた鈴木重時隊が援軍としてやって来た。生首の欲しい、飢えた新手は、関の声を上げて攻め掛り、石川康通隊と江馬隊をひっ

くるめて、濠の中に押し落し、溺れた者を引き上げて、敵味方を見定めてから首を取るというようなことが始まった。

そのころになってようやく、各所に篝火が焚かれ、敵味方が判然とするようになったが、それまでに江馬隊の三百五十名はほとんど討たれるか堀の中で溺死していた。だが、功名をあせったがために、攻城軍の死者は岡部隊より多かった。同士討ちが多かった。明け方になって、取った首をよくよく見たら、味方だったというようなことがあちこちで起った。

この方面の合戦では、後から押しかけて来た鈴木重時隊の戦果が最も多かった。後になって、鈴木喜三郎重時が徳川家康に報告した首数は、百三十八級で全軍第一の成績であった。その多くは濠に落ちた敵兵の首であった。

この戦いで徳川軍内部の功名争いと同士討ちによって生じた怨恨の後遺症の方が、彼等が上げた首の数よりもはるかに深い傷となって残った。

徳川家康はこういうこともあろうかと、和平交渉に力を入れたのであったが、結果的には多くの人命を無駄にしたことになったのである。

西の丸から林の谷方面へ討って出た城将岡部真幸の軍勢は、梯子を掛けて乾堀を渡り、柵を越えて大久保忠世の軍に斬り込んだ。

まさか夜襲があろうとは考えてもいなかったので大久保忠世軍は驚きあわてて、一時陣容を乱した。城兵は飢えている。夜襲に出るような元気はないから、最後には矢文を送って、一部は降参し、一部は城と共に死ぬ覚悟であろう。というのが、攻城軍の各大将が考えていたことであった。ところが、敵は飢えている様子も見えないほど勇ましく討って出て来たのであった。

攻城軍の中で大須賀康高だけは、他の将とは違う考えを持っていた。彼は横須賀城主として長い間高天神城を見詰めて来ていたから、なんとなく敵の城将の気持に通ずるものがあった。敵味方の城将同士の考え方の暗合のようなものであった。

（敵はいよいよとなったときは、夜襲をかけて来るかもしれない。逃れ出るにはそれしかない）

大須賀康高はそう考えていた。しかし、彼はこの考えを家康にも云わなかったし、他の将たちにも云わなかった。ただ、そう考えているだけでなんの根拠もないことを云いふらすことはできなかった。もしそうでない場合は恥を掻くばかりではなく、今夜こそ夜襲、明日の夜こそ夜襲だと待っている攻城軍の辛苦はたいへんなことである。全軍神経衰弱になるかもしれない。その結果、夜襲がなかったら、それこそ生涯のもの笑いになるだろう。だから大須賀康高は考えていても口には出さなかったのである。

康高は七人の物見を使って高天神城を昼夜監視していた。他の隊も大須賀隊同様に昼夜の別なく物見を出しては

いたが、大須賀隊の物見は、七人とも、もと高天神城にいたことのある者だった。

大須賀隊七人の物見の中の一人、鷲坂九郎兵衛は、高天神城にいる鷲坂甚太夫の従弟に当っていた。天正二年、高天神城が落城して武田方の所有になったとき、二人はそれぞれ敵味方に分れたのであった。その鷲坂九郎兵衛が大須賀康高に、

「どうも城の様子がおかしい」

と言ったのは三月十二日のことであった。

いったいどこがおかしいのだと訊く康高に、九郎兵衛は、

「飯を炊く煙がいままでは一日二度だったのがきのうから三度になりました」

たしかにそれはおかしいことだった。だいたい戦場においては、炊爨の煙を上げるのは一日に二度であった。あとの一食（昼食又は夜食）は握り飯か、炒り豆、炒り米などを用意していた。

「それはおかしい。なにか城内に変化があったのだ。厳重に見張るように」

炊爨の煙は敵味方共、敵の動静を探る上で重要な手掛りになった。軍が行動を起す前に、必ず炊爨の煙が盛んになるからであった。だからこのような場合はこの煙を出さないように苦心したものである。

おかしいと大須賀康高は思った。一日二度の煙を三度にすれば、敵にさとられることは分かっている。分かっているのに、それを敵が敢えてしたことであった。しかし、十一日、十二日、十三日と三日間、一日三回の煙が上っただけで、十四日からはまたもとどおり一日二回、以前と同じような時刻に煙が上った。或は敵が打って出る前兆かと一時は緊張したが、どうもそうではないらしかった。康高は、十八日になって鷲坂九郎兵衛を呼んで、煙のことを訊いた。

「一日二度の煙が三日間だけ三度上り、その後はいままでどおり二回になりましたが、煙の上っている時間も長くなったし、煙の量も増えたように思われます」

九郎兵衛はそのように答えた。彼が煙を出している時間やその量まで判別できたということは予想もしなかったことであった。

「なぜ、そうなったと思うか」

と康高が訊くと、九郎兵衛はこれは自分だけの考えであり、当を得たものかどうかは分かりませんがと前置して話し出した。

「城兵が減食を重ねて、痩せ衰えていることは、しばしばの小競合いで討ち取った敵兵を見て分かります。おそらく城内では一日二回の粥で過しているのでしょう。ところが十一日から三日間、一日に三度の煙が上ったということは、粥の量を三回にしたことであり、それから一日二回の炊爨の煙が濃くなり時間も長くなったということは、城兵の食事は粥から固い飯に切り換えられたということです」

「すると、敵は取って置きの米を出して、飯を炊き、決戦の日に備えて、体力をつけているということか」

康高は云った。

「私はそう思いますが。さつきも申し上げたように間違っているかもしれません」

九郎兵衛は頭を下げた。

「間違っているかもしれないが、確かにお前のいうことは一理ある。しかし、他人にはしゃべるな」

康高はまず口止めをしてから、更に九郎兵衛に、敵が打って出る日と、その突出口について質問した。

「取って置きの米もそう多いと思われませぬ。十一日から三日間は粥飯の量を増し、それから徐々に固い飯を食べさせて胃を馴らして行ったとして、得物を取って戦えるようになるのは十日はかかるでしょう。敵が打って出るのは、二十日から三日以内だと思います」

「して、突出口は」

「敵にはそれがしの従兄鷲坂甚太夫と申す、忍びの名人がおります。おそらく彼によって味方の陣地はことごとく調べ上げられているでしょう。従って、突出口は、城から脱出できるところでしかも味方の防備線のうち、もっとも弱いところを奇襲してまいるものと存じます」

「夜襲か」

「そうだと思います」

鷲坂九郎兵衛は云った。大須賀康高は、或は敵が夜襲に出るやもしれないと、漠然と考えていたことが、九郎兵衛によって裏付けされたので、非常に昂奮した。いますぐにでもお館様（家康）へと思う心を押えながら、彼は絵図を開いて、九郎兵衛の前に置いた。

「しからば敵の突出口は」

九郎兵衛の太い人差し指が動いた。真直ぐに西の丸から林の谷を指し、転じて本丸から北へ向って動いて止った。

「二方から打って出るのか」

「もし敵が打って出るとすれば、この二つの口しかないと存じます」

康高は頷いた。やはり、高天神城に居たことのある九郎兵衛の考え方は、敵と味方を天秤にかけての妥当な推理だと思った。

康高は懸命に昂奮をしずめようとした。九郎兵衛に再度口止めをして下らせた彼は、このことを家康に云おうか云うまいかを考え続けていた。結論はつかず一夜過ぎた十九日、彼は、このことはすべて彼の胸におさめて置いたほうが、あらゆる場合を考慮して有利だという結論に達した。

彼はこの日から大須賀隊全員に横須賀、馬伏（馬伏塚のことをまぶしではなく、まむしと当時は呼んでいた）の合言葉を伝え、夜襲に対する訓練を始めた。昼は見張りと物見だけを残して、他の兵は午睡させ、そのかわり、宵の口、二刻あまり、夜襲に備えての訓練をやった。

大須賀隊が夜襲に備えて訓練しているということは間も

なく徳川全軍に知れた。

「ばかな、腹が減って動くこともできない兵が夜襲になど出て来る筈がないではないか」

ほとんどの将はそう云って笑った。が、家康だけは、使番衆を出して、康高にその真意を問うた。

「おそらく敵が夜襲に出て来ることはないでしょうが、万が一に備えての訓練をしているのでございます。高天神城で役に立たなくとも他の戦場では必ずお役に立つためと心得てやっておるのでございます」

大須賀康高はそのように答えた。

三月二十二日亥の刻（午後十時）に始まった、高天神城将兵の決死の夜襲は、鉄砲の乱射によって攻城軍五千に知らされた。西の丸から北西の林の谷の乾堀を乗り越えて打って出た城将岡部真幸の率いる四百五十名の将士は一丸となって大久保忠世の陣を衝いた。奇襲は成功した。思いもかけない夜襲に、大久保軍は防ぎ切れずに退いた。陣容を直すためであった。その後へ、大須賀康高が七百名の兵を率いて応援に出動して来た。

徳川家康は大久保忠世の軍が夜襲を受けて苦戦という報告を受けると、使番衆を飛ばして、大須賀隊に応援せよと命令したのである。大須賀隊が夜襲に備えて訓練をしていたことが頭に浮かんだからであった。大須賀隊は南口に陣を張っていた。南口から北口に廻るには走っても四半刻（三十分）はかかる。暗いし道は狭かった。しかし、大須賀隊は、日頃訓練していたから、暗夜を、松明を手に手にかざしながら進撃して、大久保隊と岡部隊との間に突入して、大久保隊の危急を救うと同時に岡部隊に向って反撃を開始したのである。大久保隊がようやく陣容を立て直して、反撃に出たときには、大須賀隊が岡部隊をじりじりと城内へ追いこんでいるところであった。

「ここは大久保隊の守備区域である。大須賀隊はひとまずお引きあれ」

大久保忠世は使番衆を走らせて大須賀康高に抗議したが、

「御本陣からの命によって出撃中」

と答えて相手にしなかった。大須賀康高は横須賀城を守って長いこと高天神城と戦っていた。この総決算ともいうべき時に、功を他の部隊に譲りたくはなかった。大須賀隊はその名誉にかけて戦った。一度は大久保隊を破ろうとした岡部隊も、大須賀隊に逃げ道を遮断され、じりじりと城に追い上げられて行くうちに、次々と討たれて行った。そして、ようやく城に逃げこんだ兵も、大手門を打ち破って攻めこんで来た松平康忠、内藤信成、菅沼定治等の諸隊によって、討ち取られた。

この戦いで大須賀隊が討ち取った敵の首の数は百七十七級であり、全軍第一であった。これに比較して大久保隊の挙げた首は僅かに六十四級であった。挙げた首と、戦死した味方の首とがほぼ同じという結果に終った。

戦いが終った後、妙な噂が立った。大須賀康高は、なんらかの方法によって、敵の奇襲を知っていたが、それを他隊には知らせず、功を独占しようとしたというのである。陰口にしては毒を含んでいた。

犬戻り猿戻りの稜線を尾根伝いに脱出をこころみた横田尹松等五十名は、尾根を伝い歩きしている途中で鉄砲の音を聞いた。彼等の当面の敵は夜と嶮難な山道であった。暗いから見えない。誤って踏みはずせばそれまでだった。鷲坂甚太夫が先頭に立っていた。十間行っては待ち、また十間ほど前進しては待つというふうな行進の仕方であった。

東大谷に出たのは丑の刻（午前二時）を過ぎていた。あと一刻すれば夜が白む、そうなると敵の見張りに発見されるおそれがあった。鷲坂甚太夫は綱を使ってそれにすがって尾根の北側に降りて、森林の中をくぐり抜け、敵の包囲から逃れようとした。

彼等は懸崖を降りると、綱をはずして、暗い森の中を一所懸命走った。なんとしてでも高天神城を包囲している敵の陣を夜の闇にまぎれてくぐり抜けねばならなかった。

森林をくぐり抜けて道に出た。東大谷から高天神城の北、今滝に通ずる道であった。その道は既に敵兵によって封じられていた。

横田尹松は鷲坂甚太夫を物見に出した。間も無く帰って来た甚太夫は、道には二十間置きに、敵の見張りが立っているからその間を大勢でくぐり抜けるのは困難だろうということだった。

「ここまで来たのだからなんとかして生きて帰りたい。それには二つの道がある。このまま、二、三日森の中に隠れていて、ほとぼりがおさまり、敵が引き上げるのを見てから森を出る。もう一つは、ここで隊を分散して五人ずつの組を作り、それぞれが工夫して敵の包囲網をくぐり抜けるかどちらかだ。何れにしても問題は食糧だ……」

横田尹松はそこまで云って言葉をつぐんだ。炒り米は一人当り二合ほどしか持っていない。どっちにしろ、その米を食べ尽すころには安全圏まで逃れ出なければならなかった。

横田尹松と侍大将の相木市兵衛、安西平左衛門の三人はどうすべきかを協議した。結論はすぐ出た。今のうちなら身体が動く、分散して敵の間隙をくぐり抜けようということであった。逃げ道は袋井、飯田、天方と北に逃げ、途中から天龍川沿いの谷に出て、信濃の伊奈へ逃げ延びようという一応の申し合わせだけはしていた。

城を抜け出たとき全員五十名だったのが、ここまで来る間に四十人に減っていた。横田尹松は四十人を五人ずつ、八組に分けた。彼等はそれぞれ生還、再会を期して、そろそろ白みがかった森の中に消えて行った。

間もなく、鉄砲の音がした。人の叫び声がした。

（味方が敵に発見されたのだな）

と横田尹松は思った。敵が鉄砲を乱射した。敵がこの附

近に集まることは確実だった。そうなると脱出は困難になる。

「よし、今だ！」

尹松はそう叫ぶと森から跳り出して、そこに立っていた敵の見張りに斬りかかり、一太刀で一人をしとめ、声を上げようとしている、二人目の敵も斬り伏せた。その間に尹松の率いていた四名の兵はもう一人の敵兵を斬り倒した。五人は藪の中に姿を隠した。敵の騒ぐ声を後に聞きながら彼等は森の中を逃げた。敵の声が聞こえなくなったところで五人は一息ついた。一人の兵が、袋に入った握り飯を出した。斬り倒した敵兵が腰に下げていたものであった。

「これは敵の首以上の手柄だ」

尹松はそう云ってその男を讃めた。四人の兵のうち一人は足に怪我をしていた。さっきの斬り合いの時に受けた傷だった。深くはなかったが、出血が止らないので、持っていた布で包帯した。彼等の敗走の旅はみじめであった。この日、足に怪我をした兵は、その後患部が化膿したがために落伍した。そして、他の二名の兵も、食糧調達のために村に入ったところを捕われたり殺された。

横田尹松と鷲坂甚太夫の二人だけがようやく敵中を突破して、青崩峠を越え信濃の伊奈に入り、平岡で、相木市兵衛と安西平左衛門等に会った。ここが集合場所であった。城を出た五十名のうち、ここまで来たのは僅かに十一名であった。

横田尹松は相木市兵衛、安西平左衛門等と共に古府中に帰って、武田勝頼に会って、いっさいを報告した。

勝頼は涙を浮かべながらその報告を聞き、十一名にはそれぞれ恩賞を与えた。

久方ぶりで飯を腹いっぱい食べ、つい涙を流したのでとがめられた森仁衛門は城将岡部真幸の隊に加わって討って出たが、大須賀隊に追い返されて再び城内に戻った。しかし城内には大手門を打ち破った徳川の軍勢が入りこんでいるので、刀を捨て具足を脱いでたまた目の前にあった楊梅の大木に這い上った。その木の上に登ると、どうやら身をかくすことができた。

彼が木に登って間も無く、この木の下で三人の味方が十人の敵にかこまれて首を取られた。首の取り合いで喧嘩になったが、やがて静かになったころ、仁衛門は木から降りて、首のない味方の死者の腰から炒り米の袋を貰って木に登った。

夜が明けて、城内は徳川勢によって隅から隅まで捜索されたが、木の上に隠れている森仁衛門の存在に気付く者はなかった。木の下の遺体もその日のうちに取り片付けられた。

仁衛門は夜になると木からおりて、土塁を乗り越えて森林の中に入って眠り、夜明け前に起きて、また楊梅の木によじ登った。楊梅の木の近くに井戸があった。彼は夜になるとこの井戸の水を飲み、竹筒に汲み取っていた。彼は持っていた炊り米六合で十日間生きるつもりだった。十日も経てば、なにもかもひっそりと静かになるだろう。その時に逃げ出そうと思っていた。だが、五日目の昼ころ彼は木の上で尿意をもよおした。そのまま用をたせば大きな音を立てるから、木の幹に流しかけるように仕末した。運悪く、たまたまその場を通り合わせた城兵が楊梅の幹を伝い落ちる水に不審を抱いたことによって仁衛門は発見された。

城兵が大声を上げたので、たちまち、二十人ほどの兵が手に手に槍を持って集って来た。弓や鉄砲を持って来た者もあった。

「待て、撃つな、生きて捕えよ」

侍大将らしき男が制した声を聞いて、ほっとした仁衛門は、木からするすると降りて来て、その侍大将の前に両手をついて、

「私はこの近くの百姓でございます。夫役に駆り出されて、そのままこの城に連れこまれ、無理矢理働かされていた者でございます。私は五人の子の親です。お助け下され。私はこの城とはなんの縁もゆかりもない百姓でございます」

仁衛門のございますがおかしいのか兵たちが笑った。武具はつけていないし、どう見ても百姓であった。

仁衛門は捕えられて松平康忠の前に引き出されて取り調べられたが、云い分が認められて解き放された。森仁衛門は故郷に帰り、八十歳という高齢まで生きていた。森仁衛門と呼ぶ者はなく、生涯小便仁衛門で通っていた。

この戦いで徳川方が得た首数は合計七百四十八級であり、生捕りにされた者が三十三名であった。城兵は八百四十名ほどいたから六十名近くは無事城を抜け出て、生命を捨てずに済んだのである。

徳川方の死者の記録は残っていないから分からないが、五百名近くはあったものと想像される。徳川勢は意外に強い反撃に会ったのである。

徳川家康はこの戦いの個人的な恩賞の第一として、大手門を打ち破り的場曲輪に一番乗りをした戸田三郎右衛門忠次、戸田孫六、その従者芳賀清助、石原孫次郎、大屋喜助、植田十兵衛等を召し出し、それぞれに感状、弓、刀を与え、戸田三郎右衛門忠次は五十貫文の采邑が加増された。この他、この戦いに参加した将兵等にはそれぞれ恩賞が与えられた。敵の首百七十七級を挙げた大須賀康高隊はなんと云っても部隊として戦功第一であった。大須賀康高にはこの地三万石が与えられた。

高天神城は流血の中に亡び、そしてその戦を境として廃城となり、再び城としての能力を発揮することはなかった。

天正九年辛巳三月廿二日の夜の四つ時分に、ふたてにわけてきつて出る。あすけ・尾原・石川長門守もちくちは、入江の様成所な

れば、城より是をよわみと見て、切て出ければ、間はほりなれば、それへことごとくかけ入ければ、三方よりさしはさみて討ける。

（『三河物語』）

この章の参考書は藤田鶴南著『高天神城の跡を尋ねて』及び『遠州横須賀城史談』（典照堂書店刊、浜松市池町四一）

先方衆の悲哀

高天神城陥落は大きな影響を各方面に与えた。

徳川家康は、信長の援助なしに高天神城を落したということで大いなる自信をつけた。徳川単独では武田に打ち勝つことはできないという劣等感が払拭され、武田に対して今までになく強気に立ち向えるようになったのも高天神城陥落以後であった。

このことは未だに武田の支配下にある駿河の諸豪に対して睨みをきかせる結果となった。また、高天神城陥落の時点で既に徳川方に内通していた穴山梅雪（信君）は、表面では武田勝頼に従うような顔をしながら、裏では武田を倒すべき方策を考えていた。その駿河の隣の北条に与える影響もまた大であった。北条氏政は武田勝頼との同盟を破棄して織田・徳川の連合軍に参加したが、高天神城が落ち、遠州が完全に徳川の支配下に安定し、更に駿河が併呑されようとしている形勢を見ると、じっとしてはおられなかった。駿河が徳川の手に落ちた場合、その次に織田・徳川の餌食になるのは伊豆であり、相模であり、関東であった。

北条氏政は高天神城陥落と同時に武田との関係をもう一度考え直さねばならない事態に立ちいたったのである。

氏政は重臣の一人松田尾張守憲秀がたまたま彼の傍に来たとき、

「もし駿河が徳川のものになると、その次は……」

と不安を洩らした。それに対して松田憲秀は、

「駿河は既に徳川のものになっております」

と云ってから、実はそれについてお耳にお入れしたいことがございますとつけ加えた。憲秀はもともと武田通であった。氏康、氏政二代に仕え、武田との同盟のときは常に主役を演じた人であった。勝頼と氏政の妹佐代姫との婚儀を主張したのも彼であったし、勝頼が氏政との同盟を無視して上杉景勝に味方をしたことによって、不和となったときも、なんとかして同盟決裂を避けるよう努力したのも憲秀であった。北条と武田は敵対関係になったが、憲秀と個人的に親しい武田方の武将は現在も尚多かった。

「駿河が徳川のものに？」

氏政は問い返した。もしそうだとすれば、駿河探題穴山梅雪が武田を裏切ったということになるのだ。

「その証拠でもあるのか」

「かなり、しっかりしたものがございます」

憲秀はそう云って周囲を見廻した。氏政は近習を遠ざけてから憲秀を傍に呼びよせた。

憲秀は、

「梅雪が徳川に内通しているという噂は昨年の暮ころからありましたが、これが単なる風説でないことを確かめたのは高天神城陥落以後でございました」

彼はそう云って話し出した。

松田憲秀の次男、笠原新六郎（松田新六郎）は伊豆戸倉城の城主だった。新六郎は彼の知人で現在、江尻城の穴山梅雪に仕えている朝比奈伊織からこの情報を得たのである。

「穴山梅雪が徳川家康に通じているのは確実です。家康と梅雪の中を取り持っているのは今川の旧臣山本源左衛門です。朝比奈伊織もまた今川の旧臣でこの山本源左衛門の隣家に住んでいます」

「すると、それほど遠くない将来に穴山梅雪は駿河で叛旗をひるがえすというのか」

「さよう。梅雪が本性をむき出しにしたときが、織田・徳川連合軍が駿河、美濃、信濃から甲斐へ攻めこむ日になるでしょう。そうなると武田は亡びるかもしれません。武田が亡びたら、織田・徳川がすぐ様、兵を関東へ入れることは火を見るよりも明らかです」

憲秀ははっきりと云った。

「困ったことになる」

氏政は云った。氏政は勝頼に敵意を持っていた。しかし、武田が亡びた場合武田以上に危険な相手がそれに替ることは、まことに困ったことだと云ったのである。

「先代様（氏康）の御遺言に武田とことをかまえてはならぬ、といういましめがございました。武田はわが北条氏の盾でもあるのです。武田は痛めてやっても、決して亡ぼしてはなりません」

憲秀は氏政に決断を求めるような視線を向けた。

「だが、いまここで武田と和を結ぶということも考えものだ」

氏政は云った。落ち目になった武田と和を結めば、武田と共に亡びる運命にならぬとも限らぬ——氏政はそれを心配していたのである。

「策があります」

憲秀にそれを申してみよと云ったとき、氏政は半ば心を決めていた。憲秀がなにを云い出しても聞いてやらねばならないだろうと思っていた。

「戸倉の城主笠原新六郎を武田へ叛らせるのです。新六郎が武田へ付けば、伊豆は武田の勢力下に入ったと同じことになり、駿河東部における武田の力は俄然強化されます。駿河を徳川に譲ることによって、自らの安泰を計ろうとしている穴山梅雪は、足下に新しい敵を迎えることになるわけです。徳川を牽制するにはこれ以上の方法はありません。新六郎が武田へ叛ったとなると、わが方は兵を伊豆に出さねばならないでしょうが、このあたり適当にやるのです。馴れ合いの戦なら誰にでもできます」

氏政は唸った。なるほどこれも一つの手段だなと思った。こうすれば、武田は当分、北条氏と戦う必要がなくなり、それだけ自国の守りを固くすることができるだろう。

「その策は勝頼を喜ばすだろう。してそれは何時実行する」

「いましばらくは様子を見ましょう、様子を見ている間は武田とは戦をせず、いよいよ梅雪が動き出す気配を見せたとき、その機先を制するために、戸倉を武田へくれてやりましょう」

「そのことについては、そちにまかせよう。それはそれでよいとして、梅雪の処置はどうする。梅雪が徳川に内通しているという証拠を握っているなら、ひそかにそれを勝頼に知らせてやったらどうか」

氏政はそう云ったが、すぐその言葉を訂正した。

「まずいなそれは。目下は、勝頼は敵だ。敵に塩を送ることはできぬ」

「いやできないことはありませぬ。塩の抜け道はたくさんございます。しかし、この情報を持ちこんでも勝頼は信用しないでしょう。なにしろ梅雪は武田御親類衆第一の実力者です。武田家と深い血のつながりがある梅雪が主家を裏切るとは勝頼だけでなく、武田の家臣団中一人として信ずる者はないでしょう。これが証拠だと持って行けば、それこそ下手な離反策だと物笑いの種にされるだけのことです。噂を流せば勝頼は梅雪の行動を監視するようになるかもしれませんが、これとてさほど効果のある方法だとは思

われません」

松田憲秀は云った。

氏政は頷いた。確かにそうであった。梅雪の裏切りを信ずる者は、武田の中に一人もいないだろう。だが、それだけに信じていた梅雪の裏切りが表面に出たとき武田の家臣団の動揺は計り知れないものがある。梅雪の裏切りと同時に武田は瓦解するかもしれない。

「こうなると最悪のことも考えて置かねばならぬな」

と氏政は云った。

「やはり武田は亡びるとお考えですか」

憲秀は窺うような目をして訊いた。

「梅雪が叛れば武田は確実に亡びるだろう。そんな気がしてならないのだ。最悪の場合はどうしたらよいかな」

「佐代姫様のことでございますか」

「そうだ。あれは可哀そうな妹だ。なんとか助けてやりたい」

氏政は政略結婚の犠牲になった佐代姫のことに触れた。

「いざという時には、救いの手を伸しましょう。その方法は幾重にも考えて置きます。取り敢えずは、武田の亡びるのを遅らせることです。そのために伊豆を武田にやって、梅雪を牽制する用意に取りかかることです」

憲秀は結論を云った。

高天神城陥落の報は外部よりも武田内部に大きな衝撃を与えた。中でも、先方衆と云われている人たちに与えたものは大きかった。

先方衆というのは文字通り、戦の場合先頭に立って戦う部隊のことである。もっとも激しく敵と接触するから損害も多かった。戦国時代は武田家に限らず一般的に先方衆は、被占領国の将士がこれに当ることになっていた。即ち、信濃衆、西上野衆、駿河衆などで、合戦の大小にかかわりなく、先方衆として戦って死んだ。

高天神城陥落の際、徳川方が討ち取った首の数は織田信長に報告され記録された。『信長公記』によるとその首の総数は六百八十八であり、その中で名の分かった侍大将級は三十余名、駿河先方衆、信濃先方衆、上州先方衆と分類されている。この他に軍監江馬直盛や横田尹松の従士二人の名も入っている。

駿河先方衆は城将岡部丹波守真幸以下十七名、信濃先方衆は栗田刑部吉信以下八名の栗田衆と依田美濃守以下五名の相木衆（又は佐久衆）と横田尹松の従士二名である。

この分類で分かるように高天神城で戦死した六百八十八名の半分は駿河衆であり、半分は信濃衆であった。甲斐の人は横田尹松の従士だけということになる。その横田甚五郎尹松も、祖父、父ともに信玄に仕えたが、もとをただせば浪人であり、生粋の甲州人ではなかった。また軍監として戦死した勇将江馬右馬允直盛は飛騨神岡の出身である。こうしてみると、高天神城は全員が先方衆であり甲州武士又は武田武士はほとんど居なかったのである。

高天神城の最期は青史を飾るにふさわしい壮烈きわまりなきものであったが、その戦力を為す武士は先方衆であって武田武士ではなかったということが織田・徳川方によって明らかにされた。

「高天神城で最後まで戦ったのは駿河や信濃や上州や飛騨の先方衆で、武田衆はとうの昔に高天神城から逃げ出してしまっていたそうだ」

などとまことしやかに噂をする者がいた。出城は先方衆に守らせるという、武田信玄以来の方針が落城と共に裏目となって出たのである。

「武田勝頼という男は先方衆を殺すことによって自分だけが生きようとしている」

というような批判も諸方に出た。批判するのは、高天神城で戦死者を出した駿河、信濃、上州等の人たちであった。

「せめて、城だけ敵に渡して、城兵の生命は助けてやれなかったものだろうか」

という批判も勝頼が冷酷な大将だという評価につながっていった。

「勝頼公は先方衆に対して、ひとかけらの思いやりも持っていなかった。いずれそのうち、織田・徳川が駿河へ攻めこんだときには先方衆を見殺しにするだろう。われ等は武田家になんの恩顧も受けてはいない。武田が自らの身を守りたいと思うなら、武田自身の血で守ればよいだろう」

というようなことを、多くの死者を出した駿河の人々が口にするようになった。

信濃においても、多くの死者を出した。佐久地方の相木衆や、もと信濃善行寺別当、栗田吉信や信濃川中島の豪族雨宮十兵衛家次などの死は、忠節を尽すための死というよりも見殺しにされたという感覚で受け取られたのである。

真田昌幸が高天神城を飽くまでも救えと主張したことは結果的には当っていた。高天神城陥落は駿河衆、信濃衆の精神的離反をうながす結果になった。

勝頼は戦死者の遺族に対して、それぞれ父の家督を継がせることによって懐柔しようとしたが、後出奔して駿河に隠れたと伝えられている。善行寺衆はこの時点において武田家から離れていたのである。

栗田刑部吉信の子信濃善行寺別当永寿丸は勝頼から父刑部の家督を継ぐことを許されたが、後出奔して駿河に隠れたと伝えられている。善行寺衆はこの時点において武田家から離れていたのである。

高天神城陥落の真相は、木曾衆、伊奈衆にも大きな影響を与えた。

先方衆はいざというときは本隊が来て助けてくれるからこそ戦うのであった。武田家の御都合次第で見殺しにされると分かっていたら、戦う気持など起きよう筈がない。織田・徳川連合軍が攻め込んで来た場合、高天神城と同様な目に合わされはしないかという不安が武田不信の囁きとなって、木曾谷や伊奈谷で囁かれるようになった。

甲斐国内では別な形で高天神城陥落の事実を受け止めていた。それは高天神城陥落とほとんど同時に発せられた、築城のため十軒に一人の割合での夫役の徴集であり、軍役衆には、それ等の夫役人のための食糧割当であった。

年に二度ないし三度という出征の度ごとに自作農階級以上の家は軍役を課せられ、この他に各戸に棟割別として税金が取り立てられていた。その苦しい中に、再び築城のための夫役と食糧の調達であった。

「高天神城が陥落したから、間も無く織田・徳川連合軍は甲斐の国へ攻めこんで来る。甲斐にはこれと云ってよい城はないから、韮崎に新城を作り、お館様や御一族衆は韮崎へ移るそうだ」

という噂が流れた。

新府城という名はまだ付けられてはいなかったが、その城がどれだけ大きなものであり、その築城のために、すべてをかけようとしている首脳部のあわてぶりが、古府中に住んでいる人々を動揺させた。

古府中は甲斐の都であった。甲斐だけではなく、武田氏の支配下にある、信濃、西上野、駿河の都でもあった。ここには躑躅ヶ崎の館があり、その附近には重臣たちの屋敷があり、多くの人質がこれ等の屋敷に割当てられていた。武田の政治の中心地であると同時に商業、工業の中心地でもあった。諸国から人が集まるために、消費地としての華やかさもあった。寺社も古府中附近に集中していた。

躑躅ヶ崎の館が、古府中から韮崎へ移るということは、古府中そのものが消滅することでもあった。商業、工業にたずさわる者は、首都移転ともなれば住み馴れた古府中を捨てて韮崎へ移り住まねばならない。それはたいへんなことであった。第一費用がかかるし、引越した結果がよいか悪いかは全く未知数であった。

新城建築の噂は古府中消滅の幻想を生み、人々を焦燥に追い込んだ。古府中に住む人で、この移転に賛成する者は一人もいなかった。彼等は築城の話を聞くと敏感にそれに反応した。

築城反対は大っぴらにできるものではなく、既に首脳部の意見が一致し、勝頼が命令を発したのだから今さらどうにもなるものでもなかった。でき得ることは転居反対であった。新城へは城を守るに必要な者だけが行って、従来古府中内で行われていたことは、そのままにして置いてくれという嘆願であった。こんなことができるわけがなかった。不安が不安を呼び、噂が噂を呼び、そしてそれは人心の動揺という形で甲斐及び信濃、駿河、西上野へと伝わっていった。

中でも、不安を越え、恐怖に近い気持で、新城建築費並びに用材調達御用立を申し渡された木曾義昌は、始めは呆然としてこれを受け、次には内容を検討して、激怒した。

木曾は信濃の中でも、生活環境に恵まれないところであった。米はほとんど取れず、雑穀も他所から輸入していた。生産物は少なく、従って人口も少なかった。

城をつくるから、材木を出せ、ここまではいいとして、その大量の材木を韮崎まで運搬するのは容易のことではなかった。城の柱と用材となれば大木である。車や馬で運べるものではなかった。人力で曳いて来る以外に方法はなかった。

古来、諏訪地方に七年に一度の御柱祭というのがあった。深山から巨木を切り出し、それに曳き綱をつけて氏子総出で諏訪神社まで曳きつけて、これを立てるという祭事であった。この行事は諏訪神社の支社の多い、伊奈や木曾地方でも行われていた。当時大木を運搬するとすればこれ以外に考えられる方法はなかった。

城の用材を人力によって韮崎まで曳きつけることは可能としても、その夫役はたいへんだった。一本の柱を曳くのに百人を要するとして、百本で一万人となる。木曾から韮崎までの行程を考えると、どんなに速く見積っても一ヵ月はかかる。これだけの人数の食糧を手前持ちというわけには行かなかった。これだけではなかった。普請には、大工が一日二百人はかかる勘定だった。二百人の大工が十ヵ月かからないとできないということになれば、その工賃は最低に見積っても二千両の金が入用になる。あれやこれやで三千両はかかる。

木曾にそれだけの金がある筈がなかった。作ろうとすれば領民を泣かせることになる。

木曾義昌は家老山村三郎左衛門良利に命じて、なぜこのような法外なことがなされるのか、できることならば、普請の費用の半分は他でまかなって貰えないかを、願い出ることにした。

山村三郎左衛門良利は、娘のたみが、長坂長閑斎の側室であるという縁故を持っているので、早速古府中へ出て来て、このことで長坂長閑斎にたのみこんだ。

「たいへんだろう。しかし、たいへんなのは木曾だけではない。どこもここも困っているのだ。いままで木曾は先方衆として合戦に出た回数は少ない。だから今回は、そのような割り当てがなされたのである。なんとかならないものか」

と長閑斎は云った。

「先方衆として合戦に出た回数は少ないと云っても遊んでいたわけではござらぬ。木曾口をしっかり守っていたからこそ、織田の兵は一歩も近づけなかったのです」

山村良利は織田軍を美濃との国境で撃退した天正二年の戦の話まで持ち出した。

「そう云えばそうだ。たしかに木曾殿にだけ築城御用を申

しつけるのは苛酷に思われる。これについては、拙者よりお館様に申し上げてみよう。お館様もそのことを気になされていたから、木曾殿の云われるとおりにまでは行かないとしても、軽くすることはできるだろう。それについて拙者から頼みがある。実は、木曾殿に築城費御用立並びに用材調達を申しつけよと強く主張なされたのは穴山梅雪殿であるから、そちらから梅雪殿によろしく取り為して貰うことも一つの方便だと思う。なにしろ梅雪殿は御親類衆筆頭の実力者であるからな」

長坂長閑斎は云った。そのことは既に山村良利の耳にも入っていたから、確認したことになった。良利は長閑斎の好意に感謝した。

山村良利は主家のためになんとかして、負担を軽くして貰いたかった。そうしないと木曾の人々は木の根草の葉まで食べねばならないほどに困窮するだろう、とてもそのようなことはできなかった。

山村良利は駿河の江尻城へ馬を走らせた。穴山梅雪にすがるほか手はなかった。

穴山梅雪は山村良利を笑顔で迎えて云った。

「お困りの様子、同情申し上げる」

既になんのために来たのかを万事承知しているようなひとりであった。

良利は、なにか暖かいものを感じた。どうにかなるだろうと思った。彼は長閑斎の前で云ったとおりのことを云った。

「木曾殿には重すぎる御処置だと拙者は思っていたが、既にそうすることに決っていたので、拙者としても、止むなく、それを承認する形を取ったわけである。実を云うと、木曾殿を指定したのは、長坂長閑斎と跡部勝資、そして小山田信茂の三人である。三人で木曾殿と決めて置いたから、この拙者の口をかりて諸将に納得されるように取り計らったのである」

穴山梅雪はそう云ってから、

「木曾はまだ寒いだろう」

と庭を見て云った。庭の木々の若葉は匂うようであった。

山村良利は異常な感に打たれた。長坂長閑斎の云うことが事実か穴山梅雪が真実を語っているか、両方とも嘘を云っているのか分からなかった。彼とすればこの際、なんとかしてこの負担から逃れたかった。

「木曾には無理でございます。今回の御用立ては重い重い仕置に思われます。どこをどう工面しても木曾が三千両という大金を出すことはできません。どうしてもということになれば木曾は亡ぶるよりしようがございません」

良利は云った。

「そちの苦しい気持はよく分かる。しかし既に決ったことだから、今から変更もできまい。どうかな、ここで別な考え方をしたら」

「と申されますと？」
「一応は命令は受ける。しかし木曾でできないものは、同じ親類衆が肩がわりする。この案はどうかな？」
梅雪は笑った。笑うと彼の顔は怪奇に見える。良利は、同じ御親類衆という言葉につまずいた。御親類衆というのは、信虎、信玄、勝頼三代の男系の武田一族に穴山梅雪のように代々武田家と縁組みをしている人を含めて云うのであって、木曾義昌のように、信玄の女を正室に迎えたというだけの関係では御親類衆とは云わなかった。
「同じ御親類衆と申されますと……」
良利はそれを訊いた。
「木曾殿とわが穴山家とは同じような親類だと申したのだ」
木曾義昌も穴山梅雪も信玄の女を正室にしているから義兄弟であるという意味のことを云ったのである。
「すると、御用立金を穴山様がお立て替え下さるというわけでございますか」
良利は呼吸をはずませて訊いた。
「いやいやこれは例えばの話である。そう決めたわけではない。そう決めたとしてもおおっぴらにできることではない。もし、穴山家が木曾家の御用立金を肩がわりしたと分かったら、次の御用立金は穴山家に申しつけられるであろう。こういうことは飽くまで表面に出してはならないことだ」
穴山梅雪は声を細めて云った。
「四郎殿（勝頼）は築城に夢中になっている。その気をこでくじくようなことはしてはならない。木曾殿はまず用材の調達にかかるがいい。そして築城御用立金の方は、拙者がなんとか都合をつけよう」
「それは有難いことですが……」
良利はそこで口をつぐんだ。貸して貰えることは有難いけれど、その金を返済するあてはないのである。不義理はしたくなかった。
「どうしたのだ」
急に口をつぐんだ良利に梅雪は不審の眼を向けた。
「穴山様の御好意は有難いと存じます。殿もさぞお喜びになるでしょう。しかし、木曾はその金を返済することができないのです。十年、二十年どころか百年かかっても三千両という金は返済できません。利子さえおぼつかないことです」
「これは驚いた。三千両、耳を揃えて貸してやろうなどとは云ってはおらぬ、どうしても必要な金だけは貸してやろうと申しているのだ。返せと云ってもいない。ましてや利子をくれとは云わない」
「すると、ただで貸して下さるのですか」
へんだなと良利は思った。いくら御親類衆でもそれはあり得ないことだった。御親類衆だからこそ、かえって金の貸借はむずかしいのだ。良利は裏になにかあるなと思った。

「さっきも云ったとおり、同じ御親類衆だ。困ったときにはお互いに助け合わねばこの戦国を生き抜いて行くことはできぬ。特に今のような緊迫した時世になると、本当にたよりになる親類が必要になって来るのだ。つまり、拙者が申しているのは、わが穴山家と木曾家が互いに心を打明けて話すことができるような親類になりたいということだ。生きるも死ぬも一蓮托生の親類になりたいと申しているのだ。拙者の申すことがお分かりかな」
穴山梅雪はそこで言葉を切って、良利の顔をじっと見詰めた。良利はその目が怖かったが逃げることはもうできないような気がした。穴山梅雪がなにかをたくらみ、その中に木曾氏を抱きこみたがっているのは明らかだった。
（それはいったいなんであろうか）
良利は、近ごろ、しばしば耳にしている噂を思い出した。穴山梅雪が密かに徳川家と通じているらしいという噂だった。
（もしや、それがほんとうだったら）
良利は蒼白な顔をして、梅雪を見返した。
「今は深刻に考えずともよい。しかし、やがては考えねばならないだろう。今日のことは、しばらくはそちの心の中だけに止め置き、機を見て木曾殿に話すように。四郎殿の目から見れば、しょせん木曾は先方衆であるということを心によく踏まえて置くことだ」
梅雪はそれ以上はそのことに触れずに、良利に、木曾では食べられぬ、海の幸を馳走しようと云った。
「うまい考えはうまいものを食べないと浮かばないものだ。駿河は酒もいいし、肴もいい。駿河にはこれからもちょいちょい来られることになるだろうが、ここに来た時だけはゆるりとしていって貰いたいものだ」
梅雪はそう云ってから人を呼んで、宴席の用意を命じた。

高天神干殺し歴々討死の事
三月廿五日、亥の剋、遠江国高天神籠城の者、過半餓死に及び、残党こぼれ落ち、柵木を引き破り、罷り出で候を、爰かしこにて相戦ひ、家康公御人数として、討ち捕る頸の注文、次のとおりなり……。（『信長公記』巻十四）
〈註〉注文とは目録のことである。

鎮(しずめ)の城

山村三郎左衛門良利は、帰途再び古府中に寄った。真田昌幸に会うためであったが、彼は韮崎の片山七里の築城現場に行っていて不在だった。

良利は韮崎に馬を馳せた。

昌幸は、築城現場の近くの上野郷の名主の家を借りて、ここを仮の普請奉行所としていた。

昌幸は良利の顔を見ると、

「駿河はもうすっかり初夏でしょう」

と云った。昌幸は良利が穴山梅雪に会いに行ったことを長坂長閑斎から聞いて知っていた。

「さよう、こちらよりはだいぶ暖いように思われます」

良利は目を外へやった。木の芽が出揃っている中に、山桜の花が見えた。

「玄蕃頭(げんばのかみ)殿（穴山梅雪）はなんと申されたかな」

昌幸は真直ぐに良利の目を見て云った。その目は鋭かった。良利は昌幸の眼の中に自分の心の底まで見透されてしまいそうな力を感じた。良利は、思わず顔を伏せた。はあとか、はっ、というような曖昧な返事が口から出たが、それだけで言葉にはならなかった。

「用材調達と築城金御用立についてなんと申されたか伺いたいのだ」

昌幸は真正面から切りこんで来た。良利は受けねばその言葉に切られてしまいそうだった。

「一度、そう決ったものを今さら変更はできないだろうと申されました」

良利はやっと答えた。答えるまでにいささかの間があった。昌幸は黙って良利の顔を見詰めていた。

（それは表面の言葉であろう。裏になにかあったのだな）

そのように追及している昌幸の目を見て良利は再び俯いた。彼は敗北感を意識した。昌幸だけには勝つことはできないと思った。

「古府中を立って駿河に向われて以来今日で十日間、木曾の御重役としては、いささか長旅のようであった。それだけねばっても、玄蕃頭殿の口添えが得られないとあらばあきらめるより他はないのう」

昌幸は、往復の旅程から滞在の日数まで割り出していたのである。用立金軽減の嘆願が不成功だったなら、直ぐ引き返して来る筈だった。長居をしたということは、何等かの理由で心に余裕ができたのか、相手に引き留められたからであろう。昌幸はそう考えていた。

「御用材調達だけは木曾だけの力でなんとかやりたいと思っておりますが、御用金の方は……」

あとは云えなかった。

「そのことは長閑斎殿から聞いた。長閑斎殿もそれを心配されてなんとかならぬものかと相談を持ちかけて来た。拙者もそのことについてそこもとを呼んで相談したいと思っていたところである」

昌幸の眼がいくぶんやわらかになっていった。良利はようやく緊張を解いた。

「まずは、今度の城の概要を実地に説明してからにしよう。その方が話が運ぶだろう」

昌幸は山村良利を誘って庭に出た。仮の普請奉行所に指定された名主の家族はしばらくの間他所へ引き移ったらしく見当らなかった。名主の邸の周囲は武士たちによって固められていた。

昌幸は庭を横断して麦畑の道をしばらく登ったところの岡の上から一点を指さした。小高い山の頂上附近の木が切られ、そこへ向って道がつけられていた。蟻が群がるように多数の人影が見えた。

「あそこだ。あの山全体が城になるのだ。既に御存知のように、拙者は築城には反対だった。だが、決った以上これに命を賭けるつもりだ。築城に反対した拙者が普請奉行を仰せつかったのも、なにかの縁であろう。拙者は築城によって武田の行く先を決めようと思う。現在織田・徳川の連合軍は強大な力となって攻め寄せて来ようとしている。この力を支えるには城しかない。徳川家康は浜松城を作った。先代様は三万の軍勢で攻めたが落すことはできなかった。浜松城はそれほどの堅城とは思われないが、城であるからこそ大軍を支えることができたのである。

拙者は、敵の大軍に包囲されても半年どころか一年経っても落ちないような城を作るつもりだ。去年の四月に本願寺派の居城大阪城が落ちた。わが武田と組んで織田信長と戦って来た本願寺一派が紀伊へつぼんだ（退却した）ことによって、武田は単独で織田・徳川連合軍を相手にしなければならなくなった。しかしまだ、織田・徳川にとって、西には毛利、北国には上杉、そして東にはわが武田がいる。たとえ敵の大軍が攻め寄せて来たとしても、この城を落さないかぎり武田は亡びない。また、毛利、上杉を無視して、大軍を長期間ここに止めて置くこともできないだろう。上杉はわが武田の同盟国でもある。敵がこの城を包囲して落せなかったその時から、織田・徳川の威信は失墜する。わが武田が反攻に出るのはその時である」

昌幸は熱っぽい調子で云った。

「今は急いでいる。多少の無理があっても築城せねばならぬ。ただ一つだけ拙者に気懸りなことがある。城ができても、民心が城から離れた場合は、城を持ちこたえることはできない。民心の離反こそもっともおそろしいことだ」

昌幸は民心という言葉に特に力を入れて云った。

「民心を把握する者は、その上に立つ名主、被官、領主で

ある。武田がこの窮地を脱することができるか否かは武田内部の一致団結にある。諸将の団結に罅が入らないかぎり、わが軍は近いうちに必ずや織田・徳川連合軍を撃破できるであろう」

昌幸は団結という言葉を借りて良利になにかを云おうとしているようであった。

「玄蕃頭殿の江尻城には立派な天守閣がある。あの天守閣で、玄蕃頭殿が駿河を治めているかぎり、徳川は動けないだろう。徳川が動かねば、織田単独でわが武田の領域へ攻めこむことはできぬ。な、そうであろう。築城は玄蕃頭殿が徳川を押えている間に終らねばならぬ。たぶん玄蕃頭殿もそこもとにそのように云われたのであろう」

また穴山梅雪のことがでたなと良利は思った。或は昌幸は、内心で梅雪を疑い、そしてこの自分も疑われているのではなかろうかとも思われた。良利は慄えるような気持だった。

「檜の切り出しはもう終ったであろう。運搬はいつ頃になるかな」

昌幸は突然、用材調達の核心に触れた。

「檜の山出しは既に終っています。生木ですから、今直ぐにここへ曳いて来ても使いものになりません。普請奉行殿の御指図によってことを運ぼうと思っていますが……」

何分にも人と費用がかかると云おうとした良利の口を封ずるように昌幸は云った。

「人数のことはこうしようと思っている。用材が木曾領内を通過するときには、木曾の曳子衆によって行う。諏訪まで来たら、諏訪衆、そして甲斐に入ったら、甲斐の人々に曳かせようと考えている。そのことは近日中書状をもって通達しよう。それでよいであろう」

それは良利にとって思いもかけぬことであった。

木曾義昌に命ぜられた築城用材の調達の令書には、用材の種類、寸法、本数等を詳細に明示し、搬入期日は七月一日、場所は韮崎片山七里と明示されていた。だから用材の調達はなにからなにまで木曾衆でやれと命ぜられたのだと思っていたのだ。

「用材調達の令書をよく読めば分ることだが、搬入方法については明示してなかった。この方法でよかったら、直ちに用材運搬加勢の書状を諸方に送ろうと思うがいかがかな」

昌幸は良利に向き直って云った。

良利は涙の出るほど嬉しかった。

「よろしくお願い申し上げます」

檜を切り出し、木曾領内から曳き出すまでのことなら、なんとかできそうだった。

「それからついでに申して置くが、木曾殿に命ぜられた築城費の御用立金の内容であるが、その金額については何千両用立せよという令書は出されておらぬし、築城費全額を用立せよという令書は出ていない。木曾殿に出された令書を、あわて者が見れば、材木も築城費もいっさいがっさい

木曾殿に申しつけられたように見受けられるが、それなら当然普請奉行も木曾殿でなければならない。ところが普請奉行はこの昌幸である。拙者はよくよく令書を検討した結果、木曾殿には追ってしかるべき額の築城費の御用立割当がなされるということを用材調達の令書に書き添えたものと解しているが、そこもとはどのように受け取っておられるかな」

山村良利は、昌幸の言葉に思わず一歩下り、そして感激のために、大地に坐って、立っている昌幸の前に両手を突こうとした。昌幸はひどくあわてて、彼もまた大地に腰をおろし、良利の身体を助け起こすようにして云った。

「早合点ということは、よくあることだ。拙者が普請奉行である限り、木曾殿だけに無理を押しつけるようなことはしない。今の武田にとって築城はたいへんな仕事である。無理な仕事だと極言してもいい。しかしこの無理をすべての人に公平に分ち与えれば誰でも納得できる無理になる。そういう時期に来ているのである。よくよくこのことを心に入れられて、もしなにかがあったら、隠すことなく、この昌幸に話していただきたい。木曾家もわが真田家も武田家から見れば先方衆である。拙者には木曾殿が置かれている立場がよく分かる。しかし、いかなることがあっても、われ等は主家に背くことはできない。それは武士であるからだ。な、良利どの、もう少しの辛抱だ。織田信長のような非道なやり方で天下が制せられる筈がない。必ずそのうちに何かが起こって信長は亡びるだろう。それは近いような気がしてならぬ。そうなれば世はまた変る」

昌幸は良利の手を取って云った。

良利は両眼に涙をためていた。木曾の苦境を昌幸が救ってくれるとは思いもよらないことであった。信玄が、昌幸を指してわが眼であると云ったことが間違いはなかったと思った。

「なにからなにまで有難き幸せに存じます。早速木曾へ帰り、殿にこのことを申し上げ、玄蕃殿には……」

と云いかけて、彼は口を閉じた。

「玄蕃頭殿がどうしたのだ」

昌幸の眼が大きく開かれた。

「はっ、江尻へ行って玄蕃頭殿にお力添えをお願いしたこと、安房頭殿（真田昌幸）のお情けによって解決いたしましたとお知らせしたいと思っております」

と良利は云った。半ばほんとうで半ば嘘であった。玄蕃頭との約束は、穴山家と木曾家の秘密同盟であった。そのことは口が裂けてもここでは云えなかった。云えば、大混乱が起こる。良利は穴山梅雪が徳川家に内通しているという確証はまだ摑んではいなかったのである。

「それはよいことだ。ぜひそうされたらよいだろう。そこもとは木曾家の老職であるからなにかとむずかしいこともあるだろう。家老は主家の生命を握っている医師のようなものだ。目先の小康に心を奪われることなく主家の将来の

将来まで考えてことを運ばれよ」

良利は、その言葉を聞いて平伏した。穴山梅雪の利に誘われてはならない。木曾義仲以来の名誉ある家に疵をつけてはならないと昌幸は云っているのだと良利は理解していた。

昌幸は良利を連れて普請奉行所に帰ると、奥に招じ入れて新城の縄張り図を見せてその大略を説明した。

城の平面図は梯形をしていた。北に面した底辺の長さは二百間（三百六十メートル）、南に面した頂辺の長さは百間（百八十メートル）、そして梯形の両辺の長さは、それぞれ二百五十間（四百五十メートル）という広大なものであった。この梯形の西面は片山七里の断崖絶壁となっており、他の三方は堀を巡らしていた。

堀の内側は帯郭でかためられ、その中の本丸、二の丸、三の丸は更に土塁によって囲まれていた。

「これは驚きました。鬫蹴ヶ崎のお館と比較すべもないほど広大なものですな」

良利は云った。

「城となれば、このぐらいのものを作らねばならない。ところで三郎左衛門殿（山村三郎左衛門良利）はこれを見て、どこが一番弱いと思われますかな」

昌幸が訊いた。

「この伏図（平面図）だけ見て、どこが強い、どこが弱いと一概には申されません」

良利は逃げた。

「しかし、なんとなく感ずるものがあろう。もし、そこもとが敵の大将であったと仮定しよう。この絵図が手に入った場合、まずどこを攻めようと考えるかな」

良利はそれ以上逃げるわけには行かなかった。彼は真剣になって図に見入っていたが、やがて顔を上げて、

「拙者が攻城軍の大将であったならば、城を攻める前にまず堀を調べます。堀の水が引き水であったなら、その水道を断ちます。もし湧き水であったならば、まず堀を埋めにかかります。堀を埋める工事を進める一方では、盾で矢玉を防ぎながら、堀へ木材を投げ入れ、その上に板を敷き並べて堀を渡り、帯郭に取りつきます。帯郭を破壊するのは、人数を多く出して時間さえかければそれほどむずかしいことではございません」

と良利は云った。

「堀は湧き水である。このあたりはもともと沼地だから、堀を二重にすることもできる。またこの図にはないが、帯郭の外側に乾堀を設けるつもりでもある」

昌幸は云った。

「だが、その一つ一つを埋め、或は破壊して行くことは時間と人の数の問題です。不可能なことではございません」

「そうかな」

と昌幸は云った。そして彼はすぐ、

「城兵が、そうされるのを黙って見ていると思うか」

とつけ加えた。良利は言葉につまった。確かに良利の考え方は一方的であった。城兵が堀を埋められ、帯郭を破壊されるのを黙って見ているわけがなかった。いままで、武田軍が数々の城を攻撃したときに受けたと同じような抵抗を試みることは明らかだった。

「城兵が出て来たら、攻城軍としては、もっけの幸です。これを討ち取ります」

良利はごく当り前のことを云っているなと自分でも気がついていた。城というものは自らの身を守りながら敵を迎え討つところなのだ。城を背景に味方の人的損害を最小にして、攻撃側に最大の損害を負わせるのが城であった。城の守りが堅固であればあるほど攻城軍は多く傷つき、ついには攻撃をあきらめて、城を包囲しての持久戦になるのだ。

「やはり、この城を落すには兵糧攻めしかないでしょうな」

良利は結論を云った。

これだけの規模を持った城であれば、少なくとも、二千或は三千という兵力を保持できるだろう。それだけの兵が籠城している城を包囲するには、その三倍ないし四倍の兵力でなければならない。それほどの大軍をこの地に止めて置くことは事実上不可能である。下手をすれば兵糧攻めの憂目に会うのは包囲軍になる。

「とうとう、持久戦に持ちこむか」

昌幸は微笑を浮べていた。

「この絵図どおりの城ができ上り、この城の中に、武田の精鋭三千が籠城すれば、まず織田・徳川の連合軍を以ってしても落すのは困難でしょう。しかし……」

良利は最後に云いたいことが一つだけあった。彼は言葉を続けた。

「しかし、城を守るのは人でございます。いままで甲斐国内に城を持ったことのない武田御本家衆は果して城を守る術を知っておられるでしょうか」

良利は武田御本家衆という言葉を使った。相手が武田御本家衆の人ではない、真田昌幸だからそう云えたのである。

良利の言葉は大いなる皮肉だった。二俣城を守っていた依田父子も信濃武士であった。

高天神城を守っていたのも駿河・信濃の先方衆であって武田御本家衆ではなかった。城の守りはすべて先方衆にまかせて来た武田御本家衆が、いよいよ、甲斐の武士を率いてこの城に籠った場合、どれほどの戦いができるかということよりも、この新城を敵が包囲するようになったときは、先方衆が守っている出先の城のすべては落ちた後であるということを良利は云いたいのであった。先方衆をすべて失って、武田御本家衆だけで織田・徳川の大軍を向うに廻して戦えるかという根本的な問題を提起したのであった。

昌幸は、良利の質問の内容を正確に受け取っていた。

「腹を切る覚悟でもなければ云えないことをよく申されたものだ。城はできても、そこもとが考えているような心配は最後まで残る。だがこれは人の心の問題だ。武田御本家衆の心の問題であり、甲斐の人たちの心構えの問題である。また、新城ができたということによる先方衆の気持の問題にもつながる。その時になってみなければ分からないことだ。拙者は今、城を作ることだけを考えている。しっかりした城を作れば、そこに入った人間の心もしっかりするし、それを遠くから眺める人の心も変るということだ。拙者は鎮の城を一日も早く作り上げたいのだ」

昌幸は、そう云いながら絵図面を取りかたづけ、築城の現場を見て帰るかどうかを良利に訊いた。

「なにからなにまでお教えいただき、心から敬服いたしました。安房守殿が普請奉行でおられるかぎり、われらは真心を以って協力いたしたいと思います。どうかわれら先方衆の鎮ともなる堅城を一日も早く築き上げられるよう、お願い申し上げます」

山村良利は真田昌幸の前に両手をつかえて云った。

「帰られるか。では木曾殿によしなにお伝え下さるように」

昌幸は良利を奉行所から送り出した。

山村三郎左衛門良利は、諏訪を通るとき、遠い姻戚関係にある千野左衛門尉広景に会った。千野広景は諏訪衆の重臣であったが、諏訪家が亡びて、諏訪が武田領となった後、長らくこの地にあって、代官を勤めた長坂長閑斎に仕えていた。

山村良利と千野広景とは、よもやまの話をした。当然のことながら、話は高天神城陥落の話と新城のことに触れていった。

「諏訪家は武田家よりも、もっともっと古い神氏の家柄だったが、武田信玄に亡ぼされてしまった。しかし、諏訪家の血筋は勝頼様が受け継いでいるので、いまのところ諏訪としては比較的平穏な気持でおられる。だが、そうでないところもあるようだ。聞くところによると、今度、木曾家へ出された木材の調達や築城費御用立の下命は、きびし過るほどきびしいものだそうだ。恐らく木曾家は、この辺りで武田家に対する考え方を変えるのではなかろうかという噂さえ耳にした」

千野広景は、たいへんなことを口にした。木曾家が、武田家に対する考え方を変えるというのは、謀叛の下心があるということであった。

「そのような噂をどこで、いつ、誰に訊かれたのか」

山村良利は開き直った。

「噂だ。気にすることはない。しかしそのような噂が流れていることには気を付けねばならない。おそらく、この噂は諏訪だけではなく、伊奈でも、佐久でも、いや木曾自体でも囁かれているのではなかろうか。流言には二様ある。自然に発生するものと、なにかの意図があって、故意に流

されたものである」

千野広景は六韜の兵法にくわしかった。

「今度の噂は明らかに後者である」

思い当ることはないかというような目で、広景に見詰められると良利はまた心が寒くなった。

(徳川か織田の間者が流した離反策か、それとも穴山梅雪が流したものであろうか)

「困ったことだ。それこそ木曾家にとってまことに困ったことなのだ」

良利は云った。

山村良利は木曾福島へ帰ると、早速、木曾義昌に帰城の報告をした。

義昌はひどく上機嫌で良利を迎えた。

「御苦労であった。そちが古府中へ行っている間に玄蕃頭殿からの使者があった。そこもとの計らいまことに機を得たものであり、満足に思うぞ」

義昌は肥った身体を揺さぶりながら云った。なにがなんだかさっぱり分からなかったが、穴山梅雪からの使者があったことだけは確かであった。

「万事は三郎九郎(山村三郎九郎良侯、山村三郎左衛門良利の嫡子)に任せてあるから、訊ねて見るがよい」

良利は義昌のその一言でまた驚いた。

木曾義昌が、家老の山村父子を信頼してくれることは有難いが、良侯はまだ若い。穴山梅雪の使者と腹の探り合いができるような年齢にはなっていなかった。

(殿が上機嫌なところをみると、良侯は穴山梅雪の使者と会って、なにか確定的な取り決めをしたのではなかろうか)

そう思うとじっとしてはおられなかった。

良利はすぐにでも良侯に会ってこのことを確かめたかったが、それもできず、義昌の前で一応は、穴山梅雪に会ったことから、普請奉行の真田昌幸に会ったことを話さねばならなかった。

「玄蕃頭殿にはなにぶんの御助言、御援助をお願いいたしました。安房守殿は拙者の行くのを待っておられて、思いもよらぬ寛大な処置を示されました」

良利は、木材曳きの人数は、それぞれ木材が通過する領内の者に割当てることを約束したし、御用立金についても、木曾家で醵出できる範囲の額を命じようと言明したことを報告した。

「それは大手柄だ。すると玄蕃頭殿からの加勢金は不要ということかな」

義昌はひとこと洩らした後で、

「いやあれは加勢金ではない。正真正銘の結納金なのだ。受け取ってもいっこう差し支えない金だ」

義昌はいかにも心持ちよさそうな顔をして笑った。

良利は義昌の前を辞してから良侯を呼んだ。良侯はせわしそうな歩き方で父の前に片膝を立てて坐ると、

「なにか御用ですか」
と訊いた。お帰りなさいませも、御苦労でしたも云わずになにか御用ですかもあるまいと思ったが、人が見ている前で叱るわけにもゆかず苦虫を噛みつぶしたような顔で、
「これから屋敷へ帰る。すぐ参れ」
と云った。ここでは話ができぬから、屋敷で話そうと思ったのである。
「父上と違って、拙者はいまいそがしいのです。今日中に、江尻の殿様へ贈る木曾馬の見立てをしなければならないのです」
「なに、馬の見立てだと」
「お館様（木曾義昌）からそのように命ぜられました」
良侯はなんの臆することもなく云った。
「なんのために木曾馬を穴山殿へ贈るのだ」
と良利が訊くと、
「父上はなにをとぼけていなさるのですか、当家の百合姫様と穴山様の嫡男勝千代殿との婚儀のお約束は、父上と玄蕃頭殿との間で取り決めたことではありませぬか。過日、穴山様からお使者が御結納の品々を持参されたる故、当方にてもしかるべき用意をしているのです」
良侯はいささかも臆することなく答えた。目出たいことであるから、いくら大声でしゃべってもさし支えないという顔であった。
良利は呆然とした。家臣間の婚姻については、いちいち上部の許可が必要だった。木曾家と穴山家の婚約ともなれば、当然のことながら、武田勝頼の許しを得なければならなかった。それを無視してこういうことをすれば、その結果がどうなるか義昌が知らない筈がない。他の重役も黙っている筈がない。
（いったいおれの居ない間になにが起こったのか）
良利は良侯の顔を見たままで、言葉も出なかった。
「お使者は保坂常陸介殿でございました。お使者の口上によると、穴山様は嫡男勝千代様の正室として御館様（勝頼）の姫君を御所望なされたところ、既に典厩様の御子息との婚約が決定しているゆえ、やるわけに参らぬ、他の御親類衆の中から好きなように選ぶがよいという内諾を得ているとのことでございます」
良侯は云った。
良利にとってはすべて初耳であった。穴山梅雪が、木曾家と秘密同盟を結びたいというような主旨のことを云ったのは事実である。しかし、勝頼にも相談せず、木曾家と縁談を突然取り決めたのはなぜであろうか。なぜそれほど急がねばならなかったのだろうか。良利は穴山梅雪の怪奇な笑い顔を思い出した。その笑い顔が、まだ見たことのない想像の中の徳川家康の顔と重なり合った。
「して、御使者殿は何を持って来られたのだ」
「結納の品々の他に持って来られた物のことでしょうか」
良侯は声を落して云った。これだけは内分にして貰いた

いと使者の保坂常陸介から頼まれたからであった。
「さよう、その他のものだ」
良利は、なにかあるなと思った。良侯は畳の上を膝行して来ると、良利の耳もとで囁くように云った。
「金一千両……」
「なにっ……」
良利は思わず声を上げた。それだけの大金となると、単なる結納金ではない。裏がある金である。
「受け取ったのか」
「既に父上との間にお話があったと伺いましたので、私が父に替って受け取り、そのことを殿に申し上げて置きました」
良利は溜め息をついた。
「受け取ってはいけなかったのでしょうか」
「いまさらどうにもしようがないだろう」
良利は云った。どうしようもないことはなかった。返済すればよいのだ。しかし、その金は既に木曾義昌が正式に受け取って、木曾家の蔵に納められてあった。それを返すとなると、縁談も駄目になることは間違いなかった。このことがおおっぴらになった場合のことを考えねばならぬ。それに木曾義昌は縁談を喜んでいた。その気持を打ちこわすことは簡単にできるものではない。
（美事にしてやられたわい）
良利は、その千両の重みを噛みしめていた。木曾家は、今すぐにでもその金に手を付けたかった。それほど困っていた。木曾家だけではなく、武田にゆかりのある武将で千両の金がぽんと出せる者はいない。ただ一人穴山梅雪がそれをやった。それほど梅雪は金持ちなのだろうか。
（違う。梅雪の陰に隠れて、彼を操っている陰の人がいるからだ）
良利はその想像に行きついたとき思わず身震いをした。
（金を貰った以上、木曾家はその陰の人に頭が上らなくなるのだ）
それにしてもと、良利はまた考えた。彼が留守中に穴山家の使者が来たということは、良利が江尻に滞在中、結納の使者は木曾に向って出発していたということだ。梅雪は、御馳走戦術によって、山村良利を捕えて帰さなかったのである。
「負けた」
と良利はひとりごとを云った。と同時に真田昌幸の顔が浮び上った。昌幸にすまないと思った。手を合わせて謝罪したい気持でいっぱいだった。

血ぬられた上棟式

木曾の檜は木曾衆によって鳥居峠を越えて北上し、桔梗ケ原に出た。

ここで曳子衆が交替することになっていた。そこからは道を東に向って取り、塩尻峠を越えて諏訪の平へ降りる。そこから韮崎まではほぼ平な道だった。問題は塩尻峠越えである。

真田昌幸は諏訪衆だけでは無理だと見て、深志城下の曇衆にも協力を要請した。

塩尻峠に檜の大木を曳き上げるには、一本に二百人ないし三百人がかかった。

「サアサア、みなさまア、おねがいだア……」

と声のよく透る若者が御幣を振りながら木遣りを歌うと、それに合わせて、曳子がよいしょよいしょと綱を曳いた。

曳子の他には、梃子衆が何人かいて、大木の動きをよくするようにその近くを駈け廻っていた。木が難所にさしかかって動かなくなると、三本の大木の曳子を一本に集めて曳かせた。これ等の指揮を取るのは諏訪神社の氏子の総代であった。彼等は七年に一度の御柱祭の経験をここに生かしたのであった。

だが、木曾から曳かれて来た檜の大木は一本や二本ではなかった。合計百本近くあった。五月、六月の二ヵ月はほとんどこの木を曳くために農事をさし置いて、労力奉仕しなければならない人々の負担はたいへんだった。食糧は自弁であった。

「こんなに苦労して曳いて行った檜で作ったお城はさぞかし立派なものずらよ」

と一人の曳子が云うと、

「なあに、城が立派だって中に入る人間がだめなら、どうしようもねえってもんずら」

とまぜかえす者がいた。武田勝頼は諏訪家の血を引いているとしても諏訪が武田に亡ぼされて、武田家の蔵入れ地（直轄地）になっていることは諏訪衆にとっては不満であった。ましてや諏訪神社の下社の氏子の中には最後まで武田信玄に反抗した者が多かった。父や兄が武田に殺された恨みは簡単に晴れるものではなかった。

「高天神城にこもった信濃と駿河の先方衆の千人はみな殺しに合ったということだ。云わば見殺しにされたっちゅうもんずら、もげえ（酷い）ことをしたものだ。その高天神城が落ちたからと云って、あわてて韮崎に城を築いたところで、さあ間に合うかな。こんどは城にこもった甲斐の衆

がみな殺し合う番かもしれねえぞ」

一息入れている間にこんなことがひそかに囁きかわされていた。

折から梅雨の最中だった。曳子衆は蓑笠をつけて大木を曳いた。泥にはまりこむと容易には動かない木をなんとかして動かそうとして、身体中泥だらけになって走り廻る梃子衆の姿が人目を引いた。

大木を塩尻峠から、諏訪へ向って曳きおろして来る途中、雨の中で大木が滑り出し、あっと云う間に道をはずれて、崖をころがり落ち、崖の下で休んでいた先発の曳子衆を下敷きにして、重傷三十人、死者七人という惨事が起きた。

曳子衆はこの惨事に対して、陣代を通じてしかるべきお手当を欲しいと申し出た。死者には、弔慰金を、負傷者には傷の見舞金ぐらい出して貰いたいという、当然な要求だった。この訴願状が廻り廻って普請奉行の真田昌幸のところに来たのは事故が起きてから、二十日後であった。

「なぜ、すぐにここへ寄こさなかったのだ」

真田昌幸はその書状を持って来た家老を叱った。

「諏訪の陣代（代官）様から、長坂様、跡部様と廻り、そして……」

やっと普請奉行のところへ来たのだと、云いわけをする家来に、

「こういうことは、誰でもいいから最初に受け付けた人が、なにをさし置いても解決しないと、後々が困るのだ」

最後の方は昌幸のひとりごとであった。

昌幸は早速、家来を諏訪へやって、死者や負傷者の慰撫につとめたが、事故以来武田に対して強い不信感を持った曳子衆はそれまでのように集らないし、人数が集っても、一所懸命曳かないからなかなか木は動かなかった。

「彼等は怠けているのです。主なる者を呼んで厳重に注意しましょう。それでも怠けるようだったら、こらしめのために斬るより他にないでしょう。やむを得ないことだと思います」

真田昌幸の片腕となって働いている原隼人佑貞胤が云った。貞胤は二十三歳、昌幸の又従兄弟であった。

「ばかなことを云うな。そんなことをしてみろ、いよいよ木は動かなくなるばかりか、築城そのものができなくなる。こちらが悪かったのだ。謝って歩くしか手はないのだ」

昌幸は、大木の下になって死んだ者の家を一軒、一軒見舞って歩いた。死者への供養として、五両ずつ置いた。負傷者も諏訪の湯に公費で逗留するように手配した。

昌幸の奔走によって、ようやく、勇ましい木遣りが聞かれるようになった。木曾の檜は諏訪から甲斐の国へ入り、韮崎へ着いた。七月の半ばを過ぎていた。

昌幸は諏訪で怪我人ができたときの処置について、長坂長閑斎や跡部勝資がなぜ積極的にこれを処理しなかったの

か、それに不審を覚えた。先を見る目のある二人としては今までにないことだった。二人は勝頼の側近を代表する者であり、勝頼が城を作れと命令した以上、懸命になって協力するのが当り前だった。昌幸だけにまかせて置くことはあるまい。そう思ったのである。

長坂長閑斎の領地は韮崎の近くの長坂上条の台地にあった。新城ができた場合、古府中に住んでいる家臣団の居住区はすべて、新城の近くに移されることになっていたが、長坂長閑斎はここに屋敷があったから、新築する必要はなかった。云わば自分の家へ帰って来たようなものだった。

真田昌幸は長坂上条の家に長閑斎が来ているのを確かめてからでかけて行って、諏訪の事件について問い詰めた。もっと積極的に築城のことを考えてくれないと困るとも云った。

「いや、悪かった。そこもとが云うとおりである。許されい」

と長閑斎はあっさりと自分の非を認めたあとで云った。

「先代様は、いざというときの事を考えて、ちゃんとした城を築いて置かれるべきだった。自国に城がない大名など聞いたことはない。なぜ家来たちがそのことを申し上げなかったのだろうか」

今さら、そんな愚痴をこぼしてもしようがないのに長閑斎はそう云った。

「いまさら築城に反対なされても困ります」

と昌幸が色をなして云うと、

「いや、そんなことはない。拙者だって一所懸命になって、そこもとが要求して来る、築城費の捻出に苦労している。跡部殿も同じ気持だ。しかし、なんとしても金を集めることはつらい。だからつい愚痴の一つも出るのだ」

そして長閑斎は、声を低めて、

「どうも築城のことは、玄蕃頭の口に乗せられたような気がしてならぬ。そこもとは、玄蕃頭に関する下々の噂を聞いてはおらぬか」

と云った。

「何を云われます。もう矢は放たれたのです。なにがどうあれ、今となっては良い城を一日も早く築き上げるより他に手段はないのです」

昌幸は云って、長閑斎の顔を見上げた。長閑斎はひどく疲れているように見えた。

築城の工事は進んでいた。無事進んでいるように外見的には見えても、実際はそうではなかった。

城は山全域に渡っていた。外堀も城であり、帯郭も、土塁も城のうちの一部であった。

城には石垣が当然のことながら必要であったが、石工を集めて石垣を作る時間的余裕がないほど切迫した工事であった。それに石垣を築き上げるとなると、費用がかさむ。これも当初予定していた石垣が取り止めになった理由の一つであった。

「石垣のない城などございません。普請奉行としてそんな城は作りたくはございません。御役ご免こうむりたいと思います」

と昌幸は勝頼に願い出た。しかし、跡部勝資や長坂長閑斎に、

「そう申しても無い袖は振れないし、どうしても石垣の城を作るとすれば、あと一年はかかる」

と云われると、昌幸もまた承知せざるを得なかった。

高天神城が落ちたから、この次は駿河の各城が、次々に落ちて行くだろうことは目に見えていた。事実、徳川家康は既に大井川を越え、田中城（藤枝市）周辺の出城や砦を次々と落とし田中城の孤立を図っていた。田中城はもう一押しで落ちる状態にあった。その次は穴山梅雪の居城江尻城であった。ここが落ちれば駿河は徳川の手に入ったも同様であった。だが、徳川家康は、田中城を本気で落とすつもりはないようであった。思うところがあるのか、わざと田中城総攻撃をひかえている気配があった。

昌幸は、それらの情況にからませて、築城を急がねばならなかった。安土城のように豪壮華麗でなくとも、敵を防ぐに必要にして充分な城だけは作らねばならなかった。

石垣のない城が、城としての体面を保つには、堀を深くし、容易に敵を寄せつけないようにすることと、外部の構えや、土塁、乾堀を幾重にも城の周囲に巡らすことであった。それをやるにはおびただしい人の手が必要だった。

甲州全体に渡って、十軒に一人の割合で夫役の命が出された。夫役に出られない者は金銭を取られた。また夫役の食糧は軍役衆の負担に決められていた。

一日、三千人の人夫が半月交替でこの夫役に従事した。雨の日も風の日も工事は続けられていった。

外堀の夫役に当っていた人夫が騒ぎ出したのは八月の終りころであった。

「朝夜二食の粥だけではとても働けない」

と文句を云う者が多くなった。これでは働けないと仕事をさぼる者があった。監督に当っている土橋五郎兵衛が怠ける者は処分するとおどかすと、ではいいようにして下さいと坐りこんでしまう始末だった。

土橋五郎兵衛はいささか短気な男だった。彼は坐りこんだ五人を縛り上げて、罰のために鞭を加えようとした。だがその前に与作という者が死んだ。もともと心の臓が悪い与作は縛られたという衝撃で心臓の発作が起ったのである。このことはまたたくまに人夫全員に与作は殺されたとして伝わった。

三千人は農具を投げ出し、土運びの畚をそこに置いて坐りこんだ。指導者はなかった。誰がそうしろと云ったのでもなく、突然、三千人が心を合わせたように、そのような行為に出たのであった。

昌幸は、この日は現場に居なかった。古府中に出て、重役衆に対して工事費の支出を、とどこおりのないようにし

てくれと掛け合っている最中に起きたことであった。
三千人がいっせいに仕事を放棄したことは普請奉行代の原隼人佑貞胤を狼狽させた。
原貞胤は緊急事態発生と見て、奉行所及び奉行所附近を固めていた、百余名の武士を引き連れて現場に臨み、
「ただちに仕事にかかれ、仕事にかからない者は斬るぞ」
と馬に乗り、抜刀して呼んで廻った。だが、そのおどかしは効かなかった。彼等は無言で抗議の目を貞胤に送っていた。
貞胤は自分が無視されたことに対して更に怒った。彼は手下の兵に向って怒鳴った。
「働かぬ者は槍にかけても働かせろ」
貞胤としても、人夫を槍にかけるつもりはないし、そう命じたところで武士たちが本気で人夫を突き殺すこともあるまいと思った。
槍にかけても働かせろと云われたから、貞胤の手の者は、槍をかまえて、仕事を放棄している人夫等の方に徐々に近づいて行った。人夫の一人がその槍の穂先を見て逃げ出した。ほんとうに殺されると思ったのである。それに刺戟されて逃げ出す者が続出した。
「逃げるな、逃げる者は槍にかけられるぞ」
貞胤は怒鳴った。夫役から逃亡する者は死刑と決められていたからだった。
人夫たちはほんとうに槍にかけられると思っていっせいに逃げ出した。兵たちはこれを見て、そうはさせじと追った。兵の一人が逃げる人夫の一人を背後から突いた。突かれた男が絶叫した。その声が槍を持った兵たちを昂奮させた。血が彼等に合戦を想起させた。
三千人の人夫はこの日のうちに持場を離れて、それぞれ自分の故郷へ逃げ帰った。この騒動で五人の人夫が殺された。十八人が怪我をした。
逃げた人夫のうち半数は武田信龍（信玄の弟、一条右衛門大夫）の支配地の百姓だった。彼等はこのことを信龍に上訴した。
一条右衛門大夫信龍はひどく怒って真田昌幸を古府中の屋敷に呼び付けようとした。
すぐ来いと云われても、昌幸はこの事件が起った直後だから、現場を離れるわけにはいかなかった。昌幸は使者を信龍のところへやってまず家来がやった不始末を詫び、事後処理が終ったら早速お詫びに参上すると云ってやった。
昌幸は事情を調査した。根本原因は食糧不足から起ったものであった。つまり、一条右衛門大夫が支給すべき食糧を出さなかったからこのようなことが起ったのであった。
夫役の人数が入れ替って再び仕事が始められた。これまでに五日間の空費があった。掘った乾堀には雨が溜っていた。
昌幸は古府中の一条右衛門大夫信龍の屋敷に出頭した。彼の屋敷は躑躅（つつじ）ヶ崎の館から二町ほど離れたところにあっ

た。信龍は御親類衆一門のうちで伊達者として知られていた。もともと武田信玄の兄弟の中には、信廉のように画才のある者がいた。信龍は画を描くよりもこれを賞美する方であった。書画骨董や茶器なども集めていた。庭はよく手入れしてあった。武人の庭というよりも豪商の庭のようであった。
信龍は昌幸が詫びを云い終るのを待たずに、
「愚か者め、百姓は国の宝だ。その宝を突き殺すとはなんたることだ」
と目を吊り上げて叱った。
昌幸は、平身低頭して詫びた。家来が犯した罪はこの昌幸の責任ですとも云った。
「与助を打ち殺した土橋五郎兵衛と、百姓どもを斬れと命じた原隼人佑は勿論のこと切腹させたのだろうな」
信龍は云った。
「よく調べた結果、土橋五郎兵衛は追放しました。原隼人佑は謹慎処分にいたしました」
昌幸は云った。土橋五郎兵衛は監督としての任務を果そうとして勇み過ぎてやったことであった。切腹には値しなかった。昌幸は、五郎兵衛を追放ということにして、昨年の八月に真田領になったばかりの沼田の城へ逃がしてやったのである。また原隼人佑貞胤がこの緊急事態に打った非常措置はやむを得ないものであると認めた。一部の兵が昂奮したがために死者や怪我人を出したのは、この場合致し方ないものと見たのである。根本原因は武田信龍の家宰が人夫に与える食糧を減らしたことにあった。
「原隼人佑は家来に命じて罪なき者を殺した。当然切腹させるべきである。なぜしないのだ」
信龍は訊いた。
「原隼人佑は非常の場合だったので逃げる者は槍にかけられるぞと警告を発したのです。夫役中の逃亡はいかなる理由があっても死罪ということになっています。隼人佑はその軍規に照らして処分したくないから怒鳴っただけです。しかし、夫役の者どもはいっせいに逃げました。隼人佑の手の者が逃亡しようとする者を槍で危（あや）めたことは残念なことですが、なにしろ混乱の最中に起きた突発事件でございます。大夫様がどうしてもこの事件の真相を正しその責任者を上げよと云われるならば申し上げねばなりませんが、それにはお覚悟が要ることと存じます」
昌幸は信龍の顔を見詰めて云った。
「なに覚悟が要るとな、そちの話を聞くのになぜ覚悟がいるのだ。そのような勿体をつけずにさっさと申せ」
「では申し上げます。何故このような騒ぎが起ったかそのもとを正したところ、食糧の不足からでございました。一日二回の粥腹では仕事ができないと騒ぎ出した末、一部の者が坐りこんでしまったので、土橋五郎兵衛が、主謀者と思われる五人を縛ったのです。その食糧は大夫様御負担と

いうことになっておりました。なにしろ重労働だから腹が減ります。一日四回は固い飯を食わせないと働けません。それが粥になったのはどのようなわけがあったのでしょうか」

昌幸は、いかなる云い逃れを云っても許さないぞという目で信龍を見詰めた。

「だいたい四郎殿（勝頼）が悪いのだ。合戦に次ぐ合戦で、どこの台所も火の車だ。それなのに築城せよなどということはもっての他のことだ」

「お館様（勝頼）が独断で決めたのではありません、もともとは穴山殿が申し出されたことを、御一門衆をはじめとして、諸将にお計りして御意を得た上のことでございます」

「余は賛成してはおらぬ。黙っていた」

「それは理由になりませぬ。反対なら反対でなぜ徹底的にその場で反対なされませんでした。あの席で反対したのは拙者と曾根内匠の二人だけでございました」

信龍は言葉につまった。昌幸の云うとおりであった。

「苦しいのは、こちら様ばかりではございません。どこでも苦しいのです。しかし築城は始めた以上やり遂げないと武田の威信が地に墜ちることになります」

「いやもう墜ちてしまっている。いまからあがいてもしようのないことだ。こうなれば噂のとおり梅雪流のうまい逃げ手を考えるしかないかもしれぬ」

信龍は恐るべきことを口にした。昌幸は呆然とした。梅雪謀叛の噂があるとしても、御親類衆一門の中の信龍からその言葉が出ようとは思いもよらぬことだった。昌幸は背筋に冷いものを感じた。勝頼は気の毒だと思った。

このような事件が起ったが、築城工事は徐々に進んで行った。これ等の土木工事の他に、甲斐、信濃、駿河、西上野から集めた大工等によって、柱や梁の切り込みも進んでいた。板材も作られていた。

木挽衆は大工とは別な木挽小屋に宿泊して仕事を続けていた。木挽、大工及びその下働きを合わせると千人に近い職人がいた。

この他に百人ほどの石工がいた。石垣は使用しなかったが、礎石を作るために石工が必要だったのである。

これ等の職人衆は、職種別に普請小屋に住んでいた。彼等には日当が与えられているから、食事も彼等自身で行っていた。彼等は一般の夫役とはっきりと区別されていた。武田家としても、職人衆まで夫役として徴用することはできなかった。

大工の総棟梁は江尻城とその天守閣を作った岡部市郎右衛門であった。代々今川家に城大工として仕えていた家柄の大工であった。市郎右衛門を推薦したのは穴山梅雪である。

市郎右衛門はやや神経質なところがあったが、仕事には熱心で、責任感が強かった。彼の下で働く小頭たちも、そ

れぞれ腕に自信がある男たちだった。

総棟梁の岡部市郎右衛門の下に副棟梁を三名置いた。矢崎喜右衛門は古府中の宮大工として名を知られていた。この附近に散在する寺社の仕事はたいがい彼の手になっていた。

矢崎喜右衛門は宮大工こそ大工の中で、もっとも腕のいい大工であると自負していた。当然のことながら自分こそ総棟梁になれると思っていたのに城大工の岡部市郎右衛門の下につくことになった。彼はそれが不満であった。だが、普請奉行の真田昌幸がそう決めたのだから文句も云えず、一応は総棟梁の命に従うことになった。喜右衛門は、

「できることなら、仕事を分割してやらせていただきたい」

と昌幸に願い出た。昌幸もそのつもりでいた。

本丸は総棟梁の岡部市郎右衛門、二の丸は副棟梁の矢崎喜右衛門、西三の丸は上田出身の副棟梁望月彦兵衛、東の三の丸は西上野出身の副棟梁樋口三蔵にまかせることにした。それぞれの棟梁の下に、その配下の大工が集って仕事にかかった。仕事は大きく分けられ更に細かく分割された。

だが城全体の建物の図面を引いたのは総棟梁の岡部市右衛門だから、市郎右衛門を始めとする数人の岡部衆は総棟梁の代理となって全体の工事を見て廻ることになっていた。

副棟梁の矢崎喜右衛門は岡部衆の大工が工事場に見廻りに来るのを喜ばなかった。

「いちいち来て貰わなくとも、仕事の進捗具合はこちらからお知らせします」

喜右衛門はそう云って、間接的に岡部衆の見廻りをことわったが、岡部市郎右衛門は、

「見廻るのも仕事だ。矢崎衆がなんと云おうが見て廻れ」

と云って聞かなかった。見廻って歩く以上、黙っていることはない、なにか技術的なことで岡部衆が注意すると、

「城大工はそうするかも知れねえが、こっちは宮大工だ、そんなふうにはやらねえよ」

とロごたえする大工が出た。棟梁どうしの仲が悪いのが、直ぐ下に伝わるのは当然なことだった。だがこれもせいぜい、口喧嘩程度で、大したこともなく仕事は進んで行った。

真田昌幸は、家来から、岡部衆と矢崎衆の仲がよくないという報告は受けていたが、特に手を打つこともなさそうなので放置していた。柱の切り込みは順調に進んだ。

九月の吉日を選んで、いよいよ上棟式が行われることになった。城の外郭はこの日出来上るのである。

真田昌幸はこのことを武田勝頼のところへ報告に行った。

「ここまで来れば、半ば完成したも同然です」

と昌幸が云うと、勝頼は、

「さぞたいへんであったであろう。一走り馬を飛ばせて、余もその上棟式を見に行こう」

と云った。昌幸は工事の途中に勝頼に来て貰いたくはなかった。しかし、見に行くというのに、来るなとも云えなかった。

昌幸は急いで帰ってその準備をした。

その日は良く晴れていた。新城に指定された山の頂は平にされ、地はたたき固められ、柱の建つところにはそれぞれ礎石が敷かれていた。柱や梁の組立ては朝早いうちから始められ、申の刻（午後四時）には終った。その頃を見計らって勝頼が家臣と共に、予め設けられた本丸前の桟敷に着座した。

まず武田神社の神官によってお祓いがなされた後、棟上げの祝儀が進められた。最後に総棟梁の岡部市郎右衛門の長男、市郎兵衛が御幣のついた榊の木を棟の一番高いところに取り付けることになっていた。これで上棟式はいっさい済むのである。棟の一番高いところに御幣を持って上るのは、総棟梁ということになっていたが、市郎右衛門は年を取っているので、息子の市郎兵衛がその役を引き受けたのであった。

市郎兵衛は若いから身軽だった。するすると柱を伝い、梁を渡って棟の最高部に御幣のついた榊を取り付けた。無事役目を果した市郎兵衛は登ったところを逆に戻らず、梁を渡って岡部衆が控えている場所に一番近い柱へ取りつこうとした。その柱を伝わって降りるつもりだった。

市郎兵衛は両手で平衡を取りながら梁を渡った。

「よう、城大工の新棟梁……」

と下から声が掛った。矢崎衆の大工からであった。市郎兵衛はふとその声に足を止めて、そっちを見たとたん、

「よぼ棟梁の代理……」

と重ねて声が掛った。総棟梁が代理を出したのを揶揄したのであった。

自分の父親のことをよぼ棟梁と云われたので市郎兵衛は腹を立てた。彼の身体が左右に揺れた。見ていた人々が思わず声を上げるところだった。市郎兵衛はようやく体勢を持ち直して無事地上の人となった。

「畜生め、あとで見ていやあがれ」

と市郎兵衛は矢崎衆の方を見て云った。

武田勝頼には矢崎衆の掛け声の内容は聞き取れなかったが、市郎兵衛が梁の上でよろめいたのはよく見ていた。

「無事でよかったのう」

と昌幸が云ったほどであった。上棟式はすべて終った。勝頼は用意して来た酒樽を置いて、長坂上条の長閑斎の屋敷へ向った。その夜はここに泊ることになっていた。

上棟式の後で酒宴が開かれた。酒宴といっても、それぞれの大工衆が仕事場に茣蓙を敷いての酒盛りであった。この日のために、普請奉行からもかなりの酒が届けられた。

本丸建築場で飲んでいた岡部衆の若手大工の十名ばかり

が、二の丸工事場で飲んでいた矢崎衆のところへ乗り込んで、

「うちの棟梁の悪口を云った奴を出せ」

と云ったことから喧嘩になった。駿河の大工と甲斐の大工の喧嘩に信濃の大工と西上野の大工が止めに入った。みんな酔っていた。最後はどっちがどっちだか分らないような大喧嘩になった。急を聞いて真田昌幸以下奉行所の者が駈けつけて取り静めるまでに、双方とも三十名近い怪我人を出していた。

死人は出なかったが、上棟式の日に現場で血を流すような大喧嘩が持ち上ったことはけっして喜ぶべきことではなかった。

「この築城にはなぜこのようによくないことがついて廻るのだろうか、塩尻峠の死傷者、外堀夫役の騒動、そしてこの上棟式の事件だ。この城には血の臭いがまつわりついているようだ」

謹慎中の身だから、外に出て目立つようなことはできないが、奉行所内にあって事務的な仕事をしている原隼人佑貞胤がひとりごとを云った。それが真田昌幸の耳に入った。

昌幸もちょうど、そんなことを考えていた時であった。

「つまらぬことを申すではない。大きな仕事には、このようなことは必ず起るものだ。気にすることはない」

だが、昌幸はやはりそのことを気にしていたのである。

笠原新六郎

天正九年（一五八一）九月に入ると、小田原の北条氏政のところへ、甲斐からの情報がとどいた。

《新府城は今年一ぱいには完成の見込みがつきました。意外に仕事が進捗したのは築城奉行の真田昌幸の才覚によるものと思われます。十一月ころから、家臣団の引越しが始まることになるでしょう》

というものであった。

これを裏付けするように、駿河からも報告があった。

《新府城完成は、今年中という見込みが立ったので、穴山梅雪殿は、築城完成前に兵を甲斐へ進められるよう、徳川家康殿を通じて織田殿へ上申した模様……》

という情報であった。

これは梅雪の側近、朝比奈伊織から得たものでその信憑性はかなり確かであった。

同じころ、三河に送りこんであった諜者から、

《織田様の御家来が、三河へ兵糧を入れる件について下調べに来られた。これは甲斐への進攻のためのもので、兵糧

を貯蔵する場所は三河の東条城で、荷駄奉行は西尾小左衛門殿、兵糧は米二千俵、弾薬およそ百行李》

という報告であった。

北条氏政は家老の松田憲秀を呼んで、この情報について意見を問うた。

「織田・徳川連合軍が甲斐の国へ攻め入るのはいよいよ間近ですな」

憲秀はそう云ってから、

「しかし、今甲斐の国へ攻めこまれたら武田も困るだろう。できることなら新府城が完成して、この城に武田の精鋭がたてこもってからにして貰いたいものだ。武田軍の守備が固まったときと、そうでない時とでは全く攻防戦の成り行きも違ってくるというもの」

松田憲秀はそう云ってから、しばらく考えこんだ。思案をめぐらせているようだったが、それをいますぐ云うのをはばかっているかに見えた。

氏政は側近を下がらせ、憲秀と二人になると云った。

「このままだと、来月にも、織田・徳川連合軍は甲斐へ攻め込むぞ」

「おそらく、そうなるでしょう。今となったら、その大きな流れを変えることはできませんが、一ヵ月か二ヵ月は時期を遅らせることはできます。それによって織田信長の気が変わり、矛先が毛利か上杉の方へでも向けば、武田は苦境を切り抜けることができるかもしれません」

憲秀は答えた。

「いよいよ笠原新六郎を武田にやるか」

「御意、その時が来たかと存じます」

笠原新六郎は松田憲秀の次男で、伊豆戸倉の城主であった。

氏政と憲秀は、徳川を牽制するために、伊豆地方を武田に寝返りさせようと、かねてから考えていた。武田が亡んだあかつきには、織田・徳川連合軍は必ずや関東に兵を進めて来るに違いない。そうさせないためには、なるべく武田を長持ちさせることだ。

そのための策であった。

「新六郎には意を含めて置いたであろうな」

氏政は念を押した。

「充分に念を押してあります。既に腹を決めているものと存じます」

「では早速、ことを運ぶように。内部の主なる者には、折を見て、余がそれとなく伝えて置こう」

氏政が云った。

松田憲秀は、その翌日小田原を立って、箱根を越えた。彼は戸倉の笠原新六郎の居城に着くと、早速新六郎と密談を交わした。新六郎は憲秀の次男で名門笠原家の後をついで、笠原と名乗ったのである。

「いよいよ、その時が来ましたか」

新六郎は、かねてから父憲秀に云い含められていたことだったが、たとえ政略上と云っても主家を裏切るのは嫌だった。だいいち聞こえが悪い。できることなら、この役は他の人にやってもらいたかった。

「そうだ。来たのだ。急がないと武田がつぶれる。その次はこっちだ」

そして憲秀はこのごろ顔の皺が増えて困る。変転きわまりない時流に乗りおくれないように努力をすればするほど、年齢を取るのだと愚痴をこぼしてから新六郎に云った。

「わが北条家と武田家とは先代様（北条氏康）の時代から同盟国であった。同盟を固くしている時は、両国とも栄え、同盟が破れると、お互いによくないことが続く。いまは北条家にとって武田家は明らかに敵である。しかし、もしも武田家がこの危機を通り越して、再びわが北条家との間に同盟関係が戻った場合は、北条家は安泰となり、そちの功は、わが北条家の中で第一ということになるだろう。ここのところをよく考えたうえで引き受けてくれ」

憲秀はもう何度か口にしたことをまた云った。

新六郎は武辺一点ばりの男ではなかった。結局、父と氏政にお家の為と云われれば、ことわる訳には行かなかった。

新六郎は三島の心経寺住職音恵に密使を出して、彼と会った。既に彼とは旧知の間柄であった。

会ったところは三島と戸倉の丁度中間ぐらいのところにある心経寺の末寺であった。

「急なお召し、なにごとか出来いたしたかと存じ、急ぎ駈けつけました」

音恵は、かねてから北条氏と武田氏の間に立って、伝達の役目を果していた。伊豆における北条と武田の接点、云わば休戦地帯のようなものであった。北条と武田が伊豆から駿河東部にかけて、しばしば戦闘を行ったときの捕虜の交換や、死傷者の使いなどについて、音恵は中立的な立場でうまくことを運んでいた。音恵は、おそらく今度も、従来とそれほど違ってはいない、つまらぬことを持ち込んで来たものと思っていた。

「実は頼みがあって来たのだ」

笠原新六郎はそういって、音恵の眼をじっと見詰めていた。

「さてなんでしょうか、なんなりとも私にできることならいたしましょう」

音恵は、新六郎の顔を見ながら、いつもと違うなと思った。

「実は、北条に愛想がつきたのだ」

そう言って、笠原新六郎は話し出した。

北条と武田の同盟が破れて敵対行動を取るようになってから、北条と武田は黄瀬川附近で何回となく衝突した。そのたびごとに戸倉家は先方衆として武田軍と戦って痛い目に合わされていた。

「おれは北条の家老・松田憲秀の次男である。いうならば生粋の北条直参だ。そのおれが、笠原の名をついでからはまるで先方衆扱いにされている。度重なる武田との合戦には多数の死者や負傷者も出した。出してもいい、それなりのことをしてくれたらいいのに、せいぜい賞状一枚で、褒美は皆目ないし、今後恩賞にありつけるという希望もない。まるで、いままでただ働きをさせられたような気がしてならない。それもまあどうにかこうにか我慢していたところが、今回、戸倉城主をやめさせられた。新城主が追って到着するまでは、いままで通り政務を執行せよという書き付けを貰った」

新六郎は一息ついだ。

「おれは笠原氏をつぐと同時に戸倉城主になった。このおれに城主を止めて、新任の城主の下で働けということは、お前は無能だ、といわれたも同然だ。いままで、あれだけ働いていたのにこのざまだ。いったいこれはなんということなのだ」

新六郎の声は高ぶった。声が隣室にも聞こえるほどの興奮のしかたであった。

「お察し申し上げます」

音恵はそう云うよりいたし方がなかった。

「分ってくれたか音恵、ではこういう場合、いったい武士はどうしたらいいのか教えてくれ」

「これは困りました。私は仏に仕える身でございますから武将の心はこうあるべきだなどと、軽々しく申せるものではございません」

どうぞお許しをと逃げるところへ、

「では云ってやろう、こういうときは切腹か、反逆かその二つのうち一つの道を選ぶしかない」

新六郎は、そう云いながら、自分が演出した芝居を自分で感心するほど旨いのに気がついていた。

(音恵はすっかり信用してしまったらしい)

新六郎はそう見当をつけてから、

「切腹は犬死だ。これほど働いた主家に見放されたのに、なんでその主家のために腹を切ることがあろうぞ。主家に見放されたら、こっちから主家を見放してやるまでのことだ」

音恵は驚いた。さっきは反逆と云い、今度は主家を見放すと云った。これはたいへんなことだと思った。

「音恵、そちは沼津の城主、曾禰河内守と親しい、副将の高坂源五郎とも昵懇だと聞いている。即刻、いまおれの云ったことを相手に伝えて貰いたい」

は、はいと音恵は口では云ったが余りのことなので、それ以上のことは云えなかった。武田へ橋渡しをしろといっても、これだけでは困る。もっと具体的なことを伝えねばならない。

「笠原新六郎は、戸倉城ともども武田に降る。そのかわり、戸倉城の城主としていままでどおり、ここにいること

をお許しいただきたい。なお人質はお望みのままさし出す。そして、その時から、武田家のために、北条と戦うことをお誓い申すと、相手方に伝えられたい」

笠原新六郎は結論を云った。

曾禰河内守と高坂源五郎は音恵和尚から笠原新六郎の話を聞くと、喜ぶよりも、まずいぶかった。誰が見ても、三月に高天神城が落ちて以来、武田は落目である。そんなときに、北条との境目の城主が、城もろとも降るということはまず考えられないことであった。だが話を聞けば、どうやら本気らしいので、二人はひとまず、このことをお館様(勝頼)に報告申し上げ、その指示によりたいのでしばらく待って欲しいと音恵に伝えた。音恵はそれを新六郎に伝え、曾禰河内守は走り馬を立てて、古府中の武田勝頼にこのことを直接報じた。

勝頼もまた、笠原新六郎の内応については不審に感じた。彼は、跡部勝資、長坂長閑斎、武田信豊を召してどうすべきかについて計った。

「それは北条氏政の策かもしれません。内応と見せかけてお味方を安心させ、機を見て沼津城を攻略せんという手だてとも思われます」

という信豊に、長閑斎が、

「人質は望むままにという条件が入っているところを見ますと、そのようには考えられません。おそらくこれは……」

と云いかけるのを跡部勝資が受けて云った。

「北条氏が考え出した、戦中の和の策と思われます」

「戦中の和とな?」

勝頼が問うた。

「北条氏とわが武田家とは敵対関係にある。しかし、北条と武田とはもともと同盟国であり、今後も、織田・徳川の連合勢力に対しては同盟して当らざるを得ない立場にある。北条家臣団の中にはそのことをよく知っている者がいる。松田憲秀殿はその一人である。問題の笠原新六郎は憲秀殿の御次男、おそらくこれは、松田憲秀殿が考えられた、戦中の和の策であろう。喜んでお引き受けすべきである」

跡部勝資が云った。こまかいことは云わなかったが、含蓄のある言葉であった。跡部勝資は武田家の重臣として代代仕えて来た家柄であり、文官派重臣として、勝頼から特に重く見られている人であった。

勝資の一言によって座はしんとなった。勝資は更に云った。

「北条通の加藤景忠が丁度古府中に来ておりますから、ここに呼んで意見を聞かれたら如何かと存じます」

加藤景忠は、加藤駿河守信邦の子で、領地が相模と接している上野原附近にあった。信虎、信玄、勝頼と三代にわたり、何度か北条氏との間を使者として往復したことがあり、現在もなお北条方の情報取り入れ口として加藤氏は重

視されていた。

上野原城主加藤景忠は、突然重臣の前に呼ばれて、しばらくは恐縮していたが、跡部勝資が、委細を話して、そちの考えはと訊かれると、

「おそらく、それは北条氏内部で決められた馴れ合いの降伏ではないでしょうか」

と云った。

「馴れ合いの降伏とはまた異なる言葉を聞くものだ」

と勝頼が乗り出すと、景忠は、拙者の私見でございますと前置きして話し出した。

「新六郎は主家を裏切るような性格の方ではございません。どちらかというと、おとなしい方で、なにもかも父の松田憲秀殿にお伺いを立てないとできないようなところがございます。戸倉城は伊豆でも重要地点であり、戸倉城が武田につけば伊豆は武田についたと同然なことになり、お味方にとっては、この方面からの北条の攻撃に気を使うことがなくなるでしょう。つまり、北条氏政殿が笠原新六郎殿を武田に降伏させたということは、伊豆方面において、北条と武田は休戦状態にしようという意志表示と解してよろしいかと存じます」

景忠は自信をもって云った。

「よく分かった。何れそのうち、そちにも働いて貰うことがあるだろう。その時まではゆるりと休養されるがいい」

勝資は加藤景忠を下らせると、

「ここはお館様自らが、伊豆の仕置きについて、出向された方がよいように思われます。大軍を発せず、旗本だけ二千も連れて行かれたら充分かと存じます。拙者も同道いたします」

勝資は勝頼に云った。時局が重大化している。この際、北条氏の方で戦中の和として手を伸ばして来たならば、その手を力強く握りかえしてやるべきだというのが勝資の考えであった。

「玄蕃頭殿（穴山梅雪）には、このことを至急知らせずばなるまい」

信豊が云った。

沼津城主からの通報は、地元の駿河探題を通り越して直接古府中にもたらされていた。そのことについて信豊は心配したのである。

「それはどうかな、まずお館様よりどうなさるかの決定があった後、又はお館様の仕置きが済んだ後でも遅くはない」

と長坂長閑斎が云った。

「仕置きの後ではまずい。少なくとも、お館様と駿河探題殿同道で伊豆仕置きを考えるべきだと愚考いたします」

跡部勝資はやはり穴山梅雪のことを気にしていた。

「玄蕃頭殿が既に徳川方と内通しているという根も葉もない噂がしきりにささやかれている折から、用心には用心を重ねた方がよいだろう」

長坂長閑斎は、さりげなくこのようなことを云った。根も葉もないと、噂を否定する一方では、用心には用心を重ねと、そういう事実の存在を疑うような発言をしたのは不謹慎であった。しかし、この長閑斎の言を、武田信豊、跡部勝資は黙って聞いていたし、武田勝頼とすれば、当然ばかなことを云うなと叱るところを黙っていた。

この時点で、梅雪離反の疑念は武田上層部内に黒い雲となって流れていた。上層ばかりではなく、沼津城主の曾禰河内守が、笠原新六郎事件を駿河探題には知らせず、直接古府中へ報告したあたりも、やはり、梅雪離反の噂が流れていたからであった。

「では、早速曾禰河内守に使者を出し、笠原新六郎受け入れの儀は話をすすめるよう指示すると共に、近日中余が自ら出向くことを伝えるように」

勝頼の結論であった。

勝頼は結論をつけてから祐筆を呼び入れて、穴山梅雪あての書状をしたためさせた。

《本日沼津城主曾禰河内守より、戸倉城主、笠原新六郎が降参の由、走り馬があった。まことに同慶の至りである。ついては伊豆仕置きについて、直接余が出向きたいから、同陣せられるように案内を申す。追而、日は決り次第お知らせする》

という内容のものであった。

十月半ば勝頼は旗本二千を率いて古府中を出発した。二千では心配だと云う者があったが、後事を武田信豊に託して勝頼は云った。

「余は玄蕃頭殿離反の噂など信じてはいない。しかしもしもの場合は、至急救援部隊三千を出せるよう手配をして置いて貰いたい。今回こそ、玄蕃頭殿の心を知るによき機会だと思う」

もし噂のとおり、梅雪が徳川方に内通していたとすれば、勝頼が戸倉におもむいたとき、徳川勢を呼び入れ、これに駿河の兵を加えて、袋の鼠にすることも不可能ではなかった。

勝頼はわざとその隙を与えて、梅雪の心をためそうとしたのである。それも今日の出向の一つの目的であった。

十月半ばに勝頼が率いる二千は沼津城へ向った。諸国御使者衆の組織を動員して、駿河及び相模の動きを探索させながらの進出であった。

江尻城（清水市）の穴山梅雪には、沼津で落ち合うように書状を出した。

梅雪からは当然のことながら、早馬を以て浜松城の徳川家康に、勝頼の行動予定が知らされた。

既に梅雪から、笠原新六郎が武田側につくという情報を得ていた徳川家康は、至急北条氏政にこれを知らせて、笠原新六郎を討つように連絡した。徳川家康も、これは主家の北条氏と新六郎との間の馴れ合いによるものと見ていたが、一応書類上の処理を取ったのである。

氏政からは、
《御内報いただいたようなことは今のところわがほうでは認められぬ。或いは敵の流言の類ではないかと思うが、早速取調べの上、もし笠原新六郎が敵に内通するような事実があったならば、断乎処分するつもりである》
という返事があった。その矢先に今度は、勝頼自らが、伊豆仕置きのために、沼津に出向するという報が梅雪からあったのである。
勝頼は武力行動に出るのではなく、笠原新六郎を交えての伊豆経営の相談のための出陣であるという通報であった。
家康は諸将を集めて緊急軍議を開いた。
「勝頼以下二千が沼津城に入ったところを、その倍の兵力を以て急襲すれば、必ず勝頼の首級を上げることができるでしょう。当然のことながら北条氏政殿にもこのことを知らせて出兵をうながしましょう」
本多忠勝がまず口を切って、倍の兵力でなくとも、敵が二千なら、味方は三千でもよいから、直ちに合戦に及ぶべきだと力説した。
高天神城を破って意気が上っている徳川勢は、従来のように強度に武田をおそれる気風はなくなりつつあった。諸将が本多忠勝の説を支持した。
酒井忠次も忠勝の言、まことに当を得たもの、とまで云った。しかし、石川数正がこれに反対した。

「笠原新六郎が武田に叛るというのは、おそらく北条氏政と馴れ合いのことであろう。とすれば、この時点で北条氏は既にわれらが同盟国でないということになる。いますぐ北条がわれらに敵対行動するとは考えられないが、伊豆ではわが徳川軍と武田軍との戦いになることだけは確かである。伊豆で戦いが起れば、江尻城の梅雪は知らんふりを見せるだろう。しかし田中城（藤枝市）がある。田中城の依田信蕃は武田内でも名うての名将である。城兵一千を指揮して、わが軍の背後を断つということも考えられる。まだまだ駿河は武田の領内である。迂闊なことはできない」
石川数正は噛んで含めるようなことを云った。
「戦には機がある。機を失すれば勝てる戦いでも勝てない」
本多忠勝は飽くまでも決戦を主張したが、石川数正は、
「確かに戦には機がある。しかし機を誤れば、大敗を招くもといともなる」
と云って聞かなかった。
酒井忠次が膝を乗り出して、
「この機をさし措いて黙って見ていることは、卑怯者のすること」
と云った。
石川数正を卑怯者と云ったのではないが、その言葉には、おだやかでないものがあった。
「なにっ、卑怯者のすること……」

石川数正がむっとした顔で云った。武士が卑怯者と云われたら、黙っているわけには行かなかった。
「忠次は一般論を云っているわけではない。特に今回のことを云っているのだ、特に今回のことを云っているのではない。また数正の云っている情勢判断もたしかに一理も二理もある。北条の新しい動き方がはっきりするまでは、下手に手を出すことは、よくない」
徳川家康が結論を云ったので諸将は家康の顔を見た。主戦者の多くは不服のようであった。
「余は、今回の勝頼の沼津出向には、大きな賭けがあると見ている。彼は、自分の身を危険にさらしてまで、なにかをしようとしている。そのなにかが恐しい」
家康は更につけ加えたのである。
家康が断を下したのだから、軍議はそれで終るかに見えたが、
「お館様、ひとこと申し上げたいことがございます」
と大久保忠世が申し出た。いつになく張りつめた顔をしていた。
「申して見よ」
その家康の言葉に、はっと答えた忠世は、
「江尻の梅雪殿に出兵をうながし、まず沼津に押し出させたらいかがでございましょうか。梅雪が旗色をはっきりさせれば、武田の諸将はことごとく力を失って自滅するでしょう。武田氏を徳川氏の手で亡ぼすのはこの機会しかございません」
それは、大久保忠世だけではなく、他の部将も一人残らず考えていたことであった。いちいち織田信長に気兼ねせずに、ここでは徳川家康の判断で事を進めたらどうかという考え方であった。
「そうするには安土の殿よりお指図が要る。そうでないかぎりそのような出過ぎた行動は許されない」
家康は答えた。織田信長は、たとえそれが作戦上緊急であり、明かに有利であったとしても、彼の気に入らない行動を取った場合は、必ず何等かの罰を与える。主家はおれだという自意識の強い信長は、何事によらず勝手な行動は許さないのである。その行動が限界を超えれば、信長の敵となる可能性もある。
大久保忠世はかしこまって頭を下げた。他の部将も沈黙した。信長が信康に自刃を命じた、あのいまわしい事件が思い出されたからであった。
部将の沈黙は暗い霧となって流れた。軍議は終った。諸将はその場を下りながら、その日の軍議が、なにかすっきりしないままに終ったことに気付いていた。
しかし、彼等が冷静に考えられるだけの余裕が出て来ると、それは家康が、酒井忠次、石川数正両将の間を取りつくろった以外のなにものでもないことにふと気が付いたのである。
酒井忠次が家康の嫡男信康を切腹に追いこんだ陰の人であることは家臣団の多くは知っていた。若い武将たちはこ

の時以来酒井忠次を快く思ってはいなかった。忠次は家臣団の中から孤立するのをおそれて、このごろは事あるごとに若手諸将の機嫌を取るようなことばかりしていた。

忠次が本多忠勝の積極論に賛成したのも、このような動きを気にしたうえのことであった。

徳川家で酒井忠次と同格の家老は石川数正であった。石川数正は酒井忠次のこのふるまいを心外に思っていた。織田信長の信任が厚いのをいいことにして、行き過ぎた行動をした忠次が若手武将たちの反発に会うと、たちまち態度を変えて、今度は若手武将の人気取りをはじめたことをにがにがしく思ったからその行為をたしなめたのである。

家康もこの二人の重臣の心の動きをよく知っていた。しかし、三河を東西に分かつほどの実力を持っているこの二人の家老には、家康は今も尚頭が上らなかったのである。家康はまだまだ家臣団に気兼ねをしながら戦いをしなければならない、東海一の弓取りであった。松平家は武田家とは違って、急激に勢力を伸した三河の一豪族であった。今もなお家臣団の調和の中に立たねばならない運命の前にはいたし方がなかったのである。

江尻の穴山梅雪は、家康から書状が今日来るか明日来るかと待っていた。来たらいよいよ決心しなければならないと思った。

家康から書状があるとすれば、徳川軍が沼津城へ出兵するから、江尻城で叛旗をかかげよという命令だろう。そうなったら、勝頼の前をどう上手につくろって、江尻の城へ逃げ帰ろうか、そのことばかり考えながら沼津城へ向っていた。

穴山梅雪は徳川家康に内通していた。が、自ら武田の血筋を引く者であるという自負心があった。

（武田家の跡は穴山家に取らせる）

という内諾を織田信長から貰ってはいたが、自らの手で、武田勝頼を討つことはできなかった。もし梅雪が、武田勝頼を攻めよと号令しても、駿河衆は別として、その上にいる侍大将級の甲州武士が一人として動くものではないことを知っていた。そんな場合は、まず自分の首が危いことも知っていた。梅雪は、織田・徳川の手によって、主家が料理される場合のことのみ考えていたのである。

笠原新六郎武田被官に成事付勝頼伊豆表働の事

同年辰の暮に、北条家の家老松田子息笠原が養子笠原新六郎と申伊豆とくらの城主、勝頼公へ御被官になる子細は……云々（『甲陽軍鑑』品第五十六）とある。新六郎が勝頼の被官になる気になったのは天正八年九月の黄瀬川の合戦に北条の大軍と徳川の大軍に挟撃されながらも、いささかも動ぜず、まず北条を討ち然る後、富士川を越えて徳川勢を追い散らすという勇猛果敢な武田軍の働きに感心した結果だと書いてあるが、これは『甲陽軍鑑』一流の創作であり、笠原新六郎が武田に降ったのは、氏政の命に依るものと私は強く信じてこの一章を書いた。

伊豆仕置と穴山金山

武田勝頼は二千の旗本を率いて沼津城に入った。沼津城主曾禰河内守、副将高坂源五郎は勝頼を迎えて、

「兵馬倥傯（こうそう）の折とて、何もございませんが……」

と沼津で取れた新鮮な魚介類を調理して勝頼にすすめた。兵等にもそれぞれこれ等が配分された。駿河に入ってからは何時敵が現われるか、そればかりを心配していた将兵等は、沼津城に入ってようやく枕を高くして寝ることができた。そのかわり沼津城の将兵は休む暇もないほど忙しくなった。敵襲に対する警戒、城内の警備等やらねばならないことが山ほどあった。

勝頼到着の報はまず戸倉城主の笠原新六郎に出され、同時に江尻城の穴山梅雪にも出された。沼津と戸倉は、馬を飛ばせば、四半刻（三十分）で行かれるところであった。通知を受けた笠原新六郎は、翌日、かねて用意していた進物を車に積んで少数の側近を従えて沼津城に出頭した。

笠原新六郎が到着したから、直ちに、伊豆の仕置について勝頼との間に打ち合わせを始めてもいいのだが、勝頼は穴山梅雪のことを気にした。いかに勝頼が武田の頭領であろうとも、駿河探題として、駿河一帯のことを梅雪にまかせているからには、彼を交渉の座に招くのは当然だった。云わば梅雪はこの地方の長官ともいうべき存在だった。彼を抜いての談判はできなかった。

勝頼は新六郎等を待たせた。待たせる理由もちゃんと云って納得させた。相手役には跡部勝資と高坂源五郎が当った。

勝資と新六郎とは初対面であったから、ただ時候の挨拶をしたくらいであったが、勝資の後に出て来た高坂源五郎は、既に何度か彼と会っているから心安く話ができた。

「まもなく探題様も来られるであろうからそれまでゆるりとなされるように」

高坂源五郎が云った。ゆるりとなされるようにと云われてもここは城中であった、まだ講和が成立したのでもないのだから、新六郎には、いらいらするほど長い時間であった。

「殿は碁をなされるとうけたまわっております。よかったら一手、教えていただきたい」

高坂源五郎が云った。こういう時には碁でもして時間をつぶすのがもっとも賢明な方法だと思ったからである。

「碁はやるというほど上手ではないが……」

と新六郎は一度辞退したが、源五郎の家来が碁盤と碁石を持ってきてそこに置くと、もともと好きだから、すぐそ

の気になった。新六郎が白を持ち、源五郎が黒を持った。第一戦は新六郎が五目の勝ちとなり、第二戦は源五郎の三目の勝ちになった。互角の腕前であることを双方が意識して本気になったのは第三戦であった。劫争いがながながと続いて、とうとう新六郎の二目の勝ちになった。

「恐れ入りました」

と高坂源五郎は新六郎に頭を下げた。好敵手だと思った。これだけの相手にいままで会ったことがなかったから、負けた後の気持は壮快であった。

源五郎は侍臣が持って来た茶を新六郎にすすめながら、

「それにしても、探題様は遅いのう」

とひとりごとを云った。江尻城から沼津城まではおよそ十里、途中から勝頼の日程を知らせてあるし、到着したことも知らせてある。もう到着してもよい時刻だと思った。

「探題様はとっくに到着なされておられます」

笠原新六郎が云った。

「到着なされた？」

なぜそのようなことを確信を持って云えるのだというふうな顔で源五郎が問い返すと、新六郎は、

「探題様が御到着なされたのは一刻ほど前のこと、二番目の碁を始めて間もなくのことと推察いたします」

と答えた。聞こえて来る物音でそう判断したようであった。沼津城は平城でそう大きな城ではなかった。梅雪が来るとならば、少なくとも、五百や千の兵を率いて来るであろう。兵は城の中に入らず外にいるとしても、城内は騒々しくなること間違いない。それに気付かなかったことは高坂源五郎にとってまことに迂闊であった。

源五郎はお茶を運んできた侍臣に訊いた。

「探題様はお着きになられたのか」

「はっ、一刻ほど前にお着きなされました」

「なぜ、知らせなかったのだ」

「跡部様が、知らせぬほうがよいと申されたからでございます」

侍臣は、そう云い置いて下って行った。それと入れ違いに、別の家来が来て、

「探題様がお見えになりましたので、御用意を願いとうございます」

という案内があった。

「碁は完全に殿に負け申した。碁を打ちながら、外部の様子を逐一観察しているほどの余裕が、私にはございませんでした」

高坂源五郎は笠原新六郎にそう云ってから、改めて、笠原新六郎を抜目なき大将という目で見たのである。

源五郎は伊豆仕置の会談の前に、ひとことこのことを跡部勝資に告げて置きたかった。勝頼に告げればなお上々だと思った。だが、その余裕はなかった。一刻前に来た駿河探題・穴山梅雪を加えて、武田勝頼、跡部勝資、曾禰河内守の間では既に下打ち合せは終っていたようであった。

勝頼は終始にこやかな態度で笠原新六郎に応対していた。新六郎が戸倉城ともども武田に降伏することは勝頼にとってはまことに結構なことだから、笑顔を見せるのは当り前であったが、源五郎の目には、なぜか勝頼がいままでになく、愛想がよすぎるように思えてならなかった。

「碁はどちらが勝ったか」

と勝頼は源五郎に訊いた。

「一勝一敗で決勝に持ち込み、拙者が負けました」

と源五郎が答えると、さもあらんというふうに勝頼は頷いてから、

「碁にかけては武田で一、二と云われている高坂源五郎を負かすとはよほどの腕と見える」

と笠原新六郎を讃めた。

会談の前にこのような調子だったから、話はなごやかなうちに進んで行った。

第一に降伏した笠原新六郎の処遇は彼が求めていたとおり、従来通り戸倉城主を命じ、領地も安堵した。そのかわり武田側から要求した人質については全面的に新六郎はこれを受け入れた。後は戸倉城周辺の北条領に対する処置であった。戸倉城が武田方につけば、ほとんど自落することが分かりきっているような城砦がたくさんあった。そういう城や城についている領地の処置が問題だった。また、戸倉城に反抗して、兵を向けて来る者も出て来るであろう。その場合のことや、戸倉城謀叛と知って、北条氏が大軍を率いて出動して来る場合のことをも考えねばならなかった。こういうこまかいことが片づけられ、書き留めや覚え書や令書などが次々と出され一応伊豆仕置についてきまりがつくまでには、ほぼ一日かかった。既に気付いている筈の北条の動きはなかった。

戸倉城主・笠原新六郎は武田勝頼から太刀一振りを貰い、大いに面目を得て帰城した。

約束通り人質が出されたのはその翌日のことであった。高坂源五郎は軍監として戸倉城に乗りこんで行った。

勝頼は沼津城に三日間滞在して、四日目には沼津城を出て帰途につくことになっていた。

その三日目の夜であった。

勝頼は穴山梅雪の要請を受けて、彼と会談した。その座に出たものは二人の他、跡部勝資一人であった。

梅雪からゆっくり話し合いたいと申し入れられたとき勝頼はぎくりとした。

（来たな……）

という感じであった。予期していたことだが、相手が相手だから、これはなにか云われるぞと思ったのである。

「率直に申す。四郎殿はこの玄蕃頭（梅雪）をお疑いか」

梅雪は幼いころ疱瘡（天然痘）を患ったがためにひどいあばた面であった。ひどいというより怖い、怖いというよりも醜怪な顔をしていた。その顔でお疑いかと詰め寄られ

ると、勝頼はすぐには言葉が出なかった。勝頼の義兄に当り、従兄にも当っている梅雪は、勝頼が武田の頭領になってからも、四郎殿という言葉を使っていた。親愛の情をこめての言葉のようにも聞こえるし、御親類筆頭の勢力を持って自ら任じている彼の地位を表明するものでもあった。

「いきなり、なにを申される」

勝頼は軽く受けた。この勢いだと容易のことでは引き下るまいと思った。

「前から申し上げようと思っていたが、私ごとよりも、まずお家の仕事が大事と思って、いままで我慢しておりましたが、どうやら伊豆仕置も終り、明日、御帰還と決ったから、ここではっきりと四郎殿にお訊きしたい」

「なにを訊きたいのだ。申されい」

勝頼は心を決めた。相手がどう出ようが、心を静めて聞いてやろうと思った。

「拙者は駿河探題でござる。それなのに、今回の笠原新六郎のこと、当方になんのことわりもなく進められることは如何なる所存であるか」

梅雪は勝頼と跡部勝資の双方の顔を見較べて云った。勝資は勝頼の側近の家老であり、もともと武断派とはほど遠い文治派の家老であるから、このぐらいのことは百も知っているであろうと、非難したのである。

「玄蕃頭殿がそう思われたのはもっともなことなれど、火急の場合はときどきこういうこともある。それについては拙者がお答えいたしましょう」

勝資は勝頼の盾となって話し出した。

笠原新六郎が武田に投降したいという申し出を受けた沼津城主曾禰河内守と副将高坂源五郎は、あまりにも予想外のことだったし、重大事であったから、時を失するを恐れて、直接に古府中へ走り馬を出した。駿河探題には、古府中から折返し通達が行くだろうと思ってやったことである。この行為は、明らかに通報の順序を誤ってはいるが、現場の者がこの方がよいと一途に考えてのことで、決して落度とは思われない。

「分かった。その弁明はそれでよい。しかし、それなら、走り馬を受け取った古府中では、折返しその件につき走り馬を何故当方にさし向けられなかった。通知を受けたのはずっと後になってからであり、四郎殿が沼津城へ進発されることも、一行が古府中を出発してからようやく知らされた。これはなんとしたことであるか」

梅雪は食い下った。

「沼津城から走り馬があったその日に、そちらへすぐ走り馬を出すべきだった。そうしなかったのはこちらの手違えで申しわけがない。またお館様が沼津城へ出立するのを事前に通報しなかったのは、この行動は飽くまでも秘めておきたいという考えからであった。味方にさえ、その日にならないと知らせないような隠密行動を取ったのでござる」

跡部勝資の弁明はいささか苦しかった。

「味方にさえ、その日にならねば知らせないということ自体その味方を疑っていることではないのか」

梅雪の声はいよいよ高くなっていった。勝資はその梅雪の顔を眺めながら、この怒り方は果して本気か芝居かと考えていた。もし梅雪が噂どおり徳川家についていたら、それを隠すために怒ってみせるだろうし、そんなことはなく、梅雪は従来通り、武田家の柱石であったとしてもやはり怒るだろう。これだけでは彼の真意は分からなかった。

「四郎殿は、ちまたの噂をまさか気にしているのではあるまいのう」

梅雪は今度は勝頼に向って云った。

「ちまたの噂？」

と、とぼけると

「この穴山梅雪が敵と内通しているという噂です。これは明らかに、敵が流したもので、この流言の目的は武田の内部に疑心を起こさせ、引いては内輪もめの種にしたいという狙いのものです。こんなことはいままでも何回となくあったことで、われ等とて、このような流言を敵中にばらまいたことがある。まさか四郎殿はこのような流言を気にしているのではあるまいのう」

それまで、怒ったようなものの云い方をしていた梅雪の語気がのうと云ったとき、急に勢いを失った。梅雪は更に続けた。

「その噂を流して歩いている敵の透波を捕えて処刑したこともあるが、なにぶん広い範囲にこれが流布されているのは心外である。おそらく、沼津城の曾禰河内守や高坂源五郎もこれを耳にしていたであろう。だから、江尻の城（梅雪の居城）へは知らせずに、直接、古府中へ早馬を立てたのであろう」

梅雪は更に語気を落して云った。

「武士としてこのような噂を立てられることは誠に恥かしいことであり、心外に思っている。できることなら、駿河探題という仕事を誰かに譲って故郷へ帰りたいとも思っているくらいだ」

梅雪はここでまた語調を変えて勝頼に云った。

「先代様のころから、この梅雪は駿河方面、遠江方面の仕置について、そのいっさいを任かされていた。武田家のために粉骨砕身して今日に至っている。今になって、敵に内通しているなどという噂を立てられるのは、敵の策でもあるが、味方の中に、或いはと考えている人がいるからだと思う。そういう気持の人がいると、噂は噂を生むものだ。だから、さきほど拙者は四郎殿に、お疑いかとお訊きしたのである」

梅雪の云い方はいささか愚痴っぽくなった。先代様などと武田信玄を持ち出されるのが一番苦手な勝頼は、こうなれば、黙って聞いてやっているより仕方はなかった。

「もう一度お訊ね申す。四郎殿は拙者をお疑いか」

梅雪は急に大きな声で云った。

「毛頭疑ってはいない」
勝頼は答えた。
「いや、疑っていなさる。四郎殿の顔にそう書いてある」
こうなれば梅雪のひとり角力である。勝頼は沈黙せざるを得なかった。
「四郎殿が疑っているならば、疑いを晴らさねばならぬ。もしここで、四郎殿が、そうだ確かに疑っていると一言云われたならば、たちどころに切腹いたそう」
梅雪は勝頼を睨んだ。恐しい顔だった。怖い顔だった。武芸に秀でた勝頼は槍を取り、太刀を取れば怖い者とてなかったが、油皿の灯火に照らされた梅雪の横顔はまるで怪異なものを目の当りに見るようで、思わず冷いものが勝頼の背筋を走った。
「疑ってはいない。絶対に疑ってなんかいない。そこもとにそれほどまで心痛させたのは余にも落度がある。今度は厳重に流言を取り締るようにする」
勝頼は云った。勝頼とはなんと薄気味悪く、しつっこい男だろうと思った。
「四郎殿は口では疑っていないと申されているが、心では今でも疑っておられる。だが、今、絶対に疑っていないと云われたから、拙者としても切腹することだけは思い止ることにした。そのかわり、拙者としても、四郎殿にこの際、赤心を見せねばならないと思っている。そうでないと四郎殿の心は本当には晴れない」
梅雪は動こうとしないばかりか、いくぶんか勝頼の方へ座をすすめたのである。
「赤心とな、いったいそれは……」
と云いかける勝頼の言葉を受けて、梅雪は云った。
「赤心は文字通り赤い心の忠誠心のことをいうのだが、拙者はそれを物にてお示し申そうと思っておる。四郎殿にはその方が分かり易いかと存ずる」
梅雪は大声で笑った。腹を切ると云っていた梅雪が豪傑笑いを始めると、それがまた異様に見えた。壁に映った影が大きく揺れた。
梅雪は笑い終ると、姿勢を正して、勝頼の前に両手をつかえて云った。
「穴山家には、湯の奥金山（山梨県西八代郡下部温泉の奥）、硯島金山（山梨県南巨摩郡早川町雨畑川の奥）、保の金山（早川町）の三金山があります。これ等の金山は、古くから穴山家のものと認められ、先代様からも自由採掘を許されていたものでございます。現在も尚かなりの金が採取されていることは御存じの通りでございます」
梅雪の言葉が急に丁寧になった。
勝頼と勝資は、梅雪がいきなり金山の話など始めたから、あきれて、顔を見合わせたほどであった。
「その金山がどうかしたのか」
勝頼が訊いた。

「その三金山を揃えて、お館様に差し上げます。この梅雪の赤心を示す証でございます」
このとき梅雪ははじめてお館様という言葉を発した。いままで四郎殿、四郎殿と云い通して来ていて、突然ここでお館様と云ったのは妙であったが、ここでは勝頼も勝資も特に気を止めないほど自然に梅雪の口から出たのである。
「三金山は今日よりお館様のお蔵入れとなされるようにお取り計らい下されると同時に拙者にかけられた疑いはお晴らし下さるよう願い上げます。かえりみますれば、この梅雪が疑われるような素因がけっして無かったとは云えません。お館様との近親の縁に甘え、つい大きな口を叩いていたことも、お館様のことを四郎殿とお呼び申し上げていたことも外部から見ると、不審の念を持たれる原因になったかもしれませぬ。さきほどから何回も申し上げたように、わが穴山家と武田家とは先祖代々縁組みを重ね続けてまいりました。云わば二本の木にして一本の大樹の体を為していたと云っても過言でございません。その穴山家が敵方に通ずるということは、すなわち武田の大樹が倒れることです。そこのところをよくお考えになりゆめゆめお疑いなきようにお諫め申し上げます」
最後の方は涙声になり、そして突然、声を上げて泣き出したのである。いかにも感に迫ったような泣き方であった。
怒り、笑いそしていまここで泣いている穴山梅雪のすべてが心にもない芝居だとは思えなかった。日頃の梅雪を知っている勝頼と勝資はただただあきれるばかりであった。
梅雪は、やがて泣き止むと、誓書をしたためたいから、紙と筆を欲しいと勝資に云った。
「玄蕃頭殿、そこもとの赤心はよく分かった。改めて誓書をしたためるにはおよぶまい。また三金山の儀は、そこもとの心のみを頂いて、物は貰わぬことにする。大敵を前にした駿河探題の軍資金の金櫃を欲しいとは思わないし、たとえ余が貰っても、そこもとへ送る軍資金はこの三金山から出るのだから、同じことではないか」
勝頼はなぐさめ顔で云った。
「そうなったとしても、一度心に決めたことですから、拙者のわがままをお許し願いとうございます」
梅雪は平静にもどって、誓書を書いた。誓書は型どおり、忠誠心を神々に誓う形式のものであった。もしこの誓いに反することがあったらいかなる罰を受けても悔いるものではないと述べ、神々の名を羅列したものだった。その誓書の中に三金山を武田勝頼の蔵入れ地として、移管することが明記してあった。
「これは……」
一読したあと勝頼は言葉につまった。これまでしなくともという、いままでにない気持が出た。日頃傲慢な態度を見せていた梅雪の変わりように驚くよりも勝頼は、今彼の前に坐っている梅雪を疑って悪かったという気持が動い

た。

勝頼にとって穴山三金山が自分の手に移管されることはたいへんな喜びであった。いままで武田を支えていたものは、甲斐、信濃、西上野等の人々の力であったことは勿論だったが、甲斐から出る金の力に拠るものも多かった。武田信玄の時代には、甲斐の黒川金山からは多量の金が採れた。これが武田の碁石金として戦略に大いに役立った。武田の碁石金を目の前に積み上げられて、それでは、お味方を申しますと云った豪族は数知れなかった。信玄の時代にもっとも活躍した諸国御使者と呼ばれていた武田諜報機関も、すべてこの金によって賄われていた。他国の情報を探って通報する仕事には金がかかった。信玄はこれに惜しみなく金を使った。信玄一代で、強大な国を形成したのは、黒川金山から産出する金の力によるものが多かった。武田は黒川金山の他、富士金山や安倍金山などを持っていたが、これらの金山は勝頼の時代になると、ほとんど掘り尽されてしまった。この点、勝頼は不幸であった。長篠、設楽ケ原の合戦で大敗北をして以来、再起を計るべく苦心をしたのもこの金であった。金のために北条を敵にし、上杉景勝と組んだのもつい二年ほど前のことである。

世は貨幣の流通時代に急速に移行しつつあった。金がなければなにもできないような時代になっていた。織田信長がここに目をつけて、いちはやく自由貿易都市、堺を手中におさめて、鉄砲製造と火薬によって富を成していた。

鉄砲と火薬が最有力な武器だという考え方もこの時代の特色だった。それには金がいる。それがないのである。鉄砲はまがりなりにも製造を始めていたが、火薬の方はばかしくなかった。越中五箇山から導入された火薬製造法も、順調に延びなかった。もう一つ、なにか技術的に欠けているものがあるようであった。

勝頼にとって穴山三金山は咽喉から手が出るほど欲しいものだった。度重なる戦争と築城のため、金は費い果たし、国の経済の破綻を目前に控えている時でもあった。

「そこもとの忠誠心を有難く受け取って置こう。これほどまで武田のために心をくだいていてくれるそこもとを、かりそめにも疑うような者があったら、誰であろうと容赦なく、処分するつもりだ」

勝頼はそう云った。この時、勝頼は完全に梅雪にかけていた疑いを解いていた。

「大炊助殿（跡部勝資）にも申し上げたいことがござる。貴殿は明朝、古府中へ向って直接帰館されることなく、江尻城へ立ち寄り、つぶさに見分を済ませていただきたい。妙な噂が出ている以上、その真相を確かむるためにも、江尻城へ重役が出向かれるのは当然のことである。いままでそれを遠慮されていたことも、よからぬ噂に加勢したことになると思う。ぜひ同道下されたい。このことも併せてお館様にお願い申し上げる」

梅雪は跡部勝資を江尻城へ連れて行って、身の潔白を明

かしたいと云ってやまなかった。勝資が江尻城へ行ったからどうこうなるというものでもないのに、執拗に跡部勝資を江尻に誘おうとするのは、梅雪が跡部勝資にも自分の忠誠心を立証しようと躍起になっているように見えた。

「玄蕃頭がそれほどいうことだ、行ってやったらよいだろう」

勝頼は勝資に云った。そうせざるを得ないような雰囲気だった。

勝資は梅雪が敵側に内通しているという噂については、勝頼同様に心苦しく思ってはいたが、確証を摑んでいるわけではなかった。その心の中のいやなしこりが、穴山金山譲渡ということによって晴れようとしていた。やっぱりあれは噂だったに過ぎないのかと思っていたところへ江尻へ誘われた。

（さて、これはなんかあるぞ）

勝資は新たに疑念を抱いた。もしかすると、江尻城へ閉じこめられて、再び古府中へ帰れないかも知れないと思った。勝資は、梅雪へかけた疑念を完全に解いてはいなかったのである。

だが、江尻城についてからの梅雪は沼津城の時のように、へんにじめじめしたことはなかった。

跡部勝資は軍監として迎えられ、駿河内部の主なる城砦からそれぞれ大将や副将が呼び集められ、その前で、徳川軍の駿河攻撃に対する防衛策が熱心に論ぜられた。

田中城の城主、依田右衛門左信蕃は、

「高天神城はおしくも力攻めに会って落城した。だが、わが田中城は、敵の大軍によって包囲されたとしても簡単に落ちるような城ではない。一年間は持ちこたえるだけの食糧や弾薬は用意している」

と豪語した。いささかも弱気は吐かなかった。他の部将たちも意気軒昂であった。

その依田信蕃に向って梅雪が訊いた。

「この梅雪が敵側に内通しているという噂が古府中あたりで盛んに云いふらされているということだ。田中城あたりでもおそらくそういう噂を聞いたことがあるだろう。そちはそれを耳にしてなんと思った」

「噂など気にしていたら戦はできませぬ。拙者は田中城の城主として、ただひたすら戦うのみです。駿河探題様の御指図によって、全員決死で敵に当っております。ゆめゆめ、疑うようなことはございません」

勝資はこれを聞いて、梅雪がよく部将を掌握しているなと思った。

勝資が江尻に滞在中に、梅雪は彼を連れて城内をくまなく案内した。食糧、弾薬が充分とは云えないが一年ほどの蓄えはあった。

「穴山三金山は手放しても、駿河の防備に手を抜くようなことはないと思う。現在まだこれだけの金が用意してある。確かめられた上そのとおりのことをお館様に報告なさ

れるがよい」

穴山梅雪は金蔵まで見せた。五千両ほどの金貨があった。

勝資は、なにもかも明けすけに見せてくれる梅雪に好感を持った。彼は梅雪にかけていた疑いを次第に解いていった。

梅雪は勝資をよく知っていた。饗応や女や金などでごまかせる人間でないことを知っていた。

梅雪は勝資がいよいよ帰館するという日に戦時中ゆえとことわってささやかな宴会を催しただけであった。跡部勝資より穴山梅雪の方が悪知恵において勝れていたのである。

勝頼が新府城完成を前にして伊豆へ出掛けたことは上杉景勝に宛てた文書によって明らかである。

新館の普請出来せしむるの旨、聞し召し及ばれ、祝詞として三種並びに柳五十贈り給はり候、誠に御入魂の至り、謝す所を知らず候、内々近日居を移すべき心底に候のところ、氏政家僕松田尾張守次男、笠原新六郎、豆州戸倉の在城、不慮に当方幕下に属し候の条、かの国仕置のため出馬せしめ候の故、遅引候、如何様帰陣の節、使者をもつて、申し達すべく候。恐々謹言

十一月十日　勝頼

上杉殿

人質御坊丸の事

伊豆の仕置を済ませて古府中に帰った勝頼を待ち兼ねていたのは真田昌幸だった。

「城はほとんどできました。こまかい仕事がまだ残っていますが、まずは、お館様を初めとする御親類衆御重役衆が新しい城へ移転することが第一でございます」

昌幸は新城への移転を勧めた。

「なぜ、そのように急ぐのだ……」

城ができたのだから移転した方がいいに決っているが、昌幸のすすめ方は、あまりにも性急すぎると思って勝頼は訊き返したのである。

「古府中には新城へ移ることに対して不満を洩らしている者が多いようです。お館様をはじめとして御親類衆御重役衆が新城へ移転すれば、それにつれて商人たちも引っ越さねばならなくなります。商人たちばかりでなく、この古府中に住んでいるほとんどすべての人が引っ越さねばならなくなります。はじめから分っていたことですが、いよいよとなると、それを嫌う者が出て参ります。現に御親類衆や

御重役衆の中にも、そのような素振りをみせる者が出て参りました。この際、いろいろと事情があることでございましょうが、万難を排して一気に引っ越しを強行していただかねばなりませぬ。新しい城を城としてその面目をはっきりさせるには、早いこと全員がそういうつもりになり、城に入る将兵もまた自分の城に愛着をもち、城と共に生き、城とともに死ぬという気持にならないと、いざという場合に城が城としての役に立たなくなります」

いざという場合というのは、敵が攻め寄せて来た場合のことであった。城普請奉行として苦労して来た昌幸は、城ができた以上一日も早く、防備の態勢に入るべきだと勝頼に申し入れたのである。

「そちの申すとおりだ。早速に新城へ移転するよう家臣一同に申しつけよう」

勝頼は昌幸の申し入れを素直に受け取った後で云った。

「だが、昌幸、世の中は少しずつ、変って行くぞ、わが武田がもっとも苦しい時は過ぎたような気がする」

「えっ？」

思わず昌幸は訊き返したほど、勝頼の云い方には、その場にふさわしくない楽観的なものが含まれていた。

「伊豆の笠原新六郎が武田に降ったのは、北条氏政の差し金だ。つまり北条はわれらと再び和を結びたい所存でいるのだ。北条がわが方に与することになれば、駿河の方はまずまず心配なくなるだろう。それにな昌幸、玄蕃頭が穴山三金山を蔵入れ地にするという証文を入れた」

勝頼は穴山梅雪から貰った穴山三金山のことが嬉しくてたまらなかった。その喜びを、寵臣の昌幸に伝えたかったのである。

「穴山の三金山と申しますと、下部の湯の奥金山、雨畑の硯島金山、そして保の金山のことでございましょうや」

「その通りだ。あの三金山は今も尚、かなりの金が発掘されている」

昌幸はなにも云わず、一瞬顔をこわばらせたまま立ちすくんでいた。

（穴山梅雪は噂のとおり、徳川に内通したのだ）

穴山梅雪が三金山を勝頼に献じたという、その一言で昌幸は、そのように直観し顔色を変えたのである。

だが勝頼は、昌幸が顔色を変えたのは単なる驚きに過ぎないと思っていた。

「くわしくお聞かせくださいませ」

昌幸は、そうなった事情について問うた。勝頼は沼津城でのことをくわしく話した。あの傲慢な梅雪が終には涙まで流して忠誠を誓ったという話をしたとき昌幸は、

（梅雪の変心間違いなし）

と思った。だがそれは昌幸の考えであった。何らかの証拠があるわけではないから、うっかり口に出すことはできなかった。

「大炊助（跡部勝資）が間もなく、江尻城から帰って来る

から聞いてみるがよい」
勝頼は、腑に落ちないような顔をしている昌幸のためにつけ加えた。
（跡部勝資が帰って来るまで待とう、彼までが梅雪の心を見抜けぬということはない筈だ）
昌幸は、その場ではなにも云わずに、勝資の帰りを待った。
新城のことが心配だったが、それ以上に心配なのは、穴山梅雪のことであった。穴山三金山をそっくり勝頼に献ずるということは、いままでの梅雪のやり方から見て、卑下し過ぎた行為であった。彼が常識では考えられないようなことをしたのは、蔭で常識を破るような行為をしているのではないかと推測された。
（なんとかしなければならない。穴山梅雪が敵に内通したとすれば、武田は亡びるかもしれない）
昌幸の心の中では火が燃えた。梅雪が裏切ったとして、その次に裏切る者は誰であろうか。木曾の山村三郎左衛門良利のことがふと浮び上った。山村三郎左衛門が江尻へ行っての帰途、韮崎の普請場に立ちよったときの事など思い浮んだ。もともと新城建設を強く主張して、これを決定させた穴山梅雪のことなど思い併せて、昌幸は、不安で不安でたまらなかった。だが、これを話す相手は居なかった。うっかり口にすべきことではなかった。
昌幸は跡部勝資の帰りを待った。なかなか、帰らないので一度は、普請場に帰ってから、勝資が帰府したのを聞くと、馬を飛ばして勝資の屋敷を訪問した。表面は新城についての報告であったが、これはごく決りきったことで、本当に訊きたかったのは、梅雪のことだった。
昌幸が一言それに触れようとする気配を感ずると、勝資は家臣を遠ざけて云った。
「やはりそこもとも疑っておられたのか」
やはりそこもともというのは、おれも疑っていたがお前もそうだったのかというように取れないことはなかった。勝資は沼津城における梅雪の異常なまでの昂奮ぶりを話して、
「玄蕃頭殿は、最後になると涙まで流して、赤心を誓った。もし、噂のように玄蕃頭殿が敵に内通していたとしたら、ああいうことはできないだろう。そうは思わぬか」
勝資は逆に昌幸に訊いた。
「それは人によってでございます。中には、やりかねない人もいるでしょう。人間追いつめられると、案外そういうことが容易にできるかもしれません」
昌幸は、はっきり云った。
「そこもとは、その場に居なかったから、そのようなことを申すのだ。拙者はそこにいて、玄蕃頭殿の涙を見たのだ。また江尻の城へ行って、玄蕃頭殿がいかに駿河の国の防備に心を砕いているか、また駿河の国の諸将が彼に心服している様子などをこの目で見て来たのだ。穴山三金山の

献上なぞ、いかにも突飛なことに見えるだろうが、この非常の事態に見せようとした赤心の表れとしていささかもおかしくはない。玄蕃頭殿には悪いが、拙者も、そこもとと同じように疑っていた。が、今は疑念は晴れた。そこもとも疑念を晴らすがよいぞ。玄蕃頭殿には毛頭疑わしきことはないわい」
跡部勝資はそう云い切った。昌幸としてもそれ以上なにも云えなかった。
（いや梅雪は疑わしい。拙者の直観でそう判断する。これ以上確かなものはない）
昌幸はそう思っていても、そんなことをここでは云えなかった。彼はやりようがない気持を抱いて、跡部家の門を出た。勝頼だけではなく、武田の柱とも云うべき跡部勝資までが、梅雪を信じこんでしまったらもはやどうしようもないことだと思った。
「そうだ、長坂長閑斎殿がいる」
彼は思わず叫んだ。長閑斎ととてこのことはおそらく耳にしているであろう。彼はどう感じているのであろうか。
真田昌幸は馬を返して、長坂長閑斎の屋敷へ向った。日が短くなっていた。そろそろ暗くなりかけていたが緊急の用だと云えば、会ってくれるだろうと思った。
長閑斎の家には武田信豊が先客として来ていた。
「真田殿か、丁度よいところへ来られた」
長閑斎はそう云うと昌幸を茶室へ案内した。庭に面した狭い部屋だった。
「実はかねてより左馬助殿（武田信豊）のところにておかくまい申し上げていた御坊丸（織田信長六男）様のことについて相談しようというところだが、まずはその前に茶を一服召し上っていただこうと思ってな……」
長閑斎は昌幸に同席を勧めた。昌幸にはなんのことだか分からなかったが、長閑斎が人質御坊丸のことを、おかくまい申し上げていたなどと、最上級の敬語を使ったので、へんなことを云う人だと思った。
御坊丸勝長は幼くして、岩村城主・遠山左衛門尉景任の養子となった。景任の妻女ゆうの方が信長の叔母だという関係もあってこの城へ送られたのである。御坊丸が養子として迎えられて間もなく、この岩村城主の遠山景任は早逝して、名義上の城主は御坊丸勝長となり、後見役がゆうとなった。そして岩村城はその翌年、武田信玄の武将秋山信友の攻撃を受けたのである。
秋山信友は伊奈勢を率いて、城を包囲し、城を兵糧攻めにした。岩村城から再三使者を岐阜の織田信長に出して救助を求めたが、当時信長は、浅井・朝倉の連合軍を相手に戦っていたので、岩村城を救援する余裕がなかった。
岩村城がいよいよ降伏か玉砕かの岐路に立ったとき秋山信友は使者を出して、前城主遠山景任の未亡人ゆうとの結婚を申し込んだ。
ゆうはこの申し込みを受けて、開城し、秋山信友が事実

上の岩村城主となった。わが日本の歴史上、まれに見る入婿城主である。その時、信長の子御坊丸勝長は人質として古府中へ送られたのである。

武田側は信長の子を人質に取ったというので大いに気をよくしていたが、信長は勝長のことなどたいして気にもしていないようであった。御坊丸は、武田信豊の屋敷であずかっていた。

大事な人質であるから、常に監視がついていて、行動の自由はいっさい認められなかった。

その御坊丸のことが武田家で問題になったのは、沼津城からの帰途、江尻城へ立ち寄った跡部勝資に、穴山梅雪が、

「このような時勢になりましたから、かねてから人質として置かれている御坊丸様について御一考をうながすよう、お館様にお伝え願いたい」

と云ったことがそもそもの発端となったのである。高天神城が落ち、織田・徳川連合軍の駿河侵攻を前にひかえて、織田信長に講和を申し込むというのは虫のいい話だが、まず人質を返して信長の御機嫌を取って置いたほうがいいだろうという進言だった。

勝頼はこの問題について、まず、御坊丸をあずかっている従弟の武田信豊の意見を訊いたのである。信豊はこの重大問題を一人で決定するのは不安だったから長坂長閑斎の知恵を借りたいと申し入れた。

長閑斎は、そういう話ならば茶会のあとでお伺いしましょう、丁度、珍しい茶器が手に入った折ゆえ、ぜひ、わが屋敷へと信豊を呼んだところへ昌幸が訪れたのである。

茶道は鉄砲と共に日本全国の武将たちの間に流行していた。茶道をわきまえぬ者は武士ではないようにさえ云われるようになり、武将のたしなみの一つと思われるようになっていた。

茶道の起りは古いけれど、武家たちの間で流行しだしたのは足利時代であった。このころは書院茶といって、大広間で多くの人が茶を飲む方式であった。武田信玄も時々、この書院茶の会を開いていた。だが信長の時代に入ると、茶は数寄屋茶にかわり、狭い部屋の中に少数の人が集って、茶を飲みながらわび、さびを楽しむというふうな内面的なものに変化していった。

中央で発生した数寄屋茶は急速な勢いで地方諸豪の間に浸透していった。一応茶道の心得がないと武士として相手にされないようになりつつあった。

新しもの好きな長閑斎がいち早く茶道に凝ったのも当然であったが、昌幸の目には、にがにがしく見えた。彼としては、

（茶など云々している時ではない）

という反発の気持を押えるのがせいいっぱいであった。

一通りの茶器は揃っていた。茶釜、香合、花入、水指、茶入、茶碗、茶杓の品々を眺めながら、昌幸は渋い茶を一服飲まされた。

「いかがかな、真田殿」

長閑斎は昌幸にそう話しかけると、いかにもおかしそうに笑った。いかがかなというのは茶の味についての質問だった。茶のことには全く素人の昌幸をからかった言葉のようにも、聞こえないことはなかった。しかし昌幸はたちどころに長閑斎を驚かすような答えをした。

「御坊丸様の御処置もなかなか渋いことでございましょうな」

「そうだ。これは渋いというよりも苦いことだ。しかしやりようによっては甘くもなる」

信豊が云った。

「人質の御坊丸様をただお返し申し上げるといったところで、織田殿はおおそうかと受け取られるだけのこと……」

長閑斎はそう云ってから、昌幸に、なにか名案はないかと訊いた。

「名案と申されますと、御坊丸を信長へ返すという前提に立ってのことでございますか、それなら、私には何も申すことはございません。現在の御坊丸を今後どのように扱ったらよいかということなら、答えは簡単です。御坊丸は飽くまで人質です、味方で敵方に捕えられている者があればこれと交換するのもよし、敵が理不尽な行為に出たら斬るもよし、要するに人質は人質として取って置けばよいことだと思います」

昌幸は御坊丸様だとか織田殿などという敬語はいっさい使わなかった。

「これはまた、はげしい云い方だな。そういう考え方もまたいいだろうが、拙者はこの際、御坊丸様を左馬之助様の御養子に申し受けたいと織田方へ申し入れたらいかがかと思っている。おかくまい申し上げていた御坊丸様が吾が子同様に可愛く思われるようになった。ぜひ養子として申し受けたいが、この儀お許し願いたい、という意味の書状を出したらいかがでしょうか」

長閑斎は信豊に向って訊ねた。

「虫がよすぎはしないか」

信豊は首を傾げて云った。

「そうでも書かないと、きっかけがつかめぬでしょう。織田殿から、養子の儀はことわると云って来たら、それではお返し申し上げましょうということにしたらいい」

「なるほど、そういうことになるのか」

信豊が頷きながら云った。

「要は、この件で織田家と武田家の間を使者が何回も往復するようにして、その間に少しずつでもいいから、織田家との間の緊張を緩和して行くことです」

長閑斎が云った。

「あまり期待はできないだろうが、少なくとも、そうすれば、相手の出方が分かり、それによって今後の動向が予測されるだろう」

信豊が云った。

「そうだ、いっそのこと御坊丸様をお館様の御養子に……」
長閑斎はそこまで云ってから、なにかつまずいたように、
「いやそんなことをしてはならぬ」
と自分の言を訂正した。
長閑斎が自分の案をすぐ引っこめたのは、これでは相手に降伏しましたというようなもので、それほど卑下することもないと思ったからである。
結局は、長閑斎が先に出した案が現実的であり、最高の策だろうということになって、話は終った。
「或は、織田殿が、それでは御坊丸をやろうと云うかもしれない。そうなれば武田の危機は救われるというものだ。先に笠原新六郎の降伏もあり、穴山三金山のお蔵入れもあった。よいことというものは続くものだ」
長閑斎は真顔でそんなことを云っていた。
(信長とは、それほど甘い人間ではない)
昌幸は、そう云おうと思ったが止めた。跡部勝資といい、長閑斎といい、なぜ武田の重役はこうも甘い見通しを持っているのだろう。これではここで穴山三金山のことを持ち出しても、とても取り上げては貰えないだろう。
昌幸は思わず溜め息をついた。
「どうかされたのかな真田殿」
長閑斎が昌幸の顔を覗きこんだ。
「いや、なんでもございませぬ、城作りで疲れ果てました。思わず欠伸を嚙み殺したのでございます」
溜め息と欠伸を嚙み殺したのとでは全然違う。長閑斎は、はてなと思った。しかし強いて昌幸の溜め息を問いただそうとはしなかった。
織田信長は意気軒昂であった。
この年(天正九年＝一五八一)三月には高天神城が落ち、十月には、羽柴筑前守秀吉によって、鳥取城が落ちた。織田信長が天下人として諸国に号令を発するのも間近いことのようにさえ思われた。この信長に頑強に抵抗するのは、毛利一族だけということになった。
織田信長の居城安土へは全国の諸豪、諸将が贈り物を献じ、彼の御機嫌を取っていた。
信長の家臣たちも、従来はお館様とか、内府様と呼んでいたが、安土城に居を移してからは、安土御殿主様、又は殿主様と呼ぶようになった。信長もそのような呼び方が好きなようであった。
「御殿主様、甲斐より使者が参りました」
側近の侍が信長に告げた。
信長と羽柴筑前守との会見が終ったばかりの時であった。毛利氏の反抗についての報告を念入りに聞いた上で、今後いかなる手を打つべきかを相談したあとだったから、信長の頭の中は毛利氏のことでいっぱいだった。
「なに甲斐からの使者だと」

信長は云った。毛利のことを云っているところへ甲斐の使者が来たと聞いたので、頭の中で、甲斐と毛利が転倒した。
(そうだ、毛利を攻めるより先に武田を討つべきかもしれないぞ、武田は高天神城を失ってからは、いちじるしく戦意を失ったらしい。しかも、武田家の柱ともいうべき穴山梅雪がこちらに内通している。今兵を向ければ武田を亡ぼすことはそうむずかしくはないだろう。その甲斐からいったいなんの使者であろう)
信長はへんだと思った。
(ひょっとすると、武田と毛利が裏でなにかを企てようとしているのかもしれない)
信長は先から先を考える人であった。毛利のことを考えていたところへ武田の使者が来たと聞いたから、先ばしってそう考えたのである。
「使者をこれへ」
と信長は云った。武田と織田とは戦争中である。大っぴらに使者などよこすことはできない。どうせ、武田家の者ではなく、武田家に頼まれて、どこかの寺の和尚でもやって来たのだろうと思った。
「使者をこれへ」
信長は今度はかなり大きな声で怒鳴った。
さっきの侍がおそるおそる前に手をつかえて、
「甲斐よりの御使者ではなく、御殿主様宛の書状をたずさえた小者が到着したということでございます」
侍はそう報告すると、外で待っている若侍に目配せをした。朱塗りの盆の上に書翰箱が乗っていた。若侍はそれを持って静かに進み出て信長の前に置いた。
「なぜ取り次ぎを間違えたのだ」
信長は取り次ぎの侍に訊いた。
「はっ、そのように控えの間から聞きましたのでそのままお伝え申し上げました」
「では控えの間の者を呼べ」
控えの間とは殿主の部屋の次の部屋のことであった。そこで用件を取りまとめて、信長の側近に伝えることになっていた。
控えの間の者は信長に呼ばれると、
「はっ、甲斐よりの使者が参ったと、中の間から云って参りましたので……」
と云った。これでは、単に書状がついたということを使者が来たと取り違えたのは誰の責任だか分からなかった。
「もうよい、五郎左衛門(丹羽長秀)を呼べ」
信長は云った。丹羽長秀がなにごとならんと出て来ると、
「甲斐から使者が来たというので待っていると書状だった。書状と使者の取り次ぎ違いは、途中に幾つかの間を置き何人かの人の手を経由するからだ。城ができたのはいいが、近ごろやたらに物事が煩雑になった。なぜそれほど、

途中に多くの人を置かねばならないのだ。充分に考えて置け」

信長はそれだけ云うと恐縮している長秀をそのままにして、書状を開いた。それは武田勝頼から信長に宛てた、御坊丸を武田左馬助信豊の養子に欲しいがお許し願いたいという内容の書状であった。

信長は一読すると、

「御坊丸は幾つになったかな」

と云って、その書状を長秀に渡した。長秀がそれを読んでいる間中、信長は養子にやった御坊丸の幼な顔を思い浮べていた。幼い子に苦労をさせたものだと思った。

「御坊丸様当年たしか十五歳かと存じます」

長秀が答えると、

「十五歳といえば元服の年だ。適当な城があるか」

「はっ？」

長秀は妙な顔をした。

「御坊丸にやる城のことだ」

長秀は、どうやら信長の云うことだけは分かったが、それをすぐこの書状に対する答えとして結びつけることはできなかった。

「お前たちを集めて、この書状を見せ、いかにすべきか答えを出せと申しつけたとすれば、なんだかんだと意見が分かれ、答えが出るのに、二日か三日はかかるであろう。そして得られた答えは、およそつまらないものと決っている。人が多くなればなるほど結果はよくない。こんなことで、余はいちいち人を呼んで意見など訊こうとは思わない。即刻返事を書く」

信長は半ばひとりごとのように云った。どうやら使者と書状を取り違えた側近機構に対する叱りの言葉のようでもあった。

「御殿主様が返書をしたためるのはよいと存じます。そのまえに、甲斐のことをよく存じている者を呼んで、新しい情報などお聞きになれば、なにかと御参考になるものと思われます。高天神城が落ちたといっても、武田のこと、なかなか手強い敵だと存じます」

「穴山梅雪がこちらについてもか」

「さようでございます。あの高天神城落城の際のふるまいから推し計っても、武田は毛利以上にはげしく手応えをするものと心懸けねばならないでしょう」

長秀は、御坊丸のことは慎重にしたいと思ったから、そう云ったのである。

「そちにはもう少しものを見る眼があったと思ったが、そうではなかったな。そのような考えだから、さっきも申したように、余の側近にやたらと人垣ばかりを作りたくなるのだ。人垣を作れば、作るほど、その先が見えなくなる。人垣を作らずに、余が一人で素直に眺めると武田の滅亡はもはや疑うべくもない事実となって表われている」

「事実？」

「そうだ。その事実の一つがこの書状だ。御坊丸は岩村城から連れて行かれた人質だ。人質は生きた道具だから、どう使ってもよい。しかし、その人質を突然、養子に欲しいとはなんたることだ。このことだけで、武田の内部に戦意なしということがはっきり分かる。武田がもし、毛利と同じように飽くまで余に反抗するつもりならば、このような書状はよこさない筈だ。人質は人質として取って置き、必要がなくなったときに処分するのが定法だ。そういうつもりでいないと戦などできるものではない。勝頼からのこの書状は、武田からの降伏状と同じようなものだ。戦意はござい ませんと自分の胸のうちを表明したも同然なことだ。これで余の腹は決った。来年早々に甲斐へ出兵するぞ。毛利の方を先にしようと思っていたが、武田が先だ。弱い方から斬り従えて行くのもまた戦略の一つだ」

信長は一息にそう云うと、大きな声で、祐筆を呼んで、武田勝頼あての書状をしたためた。

《御坊丸を養子に迎えたいという話であったが、こちらにも都合があるので、おことわりをする。尚、御坊丸について、よきような処置を取りたいという気持があるなら、当方より御坊丸受け取りの使者をさし向けるであろう。よくよくお考えの上、何分よろしいように配慮されたい》

という内容のものであった。そこで信長は自ら筆を取り日付をしたため、信長の自署名よりいくらか下げて武田四郎殿と宛名を書いた。

相手の名は少なくとも日付と同じくらいの高さに書くのが例であったが、信長はわざと、そのようにした。その書状を読んで、勝頼が怒り、御坊丸を斬るようなことがあったならば、武田に戦意があるとして、甲斐進攻は毛利との戦争が終ったあとにしようと思っていた。

信長の書状は勝頼のところへ届いた。勝頼は書状を見て怒った。御坊丸を斬ろうと云ったが、重臣たちはこぞってこれに反対した。結局御坊丸は、信長の使者に下げ渡すことでけりがついた。御坊丸はそのまま木曾路を経て犬山城へ送られ、犬山城の城主となった。

十一月廿四日、犬山のお坊、安土城に至って初めて御礼。是れは、先年、武田信玄と御入魂の筋目これある刻、信長公の末子を養子仕り度の由候て、甲斐国へ御出で候を、終に和談これなく候て、送り申し候御子にて候を、犬山へ城主になし申され候。（『信長公記』巻十四）

太田牛一が書いた『信長公記』は資料価値が高いものとされているが、御坊丸については、いささか事実と違ったことが書いてある。おそらく、御坊丸が人質にされていたという真相を書くのを主家のためにはばかったのであろう。

酒屋小僧騒動の事

勝頼はいよいよ新城移転を決意した。

新城はまだ完成したのではなかったが、ひとまず新城に移ってから、未完成の部分に手を加えればよいだろうというのがおおかたの意見であった。勝頼はこの意見を取り入れて、

「新城への移転は今年中に終らせる。新城移転の前に各家臣はかねてから命ぜられていたように新屋敷への移転を終了するように」

という命令を出した。

領主およびその家臣が新城へ移るということは、武田の中心がそこへ移ることであり、政治、軍事、民治いっさいが移転することである。つまり、古府中という都市そのものが新府中へ移動することになる。新城への移転の意味はこれほど大掛りなものであった。勝頼および武田家の首脳部はこれを承知で、築城を断行したのであった。

築城はほぼ完成した。ようやく移転できる状態になっていたが、遅れているのは家臣団の家であった。

各家臣団の敷地は与えられていたが、そこへ家を建てるのは、家臣それぞれが自分の才覚でやらねばならなかった。公費で作って、さあ入れというようなものではなかった。各家臣はその家を作るための費用捻出に頭を悩ましていた。費用ばかりではなく、築城に職人が取られているから人不足で日当がかさんだ。

各家臣には新城の近くに屋敷用としての土地が割り当てられていた。新城の北から北西部にかけての一帯、伊藤窪、石水、次第窪などが、家臣団の居住区に予定されていた。新城より約一キロほどの距離であった。

土地は無償で与えられたが、そこは山の中だったり、畑地だったりした。御親類衆から侍大将級にいたるまでの主なる者だけでも五百人はいた。武田の首脳部にしてみれば、その五百人が真先に移転して貰わないと、古府中から新府中に移ったとは云えなくなる。

口ではお館様のおっしゃるとおりにいたします、新城移転はけっこうですと云っていた家臣団がいざとなると二の足を踏んだ。ためらっていたというよりも、転居の時期になってもまだ家ができていない人が多かった。それでも、命令にそむくわけには行かず、申しわけのような、小屋に近い家を建てた人が多かった。

勝頼は横目付に命じてその実態を調べさせた。まがりなりに小屋のような家を建てた者が半数で、後は手をつけていなかった。

勝頼はこの期になって、いかに新城移転が困難な仕事であるかをつぶさに知らされた。こういうことになるならば、なぜ新城建設を穴山梅雪が提案した時に反対しなかったのだろうかと、いまさらながら、悔いてもどうしようもないことだった。

多くの家臣も住み馴れた古府中を去るに臨んで、はじめて、古府中を去りたくないという気持を起こしたのである。

古府中に武田の中心都市が開かれてから六十余年経っていた。この間に古府中は甲斐の中心地だけでなく、甲・信・西上野の中心地として栄えて来た。家臣団は館の南側にそれぞれ屋敷を持っていた。六十年となると、三代、四代に亙って住んでいる人もいた。庭の松一本、池の鯉一匹を取り上げても思い出につながるものばかりであった。

また、屋敷町の周囲には、屋敷に住んでいる武士たちに物を売る商店が軒を連ねていた。古府中を訪れる旅人たちのための旅館もあった。武具屋もあり、武具屋とつながりがある職人も住んでいた。武士や町人ばかりでなく、古府中には、善光寺の他名刹が多く、そこには先祖が眠っていた。古府中から新府中に移るとなると、寺もまた移転しなければならなかった。勝頼は寺にも移転命令を発し、寺領を割り当てていたが寺はそう簡単に移転できるものではなかった。

武士たちが移転しなければならないと思いながらその行動が積極性を欠いていたのは以上のような古府中の歴史とのつながりがあるからだった。

(でき得れば、ここにこのまま住んでいたい)

という気があるから動けないのである。

織田・徳川連合軍がいよいよ古府中へ向って侵攻して来るという噂はしきりに流れていた。三河の東条城を食糧庫に当て、この城に連日大量の食糧が運びこまれているという確かな情報が古府中に入っていた。東条城に食糧を送りこんでいるのは織田信長だった。

この頃になると織田信長は、甲斐侵攻に関してはいっさい秘密行動を取らなかった。勝頼が、人質の御坊丸勝長を送り返して来た時点で、武田を完全に見くびっていた。既に木曾義昌と穴山梅雪の離反は決っていた。織田信長にとって、武田に関する限り恐いものはなかった。

勝頼をはじめとして武田の上層部は、織田・徳川連合軍が侵攻して来る日が近いと仮定し、築城を急ぎ、そこに兵力を集中して来るべき敵を迎え討とうと考えていたのであったが、一般の家臣たちはそれほど強い危機感を抱いてはいなかった。

(信玄公以来の武田だ。そうむざむざ敵の餌食になるものか)

そのような妙な自信があった。考えて見ると、高天神城が一つ陥ちただけで、他の駿河の城は立派に生きていた。

(敵が甲斐に攻め込んで来るとしたら、まず駿河が敵に取

られてからのことだろう）

彼等はそう考えていた。順序とすれば確かにそうだった。武田の家臣は誰一人として、既に穴山梅雪が敵側についているとは知らなかった。

勝頼は側近諸将を集めて新府城移転についての会議を開いた。

「家臣の中には、新府城に移転せよとの命に従わず、未だに屋敷をかまえぬ者さえおる。至急移転を行なわせるにはいかにしたらよいであろうか」

という勝頼の下問であった。もちろん、この席に連なった者は既に新屋敷をかまえて何時でも引っ越しができるようになっていた。

「まず、お館様の新城移転を早々に行なうことだと存じます。お館様をはじめとして、北の方様、お女中様等残らず、新城へ移られたならば、家臣もまた新城に移ることになり、従って家臣の家族たちも、好む好まざるにかかわらず、新屋敷へ移転せざるを得なくなるでしょう」

と云ったのは跡部勝資であった。勝資は家臣たちがいっせいに新屋敷へ移転するのは事実上困難と見たから、こう云ったのであった。この発言の裏には、まず首脳部と男だけが新城に移り、一般家臣の家族は家ができ次第移転させよう、完全に移転が終了するには、一年か二年はかかるだろうという腹づもりがあった。勝資も、武田家に急速に危機が近づきつつあるとは思っていなかった。

跡部勝資の言に対して、諸将は賛意を示した。中には、

「移りたくとも、手元不如意で家が建てられない者もいる。まさか野宿せよとは命ぜられませぬ」

と云う者さえいた。

多くは黙っていた。黙っている者は、自分はどうにか、新屋敷を建てたが、家来たちが家を建てられないで困っている者ばかりだった。中には新屋敷にはごく小さなものを建て事実上は古府中にある現在の屋敷を今後もそのまま使用したいと考えている者がいた。少なくとも、老人子供は古府中の旧屋敷に置くつもりでいる者が大部分であった。

長坂長閑斎がそれらのやり取りをにがり切った顔で聞いていた。いまになにか云うだろう、それはびっくりするような発言になりはしないかという悪い期待が彼のところに集ったとき、彼はとうとう口を開いた。

「新府中移転と決った以上はいっさい私情は許されない。なにがなんでも、われら主なる者は、移転しなければならぬ。その決意を示さぬかぎり、下々の者は従いては来ぬ筈だ」

長閑斎は一同の顔をじろりと見てから更に云った。

「拙者は、明朝早々より、古府中の現在住んでいる屋敷を打ちこわして、次第窪に移転する。古府中の屋敷を打ちこわす以上、二度と古府中には帰らぬ覚悟である。こうでもしないと、未練が後に残る。新城ができた以上このくらいの非常処置を取らないと、誰も彼も引っ越しをこばむだろう」

長坂長閑斎のこの発言には、この座に連なる者は驚愕した。六十年も続いていた屋敷を自らの手で壊すなどということは、とてもできることではなかった。

「それまでしなくともよかろう。二度と古府中に帰らぬ覚悟を決めたら、家屋敷を、他人の手に渡すのがよい。他人の家に住んでいるわけには行かぬから、新屋敷に移転せざるを得ないことになる」

と云ったのは武田信豊だった。

「それでは生ぬるい。他人の手に譲るということになると、知人に仮に譲る形式を取り、その温存を計るだろう。一人がやればみんなやる。そうなると、やはり古府中は残る。この際古府中は無くさねばならぬ」

長坂長閑斎の言葉は真実であったし、強い響きを持っていた。

「なに、無くさねばならぬとな」

そう云ったのは御親類衆の一人一条右衛門大夫信龍であった。一条右衛門大夫信龍は武田信玄から数えて、七番目の弟であった。勝頼には叔父に当っていた。

一条右衛門大夫信龍という人は御親類衆の中でも目立った存在ではなかった。名族一条家の後を継いで、一条衆二百騎を持つ、侍大将であった。一騎に五人の足軽がつくとすれば、実力としては千人を指揮する大将であった。度々の合戦に参加はしているようだが、花々しい手柄を立てたことはなかった。どちらかと云えば、武将というより、書や絵を好み、詩など創り、時には茶会など開いている風流人として知られていた。

会議にはめったに列席したことはない。その口実として仮病をよく使っていた。勝頼をはじめとして御親類衆一同は、信龍はこういう人だと思いこんでいたし、家臣団も、御親類中の変り種として別な目で見ていた。

この新府城移転についての会議に際しても、いつものように仮病を使って出て来ないだろうと思っていたところが、信龍はこの日に限って出席したのである。

異例のことであった。

「古府中をなくさねばならないとはいかなる意味か云ってみるがよい」

信龍は長坂長閑斎に向って云った。信龍は信玄とは顔は似ていなかったが、声がよく似ていた。太くて重みのある声だった。

「その理由は先ほど申しました。新府中に移るためには未練を捨てねばなりません」

「それは分かっている。余がそちに訊いているのは無くすとはどういうことか、新府中に引っ越すためには、古府中を焼いてもさしつかえないとでもいいたいのか」

「焼けとは申しませんが、むしろ焼けてしまったほうが、あきらめがつくかもしれません」

長閑斎は云った。長閑斎にとっては、御親類衆であって

も、実力者ではない信龍に、そち、そちと云われるとあまりいい気持はしなかった。信龍が余という云い方も気に喰わなかった。

「古府中には六十年の歴史がある。その輝かしい武田の歴史も焼いてしまえと云うのだな」

「そうではございません。敵に勝つためには私情を捨て、一丸となって、新城に移らねばなりません。古府中に未練を残してはならないと申しているのでございます」

長坂長閑斎は声を大にして云った。

「余は、移らんぞ、新城には移らん。古府中の先祖伝来の屋敷にとどまるつもりだ」

一条信龍はそう云って腕を組んだ。どうにでも勝手にするがいいというふてくされた態度であった。

なんとかして新府中に移転しようと相談しているところで、御親類衆の一人が動かないと云い出したのはまことに困ったことであった。一条信龍が動かないと決まれば、御親類衆の中に彼と同じ行動を取る人が出ることは間違いなかったし、屋敷はそのままにして、老人子供は古府中に置こうと考える人もでて来ることは当然であった。

気まずい沈黙が続いた。

ここまで来れば、勝頼が結論を云わねばならなかった。諸将は勝頼の方を見た。

「長閑斎の言葉は無情のように聞こゆるけれど、われらが心を同じくして、新府中に移転する覚悟を見せぬかぎり、他の者は続かないであろう。躑躅ヶ崎の館はわれらに取って数々の思い出があるが、新城に移転の後、これは取りこわし、古材は欲しい者に分かち与えるであろう。別棟や独立家屋などは、まだ屋敷が建てられないで困っている者に与えるから、解体して移築するがよい。他の者も古府中の旧屋敷は移転と同時に解体して移築するなり、古材を家来に与えるなど適当に処置するようにせよ、後にはなにものも残してはならぬ」

勝頼はこれだけ云ってから一条信龍の方に向って云った。

「一条家は武田家の先祖、新羅三郎義光公より三代目の信義公より分家した名家であり、代々この古府中の南部の地を領地として受け継がれている。つまり、一条殿にとってはここは支配地でもあるから、当然のことながら、ここに屋敷があってもかまいませぬ。しかし、いずれは、新府中に屋敷を設けないと、新城へ出仕する際はなにかと不便ゆえ、そのように準備されたらよろしかろう」

と云った。

勝頼は叔父信龍のわがままを許すのに当って、もっともらしい理屈をつけたのであった。

一条信龍の領地は先祖代々、古府中の南部（現在の甲府駅の南部一帯）にあったが、天正九年（一五八一）ころの彼の屋敷は他の御親類衆と同じように躑躅ヶ崎の館の近くにあった。しかし、勝頼はこの叔父のわがままを、一条家

の支配地という名目で許したのであった。

一条家の屋敷だけは取りこわしをまぬがれたが、他の者たちは立ち退くと同時に取りこわせという命令は、家臣たちにはあまりにも無慈悲で片手落ちに思われた。しかし、こうしなければ他の旗本衆や近習衆が、新府中移転に踏み切れないことは分かり切っていた。

大身の屋敷を取りこわして、その古材をその家臣に与える、という方法は家を建てるのに金が無くて困っている者には朗報だったし、独立家屋をそのまま移転するというのもよい方法だった。当時は、古い家を移築する技術は進んでいた。建てるよりも、はるかに楽だった。旗本衆や近習衆が移転すれば、その家がからになる、それを旗本衆や近習衆の家来が貰って移築すればよい。移転の目鼻はこうして立ったが、一度にこれはできなかった。やはり跡部勝資が考えていたように完全に移転するには二年や三年はかかりそうだった。だが、勝頼の決心によって、少なくとも上層部の者は、古府中から新府中への早期移転を決意した。

「お館様が移転なされるならば、家臣は少なくとも、その二、三日前に移転を終らねばなるまい」

と重臣たちは移転を急いだが、

「臣たるものがお館様の先を越すなどということはできぬ、たとえ、先に移転をせよと仰せられても、気持としては主の後に家臣が従うのが人の道というものだ」

などと理屈をこねまわして、移転を渋るものがあった。

長坂長閑斎は率先して移転を始めた。

長坂長閑斎の屋敷は躑躅ヶ崎の館の南側四百メートルほどのところにあった。彼は屋敷を取りこわすに先立って家臣たちにそれぞれ、古材や移築可能な小家屋の譲り先を取り決め、いっせいに取りこわしにかかった。

三日間で長坂長閑斎の屋敷は消え、後に庭だけが残った。庭木や庭石など欲しいという者にはこれを無償で与えたが、簡単には移植できないような松は切り倒すように命じた。

「これは先代様が特にお目をかけられていた松でございます。切ることだけはなにとぞお許しください」

と家宰が云うのを聞きながら長閑斎は云った。

「未練を残してはならない。すべて古いものは去り、これから新しい世が始まると考えてかからねばならない」

老松は切られ、庭石は運び去られ、池は埋められた。家が取りこわされた後には、長坂長閑斎の屋敷跡を思い出させるものはなに一つとして残ってはいなかった。

長坂長閑斎が見本を示したから、跡部勝資、武田信豊等もこれにならった。従わざるを得ないような勢いであった。

天正九年の暮れはおしせまっていた。寒風が吹きすさぶ中で、屋敷町での取りこわしは続いていた。

新府中移転は口実であって、敵の来襲に備えての逃亡ではないかと、古府中に住む人々は口々に囁いていた。古府

中の扇の要は躑躅ヶ崎の館の前の武家屋敷であった。この要が目の前で、取りこわされて行くのはなんとしても物悲しいことだった。

「武田は明日にも亡びるかもしれない」

と囁く者もいた。武田は強い、日本一強いのは武田だと甲斐の人たちは自負していた。その中心地の古府中に住んでいる人々もお膝元にいるということで鼻が高いし、お膝元にいるからこそ生きて来られたのであった。

酒屋の小僧が引っ越しの真最中の跡部勝資の家来、古屋十郎兵衛のところに売り掛け金を取りに来た。

「今は、取りこんでいるから後にせよ」

と古屋の家人が云った。

「新府中に移ってしまったら、いただきに行くのは容易ではございませんので、いまいただいて参れと主人に云われました」

小僧は何度も何度も哀願した。古屋十郎兵衛がこれを聞いて云った。

「御館様が新府中に移られるのはまだ先だ。この家も引っ越しを終り、家族は新府中に移っても、おれは尚この地にしばらくは止っている。それまでは東光寺に世話になっておる。明後日ごろ東光寺に売り掛け金を取りに来るようにせよ」

と云った。酒屋の小僧は、それを聞いて帰って主人に報告すべきだったが、小僧はなにがなんでも取って来いと主人に云いつけられていたから、

「明後日ではいけません、今、ここでお支払い下さい」

と云って動かなかった。その云い方が気にさわったので、十郎兵衛が、

「何度云ったら分かるのだ。今はいそがしいのだ、明後日東光寺に参れ」

と云って、小僧の胸を突いた。小僧はうしろによろめいたはずみに、運悪く足に古材をひっかけて倒れ、庭石の角に頭を打ちつけた。傷はたいしたことはなかったが、頭だったので多量の出血があった。

小僧は出血に驚いて、わあわあとわめきながら、酒屋へ走り帰った。

頭から血を浴びて帰って来た小僧を見て、酒屋の主人は小僧が斬られたと勘違いをした。彼は小僧の手当を家族にたのむと、自らは棍棒を手に持って家を飛び出そうとした。それを番頭が止めた。その騒ぎを聞いて近所の商家の者が集った。

商家の多くは武田の家臣たちに売り掛けをしていた。

「さては、売り掛け金を踏み倒すつもりか、そうはさせてなるものか」

商人たちは口々に叫んだ。たちまち二十人ほどの血の気の多い者が集った。手に手に得物を持っていた。後がどうなるかは考えていなかった。商人たちにしては売り掛け金を踏み倒されたらたいへんなことになる。

古屋十郎兵衛は、おしかけて来た町人たちを見て驚いた。酒屋の小僧を斬ったとか、殺したとか、金を踏み倒すつもりかなどの罵声によって、おおよそ、ことの次第は分かったが、そこで弁解している暇はなかった。彼は自衛上刀を取るしか仕方がなかった。古屋十郎兵衛に仕えていた足軽三人が槍を取り、一人の足軽は急を、隣家の跡部勝資の家来の小林半兵衛に知らせた。小林半兵衛も引っ越しの最中であった。

武士は武士を呼び、町人は町人を呼んだ。なんだかわけは分からなかったが、双方が殺気立っていた。町人の一人が投石したことによって、睨み合いから乱闘になった。武士が槍を取り、太刀をふるって突っ込むと町人は声を上げて逃げたが、すぐに引き返して来て、石を投げた。武士の一人がその石を額に受けて血を出した。その武士は弓矢を持ち出した。弓に矢をつがえることによって、ほんとうの殺し合いになった。町人は弓を恐れて遠くに引いた。

横目付が駈けつけた時には、町人側に怪我人五人を出し、武士側に三人の負傷者を出していた。取調べた結果、原因は分かった。酒屋の小僧の頭の傷はたいしたことはなく血は止っていた。なんでもないような原因で起こった騒動だったが、武田の家臣が古府中の商人と喧嘩をしたなどということはいままで無かったことだけに双方共に衝撃を受けた。武田の家臣は商人たちから、尊敬もされ信用もされていた。売り掛け金を踏み倒すなどということは考えられないことだった。古屋十郎兵衛にしても、酒の売り掛け金を踏み倒そうなどという考えは毛頭なかった。引っ越しの最中にやって来て、うるさいことを云う小僧をたしなめてやっただけのことだった。しかし、この事件によって明らかにされたことは、武田の家臣が古府中の町人から見放されかけているということであった。町人側から見れば、武田家は自分たちを捨てて、新府中へ逃げようとしていると考えるのは当然である。

新府中移転がこれほど大きな問題を含んでいたとは武田の首脳部も気がついていなかったのである。

その夜、躑躅ヶ崎の館で緊急会議が開かれた。この席上で、長坂長閑斎が提案して勝頼が命令した。家臣の屋敷はすべて取りこわすという通達が緩和された。古府中の住民に与える影響があまりにも大きすぎるから、屋敷は一度にはこわさず、少しずつこわして行こうということになった。長坂長閑斎や跡部勝資のように既に屋敷を取りこわした者はしようがなかったが、まだ屋敷を取りこわしてなかった者はほっとした。

穴山梅雪は、躑躅ヶ崎の館の真前に大きな屋敷を持っていたが、明日取りこわそうとしていた前日に、酒屋小僧の騒動が起きて、屋敷の取りこわしは延期された。

家臣たちの屋敷の取りこわしは急がないでもよいことにされたが、躑躅ヶ崎の館の移転とその後の処置まで変更するわけには行かなかった。

館もそのまま残すということになると、なんのために、新城に移転するのか分からないことになる。館は移転後、直に取りこわすことになった。

勝頼は躑躅ヶ崎の館から新府城への移転の日を十二月二十四日と決定した。

古府中の御館をば尽引破、武田廿七代信玄公迄ノ泉水の植木共に一かひ・二かひある名を付たる松の木なンどを切（て）捨給ふは、跡へ御心残されずして、此城へはやく御越有べきとなりての事なり。（『甲陽軍鑑』品第五十七）

『伊勢物語』の行方

御台所の、館へ御うつりのときは、金銀、珠玉を鏤めたる、輿車、あたりもかがやくばかりにて、御供の衆、かずしれず、古府より新府のその間、三百余丁と申せしを、よひつる、さしつる、うつらせたもふ。比（原文通り）は十二月廿四日なり。（『理慶尼記』）

理慶尼は武田信虎の弟武田信友（勝沼五郎信友）の女で、雨宮氏に嫁したが若くして死に別れ、実家に帰っていたところ兄の信元が謀反の疑いを受けて信虎に殺されてから世をはかなみ、故郷の勝沼の大善寺に入り、尼となった人である。理慶尼は勝頼夫人が古府中から新府城へ移転するのを見ていたのではないが、後日、勝頼や勝頼夫人等が落ち延びて来て大善寺に泊ったことがあり、その時の記録を書くついでに、移転の日を記したのである。従って、この文章に書かれた内容は、勝頼夫人の従者の女たちからでも聞いたのであろうが、それにしても、古府中から新府中への移転の行列は華美をきわめたもののようである。

旧の十二月二十四日というと今で云えば二月に近いころだった。季節とすれば、一番寒いころであった。

古府中は気象学的にいうと盆地気候が代表的に表われるところであった。夏暑く、冬はきびしい寒さが来る。

躑躅ヶ崎の館から新府城への引っ越しは十日間にわたって行なわれていた。十二月二十四日にいよいよ、お館様（勝頼）やその簾中が引っ越しするまでには、新府中へ行っても不自由のないように、調度品は勿論のこと、それまで館の中にあったものはことごとく新府城へ移転されていた。

躑躅ヶ崎の館の中には書庫があった。武田信玄が本が好きだったこともあって、書庫には古今の名著やその写し本がぎっしりとつめこんであった。その中で、特に武田信玄が大事にしていたのは、『伊勢物語』定家本の原本であった。

『伊勢物語』は在原業平のよんだ歌を主体として書き上げた歌物語で、『古今集』の撰が始ったころから『後撰集』のできるころまでの長い間にわたって書き続けられたものであり、著者は不明である。この『伊勢物語』には、古本、朱雀院塗籠本と定家本の三種があった。定家本というのは、この『伊勢物語』に藤原定家が註釈を書きこんだものであり、『伊勢物語』の中では、もっとも広く知られたものである。この写本はかなりあって、後世、流布本、天福本となったのである。

武田家の書庫にあった『伊勢物語』は、藤原定家が自ら註釈を書きこんだ原本のことであり、世にも貴重な本であった。

この『伊勢物語』はもともと武田信玄が今川義元から借用していたものだったが今川氏の没落と共にそのまま武田家のものになっていた。

義元の子氏真の代になって、この『伊勢物語』を返却せよという要求があったが、信玄はこれを返さなかった。借りたのではなく、今川義元から譲り受けたのだと云い張ったのである。借りたのか譲り受けたのかは、文章がないからはっきりせず、結局は、躑躅ヶ崎の館の書庫の中に眠ったままであった。

名著『伊勢物語』がいよいよ新府城に移るという前日になって、一条右衛門大夫信龍が勝頼のところへ来て云った。

「『伊勢物語』を新府城へ移すということだが、その前に拙者に貸して貰いたい。写し本を作るのだから十日もあれば作業は終る。もし借用状を書けというならば書いてもよろしい」

信龍はそう云って動かなかった。移転のさなかのあわただしい時に、『伊勢物語』でもあるまいと思っていたが、勝頼にとっては叔父であり、しかも一癖も二癖もある人物ゆえに嫌だとは云えなかった。

勝頼は門外不出の掟を破って、『伊勢物語』を信龍に貸

し出すことにした。貸し出すときには念のために借用状を取って置こうと考えていた。

文庫奉行の布施六郎左衛門は古くから中巨摩郡に荘園を持っていた氏族の子孫であり、名家であった。京都の九条家とも関係があり、古典に明るい人だった。武士というよりも完全な文官であった。

布施六郎左衛門は勝頼に呼ばれて、

「『伊勢物語』はまだ新府城へ移してはいないか」

と訊かれたとき、

「あれは重宝ゆえ、御館様と共に……」

と答えて平伏した。勝頼の傍に一条右衛門大夫信龍が居るのは知っていたが、まさか、その信龍が貸してくれと云っているのだとは知らなかった。

「まだ新府城に移してないのなら、右衛門大夫殿にお貸し申すように。ただし重宝故に、その取り扱いは特に気を配り、手落ちのないようにせよ。右衛門大夫殿は十日間と申されている故、そのように記された預り状をいただいて置くことも忘れぬようにな」

勝頼はそのように念を押した。布施六郎左衛門は、一条右衛門大夫信龍を書庫に案内して、借用状と引き替えに『伊勢物語』を手渡す前に、

「一応念のためにお改め申す」

と云って、信龍の前で、一枚一枚の頁を繰った。当時、武家の文庫奉行は、書物を貸し出す前には、必ずこうして内容を改め、また受け取る時にも頁を繰って内容を改めるのが習慣になっていた。

信龍は漆塗りの箱に入ったままの『伊勢物語』を受け取ると、そのまま、自分の屋敷へは行かずに、躑躅ヶ崎の館の前の穴山梅雪の屋敷に入って行った。信龍はそこで穴山梅雪の正室、奈津の方に会った。

奈津の方の母は三条氏である。勝頼よりは一つ年上で勝頼の異母姉であり、信龍にとっては姪に当っていた。奈津の方は梅雪との間に二子を設け、信千代は夭折し、現在は勝千代一人だけになっていた。

『伊勢物語』はたしかに借りて参った。期限は十日間だから、その間に写し本を取っておくがよい」

信龍は、血統の上では姪に当るが、年齢はそう違わない奈津の方に云った。

「ありがとうございます。叔父さまのおかげでようやく思いを達することができます。ほんとうにありがとうございました。十日以内には必ず写し本を取ってお返し申し上げますから、御心配なさらぬように」

奈津の方は、そう云ってから、話を引っ越しの方へ持っていった。

「叔父上様は古府中に残ってもよいというお許しが出たそうですが、こちらはそうも云ってはおられず、近いうちには、山の中へ引っ越そうかと思っています」

奈津の方は新府中のことを山の中と云った。

「まあ、そう急ぐことはない。勝頼殿も重臣の屋敷は即刻取りこわして至急新府中に越せなどと強いことを云ってはいたが、実際にはそうは行かないで、成り行きにまかせているようだ。この寒い最中に引っ越しもたいへんだから、春になってからにしたほうがよいのではないかな」

信龍はそう云った。信龍は癖のある人だったがもともと人の好い男だった。奈津の方から、

〈嫡男の勝千代と四郎殿の長女真樹姫との許婚の約束を申し入れたが、四郎殿にことわられて以来、どうも敷き居が高くなって困っている〉

と前置きして、『伊勢物語』のことを切り出されると、そんなことなら造作もないことと深くは考えずに引き受けたのであった。

『伊勢物語』は穴山屋敷に二日間とどめ置かれていた。この間に『伊勢物語』の表紙だけを残して、内容は写し本とすりかえられていた。この作業をしたのは、京都からやって来た、こういうことの専門の職人だった。

『伊勢物語』の写し本はかなり多く出廻っていたので、別に貴重品ではなかった。今川氏真と武田信玄が争った『伊勢物語』は定家本の原本だから価値があったのである。この本はもともと今川義元が、金五百両を積んで、京都の公卿から買い取ったものであった。出どころがはっきりしているから、その行き先も日本中の人たちが知っていたのである。

天下人としての出世街道をまっしぐらに走っている織田信長は茶の湯に凝って、由緒ある茶器を集めていた。信長にこのような趣味があると分かると、諸国の大名はいままでのように、鷹や馬や刀剣などを献上するのをやめて、書画、骨董の類を好んでさし出す者が多くなった。

天正九年（一五八一）の十一月のはじめ、徳川家康の命を受けて、酒井忠次が安土城を訪問したとき信長は、

「武田家には、今川家から横取りした『伊勢物語』の定家本の原本があるそうだが、ほんとうか」

と下問した。酒井忠次は古書などにはあまり興味を持っていない武将だから、

「は、そのように聞き及んでおりますが、まことかどうかは存じません」

とごまかした。

「もし、武田の文庫にそれがあったとすれば、焼くのはおしいのう」

と信長はまた云った。

「はあ、はっ、まことに内府様（信長）の申されることもっともなことにございます」

忠次はそうは云ったが、まだ信長の真意が分からないでいた。

「もっともだと思うなら、焼かないで済むように、手配せよ」

信長はいつになくきつい言葉で命じた。

酒井忠次は浜松城に帰って、家康にこのとおりのことを報告した。

「御殿主様（信長）は既に『伊勢物語』のことを気付いておられたのか。余もまたそのことについてはかねてから考えていたことである」

と云った。忠次にはいよいよ分からなくなったので、なぜ、内府様がそれほど『伊勢物語』にこだわるかそのわけを訊いた。

家康は『伊勢物語』は古典の中の名著であり、その原本は、千金、万金を投じても手に入りがたいような貴重品であることを話した後で云った。

「御殿主様がそれを焼くのは、おしいと云われたのは、来年早々にも、織田・徳川連合軍が甲斐の国へ侵攻した際、兵火によってその本の焼失するのを今から心配なされ、今のうちになんとかして取り出すようにと命令されたのだ」

そう云ってから家康はこれはえらいことになったぞと考えこんでしまった。

家康の信書をたずさえて影の使者が、江尻城へ向ったのは、それから間も無くであった。

使者は連尺を背負った商人に姿を変えていた。彼は、穴山梅雪の側近、山本源左衛門のところにこの信書を届けた。

穴山梅雪は家康からの信書を開いて驚いた。『伊勢物語』を織田信長が所望しているからなんとかして武田の文庫から盗み出せという命令だった。

梅雪は腹心の部下波木井義和に意を含めてまず京都へやった。波木井義和は身延出身の名家の出であり、穴山家とも深いつながりがあった。

波木井義和は十日後に『伊勢物語』の定家本の写し本と職人風の男を伴って江尻に帰って来た。この男は偽せ本や偽せ古書作りの名人であった。

波木井義和が穴山梅雪に明らかにした、『伊勢物語』原本のすりかえのやり方は、意外に簡単だった。

「『伊勢物語』の原本を、お館の文庫から借り出していただければ、それで万事が片付きます」

と彼は云った。『伊勢物語』の原本の表紙だけを残して中身をそっくり入れ替えるのはまことに簡単なことであり、こうすれば、まず十中八、九まで成功するだろうと云った。

波木井義和が穴山梅雪の密命をおびて古府中に旅だったのはその翌日であった。

穴山梅雪の正室奈津の方は、梅雪からの書状を持った波木井義和と会って、『伊勢物語』のことを聞かされ、信長の命令とあれば嘘を云うのも止むを得ないことだと観念した。

奈津の方は考えに考えた末、一条右衛門大夫信龍を利用することに思いついたのである。それも引っ越しのどさくさにまぎれてのことであった。

京都から連れて来た偽せ本作りの名人は『伊勢物語』の内容を見事にすりかえた。誰が見ても中身がそっくり、すり変えられたとは見えないほどのできばえであった。

波木井義和は、その『伊勢物語』の原本を持って江尻城に行き、江尻城の穴山梅雪からこの『伊勢物語』の原本は徳川家康に送られ、更に安土へと転送されて行った。

『伊勢物語』の原本がどのような運命をたどろうともそれには全く関係なく、『伊勢物語』が文庫奉行の手から武田信龍の手に渡ったその翌日に盛大な引っ越しが行なわれた。引っ越しの行列は一里も続くほどの長さであった。その中には幾つかの輿があり簾中が乗っていた。

勝頼は馬に乗って躑躅ヶ崎の館を離れた。長い長い行列の前後を警護の武士が並んでいた。

古府中の人々はことごとく外に出て、領主の一行の行列を見守っていた。武田が栄えている最中の引っ越しならば、行列にも勢いがあり、見送る人たちの目にも惜別の悲しみはなかったに違いないが、高天神城を失って以来、急に持ち上った新府城建設とその移転の話は、住民たちには、敵の侵入に備えるというよりむしろ逃避のように感じている者が多かった。

（お館様が去った後はどうして生計を立てて行ったらいいだろう）

と心配しながらも、新府中へ移転することもできずに愚図ついていた多くの町人たちは、明日にもおしよせて来るだろう生活の不安におびえ切っていた。

行列に対して口を利く者もないし、泣く者も笑う者もなかった。古府中の住民が一丸となって冷い眼で行列を見送っている中を、十人、二十人と山のような荷物を背負い、或は荷を満載した車を曳いて行列の後を従いて行く一団がいた。小商人の群れと遊女の群れであった。特に家らしい家はなく、仮小屋のようなもので商売できる自信を持っている人たちだけが行列の後に従ったのであった。

行列の最後が古府中の町を出たところから雪になった。小雪だったが、時刻が経つにしたがって本降りになった。行列はその雪の中を新府城を目ざして進んで行った。平らな道ばかりではなく、登ったり下ったりの道だった。田や畑や山林はやがて白一色に覆われて行った。

行列の沿道に当る民家は固く戸を閉していた。行列に失礼があってはならないという配慮から子供たちを遠ざけたのか、子供たちの声はなかった。

午後になって雪は吹き降りとなった。行列は意外な苦労をしなければならなかった。行列の中に入っていた荷駄車が動かなくなった。車は列外に置かれ、荷は人の背で運ばなければならなくなったが、人夫がいなかった。附近の村から、男たちが徴用されたり、馬が曳き出されたりした。

はっきり吹雪の様相を呈して来ると、行列の動きは更に遅くなった。輿を担ぐ人夫が疲れ果てた。交替が頻繁にな

されたが、新しい者を加えぬかぎり前進は困難のようであった。沿道の住民は、領主たちが困難していると聞くと、自ら進み出て協力した。縄や綱や橇などが持ち出された。橇を持ち出した者は、橇と共に供の列に加わった。

古府中を出るときは飾り立てられた行列だったが、新府城に着いたときには、武家行列だか、百姓の行列だか分からないような状態になっていた。そろそろ暗くなりかけていた。

新府城は山の中にあった。いよいよ里を離れて輿が山の中に入って来ると、簾中をはじめとする女たちは、涙こそこぼさないが、いますぐにでも涙を流しそうな顔をした。だが彼女たちも東三の丸、西三の丸の郭の中に入り、居所に落着くとようやく言葉を発した。木の香りがぷんぷんする新築の郭だったが、住むための用意は完全ではなかった。古府中の館から運びこまれた調度品が新築の家には不似合いであった。間仕切りの木襖がなかったりした。戸や雨戸の建てつけが悪くて動かなかったり、隙間風が洩れたり、とにかく、あわただしい引っ越しだったし、城も完成とまでは行っていなかったから不備だらけであった。

北の方に仕える中臈が、北の方の手足を拭くための湯を求めたが、湯はなかった。雪の中を危うく凍傷にかかりそうになってようやく新館にたどりついた人々は、まず熱い飲み物を求めた。湯はたちどころに無くなった。

全員が腹をすかせていた。食事の用意はしていたが、なにしろ大人数だったから、それを賄うだけの鍋、釜が無かった。食事はお館様や簾中や重役たちが先で、この引っ越しで、もっとも苦労して腹をすかせている人たちには何時飯が出るやら、出ないやらそれすら、見当がつかない状態であった。こういう手配りが綿密に計画されてなかったからであった。

こんな場合、近くに大きな寺や村などがあれば、炊出しに協力できるのだが、それがなかった。城はぽつんと森の中にあった。

飯を食わせろ、もう少し待て、いやこれ以上待てないなどと云い争っている声が、城の隅々にまで響きわたると、空腹に我慢できなくなった者は、

「焼き米でも出したらどうか、そのくらいの用意をして置いてもよい筈だ」と怒鳴り立てた。

食事のことで、いまにも斬り合いが始まるような緊張した空気のままで夜が更けて行った。全員に、どうやら半煮えの飯が行きわたるまでには、夜半過ぎまでかかった。

翌朝は前日とは打ってかわった晴天であった。

勝頼主従が新府城へ移転したという情報は穴山梅雪から徳川家康へ、そして織田信長へ通報された。

勝頼主従が古府中から新府城へ移転した日から数えて五日目に、酒井忠次が『伊勢物語』を持って、安土城の織田信長を訪れた。

「なにっ、『伊勢物語』を持って来たとな」

信長は満面に喜色を浮べて謁見の間に現われた。まさか、こうたやすく、『伊勢物語』が手に入るとは思っていなかったからそれだけはやく見たいという期待は大きかった。

信長はそこに控えている酒井忠次を見て、

「忠次、それをここへ……」

と云った。挨拶を受けるのも、もどかしいようであった。

忠次は、持って来た箱をうやうやしく開き、中から『伊勢物語』を取り出すとそれを盆の上に置いた。信長の近習がそれを信長のところへ持って行った。

「これが『伊勢物語』定家本の原本か」

信長はそう云って取り上げると、ちょっと表紙を眺めてから頁を繰っていった。時代の経過は、まさしくそのまま本全体に表われていた。

信長は本を閉じ、もう一度表紙に目をやってから、忠次に訊いた。

「内容にくらべて表紙がちと新しく見えるが……」

それは、信長でなくとも、表紙と内容を比較すれば誰でも気がつくことであった。

忠次は、その質問を受けると、

「さればでございます」

と前置きして、武田の文庫から『伊勢物語』を借り出し、すばやく中身をすりかえてしまった、そのいきさつを述べた。

「すると、この表紙は？」

信長の眼が光った。しまったと忠次は思ったがもう遅かった。信長の雷のような声が頭上で聞こえた。

「もう一度訊ねる。この表紙はにせものか」

「写し本の表紙でございます。写し本の中身は向うへわたり、原本の中身がこちらに移ったのでございます」

忠次は正直に答えるよりいたし方がなかった。

「ばか者め、本の表紙は人間で云えば首だ。たとえ内容が『伊勢物語』の原本であっても表紙が原本でなければ、首のない死骸と同じだ。こんなものをよくもおめおめと持って来たものだ」

信長は『伊勢物語』の原本を掴むと、酒井忠次に向って投げつけて、さっと座を立った。

酒井忠次が面目を失ったことは徳川家康が面目を失ったことになる。家康は忠次の報告を受けると、このことを非常に気にして、早馬を飛ばして、穴山梅雪に『伊勢物語』の原本の表紙をも至急さし出すように命じた。このことにかかり合った波木井義和が再び古府中の穴山梅雪の屋敷にかけつけた。

中身だけがすりかえられた『伊勢物語』はまだ奈津の方のところにあった。借用期間が十日間だから、それまでは留置かれたのである。

「明後日には、約束の十日目ですので、これを信龍殿にお返し申そうと思っておりました」
奈津の方はそう云ってから、
「中身だけではなく表紙まで取り替えるということは……」
それは無理だろうと云って波木井義和の顔を見た。
「お家のため、止むを得ないことでございます。表紙を一目見て偽せ物だと見抜ける者はただ一人文庫奉行の布施六郎左衛門しかございません」
波木井義和はその布施六郎左衛門を殺すしかないと思っていた。
「もう一人ございます。叔父の一条右衛門大夫信龍でございます。表紙がほんものなら叔父は内容までは疑わないでしょうが、もし表紙が違っていたら、写し本にすりかえられたことに即座に気がつくでしょう」
そう云われると波木井義和はそこで言葉につまった。布施六郎左衛門を殺すことは、それほどむずかしいことではないが、信龍の方はそう簡単に殺すわけにはいかなかった。
「ではこのようにしたら如何でしょうか」
波木井義和は奈津の方に耳打ちした。
その夜、穴山屋敷に賊が忍びこんだ。家人に騒がれて逃亡した。穴山家から、古府中の治安に当っている横目付にこのことが報告された。

賊は穴山梅雪邸だけではなくあちこち入った。重臣たちの幾人かが引っ越した空屋が増えたことと、古府中警備の武士が、新府中に移転して、手薄になったからであった。
一条右衛門大夫信龍は勝頼との約束もあったので『伊勢物語』を返して貰うべく穴山屋敷にやって来た。
奈津の方は信龍を迎えて、
「おかげ様で立派な写し本ができました」
とお礼を云ってから、箱に入れてある『伊勢物語』を信龍に返した。信龍は一応中身を改め、すぐそれが原本ではなく、写し本であることを表紙で見破った。
「これは原本ではない」
と信龍が云うと、奈津の方は、そんなことはございません、確かにそれは箱に入れたまま、私の部屋の棚に置きましたと云い張っていたが、突然、
「或は昨夜の賊が……」
と声を上げた。
「昨夜賊が入ったのか」
「はい、幸いなにも取られませんでしたが、横目付に届けは出して置きました」
と奈津の方は云ったままあとが続けられなかった。
「その賊は『伊勢物語』をすりかえるために入ったのだと考えられるのか」
信龍は云った。奈津の方は、頷いて、
「このごろ、なにかと秘密が洩れたり、妙な噂が立てられたりして困っておりますが、まさかこのようなことが起ころうとは」
どうしたらよいでしょうかと奈津の方は云った。
信龍は人を疑うことを知らない男だった。彼は『伊勢物語』の裏になにがかくされているかは知らずに、その写し本の『伊勢物語』を受け取ると、残務の整理のために、まだ古府中にいた文庫奉行の布施六郎左衛門を呼んで云った。
「昨夜、拙宅に賊が入った。何物も盗られなかったが、後でよく調べてみると、『伊勢物語』の原本が、この写し本にすりかえられていた」
と云って偽せ本をさし出した。布施六郎左衛門は驚いて言葉も出なかった。
「できたことはしようがない。本来ならば責任を負って拙者が腹を切ればよいのだが、古本一冊のために腹を切るのは、なんとしてもばかばかしい気がする。このことは、おぬしと拙者しか知らぬことだから、もしおぬしが黙っていてくれるならば、将来とも大いに恩に着ることになるが、いかがしたものか」
と単刀直入に相談した。
布施六郎左衛門もこう云われたら、聞いてやるよりいたし方がなかった。偽の『伊勢物語』は新府城の文庫に収められた。
しかし、この偽の『伊勢物語』もそれほど長い寿命は保てなかった。それから三ヵ月も経たないうちに新府城に火が放たれることになり、『伊勢物語』は勝頼主従と共に旅に出たままその消息を断ったのである。
『伊勢物語』の定家本の原本は表紙と中身が再び合一されて、酒井忠次によって安土城へ届けられたが、織田信長は、自らそれを受け取ろうとはせず、従者に命じて、そのまま安土城の書庫に収めさせた。酒井忠次には、御苦労の言葉さえもかけられなかった。
『伊勢物語』原本は安土城でそれから三ヵ月間眠り続けていた。そして天正十年六月、本能寺の変によって、信長が死に、安土城が焼かれると同時に、『伊勢物語』定家原本もまた灰燼と帰したのである。

木曾義昌逆心の事

天正九年（一五八一）の大晦日の昼ころから降り出した雪は一夜降り積って、天正十年一月元旦に止んだ。夜が明けたころには空はすっかり晴れ上りまぶしいばかりの上天気になっていた。

新府城へは朝から年賀のため出仕する者が続いた。新府城は出来たばかりなので、武家屋敷街は未完成であったが、次第窪、伊藤窪、石水などにある、穴山、山県、長坂、跡部、甘利、青木、小山田などの家臣たちの屋敷からは、乗馬姿に徒歩の衆をつれた一団が新雪を蹴散らして新府城へ登城し、本丸の大広間に伺候して武田勝頼に新年の挨拶を行った。

「大雪は豊年の先がけとか、今年はさぞや、豊年と相成るでしょう。また新府城完成と共に武田家はいよいよ安泰、発展に向うものと思われます。まことに祝着のいたりにございます」

というような、お世辞をたらたらと並べる者が多かった。彼等が口々に大雪、大雪と云っているように、この日の積雪はこの地方では珍しく、三尺ほどもあった。だから出仕するのはたいへんだった。しかし次々と人が通って踏みかためると、そこに道ができて、どうやら無事に通行できるようになった。それも日が高く上ってからである。この大雪のために難儀を蒙ったのは、古府中から来た人たちだった。新府中にまだ屋敷がない人や、屋敷があってもなにかの理由で古府中にいままでどおり住んでいた人は、この一月元旦の出仕に間に合うためには、古府中を暗いうちに出発しなければならなかった。

しかしこの深雪だった。元旦の挨拶の時刻は特に決ってはいなかったが、信玄の時代から、辰の刻（午前八時頃）に参集することになっていた。集ったところで領主から御酒をいただき、この日は早々に退出し、それぞれの屋敷で正月の客を迎えることになっていた。

勝頼の正式な許しを得て古府中に住んでいる一条右衛門大夫信龍も、御親類衆や家臣団の手前もあって、やはり新府城へ出仕しないわけには行かなかった。家臣が、このことを気にして、大晦日の夜半に古府中を出発するようにすすめたのだが、

「この大雪だ。そう無理することはない。朝になって出発し、明日中に新府城へ行けばよい」

と云って、結局古府中を出発したのは明けてからだった。

夜が明けてからだったから、雪は止んでいたし、人馬が

通った道があった。それでも二里半（約十キロ）の道を五時間ほどかけて、昼ころになってようやく新府城にたどりついた。

遠くで見ると、白く化粧された山の上を雪をいただいてそびえ立つ新府城はまことに美しいものだったが、いざ城に近づいて見上げると、容易には近よれないほど、堅固な城に見えた。

一条右衛門大夫信龍の一行は主従五十人ほどであったが、追手門の前で小休止して遅れた者を待ち、服装を整えて、追手門をくぐり坂道を城へ向って登るつもりだった。

汗を拭いている者もあった。雪を払っている者もあった。携行食の焼き米を口にいれている者もあった。そのようにしている前を、下城する者が横目で睨んで通って行った。御苦労様と声をかけた者が多かったが無視して通る者もいた。御親類衆でありながら、飽くまでも古府中から動こうとしない一条右衛門大夫のことをよく知っていたからである。

一条信龍の一行は勢揃いが終ると追手門をくぐった。坂を登り切って、坤門（西南門）まで来たときである。いささか酒に酔った一団に出会った。徒歩衆である。

「ずいぶんとお早い御出仕でござるな」

一杯きげんで一条信龍の家来に云ったのは長坂長閑斎の家来であった。

「余計なことをほざくな、早いの、遅いのと、きさま等巾着武士に云われる義理はないわい」

一条信龍の家来はそう云い返した。巾着武士とは悪口である。長坂長閑斎が勝頼の腰巾着的な存在であることを軽蔑した言葉であった。

「なにおっ！」

怒った長坂長閑斎の家来が酔った勢いで、一条信龍の家来を雪の中に突き飛ばした。雪の中に倒れた男は、起き上ると同時に抜き討ちにその相手に斬りかかった。酔った方はよけそこなって肩のあたりに手傷を負った。こうなったらもう止めようがなかった。たちまち双方入り乱れての乱闘となった。

一条信龍はこれを見て驚き、

「やめよ、やめないか、城内であるぞ……」

と怒鳴って、どうにか取り静めたものの、あっという間に一人死んだ。出血多量で死んだのは、長坂長閑斎の家来で五味九郎左衛門という男であった。

新年早々、城内で喧嘩口論のあげく、斬り合いとなって、一人が死んだということは縁起をかつぐ人々にとってはまことに不快なできごとだった。

（今年はなにかよくないことが起こるのではないか）

口にこそ出さなかったが、この不祥事は武田家全員の心を寒くした。よくないことというと当然のことながら、織田軍の甲州攻撃近しという噂が頭にちらつくのである。織田軍が攻めこんで来るとすると、伊奈口だろうか、木曾口

だろうか、こんな具体的なことまで考える人があった。
勝頼はこの事件の報告を一条右衛門大夫信龍自身の口から受けた。ほとんど同時に長坂長閑斎も家臣から五味九郎左衛門が死亡したという報告を受けた。
勝頼は、渋い顔をしてそのことを聞いていた。めでたい日に城内で刀を抜いて斬り合った両名が家禄を召し上げられたことが、父信玄の時代に一度だけあったことを勝頼はふと思い出した。父はその処分を後日行った。
「その者たちは厳重に謹慎させて置くように、追って沙汰をいたす」
勝頼はそう云ってから、ふと、おそらくいまごろ安土の城内で新年の宴を催しているだろう織田信長のことを思った。
その日安土でもやはり甲斐の新府中におけると同様、元旦早々血を流すという不祥事があった。この日、安土の摠見寺の毘沙門堂において御殿主（信長）臨席の初神楽があるというので、隣国の大名、小名、織田一族こぞって摠見寺におしかけた。それも供廻りをつれての参加だったし、時刻が辰の刻ときめられていたので、一度に多くの人がひしめきあって、狭い境内の石垣を押し崩し、圧死者数名と重傷者を多く出した。この騒ぎで腰の刀を失った者が出たほどの騒ぎであった。このためにしばらく舞台の方は遅れたが、信長の命によって無事初神楽は終った。
「新年早々人が死ぬなどとは縁起が悪い、なにかよくないことが起らなければよいが」
と囁く者は数知れずあった。この新年の不祥事件はこの年、織田信長が本能寺において殺されるという運命の予告であったと書いたものもある。だが、迷信のようなことにはいっこうに無関心な信長は、このことはたいして気にもしないし、事故の発生原因の取調べは行ったが、特に責任者を重く罰するようなこともなかった。この年の元旦の信長はいつになく御機嫌がよかった。
信長は派手なことをするのが好きだった。その御殿主の好みに合うように次々と新年を祝う行事が行われた。連日爆竹がはなやかな音を上げた。
信長はこのような泰平の空気の中に没入していながらも、彼の頭の中では天下平定の方策が巡らされていた。当面の敵を毛利にするか武田にするか、信長に取ってはこれがずっと気になっている問題だった。武田勝頼がかねてから人質としていた、信長の子の御坊丸勝長を送り返して来たのは前年の末であった。その時信長は、武田弱し、討つならば今だと思った。一応はそう心に決めてはいたのだが、毛利のことも依然として気がかりだった。
甲斐進攻の準備は整えてはいたが未だに出発の下知を下さないのは毛利のこともあるが武田進攻のきっかけになるものがなかったからであった。
一月十六日になって、佐久間信盛が紀伊の熊野の山奥で病死したという知らせを受けた。

「そうか右衛門もとうとう死んだか」
信長は、そう云って、きらりと目を輝かせた。
（信盛が死んだか、ではいよいよ武田攻撃にかかるべき時が来たようだ）
信長はそう考えて、重なる家臣たちを召集し、武田勝頼攻撃の軍を発することを宣言した。
佐久間信盛の死と武田勝頼攻撃とがなぜ関係があるか、それを説明するためには、しばらく過去を振り返って見なければならない。
元亀三年（一五七二）十二月、三方ヶ原において、織田・徳川連合軍と武田軍とが大会戦をして、織田・徳川連合軍が敗れた。この原因は数において武田軍が勝っていたということもあったが、連合軍が敗けた最大の理由は、合戦の最中に佐久間信盛が率いる一千の軍団が、武田勝頼の率いる騎馬隊の攻撃を受けると、ろくろく戦いもせずに敗走してしまったことにある。このため徳川軍は武田軍に側面を突かれることになって、一時は徳川家康の生命さえ、危ぶまれたほどの結果になったのであった。
織田信長はこの佐久間信盛の敗走を苦々しくは思っていたが敢て責めようとはしなかった。そのかわり、三方ヶ原の大会戦から三年目の設楽ヶ原での大会戦において、佐久間信盛にその償いをさせたのである。
織田信長は佐久間信盛を最左翼の陣に置いた。最右翼、最左翼は作戦上もっとも重要なところで、最強な部隊をここに置くのが常道であったが、信長は敢て、佐久間信盛を最左翼に置き、
〈そちは密使を武田方に送って、武田方に内通したように見せかけて、敵を戦場に引き出し、無理矢理に合戦に誘いこめ、このためにはあらゆる手段を用いよ〉
と命令したのである。あらゆる手段というのは、誓書を入れよということだった。武将が神にかけて誓書を書くということはたいへんなことであり、その誓書はたいていの場合は信用された。佐久間信盛は信長の命令に抗し切れずに、密使を武田の陣へ送った。
《この佐久間信盛は三方ヶ原の敗戦以来、信長公にひどくうとんぜられています。このままだと将来もおぼつきませんから、武田方の味方につきたいと思います。どうか私の気持を汲み取っていただき、なにぶんのお沙汰をお待ち申し上げます。このことは神にかけてお誓い申します》
と書き、その次には神名を書き連ねて、血判を押した。
武田側は一時は疑ったが、誓書まで添えてのこの書状をついには信用して、佐久間信盛の申し入れを受け、
（織田・徳川連合軍と武田軍とが合戦を始めてしばらく経ったころ、機を見計って、佐久間軍は敗走と見せかけて、織田信長の本陣へ斬りこむ、その時、武田軍は一せいに突撃に移って連合軍を討つ）
という申し合わせができた。
そして、運命の日天正三年（一五七五）五月二十一日の

日を迎えたのである。ところが佐久間信盛は裏切らなかった。それればかりか、佐久間陣の背後には次々と新鋭部隊を廻して来て、武田軍の猛攻を防いだ。

（佐久間信盛は誓書まで入れていたのに、あれはすべて嘘であったか、計られたか）

と武田側が気がついた時はもはや、どうにもならないところまで、武田軍は深入りしていたのであった。武田軍は八時間戦った後、敗走した。武田軍が潰滅的な損害を受けたのは、逃げる最中のことであった。

（佐久間信盛め、きたない手を使ったな）

武田の諸将は悔いたが、それは後の祭りであった。

世に設楽ヶ原の戦いは鉄砲と馬との戦いで、馬が鉄砲に負けたと単純に考えているのは、必ずしも真相をつくものでない。武田軍は鉄砲の威力を充分に知っていた。知っていて、無茶な突撃を繰り返すような合戦をする筈はない。武田軍は敵の謀略にひっかかって負けたのである。

信長は武将としてもっともきたない手段を弄して武田軍に勝ったことを気にしていた。豪胆であり細心な信長は極端なほど神経質なところがあった。信長は今や天下人とならんとしていた。毛利が降伏するのも時の問題だとすれば、その後天下に号令するのは彼以外になかった。彼はそうなったとき、

（信長は設楽ヶ原の合戦できたない手を使って武田軍に勝った）

とは云われたくなかった。信長は多くの合戦を勝ち取ったが、それぞれ正面切っての戦い様であった。謀略戦も使ったが誓書まで部下に書かせて、敵をあざむくようなきたない手は使ったことはなかった。信長は神や仏にはどちらかというと無関心でありながら、その神や仏を捨て去ることはできなかった。佐久間信盛に神をだしに使うように命じたことは、自らが神を裏切ったことではないかと考えると、いやな気がした。神よりも彼は世間の目をおそれていた。天下人になるには汚点を持っていてはならないとも考えた。

汚い手を使って設楽ヶ原の一戦に勝った真相を知っているのは佐久間信盛であった。他の部将等も、信盛が武田軍を謀略にかけたことは知っていたが、誓書まで与えて敵を裏切ったことや、そうせよと信長が命じたことなどは知らなかった。

信盛がもしこの真相をぶちまけたら自分の立場はどうなるか、信長は設楽ヶ原の大勝利以来、そのことがずっと頭の中にあった。

信長は天正八年八月になって朝廷の仲介により、本願寺派と和平を取りきめた。そして信長は本願寺派の一統が大坂城から立退いた直後に、信盛追放を思いついた。

天正八年八月十二日、織田信長は十九ヵ条よりなる折檻状を佐久間信盛にたたきつけて追放の処分に付した。罪状は縷々書き並べてあったが、その主なる点は二つあった。一つは三方ヶ原の大会戦において、戦わずして敗走したこと、大坂城攻撃が不成功に終り、終に朝廷まで担ぎ出さねばならなかった責任であった。三方ヶ原の敗走は弁解の余地はなかったし、信盛はそれを認めていた。だから設楽ヶ原の合戦では、神をあざむいてまで、味方を有利に導いたのであった。大坂城包囲戦はたまたま運が悪かったというしかなかった。誰が大坂城包囲作戦の総大将に選ばれても、毛利の水軍によって、海上権を握られ、海上から兵糧を大坂城へ運びこまれている限り、この城を落とすことはできなかったのである。信盛の責任というよりも、織田水軍が毛利水軍には勝てなかったがためにこの戦は長びいたのであった。

だが信長は強引にすべての責任を佐久間信盛にかぶせた。その追放のやり方も苛酷きわまるものだった。普通このような場合でも捨扶持ていどのものは与えられるのがならわしであったが、かつての重役の職をはぎ取り、いっさいの財産を没収して紀伊の山中へ追いこんだばかりでなく、もし佐久間信盛父子をかくまう者があれば厳重に処罰すると布令を出したのである。

それでも佐久間信盛父子は陰で助ける者があったので追放されてから一年半は生きていた。そして天正十年に年がかわって間もなく、熊野の山中の樵小屋を訪れた猟師風の男がさし出した餅を食べて死んだのである。その猟師は信長がひそかに放った刺客であった。信盛は刀で殺されずに毒殺されたのである。信盛の子甚九郎正勝はその時、食物を探しに山を降りていたからその難には会わなかったが、彼は悶死している父を見てすべてを知った。その甚九郎のところに赦免状が着いたのは天正十年の一月の末だった。信盛の死によって、信長はほっとした。信盛が死ねば設楽ヶ原の合戦におけるきたないやり方を知っている者はいなくなる。たとえそのことを信盛が甚九郎にしゃべっていたとしても、それを甚九郎が口外すれば殺されることを充分に知っている筈であった。

信長はそこまで勘定に入れて、甚九郎を許し、いささかなりとも思いやりがあるところを諸将に見せようとしたのであった。

信長は佐久間信盛が死んだと聞いたその日に毛利は後廻わしにして武田を討つことに決めた。諸将にその準備を云い渡した。

「武田を亡ぼすには軍兵の数だけ揃えばよい」

信長はこのようなこともロにした。てんから武田を舐め切った云い方だったが、その軍の数をまとめるのが一苦労であった。毛利に対する備えをちゃんとしての出征でなければならなかった。近隣の諸豪で裏切るものはさし当り考えられなかったが、用心深い信長のことだからそのへんのことはぬかりなくやった。戦争の準備がすべて終って甲斐へ攻めこむのは二月の半ば過ぎと、およそ一ヵ月間の先まで予定の中に入れた。

信長からの命令はまず、駿河の徳川家康のところに飛んだ。

「いよいよ御殿主様みずから甲斐へ兵を入れられることになったか」

家康は長いこと待ったその日がとうとう来たのを知った。

徳川にとって武田は最強の敵であった。背後に武田がいるかぎり徳川は手も足も出なかった。織田軍の援助なくして武田軍を破ることはできなかった。だから、勝頼が大軍を率いて、何度攻めこんで来てもまともに戦ったことはなかった。常に逃げていたのだ。ようやく高天神城を取り返し、穴山梅雪との間に密約が結ばれても、徳川が単独で武田を亡ぼすことはできなかった。しかし織田信長が立ち上って、甲斐へ攻めこめば、今度こそ、こちらの勝利である。

家康は穴山梅雪へ織田信長からの命令を伝えた。

穴山梅雪はすかさずこのことを木曾義昌に伝え、かねて申し合わせたような行動に出るようにとすすめた。

木曾義昌は梅雪からの密書を受け取ると、使者を美濃の苗木城主遠山久兵衛へ送り、織田信長に降伏することの誓書を提出し、人質として弟の上松蔵人を差し出すことを申し出た。このことはかねてから織田側も承知していたが、いよいよの時まで人質のことは控えていたのである。武田側に気がつかれないためであった。ここまで来たら、もう隠す必要はないから、かねてきめられたとおりのことをしたまでのことだった。

一月二十七日の夕刻であった。

馬に乗った農民風の男が、新府城の追手門に来て怒鳴った。

「木曾殿よりの御注進でござる。はや開門せられい」

身なりは農民風だが言葉使いは武士であった。門を守る武士が応対すると、

「木曾において重大事が発生した故御注進に参った。火急のこと故書状は持ってはおらぬ。身分も申せぬ。拙者のことは跡部大炊助様が知っているゆえ、即刻大炊助様の前に案内せられよ」

と云った。目の配り方といい、口のきき方といい、名のある武士が変装したのだと分かるから、粗略にはできず、跡部大炊助に早速伝えようと思ったが、大炊助は既に下城して次第窪の屋敷に帰っていた。門を守る武士はこのことを城内警備に当っている上役に伝え、使者を出して大炊助に報じた。

使いが来たとき大炊助は風呂に入っていた。木曾からの急使というので、いそいで風呂から上って馬で登城した。

大炊助は木曾から来た男に会った。どこかで会ったような気がするが、はっきりした記憶はなかった。

「拙者は茅村備前守の家来、有賀隼人でございます。お久しぶりでございます」

と挨拶した。

「しばらくだったな。急の用とはなんだ」

大炊助は相手が云うのに合わせて、しばらくだったなと答えたのである。挨拶より話の方を聞きたかった。

「お人払いを願います」

有賀隼人はそう云うと、あたりを見廻した。ひどく緊張した顔だった。大炊助がそのとおりにすると、有賀隼人は膝行して近くに寄り、まず結論から先に云った。

「木曾殿の様子がおかしいので、主人の茅村備前守の命により早々に御注進に参りました」

と云った。茅村備前守は武田勝頼の姉が木曾義昌に嫁ぐとき、つき添いの武士として木曾へ行った人で、云わば武田家が派遣した目付役的存在の人であった。

「わが主人（茅村備前守）が見知らぬ男を城内で見掛けたのは十日ほど前でございました……」

有賀隼人は話し出した。十日ほど前に茅村備前守が知らない顔を城内で見掛けて以来、城内はなにか様子がおかしく、上層部の者がひそかに寄り合って囁き合ったり、わざとらしい態度を取ったりするので注意していると、昨日木曾義昌の弟の上松蔵人が十騎ほどを率いて美濃へ向った。しかもその一行の中には、美濃苗木城の侍が加わっていた。

「わが主人の申されるには、云いにくいことながら、木曾様の御逆心かと察せられますので至急、御取り調べあるようにとのことでございます」

「なに木曾殿御謀叛となな」

跡部勝資は驚いた。湯上りの冷えた身体の背筋のあたりに悪寒が走った。捨てては置けなかった。勝資は有賀隼人に食事を摂り、着替えをするように命じてから、勝頼に至急の面会を乞うた。

寒い夜であった。跡部勝資と武田勝頼とは向い会ったまま、この驚くべき情報について話し合った。義兄に当る木曾義昌が織田信長に通ずるなど考えられないことであった。勝頼はそれが誤報であってくれることを願ったが、茅村備前守からの注進とあらば信じないわけには行かなかった。

夜中、走り馬が長坂長閑斎の邸と武田信豊の邸に向った。緊急事態発生のための召集であった。

武田勝頼、武田信豊、跡部勝資、長坂長閑斎の四人は、衣服を替えて出て来た有賀隼人に会って直接に話を聞いた。

「まず、八分はお館様（木曾義昌）御逆心と察せられます。上松蔵人様は人質として美濃苗木の城主苗木久兵衛殿のところへさし出されたものと推察されます」

有賀隼人は云った。

「推察だけでは分からん、確たる証拠があるか」

長坂長閑斎が云った。

「上松蔵人様が国境を越え美濃路に踏みこんだのを拙者が

この目で確かめてまいりました」
有賀隼人は臆さずに云った。
「信じられぬ。木曾殿がさようなことをするとは想像すらできないことだ」
長閑斎は何度か云ってから、
「とにかく使者をやって上松蔵人殿がいるかいないかを確かめ、もし不在ならばその所在をただせばよい。なにもないのに、木曾殿を疑うようなことをしては、あとあと、のっぴきならぬことになる」
その長閑斎の説には他の者も賛成した。ここまではっきりしていたら、すぐさま兵を向けるべきだったが、まさか木曾義昌が謀叛など起す筈がないという気持が、いままでになく姑息な手段を取らせたのである。
跡部勝資は有賀隼人を木曾へ返し、改めて武田勝頼の使者として、原貞胤を木曾へ派遣したのである。
原貞胤が木曾へ着くと、木曾はなにごともないように静まりかえっていた。貞胤は木曾義昌の家老山村三郎左衛門良侯に会って、
「上松蔵人殿の行方についてよからぬ噂を聞いたので主命により取り調べに参った」
と切り出すと、
「ああ、蔵人殿のことなら、本日新府中へお届けしようと思っていたところである」
と前置きしてつぎのように語った。

「上松蔵人殿は前々から気分が落つかず異状な振舞いがあった。妙にはしゃいだり騒いだりするかと思うと、急にだまりこんで、三日も四日も口をきかないようなことがあった。数日前のことである。急に狩りに行くと云い出して、家来を連れたまま美濃の領地に踏みこんでしまい、苗木城の者に捕えられてしまった。少人数ゆえ、一人残らずとらわれの身になってしまった。委細は書状にしたためて、今日明日中に新府中へお送り申す。嘘と思うならば、原殿御自身で調べられよ」
山村良侯はそれ以上のことは云わなかった。いかにもこじつけのように思われるので更に、こまかなことを問い正そうとすると、
「原殿、たとえお使者の身であろうともわが殿（木曾）を疑うようなことを口にされるならば容赦は致しませぬぞ。わが殿は新府中のお館様（勝頼）の義兄に当られることをよもやお忘れではなかろう」
と高圧的に出た。こうなると、原貞胤も云いようがなく、そのまま新府中に帰って報告せざるを得なかった。
原貞胤が新府中に帰城したその日に上田城へ行っていた真田昌幸が新府中に帰って来た。勝頼は早速木曾のことを昌幸に相談した。
「有賀隼人が注進に来たのは何時でござる」
「たしか一月二十七日……」
と勝頼が云うと、

「今日は二月七日。いったい重役たちはなにをしておられたのだ」
真田昌幸は城中に聞こえるような声を上げた。
「有賀隼人の注進だけで、木曾殿の逆心は明らかなのをなぜ十日も放置されました。直ちに出兵しないと取り返しのつかぬことになるやもしれませぬ」
真田昌幸は顔色を変えて云った。
「やはり木曾殿は謀叛したのか」
勝頼がそう云っているところへ、美濃方面に配置してあった諸国御使者衆より、織田信長軍三万が甲斐進攻を開始したという報告が届いた。既にその先頭は木曾へ向って行動を開始したのである。
駿河の穴山梅雪からも走り馬があった。織田軍に呼応して、徳川軍が動き出したが、駿河のことはこの梅雪におまかせ下さい。必ず徳川軍を撃退しますから安心なされるようにと書状にしたためてあった。
穴山梅雪はこの段階ではまだ正体を見せずに、新府中の狼狽振りをせせら笑いながら見守っていたのであった。
茅村左京進と云ふ者、天正十年正月二十七日の暁、只一人忍で甲州の新府中へ馳せ参じて、土屋右衛門尉に対し、密に披露せしは、義昌去年秋の比より逆意を企てられ、信長へ条々申し送られ、……（『甲乱記』）

鳥居峠の敗北

新府城内は色めき渡った。木曾義昌の反逆がはっきりした以上一刻も猶予をしている場合ではなかった。
「木曾義昌の軍を一気に踏みつぶせ」
軍議の席で勝頼は今までになく昂奮した顔で云った。そう云いながらも誰かよい献策をする者はいないかと軍議の席に連なった諸将に目をやった。
「お館様の云うとおり、木曾殿の行為こそ許しがたきこと、ただちに討手をさしむけるべきである」
というようなことは、口々に云うけれど、その作戦についで申し出る者はいなかった。いままでの軍議とどこか手応えが違っていた。諸将は心と腹とは別にしてそこに坐っているように見えた。木曾殿反逆で気が転倒して、ものも云えないでいるのだろうか。勝頼は部将たちの顔をいちいち確かめるように見ていった。
「木曾殿はだいぶ前から敵方に通じていたと見るべきです。敵はわが軍の動きを考え、鳥居峠の備えは既に成っていると見てさしつかえないと思われます。さすれば……」

と真田昌幸が云った。勝頼はほっとした。茅村備前守からの密使が来たとき、この昌幸が不在でなかったならばと、今さらのように悔いながら、昌幸の聡明な目がなにを訴えようとしているかを確かめようとした。そのとき、居並ぶ部将のうしろの方から声があった。

「鳥居峠の敵が怖くて攻撃できないとおおせらるるのか、真田殿はお館様の側近にあって、戦略、戦術などいろいろと献策されておられますが、このような危急の際には軍議などしていることすら、敵に遅れを取ることになるのではないでしょうか。われ等はお館様のために生命など惜しいとは思っていません。武士は戦うことです。戦略など云々するよりも、目の前の敵を打ち払うこそ武士のつとめでなくてなんでしょう」

山県源四郎昌満であった。彼は発言の責任を取るかのように自ら前に進み出て来た。設楽ケ原の敗戦の際、それまで武田軍の名のある大将たちの多くは討死したので、勝頼はその子やその一族を取り立てて、軍議に列するようにしていた。だが彼等は若いせいか、父の名に比して自分が小さく見えるのか、めったのことでは発言はしなかった。常に部将たちのうしろにだまって控えていた。昌満は山県昌景の子であった。自分自身が名家の後継であることを考えて、これまではあまり出しゃばったことは云わないし、しなかった。

山県昌満のみならず、名将と云われた人たちの後を継いだ子やその補佐役の武将たちの多くはおおむね山県昌満と同じような態度を取っていた。その山県昌満が突然この軍議で発言したのは、危機感が第一ということもあるが、武田勝頼の側近として重きをなしている真田昌幸が信州の武将であって、武田家代々の武将ではないということに対する反発のようであった。若いから単純に物事を考え、このような暴言を吐いたのである。

「拙者も山県殿と同じ意見でござる。真田昌幸殿の策略とやらは後で聞くこととし、拙者には、はや鳥居峠へかけつけよと御下知を賜るよう、お館様にお願い申し上げます」

そう云いながら進み出て勝頼の前にひれ伏したのは、今福左衛門尉昌弘であった。名将今福浄閑斎の子である。

山県昌満、今福昌弘と二人の名将の子が鳥居峠へ向って進撃せよと云い出したのを、勝頼としては強いて押えようもなかった。武田家最大の危機に際して、生命を投げ出して戦うと云っているこの若き武将たちこそ、勝頼にとっては頼みの綱であった。

「よくぞ申した。頼もしく思うぞ。そちらの申し分しかと聞き届けた上で、昌幸の云うことも聞いてやろうぞ」

勝頼は昌幸の方へ目をやった。

昌幸は瞑目していた。深く考えこんでいる姿勢だった。(猪武者は上手に使えば、実力以上の戦力になるが、下手に使えば、かえって敵を引っ張りこんでしまうことにな

る。この際はよほど考えてかからねばならないぞ)

そう思っているところへ勝頼から声がかかったのである。昌幸は直ぐには返事ができずに黙っていると、

「そちの考えを申せ」

と勝頼に催促された。

「織田軍と通じた木曾軍は、おそらく 鳥居峠に、鉄砲の砦をかまえて味方を待っているでしょう。まともに攻めると深手を負います。鳥居峠を攻めるように見せかけて、できるだけ多くの敵と鉄砲を引きつけて置き、味方の主力は伊奈の権兵衛峠を攻め下り、敵の背後を突くのが上策かと存じます。勿論敵もこのことを予知して、権兵衛峠の守備をかためていると思われますが、今の時点では、兵力はわが方が有利ゆえ取り敢えずは高遠城の守備軍をあげて押し出し権兵衛峠に攻め上るのが上策と心得ます。高遠城へは直ちに新府中より兵を派遣して補強するようにしたらよいかと存じます。鳥居峠の一戦に勝利すれば、木曾谷の敵を狭い谷に封じこむことになるでしょう。さすれば、あとは伊奈谷です。伊奈を防ぐには……」

と言いかけたとき、

「安房守殿(昌幸のこと)しばらく」

と声をかけた者があった。長坂長閑斎であった。

「高遠の城をからにして、全力を上げて権兵衛峠に攻め上れという策は無謀かと思う。織田軍は美濃方面より、木曾谷と伊奈谷の両方に分かれて攻め上って来ることは必定、高遠城をからにして権兵衛峠を越えて鳥居峠へかけ向かっている間に、敵が攻め上って来たら、それこそ高遠城はひとたまりもなく落ちるだろう。高遠城が落ちれば、諏訪もたちまち敵の手になるだろうし、諏訪はこの新府城より僅かに五里半(約二十二キロ)しか離れてはおらぬ。この新府城が危うくなる」

長閑斎が云った。

「危急の際は思い切った手を打たねば勝利は得られませぬ。伊奈が危うくなるまでに鳥居峠をわが手によって押えてしまえば伊奈衆は安堵して、わが軍のために働くでしょう。まずこの戦の初戦に勝って見せることです。そうしないと、伊奈衆の心を摑むことができないのです。今大事なことは敵よりも、味方の中にこれ以上の裏切り者を出さないことです。それさえなければ、織田軍は必ず、追い返すことができます」

味方の中にこれ以上の裏切り者を出さないことと昌幸が云ったのはまさに至言であった。次に裏切る者があるとすれば誰であろうかと、誰もが考えていたことである。伊奈のうち、美濃寄りに位置する下伊奈の豪族たちはどうであろうか。ふとそんなことを考えた者は一人や二人ではなかった。

「安房守の云われること、いささか取り越し苦労のように思われる。下伊奈の大島城には、逍遙軒殿が頑として控えておられる。めったなことで敵に下るようなことはある

まい。むしろ高遠城をからにして権兵衛峠へ兵を向けるようなことこそ、伊奈衆の心に動揺を与えるものがある。この際は、多少の損害は覚悟の上で、機を失せずに木曾の鳥居峠へ打ちかかるのが第一の策ではなかろうか」

跡部勝資が口を挟んだ。勝資は文治派の家老であった。政治のことはよく分っているが、武断派ではないから、戦争に参加したことはない。信玄公の時代からそうであった。その跡部勝資が、珍しく軍議の席で作戦について発言したのである。これも国危うしという気持からであろうが、この際かえって、軍議をみだすものであった。

「大炊助の云うこともっともなれば、昌幸の申すことも一理ある。取り敢えずは、鳥居峠へ主力を向け、引き続き、権兵衛峠へ兵を向けたらよいであろう」

武田信豊が両者の意見を取ったような発言をした。

「それでは間に合いませぬ。今直ぐ権兵衛峠へは高遠の兵を向け、同時に鳥居峠に取りかからねば勝利は得られません」

昌幸は云った。

「ここから兵を発して鳥居峠にかかるにしても、権兵衛峠にかかるにしても、十日はかかるだろう。たかが十日のことだ……」

信豊がたかが十日に力をこめて云うのに対して昌幸は反発した。

「いや、その十日が大事なのです。こちらに十日があれば敵も十日あります。高遠城から権兵衛峠を攻めるのはたった一日でことたります。走り馬を今出せば、高遠の軍は権兵衛峠を三日の間に制圧するでしょう。敵があわてて、権兵衛峠に取りかかるころには、鳥居峠には、わが主力が入りこむことになるでしょう」

昌幸は権兵衛峠の攻撃を強調してやまなかった。武将たちの目は、勝頼の方へ向かって行った。ここまで来たら断はお館様以外にはございませんという目であった。

勝頼はさきほどから聞いていて、昌幸の意見に賛成だった。戦略的には昌幸の云うことが理にかなっていた。しかし、他の一族の面々が、昌幸の言葉に反対している空気がなぜだかよく分からなかった。

「典厩様（信豊のこと）の御意見ごもっともと存じます」

まず跡部勝資が云った。次いで長閑斎がそれに同調した。勝頼の発言に対する牽制であった。勝頼はもはやどうしようもない立場に追い込まれていた。衆議は昌幸に反対であることは明らかであった。無理に強行することは頭領としてできなかった。

勝頼は典厩信豊の策を取り上げ、鳥居峠攻撃の総大将とした。武田信豊の軍勢には自ら従軍を申し出た山県昌満、今福昌弘、横田十郎兵衛尉等三千が向かうことになった。そして伊奈の権兵衛峠からは、高遠城の仁科五郎盛信、諏訪越中守、諏訪伊豆守等二千を進撃させようとした。高遠城の後詰めは、小山田備中守昌辰が向かう手筈になった。

下伊奈の飯田城には保科正直がいた。この城へは小幡因幡守、波多源左衛門などの軍勢が増強されることになり、松尾城の小笠原信嶺も伊奈衆によってかためられた。

だがこの派兵が完了する前に武田の陣営に真田昌幸が恐れていた裏切りが発生したのである。

二月十日になって、下伊奈松尾城に目付け役として置かれた秋山七郎左衛門から、城主の小笠原信嶺の様子がおかしいと、新府中に報告された。美濃からやって来た使僧とおぼしき者と密議をした後、清内路を経て木曾へ家臣を走らせたという報であった。小笠原信嶺が守る松尾城は下伊奈の要衝であった。この城が敵の手に渡れば、飯田城、大島城の運命はきまる。上伊奈の高遠城も敵に包囲されることと間違いなかった。二月十二日になって、小笠原信嶺の裏切りはほぼ明白になった。城門を閉じて、新府中からの使者を拒否したからであった。

「松尾城裏切り……」

の報は武田の諸将の戦意をくじいた。こうなれば、伊奈から権兵衛峠を越えて、木曾に攻めこみ、鳥居峠の背後を突くなどという余裕はなかった。高遠城は自らの防備を急がねばならなかった。

真田昌幸の云ったとおり、木曾勢に大打撃を与える前に、下伊奈に離反者が出たのであった。

小笠原信嶺の謀叛に呼応するかのように、織田信忠を大将とし、滝川左近、河尻与兵衛、毛利河内守、水野監物等の諸将が率いる五千余の部隊が木曾妻籠口より大挙東方に向って進撃を開始し、清内路と大平路を飯田に向った。さえぎるものはなかった。十二日に小笠原信嶺が叛旗をひるがえすと、十四日には織田軍の先方衆の団平八、森勝蔵等が松尾城の城外に迫っていた。昼と云わず、夜と云わず、狼煙があちこちの山に上った。織田軍を迎えるために小笠原信嶺が上げる狼煙だったり、飯田城や大島城から、高遠城に向って打ち上げる敵襲来の狼煙だったりした。

松尾城主小笠原信嶺が裏切ったと知ると、下伊奈の諸豪族でこれに呼応する者が続出した。飯田城主の保科正直は次々と帰って来る物見の報告を聞いて、飯田城に籠城しても所詮大軍を支えられるものではないと見て十四日の夜、城を開けて全員が逃亡した。

新府中からの命令も待たずに単独に開城したのである。城将も、城兵もこのようなことをすれば結果がどうなるかをよく知っていた。新府中に帰れば、軍規によって罰せられること間違いなかった。将兵たちは、それぞれ知人を探して身を隠した。

大島城には武田逍遙軒信廉がいた。信廉は信玄の弟で、顔が信玄によく似ていたと云われていた。武将であるとともに、画才があった。彼は御親類衆第一の大将として下伊奈でもっとも重要な大島城の城主をして来ていたのである。

堅城と云われていたが、城兵およそ千名ではとても大軍

を支えることはできなかった。

武田信廉は戦わずして大島城を捨てた。二月十九日の夜のことである。誰一人予想もしないことが起きたのであった。大島城には逍遙軒の他に、安中七郎三郎や小原丹後守、依田能登守等がいたが、松尾城が裏切ったと同時に飯田城が夜逃げをしたと聞いて、なぜか戦う意慾を無くしてしまったのである。

武田軍は城を攻める戦ばかり続けて来た。逍遙軒の生涯においても防ぐ戦いはたった一度もなかった。防いだ経験がないから、防ぐことに自信がなかった。とても防ぎ切れるものではないというような、暗示にかかって城を立ち退いたのであった。飯田城や、大島城がもう一つの伊奈の城、高遠城のように全員討ち死の覚悟で戦ったとしたら、或いは歴史上その例を見ないほどの、武田崩壊の記録を後世に残さなかったかもしれないが、これもやはり時の勢いであったのであろう。

逍遙軒が大島城を退去した理由は他にもあった。松尾城が謀叛したと聞くと、城下の者が急に落ち着きを失ったばかりか、織田勢に味方をするのだと云って農民の一団が、兵糧の徴収に出向いていた大島城の武士を襲い、米を奪い返したばかりでなく、各郷の役人の詰所に火を放った。大島城から兵を出して取り静めようとすると暴動に加わった農民は石を投げてこれに抵抗した。それを聞いて、

「既にして、民にそむかれたか」

と逍遙軒は溜息をついた。一人の農民が捕えられて来た。暴動の主謀者の一人であった。

逍遙軒は、庭に引き据えられたその男の縄を解くように家来に云った。

「余のいうことに素直に答えよ。さすれば許してやろう。なぜ暴動を起したのか」

と逍遙軒は云った。男は思いもかけないことなので、逍遙軒の真意を疑っているようであった。男は話し出した。

「米も豆もすべておれたちが汗水流して作ったものだ。それを無理矢理取り上げて行くから腹を立てたのだ。信玄様の頃は四分六分で六分はおれたちのものだった。それでどうやら生きておられたが、今は三分七分の三分が百姓のものときめられている。これではおれたちは生きては行けぬ。生きて行けぬからなんとかしてくれと願い出た名主は、磔にかけられた。これでもまだ黙っておれと云っても無理だ。なんで、おれたちは、おれたちが作った米が食べられないのだ。領主様やその家来は泥棒よりたちが悪い鬼だ。鬼だから追い出すのは当り前ではないか」

男は死を覚悟してそう云った。男の目が逍遙軒をじっと見つめていた。

「そちの云うことはよく分かった。では約束どおり許してやる」

逍遙軒は男を放してやった後で、家臣たちを集めて云った。

「長い間、戦争が続いた。民は疲弊の底にいる。もはやどうにもならないところまで追い詰められたものと見える。たとえ、ここに籠城したところで、たくわえの食糧は三月とはない。附近の住民の支持なくしてはこの城を持ちこたえることは不可能である。城を枕に討死ということも考えられないことはないが、死ぬならば、もう少し死に甲斐のある戦をして死にたいものだ」

逍遙軒は設楽ヶ原の合戦を思い出した。あの時は、武田御親類衆は、穴山信君を始めとして、いち早く戦線を離脱して生き延びた。そのために、武田陣容は総崩れとなり、名のある武将たちの多くを失った。今ここに踏み止って戦わねば、結果的には設楽ヶ原の二の舞いになるかも知れない。そう分かっていても、踏み止まる気にはなれなかった。彼を決死の覚悟で引き止める家老もいなかった。

彼等は敵が城下に近づかないうちに逃亡を企てたのである。

保科正直や武田逍遙軒の敗走兵は高遠城に向った。ここで一服しようと思っている者も、ここに踏み止まって戦いたいと思っている者もいた。だが、高遠城主仁科五郎盛信は彼等を一人も城には入れなかった。

「敵と戦わず逃げて来るような腰抜け武士はもはや味方ではない。追い払え、無理に入城しようという者があれば斬り捨てよ」

盛信は永禄元年（一五五八）に信玄の五男として生れた。母は油川信恵の女であった。幼い頃から豪気の気性であり、この年二十四歳の血気盛んな武将だった。家老には諏訪越中守、諏訪伊豆守等の率いる諏訪衆伊奈衆が揃っていた。

武田逍遙軒にとっては、高遠城はかつての居城であった。なつかしい城ではあったが、盛信が入れないと云うのではやむを得なかった。

「兵は疲れている。せめて粥一ぱいを恵んで貰いたい」

と家臣を通じ申し入れたが盛信は断乎として拒絶して云った。

「この城の食糧は敵の大軍と戦うためのものである。一戦もせず逃げて来たような者に与えることはできぬ、はやはや立ち去り給え」

叔父に当る逍遙軒だったが、盛信は許さなかった。下伊奈から寝ずに歩いて来た将兵は、空腹をかかえて、杖突峠を越えて諏訪へおりて行かねばならなかった。

このころ、鳥居峠では武田軍と織田・木曾連合軍との間に死闘が続けられていた。

武田軍の名将の血統を受け継いだ山県昌満、今福昌弘、横田十郎兵衛の三千の軍は鳥居峠にいた。鳥居峠は標高千四百メートルもある高い峠であり、勾配は奈良井方面から行っても、藪原方面から登っても共に急であった。

武田軍は奈良井に集結して、鳥井峠に物見を出したが、峠の道を扼する位置に鉄砲隊が出張っているので、本道を

攻め上ることは非常に困難であることが分かった。真田昌幸の云ったとおりであった。奈良井から尾根道伝いに鳥居峠に出る間道が一本と栃窪から鳥居峠に抜ける小道があったが、当然のことながら、そこにも敵は網を張って待っていた。

山は針葉樹が鬱蒼と茂っていて、この中を大部隊を動かすことは不可能であった。

総大将の武田信豊は奈良井に本陣をかまえ、奈良井からの間道と栃窪からの小道とそして本道の三方面に兵を分けて攻め上ろうという作戦だった。犠牲は覚悟だった。武田軍得意の弾丸除けの竹束を兵の一人一人に持たせて攻め上る用意をととのえた。二月十四日早朝、武田軍は積雪を踏んで攻撃を開始した。武田軍はよく戦って峠の間近まで攻め上って小休止した。峠の上の篝火と、峠の下の篝火を遠くから見ると山の二ヵ所から火が出て燃えているようであった。十五日になって、奈良井から尾根道を進撃した山県昌満の軍が、敵と激しく戦った。味方にも多くの死傷者が出たがもう少しで鳥居峠を見おろすところまで敵を押しこめた。翌日は一気に敵を鳥居峠から追い落そうと、すこぶる意気が上っていた。栃窪から小道を峠山目ざして登った今福昌弘の軍は峠山を守る敵と激しい攻防戦を繰り返していた。

本道を攻め上った横田十郎兵衛の部隊は進撃が思うがままに行かずにとどこおり気味であった。

十六日の早朝から再び合戦が始った。午の刻を過ぎて間も無くであった。峠山に陣を張っていた敵がじりじりと後退を始めると、それにつれて、鳥居峠全体にわたって敵が動揺をはじめ、やがていっせいに退いた。後退を援護するために、鉄砲隊五百人が最後まで残って猛烈に撃ちまくっていたが、やがて、薮原へ向って逃げ下って行った。

「敵がにわかに退きはじめました」

という報告が伝騎によって武田信豊の本陣に届いたとき、信豊は、

「深追いするなと伝えよ。或いは敵の策略かもしれぬ」

とむかで衆をわざわざつけて前線に伝えさせた。しかしこの時は既に手遅れだった。山県昌満、今福昌弘、横田十郎兵衛の三将は逃げる敵を追って鳥居峠をかけ降りた。そこに敵は待っていたのである。

木曾勢を始めとして、美濃の苗木久兵衛、織田孫十郎、稲葉彦六、梶原平次郎、塚本小大膳、水野藤次郎、簗田彦四郎、丹羽勘助等合計五千がいっせいに武田勢を包囲した。峠の上では戦争はやりにくいので、武田勢を峠の下まで引きおろして包囲したのである。およそ倍する敵にかこまれた武田軍はじりじりにおされて鳥居峠を逃げ上ろうとするが、そう簡単には登れない。

山県昌満、今福昌弘、横田十郎兵衛は死にもの狂いで戦ったが、その日の夕刻には、多くの敵に囲まれて戦死した。

武田軍危うしの報を聞いて、松本の深志城から救援がかけつけた。名将馬場美濃守の子息馬場民部少輔昌房は奈良井に向かって逃げて来る味方を救うべく千人を率いて鳥居坂に向かった。だが鯨波の声を上げて鳥居峠を攻め下って来る敵の大軍を支えようもなかった。

味方は討たれ、じりじりと退いていた。馬場昌房は奈良井まで退いて大将の武田信豊の安否を問うと、すでに本陣を退いた後であった。馬場昌房は父の馬場美濃守が設楽ケ原の合戦で、殿として敵を支えて主君の勝頼を逃がしたと同じように、自らもまた殿となって鳥居峠を攻めおりて来る敵と戦いながら深志城に向かってじりじりと退いて行った。見事な戦いぶりであった。

鳥居峠で、計らずも名将の子たちが、その名に恥じないように死に花を咲かせたのに引きかえて、部下の犠牲によって退却した武田信豊はあまりに能がなさすぎた。

ほうほうの体で諏訪へ逃げ帰ると、そこに武田勝頼が本陣をかまえていた。

「残念にございます……」

信豊は勝頼の前で云ったが、勝頼は黙っていた。飯田城、大島城の自落に続いて鳥居峠の敗戦、しかも、若手の勇将たちの多くをこの戦いで失ったことは勝頼にとって痛かった。

(武田は弱かったのか、こんなに……)

織田・徳川連合軍を相手にあれほど勇敢に戦って来た武田がなぜこうも、もろく敗れ去ったのだろうか。どうしても考えられぬことであった。信豊は口もきいてくれない従兄の勝頼に、なにも負けたくて負けたのではない、時の勢いだと云いたいのを我慢しながら、自分の陣へ引き返すと、風邪を引いたと称して、その夜から軍議に加わらなかった。

勝頼は木曾谷と、伊奈谷に充満した織田軍がやがて一つになって甲斐に侵入して来た場合、どのように防ぐかについて考えねばならなかった。

(新府城がある、そのために築城したのではないか)

答えはすぐ出たが自信のある答えではなかった。城はまだ完全だとは云えなかった。大軍がおしよせて包囲したならば、防ぎきれる城ではなかった。周囲に石垣を組み上げて難攻不落の城にするにはなお数年はかかる。そこまでしないうちに攻められたのである。

(新府城で敵が防げないとしたら、どこで敵を防げばよいのだろうか)

その城が甲斐の国にはないのである。父信玄が甲斐国内に城を作らず、常に外に出て戦いを続けていたからこういうことになったのだと悔んだところでどうしようもないことであった。

「敵の透破らしい者を捕えました」

家来が商人風の男を後ろ手に縛り上げて、連れて来た。

男は、諏訪の豪士の家へ行って、

〈間もなく、織田様の軍隊が入って来る。もし生命がおしければ、今のうちに、逃げてしまうか、既に織田様のお味方となっておられるなにがし様に誓書を出して置くことだ〉

と話を持ちかけた。豪士は、そのなにがし様は誰かと訊いたが、男はそれはあなた様が本心を見せないかぎり云うことはできないとかわした。

豪士は諏訪家に関係ある人だったので、このことを早速訴え出たのである。

男はいっさい口をきかなかった。

そのなにがしとは何者か、かくさずに申せば許してやると云ってもついに答えなかった。拷問にかけても口を割らなかった。勝頼はこの男を処刑した。

「おそらく、このような男が、あちこちをうろつき、よからぬことを触れ廻っているだろう。今日よりは、身元のはっきりしない者は勿論のこと、他国より来た者はすべて捕えて、代官所にさし出すように」

勝頼は命令を出した。だが、その命令が甲斐の国へ伝達される前に、次から次と武田家の危機を告げる風説が流れた。

木曾衆、伊奈衆はことごとく、織田殿についたそうだ。各地方には織田に通じている者がいるそうだ。織田軍が入って来ると、武田に味方をする者は殺されるが、武田に味方をしなければなんのおとがめも受けぬそうだ、というような種類の噂から、武田が亡びるのはあと一ヵ月だとか、武田が亡びた後は武田の縁故につながる者は探し出されて殺されるなどという物騒な噂の後を追うように、

(穴山梅雪様裏切りはもはや確実、穴山様と木曾様とはかねてから通じていた)

という噂が急速に流れ始めた。

噂は勝頼の耳にまで達した。

「玄蕃殿の謀叛など考えられぬ、それこそ敵の策略だ。そんな噂をふり撒いて武田内の離反を計ろうとしているのだ」

勝頼は浮かぬ顔で云った。

「念のため古府中にいる、玄蕃殿の人質衆の警護を厳重になされたら、いかがでしょうか」

真田昌幸が勝頼にすすめるのを聞いて跡部勝資が目をむいて怒った。

「なにをたわけたことを申す。御親類衆筆頭の穴山様を疑って、穴山邸へ監視の兵など出せば、それこそ、人々は、それ噂どおりだと云うだろう」

「穴山邸を囲む要はござらぬ。治安の維持のため、兵を出してそのあたりを警備せよと申すのです」

昌幸が応ずると、

「兵が足らぬのに、古府中などかまっておられるか。安房守殿はそんな考え方でよく戦ができたものだ」

と長坂長閑斎が云った。

重臣たちも昂奮していた。声を高くして、あれこれ云うけれども、木曾と伊奈から押しこんで来る大軍をどこでどう防ぐかの作戦は建てられないままに日は刻々と経って行った。

二月十六日御敵今福筑前守武者、大将として薮原より鳥居峠へ足軽を出し候。(『信長公記』巻十五、木曾義政〈昌〉忠節の事)

貞女願文

ここで話を少々もとに戻すことにする。

武田勝頼の正室佐代姫は木曾義昌謀叛の噂で新府城内が騒然としている中で、

(そんなことはない。なにかの間違いにちがいない)

としきりに自分自身に思いこませようとしていた。木曾殿が叛いたとなると、他の信濃衆はどうなるだろうか。お味方の甲斐衆の中にも心をひるがえす者がでるかもしれない。女心にもそれはすぐ考えられることだった。なんとかしなければならないが、なにもできなかった。できることはいざというとき兄の北条氏政に援助を願うことぐらいであった。それも、独断ではできないことだった。

佐代姫は三の丸にいた。勝頼は、夜遅くまで軍議を続けていて、三の丸へ来るのは夜が更けてからであった。

正室も側室たちも、それまでは起きていなければならなかった。三の丸の婦人たちまでが、木曾殿が叛いた、いやそんな筈はないと騒いでいる最中、佐代姫は新府中から木曾へ向かった使者が鳥居峠まで行ったところで木曾軍によ

って追い返されたという話を聞いた。鳥居峠には急ごしらえの柵が出来ていて、木曾衆と、美濃の岩村衆が鉄砲の筒を揃えて待っており、鳥居峠へ登ろうとする、武田の使者にいきなり撃って来た。それでも、使者は、書状を竹竿の先に挟んで軍使であることを遠くから示して通ろうとしたがなんとしても通そうとしないので、そのまま帰って来てこれを勝頼に報告した——これが佐代姫が聞いた話であった。

（木曾義昌殿の裏切りは確実だわ）

佐代姫はうすら寒いものを感じた。その夜、勝頼は佐代の局に来たが、ほとんど口をきかなかった。憔悴し切った顔であった。

「御苦労のほど察し上げます」

と云ったが、軽くうなずいただけだった。

「木曾殿、御謀叛ということになれば……」

木曾殿の人質衆はどうなるであろうか。それを聞きたかったが、佐代姫には口が出せなかった。木曾義昌の人質として、義昌の母と義昌の長女と嫡男が、古府中の木曾屋敷にいたのを、木曾殿謀叛の噂と共に新府中に連れて来られているという噂も聞いていた。

「明日にも首を討たねばならぬだろう」

勝頼は云った。不憫ながら、それが約束ごとだから致し方ないことであろうという顔であった。その勝頼は、その暗い話からのがれるように、

「勝千代は元気か」

と佐代姫に聞いた。勝千代は去年の秋生れてやっと四ヵ月そこそこだった。

「はい乳母の許でよく眠っております」

佐代姫は答えて、ふと、このまま勝千代が順調に育って、やがては勝頼のような立派な大将になれるだろうかと思った。胸がつまるような思いだった。

翌日、新府中の坂井上野にある上野豊後守邸に預けられていた、木曾義昌の母堂と、義昌の長女あい（十七歳）と嫡子千太郎（十三歳）が躑躅原で処刑された。

処刑の場に勝頼は立ち合わなかった。処刑が終ったという報告を受けると、黙って、頷いただけであった。

処刑が終った日は朝から軍議が続け様に開かれていた。軍議が決して、鳥居峠方面と伊奈方面へそれぞれ軍兵が出発するという話を佐代姫は聞いた。そして城の内外に溢れていた軍兵は次々と諏訪方面に出発して行った。

佐代姫は勝頼の出陣の日の近いことを知った。

寒い日が続いた。諏訪方面に向かって出発する軍団を三の丸の窓から遠く見ながら、佐代姫は同じ道を、織田軍が攻め寄せて来たらこの城はどうなるだろうかと考えていた。

その夜も遅くなって勝頼が佐代姫のところに現われた。

「明朝、諏訪の上原城へ発つぞ」

その一言で、いよいよ、戦争が信濃方面で始まるのだと

佐代姫は思った。

「なにか私にできますことがあれば、なんなりと御云いつけ下さいませ。たとえ、小田原との間が現在不縁になっていたとしても、北条氏政は私の兄ゆえ、このような際にはたよりになるのではございませんか」

佐代姫は思い切って云った。

「そうよなあ、いよいよとなったその時はそなたにたのむことにしようかのう」

そう云って勝頼は空虚な笑いをした。いままで佐代姫のところへ来て、このような笑い方をしたことのない勝頼だった。佐代姫は思わず彼の顔を見た。顔は笑っているのだが目だけは笑わずにいた。恐しい顔だと思った。

（勝頼様はなにかよくないことを考えておられるのではないだろうか、ひょっとしたら死を……）

佐代姫はふとそんなことを思った。

いままで何回となく合戦の場に出て行くことがあっても、こんな顔をしたことはなかった。出陣の前だから緊張はしていても、常に自信に溢れていた。だが今日はどうだろう。

（まるで負け戦に出て行くようなお顔だわ）

佐代姫が嫁いで来てから、勝頼が戦に負けたことはなかった。だが彼女には勝頼の顔が負け戦の将軍の顔に見えたのである。

だが、その勝頼も佐代姫と同じ衾に入ってからは別人のようになった。彼は性急に彼女を求め、嵐のような愛撫のときが過ぎても尚、彼女をはなそうとはしなかった。執拗なほどに彼女を愛し続ける勝頼に負けて、彼女の方も狂ったほどに乱れてほとんど自分を燃焼し尽したあと、

（勝頼様は死ぬ気で出陣なされるのではないだろうか）

とふと思ったりした。

翌朝は顔を合わせるのも恥かしいような気持で勝頼を送り出してからは、じっとしてはおられないほど淋しい気持になった。

出陣する勝頼の姿を見送りたいのだがそれは許されず、三の丸の窓から、枯木越しに遠く軍馬の列を見送りながら、浮かび出て来る涙をこらえていた。

（このままでは武田は亡びるかもしれない）

突然、彼女の頭の中に、そのような途方もない思いが走った。木曾殿が叛いて以来の勝頼の気落ちぶりから察すると、ただごとではないように思われた。三の丸の中にもよからぬ噂はひろがっていた。

佐代姫は北条家から嫁いで来るときつれて来た、侍女のさつきを呼んで、自分の気持を告げた。

「じっとしてはおられないのです。お館様のためになることならなんでもいいからしたいのです。小田原の兄にも手紙を書こうかとさえ思っています」

「それはなりませぬ、そういうことはお館様がお許しのないかぎりなさってはなりませぬ。いま姫様御自身でできる

ことといえば神や仏のお力におすがり申す以外に方法はないでしょう。神様も姫様が熱心にお祈りなされたならば必ずやご加護をお与えになるでしょう」

さつきはそう云って、佐代姫に新府中からほど遠くない韮崎神山にある武田八幡宮に参籠するようにすすめた。

韮崎神山の地は、武田氏発祥の地といわれているところであった。ここに建てられた武田八幡宮こそ、武田家代々の領主が崇拝して来た神社であった。

佐代姫はさつきの云うことを聞き、早速、武田八幡宮参籠の準備を命じた。

時が時とてあまり目立つようなことはできなかったが、御領主様正室が参籠なされるというので神社側もその用意をしなければならなかった。

武田八幡宮の宮司矢崎式部大輔は籠り堂を掃き清めて佐代姫を待った。籠り堂から松並木の参道をおよそ一町あまり行ったところに石段があり、石段を登ったところに、社殿があった。

佐代姫は水垢離を取ると云ったが、さつきが強く反対したので、半刻（一時間）毎に素足で神社にお参りした。厳寒のことであり、参道は凍っていた。石段のあたりに氷が張っており、周囲の老杉の下には雪が積っていた。

素足で歩くと足の感覚がなくなるほど冷たかったが、佐代姫は続けた。二昼夜経った。

「姫様、もうこのあたりで、おやめなさいませ、お身体にさわります」

とさつきが云ったが佐代姫はやめようとはしなかった。七日七夜素足の参拝を続けたところでとうとう佐代姫は倒れた。

「参拝はもうよろしいでしょう。それより願文をお書きなされませ」

見るに見かねて矢崎式部大輔が佐代姫にすすめた。

「心をこめた願文を奉納することこそ、神の御心を動かし奉るものでござる」

長い白髭をたくわえた矢崎式部大輔の言葉に佐代姫はようやく彼女が為すべきことを知ったようであった。

彼女はただちに願文の草稿に取りかかり、その翌朝には二十六行の願文を一枚の紙に書き上げた。二月十九日のことであった。この願文を現在の文章に意訳すると、大体次のようになる。

そもそも、八幡大菩薩様は甲斐の国の国守として武田信義がこの地に参って、武田八幡神社としてお祭り申し上げてよりこの方、代々武田家の守護神であらせられました。どうか八幡大菩薩様、私のお願いをお聞きとどけ下さい。

武田家は今苦境に立たされています。思いがけないところに逆臣が現れて甲斐の国を亡ぼそうとしているからです。統領の武田勝頼は運を天にまかせ、生命をなげ出すつもりで敵陣に向いました。ところがこのような情勢にもかかわらず、士卒の中には道理をわきまえない者もあって、

必ずしも全軍一致してこの難局に当ろうとはしておりません。木曾義昌は神の御心にそむいて敵に内通したので人質の母や子が殺されることになりました。この他にも、武田家や勝頼公に恩顧を受けている者たちが逆臣たちと心を合せて、国を亡ぼそうとしています。こういうことをするから、万民が苦しみ悩むことになり、仏法は無視されてしまうのです。いったい統領の勝頼のどこが気に入らなくてこのようなことをしでかしたのでしょうか。勝頼は悪心などあろう筈がありませんが、この期に至れば、勝頼の心は怒りとにくしみの気持でいっぱいになり、無念の焔は天にもとどくほどでございます。私とて、夫の勝頼と同じ気持で悲しみ、涙をとどめることさえできません。もし神慮のほどが誠であるならば、謀叛をおこし、五逆、十悪の過ちを起した者たちには、神の加護などあろう筈がないでしょう。そうであってこそ私は神を信ずるのでございます。悲しいことに今や武田は危険なところにあります。もし神慮というものがあるならば、この時こそ霊神の力を以て勝頼を勝たせて下さい。仇敵を四方におしのけて、兵乱をおさめ、長生きが出来、子々孫々まで武田が繁昌するようお願い申し上げます。どうか私の願いをかなえて下さい。そうすれば、勝頼ともども八幡神社の社殿、御垣、廻廊は建て直して寄進申し上げるつもりでございます。

天正十年二月十九日

源勝頼室

佐代姫はこの願文を書き上げて奉納すると連日の心労と寒さのため神殿の前で倒れてしまった。佐代姫はひたすら、夫勝頼のこと武田の将来のことを願ってこの願文をしたためたのであった。彼女は十九歳になったばかりであった。

佐代姫が願文を書いて、八幡神社に祈願している頃、勝頼は、諏訪の上原城から精鋭三千を率いて塩尻峠を越えた。木曾口を破って侵入して来るであろう敵に逆襲を試みるためであった。深志城に籠って一戦に出ようとしている馬場昌房と力を合せて、木曾軍と織田軍を押し返そうとしていた。だがその時、更に悪い知らせが入って来たのである。徳川軍が織田軍と呼応して進撃を開始し、二月二十日に藤枝にある田中城を攻め名将依田信蕃を降伏させ、二十一日には駿府城をも占領したという報であった。

二俣城を守って奮戦したあの勇将依田信蕃がほとんど戦わずして、徳川家康に降伏したことが勝頼には考えられないことだった。田中城からそう遠くないところにある高天神城が全員城と運命を共にしたあの壮烈無比の戦いがつい一年ほど前に行われたことなど嘘のようであった。

田中城、駿府城が落城したという報が勝頼の本陣にもたらされたのは、二十三日であった。こうなると木曾口、伊奈口についで、駿河口が心配になった。塩尻あたりで敵と

対抗していることが軍事的に不利に思われた。
（こうしてはおられない。防衛策を練り直さないと、間も無く甲斐へ敵兵が乱入して来るかもしれない）
勝頼は再び本陣を諏訪上原城に移して、ここで諸将を集めて、最後の作戦会議を開こうとした。
勝頼が塩尻峠から退くと同時に、木曾衆、織田衆は一気に深志城に攻めかかり、馬場昌房は城を捨てざるを得なくなった。終に、信濃の中原に敵兵を入れたのである。
二月二十七日の早朝であった。古府中から早馬が諏訪上原城に到着した。
古府中に残っていた一条右衛門大夫信龍の家来、土橋勝左衛門であった。
「穴山様御謀叛でござるぞ」
土橋勝左衛門はそれだけ云って、あとが云えなかった。古府中から駈けどおしであったからである。水を飲み、ようやく落着いてから諸将の前で勝左衛門は語り出した。
二月二十五日は朝から曇っていて妙に生暖い南風が吹いていた。天正十年（一五八二）二月二十五日を太陽暦に直すと三月二十九日になる。
夕刻ころから雨になった。
雨の中を屈強な武士が五百人ほど古府中にやって来た。住民たちは、風雲が急だと聞いて集って来た地方豪族の一団と思って見ていたが、旗差物を持っていないから、どこの家中の者だか分らない。
五百人の中には騎馬武者が三十騎ほどもいた。それぞれいかめしい扮装であった。
一行は南から北に向って真直ぐに古府中を横断すると、旧躑躅ヶ崎の館の前にある、穴山梅雪邸の前で止った。
「駿河の江尻城におられる、穴山梅雪殿から加勢の人数が送られて来たのだ」
古府中の人々はロ々に話し合った。やがてその五百人の将兵たちは近くの家に分宿して、明日は新府中へ旅立つか、この古府中の守りに着くかどっちかだろうと思っていた。
だが、五百人の将兵は邸の前に突立ったままで雨に打たれているので、古府中の見廻りに当っている武士が不審に思って訊ねてみた。
「玄蕃様のお家来衆と見受けられるが、宿泊の場所ならば、われ等が御案内申しましょう」
すると、馬上の武士が、
「われらにはわれらの考えがある、余計なことを申さず、さっさと立去れ」
と云った。雨は降っているし、そろそろ暗くなっているから顔は見分けがつかないが、その云いようから考えて、名のある武士と思われた。
「どうもおかしい」
見廻りの武士は、そう思ったので、古府中の取締りの責任者に当てられていた一条右衛門大夫信龍にこのことを知

らせた。
「なに五百人の軍勢が来たと？」
信龍は食事中だったが、箸を置くと、ただちに武装して、古府中警護の武士百人ほどを連れて、穴山邸に駈けつけた。
穴山邸の前には松明を持った武士たちが立っていた。信龍が到着したのと、穴山邸から輿が出るのとほとんど同時だった。輿は五挺ほどもあった。
（さては、穴山梅雪が武田を裏切ったな。さしむけた人数は人質を連れ出すためのものであろう）
信龍はそう思った。
「一条右衛門大夫である。そこを通せ」
と信龍は馬上から叫んだが、邸を囲んでいる者たちは知らんふりをしていて答えようとしないばかりか輿をかこんだまま移動を開始したのである。
「大将はおらぬか、ここに来て、この信龍の問いに答えよ」
信龍は大声で怒鳴った。
すると、五百人の将兵の中から、一騎だけが近づいて来て云った。
「穴山殿家中の者でござる。何用でござるか」
「何用でござるかとは、なんたる答え方だ。こちらが名乗っているのだからそちも名乗れ。それでも武田武士か」
武田武士かと云われたのがこたえたのか、その武士は郎党の持つ松明を取って、自ら面体を明らかにして云った。
「保坂常陸介、主命によって、御一統衆をお迎えに参りました」
御一統衆とは、穴山梅雪の正室や嫡男等人質のことであった。
「恥を知れ恥を、今ここで、主家を裏切って、しばらくは生き延びようとも、末長く生き延びられるものではないぞ、どこへ行っても、あれは裏切り者よ、裏切り者の家来よ、郎党よと指をさされるのだぞ、その輿を家の中に返せ」
信龍は大音声で怒鳴った。
「われらは主命によって行動するのみである。他の者の指図は受けぬ」
保坂常陸介はそう云うと、
「はや、輿を出せ、さまたげる者があらば容赦は要らぬぞ」
と叫んだ。そのやり方に腹を立てた信龍は、
「人質を取り逃すな、裏切り者は一人残らず斬り捨てよ」
と下知した。
もともと木曾義昌も小笠原信嶺も武田氏ではなかった。云わば信濃の豪族であったのを武田信玄が武力でその支配下に置いたのだから、武田の支配力が弱まれば離叛する可能性は当然考えられたが、穴山梅雪は、武田の一族である。血の繋がりも濃い。御親類衆筆頭の実力者である穴山梅雪が裏切ったのだからことは深刻であった。

あっという間に斬り合いとなった。これは武田の内乱であった。五百対百では勝負にはならなかったが、信龍の軍勢には正当な怒りがあり、保坂常陸介の軍には裏切りという負目があった。一条信龍の指揮する百人は常陸介の兵を押えて一時は輿が邸内に逃げこんだほどであったが、やがて常陸介の兵も、勢いを盛り返して、槍を揃えて信龍の軍に突きこみ、鉄砲隊が筒先を揃えて射撃を開始すると、瞬く間に三十余人の死傷者が出た。信龍の軍は退いた。

「それ敵は退いたぞ、今のうちに輿を出せ」

保坂常陸介は下知した。

穴山梅雪の人質とその従者等はことごとく穴山邸を脱出した。五百の軍に守られたまま、雨の夜をひたひたと駿河に向って南下する一行を追う者はなかった。

「おのれ穴山梅雪……」

一条信龍の使者の報告を聞き終った勝頼はそう云っただけで、後が続かなかった。全く予期せぬできごとだった。御親類衆の筆頭の穴山梅雪が裏切るとはとうてい考えられないことであった。

二月二十日に田中城の依田信蕃が戦わずして家康に降伏し、二十一日には駿府城も降伏したというのは、おそらく、降伏したのではなく、降伏せよと、穴山梅雪に命令されたものであろう。そうでなければ依田信蕃ともあろうものが、そう簡単に城を空ける筈がなかった。田中城も駿府城も穴山梅雪の配下にあった。

（田中城明け渡しの報を聞いたとき、府中に居た人質を新府中に移すべきだった）

勝頼は悔いたが、

（しかし、ここまで来たら、人質を斬ったところで、どうこうなるものではない）

と考えると、目の前が真暗になる思いであった。

「辰の刻に軍議を開く。重大な軍議ゆえ、欠席を許さぬ、重病人でないかぎり必ず定刻まで出て来るように。代理者は許さぬ」

勝頼は命令を出した。伊奈方面、鳥居峠方面、そして深志城から逃げて来た諸将は病気と称して、軍議の席には出ずに自邸に引きこもっていた。大将がそのようであるから兵の中にも、勝手に自分の家へ帰っていった者もあった。勝頼はこれらの大将たちに、穴山梅雪の裏切りを知らせて、これからさきどうしたらよいかを相談しようとしたのである。

辰の刻（午前八時）の軍議には武田信豊と、武田逍遙軒の二人の御親類衆は依然として参加しなかった。やむなく勝頼は迎えの兵を二人の邸に向けたほどであった。

軍議は半刻ほど遅れて開かれた。劈頭穴山梅雪裏切りの報告がなされると、最初は信じがたいような顔をしていた諸将も、終にはがっくりと首を垂れて、物を云う者さえ無くなった。

「敵は木曾口、伊奈口のみならず、駿河口からもやって来

ることになったのだな」

跡部勝資が一言洩らしたが、駿河口からやって来るということは直接、甲斐が攻撃を受けることだという意味であった。しかも、その先方衆が同族の穴山梅雪である。

（もう駄目だ）

とほとんどの将は思っていた。もう武田は亡びるしかない。武田が亡びたら自分や家族はどうなるだろうか。当然のことながら、そのことを考える。軍議どころではなかった。

「上杉殿から御使者が参られました」

と軍議の席に報ずる者があった。使者は、上杉景勝の書状を持っていた。天正七年、勝頼の妹於菊を正室として受け入れた上杉景勝は勝頼に好意を持っていた。おそらく、木曾義昌謀叛、織田軍来攻を報じた書状に対する回答と思われた。勝頼は書状をひもといた。

《木曾義昌の御謀叛はまことに意外なことである。まことに許しがたい所業である。また、木曾口よりの織田軍の侵入も、信長の野心をむき出しにしたものであり、黙って見てはおられない。わが国と貴国とは同盟関係にある故、何時なりとも援助をさし向けるつもりである。至急具体的な御指示を賜るようお願い申し上げる》

という誠意に満ちた書状であった。

勝頼はその書状を読んで、いささか明るい顔をした。上杉にたよればなんとかして、この危機を脱することができるかも分らない。彼はその書状を諸将に回覧した。

ほとんどの諸将の顔色には変化がなく、書状は次々と廻されて行く。

「上杉殿に返書を出したいが、それについて意見はないか」

勝頼が云った。真田昌幸がまず発言した。

「木曾口、伊奈口、駿河口と三方から敵が入って来た場合、敵を防ぎとめるには新府城は未だ不完全でございます。この際思い切って、お館様をはじめとして、一族衆は、ひとまず上州吾妻城へお越しになり、上杉氏と手を握り、再挙を計られたら、如何でございましょうや。上杉殿にはその旨、返書をしたためられ、取り敢えずは、上杉軍に北信濃から中信濃にかけての出兵をうながし、この地をかためて貰うのも、この際やむなき事情と思われまする」

思い切った云い方であった。

長坂長閑斎と跡部勝資が同時になにか云おうとした。まず長閑斎が発言した。

「武田の統領ともあろうお方が、上州に逃げるとは、国を捨てたも同然ではないか。また、新府城では敵は支えられぬと申されたが、その城を築き上げられたのは、どこのどなたであろうぞ。安房守殿（真田昌幸のこと）、少々口が過ぎはしないかな」

長坂長閑斎に続いて跡部勝資が発言した。

「そのとおりだ。まだ高遠城が敵を支えている。こんなと

きに、主家が逃げ出したら、それこそ高遠城も自落するだろう」

戦争をやったことのない勝資が云った。

（ばかな。高遠城の仁科盛信は城を枕に死ぬ気で戦うつもりでいる。盛信が支えている間にこそ、勝頼を逃がすべきだ。それが武田を亡ぼさない唯一の道である）

昌幸はそう云いたかったが、云えなかった。このぐらいの理窟は分かるだろうと思っているのに、今だに、自分の発言に権威を持たせようとしたり、武田家の統領を云々して虚勢を張ったりする家老たちに、昌幸は怒りさえ覚えたのである。

「今は、作戦のすべてが手づまりでござるぞ。御親類衆の筆頭穴山殿がそむかれた以上、甲斐の国がもっともお館様にとって危険であることがお分かりにならないのですか」

昌幸はかなり激した口調で云った。

「真田殿はもともと信濃の人であるから甲斐のことは分からぬ。われら甲斐生れの重臣として、この際、他国へお館様をお移し申し上げることはできぬのだ」

長坂長閑斎が云った。

御親類衆は放心したような顔をしていて一言も発しなかった。穴山梅雪の裏切りを聞いただけで、きもをつぶし、いったいこの身をどう処置したらいいだろうということばかり考えていて、作戦など建てられる状態ではなかった。この時点で、武田家の首脳はほとんど腰を抜かしていたのである。

「お館様、御決意を」

昌幸が迫ると、

「家臣一同断じて他国移転は反対申し上げます」

と長坂長閑斎と跡部勝資が勝頼の前ににじり寄るようにして云った。

勝頼は昌幸の言に従いたかった。しかし、長坂・跡部の両家老の意見をしりぞけるわけにもゆかなかった。

「しからば大炊助、上杉殿にはいかなる返事を書くべきか」

勝頼が下問した。

「上杉殿の好意に対し、厚く厚く感謝し、もし敵が信濃路深く侵入したときは、上杉軍の手によって、打ちこらしめるようお願いするというような返書の内容にしたらいかがでしょうか」

勝資が答えた。

「ここまで事態がせまっているのに、そんな悠長なことを……。今頼りになるのは上杉軍のみですぞ」

昌幸は叫んだ。

だが、昌幸の意見に賛成して、上杉軍に出兵を乞いたいという者は一人もなかった。

辰の刻の軍議で決ったことは、明二十八日に諏訪上原城から新府城へ本陣を引き上げるということであった。

二月廿五日、甲斐国府中に妻子を人質として置かれ候を、雨夜の紛れに偸出だし、穴山逆心の由承る。（『信長公記』巻十五、木曾義政〈昌〉忠節の事）

高遠城血染の桜

天正十年（一五八二）二月二十八日、武田勝頼等諸将が諏訪上原城から新府城に引き揚げたころには、諏訪と峠をへだてた伊奈の高遠城近くには総大将織田信忠の率いる滝川一益、森長可、毛利秀頼、河尻鎮吉、団景春、水野忠重、それに武田を裏切って織田方についた小笠原信嶺等の軍勢合わせて一万近くがおしかけていた。

高遠城は伊奈谷の北東にあり、上伊奈の平を眼下にする丘陵上の城であった。

三峰川と藤沢川がこの丘陵を挟みこむように合流しているから、およそ、南面から一部西面にかけては断崖になっている堅城であった。この城は、天文十六年（一五四七）に武田信玄によって築かれて以来、しばらく秋山信友が守っていた。次の城主は武田勝頼で、弘治三年（一五五七）から元亀二年（一五七一）に至るまで十四年の間ここに在城した。その後、武田信玄の弟の武田逍遙軒信廉が城主となり、天正九年（一五八一）に、信廉が大島城に移ると同時に、高遠城には勝頼の異母弟、仁科五郎盛信が信濃の北

安曇の森城から呼び寄せられて城主となったのである。盛信の母は油川氏であった。信玄は安曇の名族、仁科氏を亡ぼし、その後継者として五郎盛信を森城へ送りこみ、仁科氏の旧領を安堵していたのであった。かくして仁科盛信は高遠城三十五年の歴史の最後を飾る人となったのである。

織田軍は高遠城を重視していた。下伊奈の下条信氏の離叛、松尾城主の小笠原信嶺の裏切り、そして飯田城主の保科正直の自落、引き続いて大島城の武田信廉の逃亡と、伊奈谷の武田勢力があっという間に潰え去った後に高遠城だけは微動だにせず、防備を固めていることは、織田軍には驚異でもあり脅威としても映った。

「高遠城だけは本気で戦うつもりでいるらしい」

本気で戦うことは死を賭して戦うことであり、相手がその気になれば、当然のことながら味方の損害も大きくなる。織田軍はそれをおそれていた。

織田信忠は使者として、僧法泉を送った。法泉は口上手な僧であった。織田軍の使僧として、敵地に乗り込み、離叛の勧誘をするのが得意であった。下伊奈の下条信氏を誘ったのも法泉であった。美濃出身の僧というだけで、彼の履歴はつまびらかではなかった。

法泉は眼光炯々とした大男で、見るからに、なにか曰くがありそうな僧に見えた。彼は僧形のいでたちにもかかわらず、馬に乗り、従者五名を従えて、高遠城の追手門に向かった。

高遠城は南側は断崖になっているから、通路は北側（山手側）にあった。追手門は北西、搦手門は北東にあり、城は三の丸、二の丸、本丸と濠をへだてあった。

法泉は追手門の手前で高遠城の城兵によって呼び止められたが、

「軍使として参った法泉でござる。城主仁科五郎盛信殿に面会したい」

と大音声で云った。

門を守る武士によってこのことは城内に伝えられた。しばらくして開門され、法泉等は中に入れられたが、そのまま、馬場に連れて行かれて、そこに待たされた。一刻ほどしてから、法泉だけが、呼び出されて、城内で一人の武士に会った。

「非持越後守である。城主に代ってものを申す。軍使ならば書状をたずさえている筈、まずそれを出されよ」

法泉は、こういうことに馴れていたから、最初はやんわりと、

「御役目、御苦労でござる。拙僧は中将殿（織田信忠）に伝言ともども書状を差し出せよとの内意を伺って参りましたので、まず拙僧の申すことをお聞き取り下さい」

と云った。

「いや、拙者は城主より使者の書状を貰って来よとのお指図によって参ったから、まず書状を出されよ」

非持越後守はそう云って、法泉の云うことを聞こうともしなかった。法泉も、このかたくなな武士にあまり楯突くのはまずいと思ったから、書状を出して、

「この他に口頭にて申し述べたきことが、多々あることを御城主及び御家老にお伝え下されたい」

と云った。

非持越後守は高遠の南部一帯を支配する蒙族であり、重臣の一人としての待遇を受けていた。

非持越後守が持ち帰った書状は本丸で読み上げられた。そこには城主の仁科盛信、副将の小山田昌辰をはじめとして、諏訪勝右衛門頼清、春日河内守正吉、飯島民部少輔、非持越後守等の諏訪、伊奈の大将の他、原隼人、渡辺金大夫、畑野源左衛門、飛志越後守、神林十兵衛、今福筑前守、小山田大学、小幡因幡守、小幡五郎兵衛等の諸将が居並んでいた。

織田信忠よりの書状は小幡因幡守によって読み上げられた。書状の大要を意訳すると次のとおりである。

武田追討の総大将織田信忠が一筆啓上つかまつる。

そもそもこの高遠城は武田信玄が築城以来織田家に対して敵対行動を取っていたので、今回その不義をさとすために軍勢を送った。この時に当り、木曾義昌や小笠原信嶺等の信濃の諸将はほとんど降参してしまい、伊奈の飯田、大島城などは戦わずして自落した。しかしながらこの城だけは今だに堅く守りをかまえているのはまことに神妙の至りというべきである。ところが、武田の統領の勝頼はどうであろうか。彼はこの高遠城を見捨てて、昨二月二十八日には諏訪上原城を出て、新府城へ帰ってしまった。この武田勝頼の行動を見て、いままで、武田の領内にいた武士たちはこぞって、織田殿の味方になり、勝頼に兵を向けようと云っている。以上のような情勢だというのに仁科五郎殿はいったい誰がために籠城して生命を捨てようとしておられるのか。考えを変えて、早速降参し、織田殿のために忠節を尽されるならば、所領は望みどおりかなえてやるであろう。また降伏の際には当座の褒美金として、黄金百枚を与えることを確約する。以上のとおりであるゆえ、よくよく考えた上での返書を欲しいものである。

天正十年二月二十九日　秋田城之助信忠

仁科五郎殿高遠城中

小幡因幡守は読み上げてから、かすかながら反発の息を洩らした。あきらめに似た長い吐息ではなく、明らかにその書状の内容の非礼に対して発する怒りが短い吐息となっていた。

「黄金百枚でこの城を買おうというのか、これほど無礼な書状がこの世にあるであろうか」

諏訪勝右衛門がまず云った。春日、飯島、非持の各将が同様のことを発言した。発言している間に次第に声高となって行った。原隼人佑貞胤は、

「このような非礼な書状をよこす敵に対しては返事などやることはない。早速使者は追い返すべきである」
と云った。
「その使僧の法泉が申すには、書状の他に諸将の前で口頭で申し述べるべきこと、主命を受けて参っていると申しておりますが……」
と非持越後守が云いかけると、神林十兵衛が、しばらくと非持越後守の言葉を制し、副将の小山田昌辰の前に進み出て、
「拙者はその法泉なる僧のことはよく存じております。まずは拙者の申すことをお聞き下さい」
と前置きして話し出した。
神林十兵衛は下伊奈の下条信氏のところにいた侍であった。下条信氏のところに武田から離叛するように勧誘に来たのは、僧法泉であった。彼は得意の話術でまず下条信氏の心を変えてから、主なる家臣を集めて、同じことを話した。彼の話しっぷりはまことにたくみであり、聞いているうちに、そのとおりだとつい頷かせてしまうようなものを持っていた。
神林十兵衛自身も法泉の話を聞いて、武田に叛くべきであるような心境に一度はなったが、その夜、偶然に、法泉が酒を飲みながら、彼の従者にしゃべっているのを隣室で耳にしてから心は変った。
法泉は口が達者だというので織田信長に認められ使僧となり、従者を連れて歩くほどの男になった。あることないことならべ立て相手を安心させ、たくみに織田方へ引き込むのが商売だった。その褒美として、その度ごとにまとまった金を貰っていた。法泉は下条信氏の裏切りは金貨十枚になるだろうと口にしていたのである。話を聞いた、神林十兵衛はその夜のうちに下条信氏のところを抜け出して高遠城に走った。
「法泉は衣こそ着ているが、おそらくは僧ではなく、もとを正せば野盗の類ではないかと思われます。あの者の云うことなぞ聞く必要はありませぬ。そうそうその夜法泉が話すのを聞いていますと、信長というお人は非情な方だから、木曾殿、下条殿、などに裏切りをすすめて置きながら、やがては、信用ならない人間として殺すか、追放するか、どちらかだろうと云っていました」
神林十兵衛は話が終ると自席に戻った。
高遠城に籠った者は一人として織田方に降伏しようなどと考えている者はいなかった。伊奈下条から脱出して来た神林十兵衛もそうだったが、小笠原信嶺のところから脱出して来た畑野源左衛門にしても飯田城の保科正直の副将だった小幡因幡や小幡五郎兵衛、そして、鳥居峠で利あらずして敗北した今福筑前守など、すべて、死所を高遠城と決めて、ここへ自ら志願して来た大将たちばかりだった。いまさら、使僧の法泉がいかに弁説で籠絡しようとも、そうできる相手ではなかった。

「使僧にはやはり返書を持たせて帰すべきである」
副将の小山田昌辰がひとこと云って、総大将の仁科盛信の顔を見た。
盛信は大きく頷いて、佑筆に返書の準備をするように命じてから、書いてやるべき文章について、しばらく考えているようだった。
この日、仁科盛信が織田信忠にやった返書の大要は次のようなものであった。

書状は読み申した。云うまでもなく、信玄以来、武田家は織田信長に対して多くの遺恨を持っている。ようやく雪も解け春となったから、勝頼自ら美濃、尾張へ出兵して、大いに積年の恨みを晴そうと思っていたが、こっちが出掛ける先にそっちがやって来たのは、まことに好都合である。当高遠城の将兵は既に一命を武田勝頼に捧げている。恩義を忘れて敵に降伏した輩とは全然違っている。いざ、いざ遠慮なく攻めかかって来るがよい。信玄以来の武田の武勇が如何なるものか、とっくりお目に掛けてやろうぞ。

天正十年二月二十九日　高遠籠城衆

秋田城之助殿

書状は書き上げられ、神林十兵衛がこれを持って使僧法泉のところに行き、渡そうとした。法泉は、神林十兵衛と下条で会ったが、相手が多数だったから顔を覚えてはいなかった。法泉は、
「この書状を受け取る前に、諸将にお伝えしたいことがござる。中将殿よりそのように固く申し付けられて来たゆえ、仁科五郎殿にそのようにお伝え下されたい」
昂然として云った。
「これ法泉、そちはこの城の投降勧誘を黄金二十枚で引き受けたか三十枚で引き受けたか」
神林十兵衛にいきなりそう云われると法泉は、ぎくっとしたような顔で、十兵衛の顔を見詰め、ようやく下条で会ったことを思い出した。
「おお、そこもとは……」
と云ったとき十兵衛はすかさず云った。
「そちが、宿舎に当てられた寺の一室で、酒を飲みながら話していたことは、その夜寺の警護に当っていた拙者によって、全部聞かれてしまったのだ」
呆然としている法泉の顔を見て、十兵衛の後についてやって来た数人の武士が嘲笑を浴せかけた。
「その法泉とかいう坊主の両耳を殺ぎ取って帰してやったらよい。耳がなくても口があれば、いままでどおり商売はできるだろう」
という武士があった。
それを聞くと法泉はふるえ上って、
「耳を殺ぎ落すなど、そんな無茶なことを……どうかお許し下さい」

といままでとは打って変って、そこに手をついて哀願するありさまに神林十兵衛は怒りを押えて云った。
「高遠城降伏勧誘に成功したら黄金何枚をくれると、織田信忠が約束したかそれを正直に申せば、許してやろう」
「ありがとうございます。それでは申し上げます。実は、黄金五枚で約束いたしました」
法泉がその答えを云い終るか終らないうちに、神林十兵衛の腰のあたりで音がした。と、同時に悲鳴が上った。
法泉の左の耳がころりと彼の前にころがり落ちていた。
「正直に申したから、片耳だけは助けてやる。さっさと返って、織田信忠にその書状を渡してやれ」
神林十兵衛がそう云った時には刀は鞘に納められていた。
法泉は、流れ出る血を押えながら、従者に助けられて、城を出ると、坂をころげ落ちるように駈けくだって行った。
織田信忠の本陣は飯島にあった。彼は片耳をそがれて帰って来た法泉の姿と、その返書を見ると、烈火のように怒った。
「高遠城は許せぬ。明朝より、総攻撃をかける。たとえ、投降して来る者があろうとも殺せ、一人として生かして置いてはならぬぞ」
信長の嫡子として生れた信忠は、気の短いところだけ信長に似ていた。

翌三月一日になると、それまで高遠城を遠巻きにしていた織田軍は、それぞれ本陣からの指図どおりに高遠城の北東側の山手に陣を敷いた。南側から西側にかけては断崖なので山手の北東面からの攻撃がまず常識と考えられていた。
しかし、小さい城に一万に近い軍隊がおしかけたので、味方どうしが肩を突き合わせるような状態でまことに動きにくかった。攻城軍は三月一日いっぱいかけて、ようやく陣容を整え、攻撃の手立てを決めた。
攻城軍は各隊とも勇み立っていた。確実に勝つ戦だからである。大将首の一つも取れば、たちまち恩賞にあずかる戦だからであった。
城内はしんとしていた。三月一日は見張りの者だけ出して、城内ではこの世の別れの宴を開いていた。食べるだけ食べ、飲めるだけ飲んで、明三月二日の死の旅に臨もうとしていた。三の丸には武将たちの妻妾や子供たちがいたが、ここでも別れの宴が開かれていた。城主仁科盛信の小姓衆に牛山清之進がいた。十八歳で弓の名手であった。美男子のほまれが高かった。清之進に思いを寄せる多くの女の中で盛信の正室に仕えるすぎという十六歳の侍女がいた。二人の仲を取り持つ者もあって、この春結婚することになっていた。盛信の正室百合の方は、牛山清之進とすぎの思いを遂げさせるために、三月一日の夜婚儀を挙げ、二人だけの一夜の契りを許してやった。

城外では一晩中篝火が焚かれた。攻城軍は明朝の功名手柄を想像しながら寝につき、城内では死を覚悟した千名が、最後の一夜の眠りに入っていた。
天正十年三月二日は一点の雲も無くよく晴れた日であった。
織田軍は夜明けと同時にいっせいに攻撃を開始した。各隊ごとに予め用意してあった木材を三の丸外濠に投げこんだ。よいしょ、よいしょの手送りによって、材木や、附近の家を打ちこわした戸板や柱が投げこまれた。なにしろ多人数だから、こわした家の屋根をそっくり運んで来て濠に投げこむ者もあった。
城内からはそうはさせまいと、鉄砲や矢で抵抗したが、人数にものを云わせての濠埋め作業だから濠の各所が埋められた。
各隊とも功名を争っているから、濠が完全に埋まらないうちから、梯子を掛けて濠に降りる者もあった。
三の丸外濠は二刻（四時間）ほどの間に要所要所が破られ、濠を渡った織田軍は、郭の板塀に次々と投げ鉤をかけて、引き倒しにかかった。そうはさせまいと、城兵がそちらの方へ人数を廻すと、今まで静かだった追手門、搦手門方面がにわかに騒がしくなった。織田軍が追手門、搦手門の打ち破りに取り掛ったのである。攻城軍は弾丸や矢に当ってつぎつぎと倒れた。
三の丸郭の一部が打ち破られて織田軍が斬りこみ、すさまじい斬り合いが始った。だが城兵はよくこれを防いだ。
城内に斬りこんだ者の多くは、決死で戦う高遠城の武士に殺された。
織田軍は功名手柄のために戦うのだから、首一つ取ると、高々とそれをかかげ持って、引き返し、軍目付のところに出頭して、それを記録して貰った。それがための戦であった。だが高遠城士はひとりとしてそのようなことをする者はなかった。死ぬ戦いであり、勝つ戦ではなかった。やがては殺される戦であった。
いまさら手柄を立てたところで、なにもならないことはよく知っていた。高遠城士は、一人でも多くの敵を殺すことによって、最後を飾ろうとした。
気負って三の丸に斬りこんだ織田軍は一度は三の丸から追い落された。追手門、搦手門を攻めた織田軍もあまりにも犠牲が多いので、一時的に退いた。日が高く上ったが、はかばかしい進展を見せない戦いの有様を月蔵山の本陣から見ていた総大将の織田信忠は、
「こんな小城一つ落せないでなんとする」
と云うと、自ら旗本一千を率いて打って出た。信忠は総大将である。総大将が、旗本を率いて合戦に参加するというのはよくよくのことである。もしこんなことが織田信長の耳に入ったら、攻城軍の大将たちは、その責任を糾弾され、追放されるかも知れないのである。
月蔵山の本陣が動いたと聞くと、それまで三の丸を占領

できずにもたついていた攻城軍が、再び攻撃を開始した。
損害も多かったが、なにしろ、数に物を云わせての無理押しだったから、やがて三の丸は落ち、ほとんど同じころ、追手門、搦手門が破られた。
仁科盛信は全軍を二の丸に集めて敵を防いだ。だが城内に敵を入れた以上、もはや城の運命はきわまったも同然であった。
仁科盛信は二の丸に避難していた正室の百合の方に、本丸に退いて自決をするように命じた。
百合の方を始めとする女子供たちは、予め決められたように死の床についた。家老藤森勝右衛門の妻はなは長刀の名手であり、彼女に長刀を習った腕の立つ中間衆が七人いた。はな以下七人の女性たちは、百合の方に命ぜられて、次々と介錯して廻ってから、死骸の乱れを直して一ヵ所にまとめた。その間、彼女たちは涙一つ見せなかった。
女衆、子供衆の遺体の処置がすべて終ったところで、はなは七人の女武者を率いて、二の丸外金山坂に打って出て敵と戦った。
「女だぞ、それ討ち取れ」
と斬りかかって来る敵にまず、はなは一太刀を浴びせて、手負にしてから、彼女の弟子たちに渡して処分させた。
女とあなどってかかった織田方の郎党八名がたちまち戦死すると、攻めかけた男たちはおじけづいたのか遠くに退いた。
森長可の手下の鉄砲隊が三の丸の屋根の上からこれを見ていて、藤森はなに向かって、鉄砲の一斉射撃を浴せかけた。はなは血に染って倒れた。
「それ今だ！」
とロ々に叫び声を上げて襲いかかって来る敵に対して、七人の女武者は、とても女とは思えないような奮戦をした。
昨夜牛山清之進と結婚して、一夜を明かしたばかりのすぎは十六歳とも思われぬふるまいだった。七人の女武者は敵二十三名を斬り取った。だが相手は数倍の敵であった。七人のうち三人が深手を負って、もはやこれ以上戦えぬと見ると、
「いざ、死出の山路へ」
とロ々に叫び合って、小刀で胸を突いて自害するのに続き、他の四人もその後を追った。捕えられてはずかしめを受けたくないという配慮であった。
「金山坂にて中間衆全員戦死」
という声を聞きながら、本丸郭脇台所口では牛山清之進が弓を引いていた。
清之進の弓勢は城中第一と云われただけあって、牛山清之進の矢に当って命を落す者は二十数名に達した。
牛山清之進が矢で防いでいる傍を大腿部を鉄砲で射ぬかれた城主の仁科盛信が家臣に助けられて、本丸の中へ入って行った。

「清之進、天晴れなる弓勢よ、そちによって、武田源氏の弓がいかなるものか平家の末（織田信長は平氏の末）にも分かったであろう。さらばぞ、清之進、あの世でな」
折れた刀を杖に、全身血を浴びながら、そう云い残して本丸に入って行ったのは、今福筑前守だった。続いて小幡因幡守が、片足を引きずりながら来て、清之進に云った。
「諸将のことごとくは討たれた。諏訪勝右衛門もいまそこで討死した。清之進、お館様のお供をして、冥土に旅立つまでもうしばらく頼むぞよ」
そう云っているところへ、曾根原十左衛門とその子の三十郎が、血刀を携えて来て、本丸防備に加わった。清之進は矢を数えた。あと十本あった。
それをどう使って、敵を防ごうかと考えていた。十本の矢のうち五本を射て敵五人に負傷させたとき、本丸の中から、裂帛の気合が聞こえた。一つではなかった。介錯の掛け声であることは明らかであった。城内が急に静かになった。本丸ばかりでなく敵の攻撃も静かになったようであった。
牛山清之進は十本目の矢をつがえた。たった一夜であったが、確かに彼の胸に抱いたすぎの涙の目が心の中で光った。
彼は数十人の郎党を指揮して近づいて来る大将の喉を狙って最後の一矢を放った。敵の大将がのけぞると同時に鉄砲の音がした。牛山清之進は、森長可の鉄砲隊に狙い撃ちされたのである。曾根原父子もこの場で壮烈な戦死を遂げた。
高遠城が落ちたのは天正十年三月二日の申の刻（午後四時頃）であった。卯の刻（午前六時頃）から開始された合戦は十時間後に終ったのである。
日本最強の武士集団と云われた武田が、織田勢の進攻の前に為すことなく亡び去ったその中にたった一つの例外があった。
それが高遠城の抗戦であった。勝つことの見込みは全くなく、武田の滅亡さえ目の前にちらついているのに、一人として脱落する者もなく、全員討死したこの戦いはあまりにも悲惨であった。なぜ高遠城だけが武田の最後を飾るにふさわしい戦をしたか、それにはいろいろの説があるが、まず第一は城主の仁科盛信がしっかりしていたからであろう。副将の小山田昌辰も気骨ある武士だったからであろう。それに、諏訪衆、伊奈衆が死を覚悟で戦ったことと、この城で死ぬつもりでやって来た今福筑前守他、多くの武将たちがいたからであろう。
この合戦については『信長公記』に載ったものが唯一の資料と云われている。その一節を原文のまま紹介する。
三月二日、払暁に、御人数寄せられ、中将信忠卿は尾続を搦め手の口へ取りよせられ、大手の口、森勝蔵、団平

八、毛利河内、河尻与兵衛、松尾掃部大輔、此の口へ切りて出で、数刻相戦ひ、数多討ち取り候間、残党逃げ入るなり。か様候ところ、中将信忠卿自身、御道具を持たれ先を争つて塀際へつけられ、柵を引き破り、塀の上へあがらせられ、一旦に乗り入るべきの旨、御下知の間、我劣らじと、御小姓衆、御馬廻城内へ乗り入り、大手搦手より、込み入れ込み立てられ、火花を散らし相戦ひ、各疵つけられ討死、算を乱すに異らず。歴々の上臈子共、一々に引き寄せ〳〵差し殺し、切つて出で、働く事、申すに及ばず。爰に諏訪勝右衛門女房、刀を抜き、切つて廻し、比類なき働き、前代未聞の次第なり。又十五、六のうつくしき若衆一人、弓を持ち、台所のつまりにて余多射倒し、矢数射尽し、後には刀を抜き切りてまひり、討死、手負、死人、上を下への員を知らず。（『信長公記』巻十五、信州高遠の城、中将信忠卿攻めらるるの事）

『信長公記』の中で藤森勝右衛門女房はなのことを、比類なき働き、前代未聞の次第なりと讃めたたえているとおり、藤森はな等の戦いぶりは高遠城陥落にふさわしいものと云えよう。高遠城は、この後、毛利氏、京極氏、保科氏、鳥居氏、内藤氏と領主が変って明治となり、現在は公園となっている。

高遠公園のコヒガンザクラはその美しさにおいて、日本一と云われている。海抜八百メートルの高地に咲くこの桜は、ヒガンザクラとマメザクラの中間にある種類と云われている。花は紅が強く、いっせいに開花し、その美しさはたとえようもない。この高遠城のサクラについてはいろいろと伝説があるが、天正十年三月二日に、藤森はな等の奥女中衆が戦死した血の跡に咲いたのがこの桜だという。藤森はなが死んだ日が旧の三月二日で今の暦に直すと四月四日である。この日は高遠のコヒガンザクラの開花日よりは二週間ほど早い。

現在の城址から天正時代の城を想像するのはむずかしいが、附近の地形はそのままである。中央アルプス南アルプスの山岳にかこまれた高遠城は今も尚、他の古城址と比較して、なにか毅然として孤高を守っているようである。こう思うのは私ひとりだろうか。

落人の道

武田勝頼は二月二十八日に諏訪を発った。情勢に応じて、急遽新府城に帰り、対策を建てるためだった。だが、この日あたりから、家臣団の間に妙な空気が流れ始めていた。顔を合わせてもろくな挨拶をせず、なにかお互いに含むところがあるかのごとく、よそよそしくする者があるかと思うと、急にいままでになく、親しそうにふる舞うような者もあった。武田が日に日に危機に追いこまれているがためではなく、家臣団の間に互いに猜疑の目で見交す、いやな空気が流れ出したからであった。

この原因については真田昌幸が勝頼にさし出した一通の書状によって明らかになった。

真田昌幸は二十七日の夜、田中城の依田信蕃に頼まれた使いの者と名乗る男から一通の書状を受け取った。開いてみると、それは織田信長、織田信忠連署の降伏勧告の書状に、穴山梅雪の添え書きがあった。それには大体次のようなことが書いてあった。

一、武田は今や崩壊寸前にある。

一、わが織田家は、武田勝頼に遺恨は持っているが家臣団に含むものはない。敵は勝頼一人である。

一、そこもとが勝頼から離れて、わが方に降伏するならば旧領は安堵して、織田家の家来とする。

一、降伏しないでも、勝頼に協力せず、兵を率いて自領に引き返して、後々、出頭するならば、将来のことは考えてやる。

一、武田勝頼は必ず殺すけれど、名誉ある武田の名は亡ぼさない。穴山信君をはじめとする武田の旧臣たちに後のことはまかせるつもりである。

これが織田信長と信忠の連署であり、穴山梅雪の添え書きには、御殿主（織田信長）や中将様（信忠）のいわれることは、いつわりがないことをこの穴山信君が保証する故、安心して今後の身の振り方を考えられよ、と書いてあった。内容からみて、同じ書状を武田家臣団全体へ出したものと思われた。

「このような調略の手は誰でも使うものです。信玄公も盛んにこの手を用いて、敵の陣営を攪乱し、敵将を味方に引きこみました。だから織田方がこのような書状を出してもいささかもおかしくはないし、これに玄蕃頭殿（穴山梅雪）が裏書きするのも当然考えられることですが、これを受け取った者がこの裏を読み取れるかどうかが問題です」

昌幸は云った。

「裏とは？」

勝頼には昌幸の云う意味が大体分かっていたが、念のために訊いた。

「これは信長一流のやり方です。相手を降参させてから、必ず後で殺すという、きたない手です。信長がきたない手を使うことを知っていても、玄蕃頭殿の裏書きにだまされはしないかということが、心配です」

昌幸は云った。

勝頼は、しばらく目をつぶって考えた。おそらくこのような書状は主なる家臣のすべてへ行っているだろう。急に家臣たちの素振りがおかしくなったのはこのせいだ。

（真田昌幸はその書状を持って来た。しかし他の大将や御親類衆はなぜそれを届け出て来ないのであろうか）

すぐ届けないのは、昌幸が心配しているようなことが、彼等の心の内部に起っているからであろう。

「如何にすべきか。どうしたらよいのであろう。昌幸、そちの心算を聞かせてくれ」

勝頼は哀願するような目を昌幸に向けた。

「敵の一片の書状で動揺したり、心を変えるような者は、もはや当てにはなりません、お館様は心を決めるべきだと思います。急ぎ新府城に帰り、御一族衆を取りまとめ吾妻城（岩櫃城）へお越し下さるように、この昌幸が御案内つかまつります」

昌幸はそう云い置いて下って行った。昌幸と入れ違いに、小山田信茂が入って来た。

「今、そこで安房守（真田昌幸）に会いました。かかる際は特に、信濃衆にはお気をつけられるようお願い申し上げます」

信濃の木曾や小笠原や下条等のように昌幸も裏切るかも知れないと云わんばかりであった。小山田信茂はあたりを見廻した後で懐中から書状を出して、黙って勝頼の前に置いた。それはさきほど真田昌幸が持って来た書状と同文のものであった。

「そうか、そちのところへも来たのか」

勝頼は思わずそれを声に出した。

「そちのところへもと云うと、今そこで会った安房守のところへも来たのでしょう」

小山田信茂はそう云って勝頼の顔を見た。勝頼は大きく頷いた。嘘は云えなかった。

「まさか、お館様は安房守の誘いに乗って上州の吾妻城へ行かれるおつもりではないでしょうね。真田家はもともと武田の家臣ではございません。吾妻城へお館様を誘いこんで、そのまま敵方に引き渡すというようなことだって、考えられないことはありませぬ。お館様が行く先は、わが居城、郡内岩殿城しかございませぬ。この城は堅城故に、容易には落ちません、兵糧もたくわえてございます。尚郡内上野原の城主加藤丹後守信景を北条殿にやって、いろいろと取り計らいさせております。緊急の折故、お館様のお耳にはいちいち入れてはございませぬが、北条殿は表面上は

織田殿に加勢をするように見せかけ、内実は陰で武田に救いの手をさし延べたいと考えているようでございます」

勝頼は返事をしなかった。

急に北条氏のことを云い出されても答えようがなかった。

「兎に角、今は急ぎ新府城に帰ることです。ことはそこで決しましょう」

小山田信茂はあわただしく席を立っていった。

諏訪上原城を中心とした諏訪の平には、武田軍が約一万ほどいた。二月二十八日に新府中に引き返すことに決定してから、軍勢の中に動揺が起った。上司の制止を聞かず、部隊を逃げ出す者が出て来たのである。

「武田は負けた。木曾、伊奈、安曇には織田軍が満ち満ちている。駿河の穴山殿は徳川氏に寝返って、甲斐に攻めこんで来ている。今のうちに逃げ帰って、武器を隠し身をひそめていれば生命だけは助かる」

というような噂が流布された。それに続いて、

「今武田から去った者には、とがめはないが、これ以上武田について戦う者は、後日探し出されて必ず首をはねられる」

という流言が部隊から部隊へ、人から人へ伝えられた。このような流言は上部の者がきつく取り締ればおさまるものであるが、主なる部将、大将には例外なく、織田父子の書状に穴山信君の添え書きがついた勧降状が廻っていた。

それを読んで部将の多くは、すぐ届け出ずに、さてどうしようかと考えこんでいた。このような上部の心理的動揺がたちまち部下に伝わったのである。

二人、三人と連れだって逃亡者が出ると、引き続いて、二十人三十人とまとまった逃亡者も出て、それを引き止めることができなかった組下頭や、はては足軽大将までが戦列を離れる有様であった。

甲斐の国始まって以来というよりも、日本歴史でも珍しい、人間のなだれ現象が起ったのである。諏訪を出発した武田軍一万人のうち八千人は、途中で霧散し、新府中に到着したのはたったの二千であった。この人間なだれ現象は、新府中にも起きた。三月一日、二日と引き続いて逃亡者が続出した。

この時点で武田の敗北は決定的なものとなっていた。

新府城は未完成ではあったが、真田昌幸等が心をこめて作った城であった。決死の覚悟で籠城したら、一ヵ月や二ヵ月敵を持ちこたえることはできる筈だった。ところが、その城を守るべき将兵が居なくなったのである。

勝頼はなすこともなく、武田の崩壊の有様を見ていた。怒りさえも起らなかった。

彼は最後の軍議を開いた。死所をどこにしようかそれを決めるべき軍議だった。

真田昌幸が勝頼に云った。

「一刻も早く、新府城の後始末をして吾妻城へお越し下さ

い。城には御馬廻りの者五、六千人を三年はかかえこむだけの兵糧がたくわえてございます」

そして昌幸は、上杉と北条の勢力の境目にある上州吾妻城はいかに安全であるかを説いた。吾妻城で再挙を計り、上杉や北条と力を合わせれば、必ず織田軍を討ち破ることができると力説した。

その軍議の最中に、北条家から勝頼の正室佐代姫に付き添って来た池内三郎兵衛が、北条氏政の家老松田憲秀から佐代姫に宛てた密書を持って現われた。

《緊急の折ゆえ、用件のみを申し述べます。木曾や駿河の裏切りによって、武田家が苦境に陥入ったことについて、お館様（北条氏政）はいたく心を悩まされています。今は疎遠になってはいますが、もともと北条と武田は親しい間柄でした。お館様はもし、勝頼殿がしかるべき書状を下されるならば、御助勢をつかまつると云っておられます。こまかいことは加藤丹後守信景を通じて小山田信茂に申したいと思っていますが、この件について至急御返事をお待ち申しております》

という内容のものであった。この書状の後を追うように加藤信景から小山田信茂あてに、北条氏政は、武田勝頼が郡内の岩殿城に籠るならば、場合によっては、実質的な援助を与えてもいいという意向である旨書き送って来た。この書状の中の場合によってはという意味は、勝頼が北条氏政に詫び状を入れることであると、加藤信景の添え書があった。

しかし、勝頼はこれらの書状に喜色は見せなかった。氏政あての詫び状を書くことにはこだわらなかったが、岩殿城へ行くことがなにか不安だったからである。

勝頼は昌幸とともに吾妻城へ行きたかった。

「北の方様（佐代姫）はただいま氏政殿にお礼の書状をしたためておられまする」

池内三郎兵衛が云った。勝頼に早々返事を書けという催促だった。

「北条殿が手をお貸し下さるとあっては、なによりのこと、岩殿城へお供をつかまつりましょう」

跡部勝資が云った。

「それより他に手はございませぬ」

長坂長閑斎もそれに同意した。

最後の軍議の席には、跡部、長坂、小山田、真田の四将しかいなかった。御親類衆の姿は一人も見えなかった。

伊奈の堅城大島を捨てて逃げ帰って来た逍遙軒信廉は、恥かしくて他人に顔を合わせたくないと云って、諏訪の上原城にも顔を出さなかった。勝頼の命もまたずに、さっさと新府中の屋敷に引きこもったままだった。勝頼が頼りにしていた従弟の武田信豊も鳥居峠から逃げ帰ってからは病気と称して、めったに顔を出さなかった。新府中に帰っても、度重なる呼び出しに応じなかった。

最後の軍議の席に連なる四将のうち、三将までが、岩殿

城行きに賛成したからには、勝頼としてもそれを認めざるを得なかった。

「されば拙者も岩殿城へお供をつかまつろう」

と真田昌幸は云わざるを得なかった。

「いや、真田殿は参るには及ぶまい。信濃に帰るなり上州に帰るなりして、お館様の命を待つがよいだろう」

小山田信茂が云った。安房守殿とは云わず真田殿と信茂が云ったときから、言葉の中にはっきりと針が感ぜられた。大体このようなことは勝頼が云うべきであった。信茂が言うべきではなかった。

「なんと申される」

さすがに昌幸は色をなした。

「わが小山田信茂は武田の一門でござる。この際、お館様にお供をするのは当然である。武田との血の繋りがない、信濃武士まで引き連れて落ちたとあっては、武田のほまれにもかかわること、そのくらいのことは重々お分かりであろう」

信茂は昌幸に突っかかるように云った。真田昌幸が一行に加わることが邪魔だとはっきり云ったのである。

小山田信茂の父小山田出羽守信有は武田信虎の妹を正室として迎えた。

信茂はその子であった。信茂が武田との血のつながりと云ったのはそのことであった。信茂は、今回の武田の悲運は、木曾義昌、小笠原信嶺などの、信濃武士の謀叛によるものだと深く信濃武士を憎悪していた。真田昌幸もまた離叛する可能性があると強く信じているようであった。この期になっても、武田を崩壊に導いた元兇が武田の御親類衆筆頭の穴山信君だということに気付いていなかったのである。

昌幸は憤りと共に悲しげな目を主君の勝頼に向けた。勝頼は最後の最後まで、頼りにしていた真田昌幸と別れるのはつらかった。しかし、小山田信茂がはっきりと、真田昌幸に猜疑の目を向けている以上、昌幸を連れて行くわけには行かなかった。

「吾妻城のことをよろしゅう頼むぞ、ことと次第によっては或は吾妻城に落ち延びるかもしれぬ」

勝頼は落ち延びるという言葉を使った。そしてその言葉が、この場にもっともふさわしいものであることに気付いた返していた。

三月二日は人質の処刑と引っ越しの用意で新府城はごった。

多くの人質が斬られた。今さら斬ってもどうしようもないような人質まで斬られた。武田の敗北がはっきりすると、更に逃亡者が増えた。岩殿城へ行くために駄馬三百頭を用意するように命じたが、三日の朝、新府城に集められた駄馬はたったの三十頭であった。

女や子供が多かった。輿はあってもそれをかつぐ人さえ姿をくらましたのである。

三月三日、武田勝頼一行は新府城を出た。従う者七百余名であった。駄馬が不足しているので乗馬が駄馬になった。従って、馬に乗るべき人が歩かざるを得なかった。勝頼の正室佐代の方は輿には乗れず、馬に乗ることになった。従う女衆たちはすべて、歩かねばならなかった。

新府城には勝頼の祖母（湖衣姫の母）お大方様がいた。歌をよくするやさしい女性で三の丸の女たちから尊敬されていた。お大方様と付き添いの女中たちは勝頼と新府城で別れて、生れ故郷の安曇の麻績へ従者十人を連れて行くことになった。どうしても生れ故郷へ帰りたいし、諏訪や安曇には身を隠すところが、いくらもあるからというので、勝頼もそれを許したのである。そして、この一行はこの日を最後として行方不明になったのである。

出発の時刻がせまったが長坂長閑斎の家族だけがまだ到着しなかった。長閑斎の屋敷は新府城の近くの次第窪にあったが、館は長坂上条にあった。新府城からは三里ほど離れていた。

長坂長閑斎はやきもきしていたが、

「拙者が行って引き連れてまいります故、お館様は一足先に御出発下さいますように。古府中に着くまでには必ず追い着きます」

そう云い残して馬に乗って上条の館へ行った。混雑の際であったからこのようなことは各所で起っていた。

勝頼の一行は城を出た。城が無人となったところで勝頼は城に火を放つように命じた。苦心して築いた城をむざむざ敵の手に渡すより、焼いてしまった方がいいと思ったからである。城は完成後、二ヵ月で炎に包まれた。その炎の下で、勝頼と昌幸は西と東に袂を分かった。

昌幸は諏訪方面から攻めて来るであろう織田軍をかわすために、佐久往還を上田をめざして落ちて行った。

炎を背にしながら勝頼主従七百人は光明寺、みだれ橋、北下条、相埜を通り、穂坂路へ入って行った。阿弥陀の森（後涙の森と称す）まで来て見ると、既に新府城は焼け落ちて、余燼がくすぶっていた。このあたりは台地だったので、新府城のあたりがよく見えたのである。勝頼主従は焼け跡に立ち昇る煙を見ながら、一言も声を発せず、涙を流していた。彼等は歩き続けた。つい二ヵ月前にこの道を新府城へ行く時には道の両側には附近の住民が土下座して迎えたのだが、今は誰一人として一行の行列を見送る者はなかった。

出発に遅れた長坂長閑斎の一族五十余名に家来百人ほどは、勝頼等の一行の後を追って、阿弥陀の森から上ノ山、法喜院、宇津谷まで来ると、見知らぬ一団によって行手を庶られた。およそ三百人のうち、百人ほどは武器を持ち、他の者は棒や鎌などを持っていた。

「長坂長閑斎の一行が来たぞ、いまこそ恨みを晴らしてやろうぜ」

と彼等は口々に云っていた。長坂長閑斎が扶持米をけずった。疲れているし、空腹でもあったから、一同喜んでこれを食べた。

なにしろ、七百人という人数に一ヵ所で一度に食事を与えるのはむずかしいので、分散して食事を摂った。食事が終っていざ出発となると、七百人中二百人が逃亡していた。

一条右衛門信龍は勝頼の叔父であった。勝頼は信龍に行動を共にするように誘ったが、彼は首をふって云った。

「いかなる理由があろうとも、先祖代々のこの地を離れるわけには行かぬ」

彼はかたくなに同行をこばんだ。こうしている間にも周囲の情勢は急激に変りつつあった。

「古府中の様子がおかしいので、はやいところこの地を去った方がよいでしょう」

という知らせが勝頼一行のもとに入った。様子がおかしいというのは、処々に掠奪暴行沙汰が起きているということであった。

織田勢が攻め込んで来ると聞いて、家を捨てて、近隣の山家へ逃亡して空屋同様となった家へ掠奪に入る者や、その屋の留守衆にとがめられて暴行を働く者など数限りなく出ていた。主人の居ない武家へ押入って、子供を殺し、女を犯した者があるという情報も入った。もはや古府中には治安の維持に当る者すら居なくなったのである。

勝頼の一行は早々に古府中を去らねばならなかった。

ったことに対して恨みを抱いている御小人衆の一団に農民が加担したのである。長坂長閑斎はこのまま進むのは危険だと見て、そのまま長坂上条の館に引き返した。勝頼の第一の重臣といわれた長坂長閑斎はこの時既に没落したのである。実は、長坂長閑斎のところにも織田信長・信忠父子と穴山梅雪連署の降伏勧告状が届いていた。彼は長坂の館に帰ったその時から、自分の生きる道を考えた。長閑斎は穴山梅雪のところへ降伏の誓書を送った。梅雪は、織田殿に必ず命乞いをしてやるから、そのままで待っているようにという返書をしたためた。長坂長閑斎はその書状を信じて待っていると織田軍の兵が現われ、彼を捕え古府中に送った。長坂長閑斎父子が首を斬られたのは三月十五日のことである。

長坂長閑斎が引き返した宇津谷のあたりは釜無川の流域で平坦地であった。勝頼の一行はここから志田、下今井、塔の越を経て逸見路へ入り古府中を目ざして歩いて行った。

一行は古府中の西部志摩の郷（湯村）にある一条右衛門大夫信龍の館に入って休養を取ることにした。馴れない旅で女子供たちはここまで来るまでにかなり疲れていた。

一行が来るという通知を受けていた一条右衛門大夫信龍は大釜で饅頭を作り、一行を持てなした。このころの饅頭は現在のようにうどんのようにはなっておらず、小麦粉の団子を投げ込んだ野菜汁のことであった。汁には味噌を使

古府中に残った一条右衛門大夫信龍はその後穴山梅雪から数回に渡って投降の勧告を受けたが、返事をしなかった。そのうち織田軍が古府中に侵入して彼の館を囲んだ。彼は条件を示した。

「余を穴山梅雪のところへ連れて行け、さすればこの館をこのまま明け渡そう。それがいやなら、この館には火を付けて自刃する」

大将の河尻鎮吉は信龍の申し出を聞き取り、彼を捕えて、市川の穴山梅雪の陣へ送った。一条信龍の館はその後織田信長・信忠の本陣となったほど立派なかまえであった。

捕えられた信龍は穴山梅雪の面前で云った。

「武田の名を汚し、武田を亡ぼしたこの裏切者の元兇め、きさまは今年のうちに必ず非業の最期を遂げるであろうぞ。余にはその姿がよく見えるのだ。梅雪とそして梅雪の血につながる一統等もことごとく死に絶えるのだ。必ずそうならでは置くものか」

信龍はそれが云いたくて、ここまで来たのである。一条信龍が市川で首を打たれたのは三月十五日である。そしてこの日から三ヵ月後の六月に本能寺の変が起きた際、穴山梅雪は、徳川家康と共に堺にいた。彼は変を聞き、徳川家康とは別の道を通って駿河へ帰ろうとして、土寇に襲われて非業の最期を遂げたのである。土寇の仕業とみせかけて、穴山梅雪を殺したのは徳川家康だと大久保彦左衛門が『三河物語』に書いているが、この辺が真相であろう。梅雪の子はその後夭折して、梅雪の血統は、一条信龍が予言したとおりになった。

勝頼主従は東へ東へと歩いて行った。直ぐ後を織田の大軍が追跡して来るような恐怖に駆られての逃避行であった。古府中を出て大泉寺、善光寺、石和まで来た。前には笛吹川が流れていた。

ここで道は三路に分かれていた。北へ行けば雁坂峠を経て秩父に至る秩父路になる。笛吹川を渡ったところで御坂路（鎌倉往還）と武相路の二つに分岐する。岩殿城へは、この武相路を行かねばならない。武相路は後甲州街道と云われた道である。

当時の笛吹川は現在の笛吹川より北にあり、平等川のあたりを流れていた。

勝頼主従がこの笛吹川を渡るために、春日居の渡しまで来たときである。勝頼、佐代姫の間に生れて二歳になる勝千代が激しく泣き出した。勝千代は乳母つるの背に負われてここまで来たのだが、あまりに激しく泣き立てるので、佐代姫は勝頼に乞うてしばらく休むことにした。

勝千代は発熱していた。あまりにも急激な生活の変化が勝千代には耐えられなかったのである。

「この熱のある勝千代殿を連れて歩いては、生命が危うございます。幸い、この近くの鎮目というところに渡辺嘉兵衛、瀬兵衛と申す兄弟がおります。確かな者ゆえ、彼等に

かくまって貰い、医者に見せてやったらいいかがでしょうか」

跡部勝資が云った。

佐代姫はわが子と別れたくはなかった。しかし勝千代は発熱している。一行中に医師はいなかった。佐代姫は勝頼の顔を見た。

「やむを得ない。その者たちにかくまって貰うよう頼んでみてくれ」

勝頼は承知せざるを得なかった。跡部勝資は、自ら鎮目の渡辺嘉兵衛、瀬兵衛の兄弟のところへ出向いて行きたかったが、そうすれば人の目に立つので、乳母のつるに書状を持たせてやった。

涙ながらに吾が子と別れた佐代姫は、それからの道中はほとんど泣き続けていた。

渡辺嘉兵衛と瀬兵衛の兄弟は、納戸役を勤めていたことがあった。勤務に手落ちがあったと讒訴されて危うく処刑されるところを勝資に救われ、鎮目の郷に引き込んでいた。この附近では並ぶ者がないほどの家柄であった。人望もあった。渡辺兄弟は、遠縁に当る母子が、古府中から逃れて来たから面倒を見てやっているという口実を設けて二人をかくまった。その後織田軍が武田の落人や、武田家に縁故がある者を懸賞金を出して探し求めたが、この鎮目の村からは一人として訴え出る者はいなかった。つるが乳母であり、その腕に抱かれる子が勝頼の子であることを薄々は知っていたが、誰もそれを口にする者はなかった。勝千代は渡辺嘉兵衛、瀬兵衛の元で一年間は生きていたが、翌年の三月七日に不幸にも病没した。もともと病弱だったのである。嘉兵衛、瀬兵衛は痛く悲しんで、一町田というところに勝千代の遺骸を葬り、ここに芍薬を植え塚を設けた。芍薬塚は現存している。

武田家の最後にはこのような哀話もあったのである。

勝頼主従は笛吹川を渡って、田中、下矢作、小城、中尾、南野呂、下岩崎、上岩崎を通って柏尾の大善寺についたのは暗くなってからである。

勝頼の一行が柏尾の大善寺に来たのは、ここに武田の一門、勝沼次郎五郎信友の娘理慶尼が居たからであった。

勝沼次郎五郎信友は勝頼の祖父武田信虎の弟であった。勝沼地方を領する豪族であったが、兄信虎に叛意があるという口実のもとに殺され、領地を奪われた。当時理慶尼は雨宮氏のもとに嫁していたが、雨宮氏は信虎に疑われるのをおそれて、いそいで理慶尼を離縁したのである。理慶尼が仏門に入ったのはこのような理由による。

理慶尼は勝頼一行を暖く迎えた。

その夜、勝頼夫妻は大善寺境内の一番奥にある薬師堂本堂に泊った。この寺は鎌倉時代に建てられたもので、本堂には平安初期の作になる薬師如来像が安置されていた。

勝頼夫妻は本堂の護摩壇の下に寝所を設けた。薬師如来に向かって右側が勝頼、左側が佐代姫であった。

佐代姫は移り変る運命のはかなさよりも、鎮目に置いて来た勝千代のことが気になって眠れなかった。彼女は夜半ひとりで起き上って薬師如来に向かって祈りを捧げた。

外が騒々しくなった。如来堂に向かって投石する者がいた。板壁に当る音で勝頼や従者が目を覚したほどである。狼藉者は石を投げただけで、去った。かなりの人数のように思われたが、それが誰であるか、なんの憎しみによる投石かは分からなかった。はっきり分かったことは、ここには長くとどまることはできないということであった。

日本最強の武士団といわれていた武田氏がろくな戦いをせずになぜ敗北し、想像もできないような人間なだれ現象をなぜ起したかについて、武田氏研究の権威であり、最近『定本武田勝頼』（新人物往来社刊）を著した歴史学者、上野晴朗氏はその中で次のように書いている。

《これによって見ると、二月末から三月のはじめにかけて、信長は武田の家臣たちに向かって、信忠と親子連名の書をひそかに発行して、織田家に内応した者には、しかるべき恩賞を与えると、謀略の甘言を盛んに流していたことがうかがえる。ところが意外にも、武田家臣のほとんどが、それに引っかかって、土壇場で主君の勝頼を見捨てて、引き籠ってしまったのである。甘いといえばずいぶん甘い話であるが、勝頼が滅んで、信長が恩賞を与えるから出てくるようにという廻文を流すと、すぐにこれを信じていっせいに出てきたところをみると、信長の謀略を謀略とも思わずに、ほんとうに信じていたのは事実であろう。あるいは穴山信君あたりが、添状かなにか付けていたのかも知れない。それにしても武田家臣団というのは、その体質は信玄個人の統率と、その権力構造のなかでは、いきいきと活躍できたが、本来の気質や性格は、現実主義にとらわれやすい、非常に脆弱な武士団気質のあつまりであったとしか云いようがない》

上野晴朗氏は先祖代々甲斐の国の人であり、名家の末である。多くの甲斐の国の人は武田が滅亡した原因のすべてを勝頼におしつけようとする傾向の中にあって、武田の歴史をくわしく調べ、特に武田勝頼については畢生の情熱を傾けて調べ上げた結論として、武田家臣団の気質や性格は、現実主義にとらわれやすい、非常に脆弱な武士団気質のあつまりであったと結論づけたのはまさに卓見というべきであろう。武田家滅亡間際の人間なだれ現象の謎はこの上野晴朗氏の一言によって解かれたともいうべきであろう。

武田家滅亡

勝頼等一行が泊った柏尾の大善寺は甲府盆地の東のはずれに当っていた。ここから武相路（甲州街道）をそのまま東に進んで笹子峠を越えれば郡内に入る。岩殿城までは五里余のところにあった。彼等が泊った大善寺薬師堂本堂の背後は赤松林で、山を背にして眼下にひろがる盆地（甲府盆地）を眺めると、一面にわたり春の朝靄に覆われていた。むごい殺し合いなどあろうはずがないほどののどかな風景だった。

勝頼等が長い石段を降りて寺の境内の外に出ると、家臣たちが騒いでいた。一夜のうちに五百人の供廻りのうち三百人が逃亡してしまったのである。馬を奪ったり、馬に荷をつけたまま逃亡した者が多かった。その悪人どもをつかまえ連れ戻すと称し出て行った者まで帰らぬ始末であった。

「不甲斐なき者ども、恩顧を受けた主君を見捨てて逃げるとはなんたることぞ」

小山田信茂はそう云ってから、

「だがお館様、あと峠を一つ越えれば郡内に入ります。郡内に住む者は一人としてお館様にそむく者など居りません。今朝使いを出しましたから、早々迎えの兵も参るでしょう。御安心下さいませ」

と勝頼をなぐさめた。勝頼等にとっては小山田信茂だけがたよりであった。勝頼は小山田信茂の顔を拝むような目で眺めていた。一行は柏尾を出て間もなく山道に入った。周囲には山が迫り人家は少なくなった。横吹、鶴瀬まで来たとき、笹子峠の方向から騎馬武者を先頭とする二十名ほどの武士の一団が現われた。小菅五郎兵衛が率いる迎えの兵であった。小菅五郎兵衛は岩殿城の城代小山田八左衛門の言葉を武田勝頼、跡部勝資、小山田信茂等の前で述べた。

「岩殿城ではお館様御一行を迎えるため、夜を日に継いで準備をしておりまするが、なにぶんとも小さな城故に苦心をしております。この先に駒飼という村がございます。そこに石見寅右衛門と申す者の家がございます。この家をお館様御一行の宿として用意しておりますので、今宵はここにて御一泊をお願い申し上げます。尚わが殿には至急岩殿城へ帰り、お館様御一行を迎えるためのお指図を願いとうございます」

小菅五郎兵衛が云った。

「なぜ、帰らねばならないのだ。そのために城代の八左衛門がいるではないか」

信茂が云うと、小菅五郎兵衛は、あたりをはばかるよう

な顔をして、いくらか小声で云った。
「八左衛門様はあまりの大事にて、心が転倒し、ただうろたえているばかり……。お館様の居所をどこにどうきめていいものやら、それさえ決めかねており、ましてやお局様の居所はおろか、厠などのことをどう作っていいやら分らずに迷っている始末でございます。はやはやお立ち帰りになって殿がみずから御下知のほどを……」
小菅五郎兵衛は平伏して云った。
「ばか者めが、そのくらいのことができずに城代が勤まるというのか」
信茂は声を荒げて云ったが、こうしてはおられないと思ったのか、勝頼に向って、
「お聞きのとおりの次第ゆえ、拙者が立ち帰って、直ちに居所を設けてお迎えに参ります故、しばらくの御猶予をお願い申し上げます」
と云った。勝頼は家臣たちの顔を見た。跡部勝資が止むを得ないことだろうと云ったので、勝頼は信茂の申出を許した。
信茂は小菅五郎兵衛を引き連れて一足先に岩殿城に向った。後には小山田信茂の家族等がそのまま残された。人質として、家族を残してあるので、跡部勝資も別に不審を抱かなかったし、小山田信茂も城代の小山田八左衛門の気の利かなさに腹を立てながらの帰城であった。
だが、その日、小山田信茂が岩殿城へ帰ってみると、城内の空気がなんとなくおかしいのに気がついた。家来たちの顔がこわばっているばかりではなく、勝頼の一行を迎える準備がしてない。信茂は城代の小山田八左衛門を呼んで、これはいったいどうしたのかと訊くと、それを合図に、にわかに周囲に人が集り、あっという間に信茂の腰の物が奪い取られた。
「さては、八左衛門、そちは主人を裏切ったのか」
と信茂が怒鳴ると、
「とんでもないこと、なんで私が御主人を裏切るなどと考えましょうや、こうなったのは小山田家を安泰に置くためにしたことでございます。まずこの書状をお読み下さい」
と八左衛門は云って、織田父子の文面に穴山梅雪が添え書きをした小山田信茂あての書状、穴山梅雪から直接小山田八左衛門に宛てた書状を見せたほか、上野原城の加藤丹後守信景の書状を見せた。織田父子の書状は、降伏勧告状であったが、穴山梅雪の書状には、勝頼を岩殿城へ入れることを拒否せよ。そうすれば旧領は安堵する。そのように確約すると信長公より内諾を得たと書いてあった。領主を討つなどということは家臣としてできないだろうから、勝頼の一行を岩殿城へ入れないだけでよい。そうすれば小山田家は安泰だと繰り返して書いてあった。
加藤丹後守信景の書状は走り書きであったが、織田軍の進撃の前に為すこともなく瓦解しようとしている武田に対し北条一門の中には激しい批判が出ており、今まで、武田

勝頼に救いの手をさし延べようとしていた方針が変ったらしいという知らせであった。北条氏政の家老で、武田贔屓の松田憲秀は蟄居させられるに至ったという噂さえあると報じていた。
「北条氏が武田を見捨てたとなれば、わが郡内は腹背に敵を受けることになります。とても戦にはなりません。この際は玄蕃頭様（穴山梅雪）のお言葉どおりになされるよりいたし方がないと思います。実は、独断で玄蕃頭様には、承知する旨の書状を出しました。もはやどうしようもございません。これは城内一同の意見をまとめた上のこと故、なにとぞ殿も御同意を願いとうございます」
八左衛門が手をつくと、城内の主なる家来が揃って手をついた。信茂は言葉が出なかった。いやだと云ったら、家来等に斬られるか、捕えられて、牢に入れられるしかなかった。
「人質として母者その他を駒飼に置いて来たが、すべて見殺しにせよというのか」
信茂は血の出るような声を上げた。
「それについては策がございます。万事この小菅五郎兵衛におまかせ下さい」
五郎兵衛が云った。
信茂は承知するも、しないもなく、そのまま城内に軟禁状態とされたのである。
城代の小山田八左衛門と小菅五郎兵衛は、人質奪い返しのためのこまかい計画を立てた。
翌朝、小菅五郎兵衛は再び勝頼一行の泊っている駒飼に現われた。荷駄二十頭に食糧や衣類その他必需品をつけて来たのである。
新府中を出て三日目であったが、それまでろくろく食事らしい食事をしていなかった女子供たちは、どっさり持ちこまれた食糧や衣類などに愁眉を開いた。
「殿（小山田信茂）が自ら指図をなさっておりますから、ここ二、三日中には必ず立派なお住居ができるでしょう」
と小菅五郎兵衛が云った。
「立派な住居ができなくてもいいから、早く郡内に入りたい。ここでは織田勢の追手が心配だ」
跡部勝資が云うと、
「そのことなら、御心配なさいませぬように、郡内より兵を連れて来て防ぎます。既に笹子峠には柵を設ける準備をしております。間も無く警備の兵も参ります。ここは岩殿城の支城とおぼし召して、ごゆるりと御滞在下さいますようにに」
小菅五郎兵衛は口先ばかりでなく、その翌日には二百ほどの兵を率いて来て、附近の警戒に当った。織田軍の到着する様子はなかった。
「なにか御不自由なものはございませんか」
小菅五郎兵衛はそう云って、毎日のように、一行のための必需品を送り届けて来た。笹子峠の交通は遮断されてい

るから人通りはないし、山の中だから戦争などどこにあるかのように静かであった。勝頼等一行はやや小康を得た気持でいた。

勝頼等は鶴瀬で、四日、五日、六日、七日、八日と五日間を暮らした。この間小菅五郎兵衛は勝頼等の警備のために鶴瀬あたりに駐留していた。人数も三百人ばかりになっていた。新府中を出発した折、七百人だった人数がたったの一日で二百人に減ったのを悲しく思っていた一行は、小菅五郎兵衛を大将とする郡内武士三百人が現われたので気をよくしていた。それにこの五日間は、岩殿城より毎日伝令があって、今日はお館様（勝頼）の居所ができました。今日はお局様方の居所が建ちました。あと三日で完成いたします。兵糧は三年分運びこまれましたなどと耳よりな話が勝頼のもとに伝えられた。

三月九日の夕刻近くであった。小菅五郎兵衛は、物見の報告として緊急事態発生を告げた。

「辻弥兵衛なる乱破がおよそ五百人ほどの人を集めて、近づいて来る様子、たいして気になるような敵ではございませぬが念のため、御女中御子供衆より先に郡内へお越しめされるよう、取り敢えず足ごしらえをお願い申し上げます」

と云い置いて、走り下って行った。

このようなことは予期していたことだった。騒然となった。一刻ほど経ったときである。小菅五郎兵衛が五十人ほどの人数を従えて、坂をかけ上って来ると、

「敵はすぐそこまで迫っています。ただ今郡内衆が防いでおりますから、まず、女、子供衆より御避難を願います。拙者が御案内いたします」

と云って、女、子供衆五十人近くを引連れて笹子峠に向ったが、峠の手前まで来ると、小菅五郎兵衛は、

「小山田お身内様よりまず先に御案内申し上げます」

と云って、小山田信茂の母堂や嫡子など十余人を連れて先に行こうとするので、佐代姫に付き添っていた上臈が、

「小菅殿、それは順序が違うのではござらぬか、まず北の方様（勝頼正室）こそ真先にお連れ申し、その後に……」

と云いかけると、小菅五郎兵衛は、

「余計なことを申すな、こっちはこっちの考えがあることだ」

と、上臈の胸を突きとばし、小山田一族の人質だけを連れ、さっさと行ってしまったのである。

駒飼にいた勝頼一行がこれを知って駈けつけた時には小菅等の姿は峠の向うに消えていた。小菅五郎兵衛に人質を奪われたと気がついて、鶴瀬に人をやって見ると、そこにいる筈の郡内の兵たちの影も形もなかった。彼等は間道伝いにすべて郡内へ逃亡した後であった。辻弥兵衛の指揮する乱破の集団は近くにいることはいたが、勝頼主従を襲うほどの勢いにはなっていなかった。すべてが小菅五郎兵衛の計略だった。

勝頼は直ちに土屋惣蔵等を笹子峠へ向わせた。だがそこには小山田信茂の輩下の者が柵を設けていて、近づく土屋等に鉄砲を撃ちかけて来た。小山田信茂の謀叛はもはや、確実となった。

勝頼は、跡部勝資、阿部加賀守、小原丹後守、温井常陸守、秋山紀伊守の五人の家臣と今後のことを相談した。跡部、阿部、小原、温井、秋山の諸将は勝頼の幼少のころから仕えていた側近の家臣であった。

笹子峠が封ぜられたら引き返すよりしようがなかった。引き返していったいどこへ逃げたらよいだろう。織田軍はすぐそこまで来ているのだ。

「小山田がそむいた以上、郡内方面は危険です。近くの日川渓谷沿いの山道を登り、間道を雁坂峠に抜け、秩父に逃れて北条殿にたよる以外に道はないでしょう」

と阿部加賀守が云った。そこにいる誰もが考えていたことであった。反対する者はなかった。

「しからばすぐ出発しなくてはならない。一刻の猶予もないぞ」

跡部勝資が云った。だが、既に夜に入っていた。動こうにも動きようがなかった。

彼等はその夜は眠らずに明かして十日未明に駒飼を発ち、日川に沿って渓谷を登り出した。道案内人を雇おうとしたが、附近の住民は逃げてしまっていないし、物見を放つとそのまま逃亡してしまう者が多かった。

日が高く上ったときに人員を数えるとおよそ百名で、そのうち半数が女と子供であった。その中に、小山田平左衛門、小山田掃部介、小山田弥介、小山田於児等、小山田信茂の一門四人のほかに、その郎党六人がいた。

「お前たちはなぜ逃げないのだ」

と勝頼が小山田平左衛門に訊くと、

「小山田信茂は謀叛した以上敵でございます。われらは死んでも敵に降伏はいたしません。お館様のお身の上が今後どうなろうともお傍にいて御奉公したいと思います」

と云った。小山田一族の中にもこのような者もいたのである。

一行が日川沿いに登って、水野田まで来ると、彼等の後を追って来る者があった。小原丹後守が戻ってその男に会った。もと使番衆（今で云うと若手参謀に相当する役目）の小宮山内膳友晴であった。設楽ケ原の敗戦の最大原因は、御親類衆が勝手に戦列を脱したからであると批判したがために、御親類衆に睨まれ、ついに役を離れざるを得なかった人である。

「お館様の後を追って、御恩報じに参りました」

という小宮山友晴を、小原丹後守は勝頼のところに連れて行った。

「おお内膳……」

言葉が出なかった。勝頼は小宮山友晴の姿を見て、不覚にもほろりと涙を落したのである。武田の重臣をはじめと

して下々に至るまで、勝頼を見捨てて行く中にあって、武田に追われた小宮山友晴が、駈けつけて来てくれたことは嬉しかった。

十日の夜、勝頼の一行は水野田の農家に泊った。住民は一人として見当らなかった。人も居ないし物もなかったが、一行は駒飼から持参して来た食糧で飢えを凌いだ。

この頃、織田軍が勝沼に着いたという報が入った。その数はおよそ五千だと物見は云ってから深い溜息をついた。織田軍がここに攻めよせるのは明朝であることは確実となった。

夜になってから、彼等の行手の山中に点々と篝火が見えた。物見を出して調べてみると、勝頼の一行が日川の渓谷に入ったと聞いてこの附近の郷人が乱破の辻弥兵衛に加担し、間道を登り先廻りしたことが明らかになった。

敵が進路を扼したとすれば、追手はすぐそこまで来ていることは確かであった。勝頼主従は前夜に続いて、この夜も眠らずに、朝を待った。

夜半ころ、山手の方で人の叫び声がした。どうやら斬り合いがなされているようであった。間もなく、傷ついた身を引きずるようにして、現われた男があった。

「加藤丹後守信景殿よりの使者でござる」

男はそれだけ云うのがやっとだった。彼は血に染った書状を阿部加賀守に渡すと、ちょっと眠らせてくれと云って目を閉じた。それが最期であった。

上野原城主、加藤丹後守信景より勝頼にあてた書状には、北条氏政の家老たちがこぞって反対したために、武田に肩入れしようとしていた松田憲秀の意見はしりぞけられ、憲秀は失脚し、北条氏は織田軍に呼応して武田を攻めることになった。また郡内の小山田信茂は北条氏の動きに応じて武田に叛旗をひるがえしたから、上野原城は北条氏と小山田氏の両方から攻められることになった。こうなれば今はただ、死所を何処に求めるかが残るだけになった。生前の恩に感謝をいたすとともに最後のお別れの一言を申し送る次第であると結んであった。

小山田信茂が突然叛旗をひるがえした裏には北条氏政の動きがからんでいるのではないかと、うすうすは想像していた勝頼主従も、ここに至って、逃れるべきところがないことを知った。佐代姫は、

「兄を信じたために、お館様を窮地に追いこむようなことになりました。私はいったいどうしたらよいでしょうか」

佐代姫は泣き崩れた。

「この機になってなにを云うのだ。今はただ死に様を立派にすることだけを考えよ。夜が明けたら、その支度にかかるがよい」

勝頼が云った。勝頼が佐代姫に云った言葉はすなわち、そこまで彼に従って来た家臣全員に対する命令であった。明日こそこの世の最期ぞと勝頼は自分にも妻にも家臣たちにも云ったのである。女たちは涙で袖をしぼったが、男た

ちは懸命にこらえていた。

このころ、加藤丹後守信景は、北条氏の攻撃を受けて、武州箱根ケ崎村まで追いつめられていた。加藤一族が北条氏と戦って一人残らず戦死したのはこの日から三日後である。武州箱根ケ崎村は、現在は東京都西多摩郡瑞穂町に当る。戦死したあたりに加藤神社という小祠があるという。

勝頼は田辺佐左衛門尉を呼んで、

「そちはこのあたりの地理に明るい者を五名ほど連れて武田家重代の宝物、小桜縅威鎧（盾なしのよろい）と日の丸の御旗、そして諏訪法性の旗、風林火山の旗などを持って、山伝いに裂石の雲峰寺へ逃れよ。夜の明けぬうちに、はや出発いたせ」

そして勝頼は嫡子の太郎信勝に向って云った。

「信勝、そちはまだ歳が若い、ここで死ぬのはおしい。田辺佐左衛門と共に雲峰寺に身を寄せ、ほとぼりがおさまったころ、信濃の真田昌幸をたよって行き、後日武田を再興せよ」

しかし信勝は大きく首を横に振った。

「私は主家の危急存亡の時に、旗色を見て逃げかくれたり、急いで敵に叛るような甲斐の国の人たちをこの眼で確かとたしかめました。甲斐の国の人は武田を捨てました。従って、武田の直系の私も、このような背徳行為を平気でする甲斐を捨てます。今さらなんの未練もありません。お家再興などもっての他のことです。私は父上と共に、武田の名と共にこの地で戦って死にます」

信勝ははっきりと云った。甲斐全体に起った人間なだれ現象を、集団背徳行為と見た十六歳の信勝の目は曇ってはいなかった。勝頼は咽喉のあたりで信勝の言葉をがっちりと受け止めた。二度と信勝にこの場を去れとは云わなかった。

田辺佐左衛門尉が武田の重宝を持って山の中に逃れこんだころ、ようやく夜は白々と明け放れて行った。この重宝は三里の山道を彷徨した後、雲峰寺に無事たどりついた。現在もこの寺に保存されている。

勝頼の一行に対する攻撃は夜明けと共に、まず山手にいた土寇の群れから始まったが、ここは狭い谷で断崖をけずってできたような一本道しか通路はないので、ここに柵を設けて、十人ほどの人数でかためると、どうやら防ぎ止めることができた。土寇の群れの大将辻弥兵衛は、断崖の通路を断念し上部の森林地帯に分け入り、大きく迂回して、勝頼たちを襲撃しようとした。土寇の群れが勝頼等を襲うのは時間の問題だった。

勝頼主従は田野を陣地として選んだ。渓谷に面したこの台地は敵を防ぐのに恰好な場所というよりも、死所としてふさわしいからであった。谷を見おろす田野の台地からは両側の山と叫び交すことができるほど山がせまって見えた。

鶴瀬に出してあった物見から、織田軍の先方衆の姿が見

えたという報が入ったのは巳の刻（午前十時）ころであった。それまでに田野の陣地にはまがりなりにも柵が設けられていた。

「拙者等が川下よりの敵を防ぎ止めております。その間になにとぞ、なにとぞ、奥方様をはじめとして……」

阿部加賀守は、勝頼に別れを告げたかったが、後が続かなかった。いよいよ勝頼の正室佐代姫を始めとする側室衆や、子供衆が自決する時が来たのである。

阿部加賀守は勝頼に一礼すると小宮山内膳友晴他十数名を率いて、陣地を出て行った。朝靄は晴れて、日が上った。

佐代姫は死の用意をした。死に様が見苦しくないように、紐で足をしっかり結んでから、黒髪を切って落し、それを四つに分けて小田原から彼女の付添いとしてついて来た甲野（早野と書かれたものもある）内匠助、剣持但馬守、清六庄衛門、清又七郎の四名の者に一束ずつ渡して云った。

「私達の死に様をよくよく見届けてから、この場を逃れ出よ。そして四人のうち誰かは必ずこの黒髪を小田原の兄に届け、一言お恨み申すとだけ伝えられよ」

そして彼女は柵のあたりで家来たちと共に柵をかためている勝頼の後姿に目礼した。その時が来たことを知った女たちも、佐代姫にならって死の準備をした。

佐代姫は懐剣を抜き放ち、心の臓のあたりを確かめてから、そこに突き立てると同時に体重を前にかけて大地に俯した。見事な自決だった。佐代姫の死を追って、勝頼の内室お福の方や、美和の方が自決した。後には順序がなかった。ここまで従って来た、家臣の妻妾たちがまず幼いわが子を突き刺した後、自害した。上薗、中薗たち女中衆もそれぞれ自らの生命を断った。中には手が震えて懐剣を握れぬものがいた。彼女等は、どうぞお願い申しますと、手を合わせて甲野内匠助等に介錯を頼んだ。甲野内匠助等は乞われるままに女の懐剣に手を添えてやった。

まだ死に切れず、血の中にのた打ち廻っている女たちを、内匠助等がいちいち止めを刺して廻った。あたり一面が見るも無惨な血の海となった。女、子供たちが一人残らず死んだのを見ると、そこまで勝頼主従に付きそって来た麟岳大和尚と円首座禅師が読経を捧げた。血の中でその声はふるえていた。

甲野内匠助他三人は佐代姫等の死を見届けてから遺言どおり、近くの山に向って突走った。そこには既に土寇の群れが待っていたが、四人は力を合わせて、そこを斬り抜けようとした。二人がここで死んだ。残った一人は郡内に出てから殺され、結局甲野内匠助一人だけが、十日の後に小田原城にたどりついて、北条氏政に面会した。

「これが佐代姫の髪か……」

北条氏政は末の妹の黒髪を手にして暗い顔をした。

甲野内匠助がすかさず、遺言がございますと云った。

「なに佐代姫の遺言じゃと、申してみよ」

氏政は膝を乗り出した。

「兄上様の裏切りをお恨み申します。あの世に行っても、きつくきつく、兄上様を憎み北条氏を呪いますと云い残して立派に自決なさいました」

あとの方は甲野内匠助のつけ足しであったが、氏政はこれを聞いて顔色を変えた。甲野内匠助はその夜、腹を切って死んだ。佐代姫に殉死したのである。

勝頼は女、子供のすべてが自害して果てたことを背で感じていた。見てはならないと思った。自分も彼女たちの後を間もなく追って行くのだと思うと、なぜか女、子供たちにおくれを取ったような気がしてならなかった。

矢が山手の方から飛んで来た。間もなく、川下の方からも飛んで来る。山手を防いでいた者はどうなったであろうか、もし彼等が戦死したら、土寇等が一度に押し出して来るだろう。できることなら土寇等に首を取られたくはない、武士は武士と戦って死にたいと勝頼は思っていた。阿部加賀守が血だらけになって、帰って来て云った。

「小宮山内膳等十一名は立派に戦死いたしました」

それだけ云うのがやっとだった。

「土屋惣蔵様、温井常陸守等が防いでおりますが、とても持ちこたえられません。間もなく上の柵を越えて敵は押し出して参るでしょう」

鎧の袖に矢を三本立てたまま本陣にたどりついた小山田平左衛門が云った。その時である。勝頼は眼前に一度にどっと人間が湧き出るのを見た。十人二十人いや百人か二百人の武者たちが、槍や刀を持って一気に坂を登りつめて攻め寄せて来るのが見えた。

落人狩りは武技ではなく足の速さで決るのだとさえ云われていた。槍や刀は達者でなくとも、足さえ速ければ大将首を拾うことができた。織田軍の河尻秀隆隊、滝川一益隊の先方衆が大将首を拾うために、目の色を変えて駈け登って来たのである。彼等の鬨の声は、獲物に向って襲いかかる野犬の吠える声とどこか似ていた。

一団となって迫った敵の圧力を一度は柵でささえることができた。柵につまった敵兵は背後から押されて柵の内部にころがり落ちた。そこを勝頼の家来によって、芋刺しにされた。芋の上に芋が重なり、その上にまた次の芋が重なると、もはや柵はないも同然だった。この日の功名手柄のために生命を賭けた兵たちが味方の死体を踏みこえてどっと柵内になだれこんだ。

勝頼は大刀を取り、信勝は槍を取った。信勝は突き出した槍でまたたく間に三人を突き伏せた。

「あっぱれ信勝よ」

信勝は四人目の敵に槍をつけたとき父勝頼の声を聞いた。信勝は初陣を父の言葉によって飾れたのが嬉しかった。信勝の槍が四人目の敵の咽喉を刺したとき、彼自身も腹に熱いものを感じた。数人の敵が一度にどっと信勝に襲

いかかった。

勝頼は大刀で敵と戦っていた。周囲に味方は見えなかった。勝頼は鎧櫃を背にして戦った。七人斬ったか八人斬ったか覚えてはいなかった。弱い敵だった。ろくに刀の使い方も知らない。おそらくは農夫が鍬を刀に持ちかえたような敵兵だったが、どれもこれも若くて一所懸命だった。斬っても斬っても際限なく敵は斬りかかって来た。

一段と背が高くてたくましい敵が現われた。

「伊藤伊右衛永光！」

と彼は大声で名乗るといきなり勝頼に向って斬りつけて来た。勝頼はその刀を払いのけたが、敵がそのままぶつかって来たので押し倒されて鎧櫃の上に倒れた。前後左右から一度に敵がおり重なって来た。勝頼の首を挙げたのは伊藤伊右衛であった。

勝頼が戦死したのが最後だった。武田方ではもはや生きて戦っている者は一人もいなかった。この頃になって、足の遅い組が戦場に到着した。彼等は獲物を探し求めた。首が欲しかった。首を取らねば恩賞が貰えなかった。彼等は、そのために長い道中をここまで来たのである。飢えた織田軍は、佐代姫たちの自決の場で読経している二人の僧を殺して首を取った。自害した女衆や子供衆の遺骸の首を取った。それを止める者さえいなかった。

辻弥兵衛の率いる土寇等も功名手柄が欲しかった。死んだ武田の将兵等の着ている鎧や持っていた刀が欲しかった。彼等は、山から姿を現わした。彼等の姿を見た織田の軍勢は、よき首ござんなれとばかりに襲いかかった。

「味方だ、味方の辻弥兵衛であるぞ、血迷うな」

辻弥兵衛だけが鎧を着ていた。その姿を見て、首に飢えていた軍兵たちは、それあそこに大将首があるぞと襲いかかった。弥兵衛はたちまち首と胴になり、弥兵衛に煽動されて、土寇と化したこの界隈の郷人共も次々と首を取られた。

血の昂奮は夕刻まで続いた。谷を埋め尽していた軍兵五千余が引き上げた夜には寒い寒い月が天目山の上に出た。その淡い月の光の中を多くの人がうごめいていた。武将の鎧や刀は既に持ち去られていたが、首のない遺体は着衣をつけていた。死体からはそれさえも剝ぎ取られて裸にされた。自害した女衆や子供たちの血に染った着衣もことごとく奪われた。その悲しい姿の上に申しわけのように筵がかぶせられた。

勝頼に従って最後を共にした氏名やその数については幾つかの説がある。武田が滅亡した直後に徳川家康が、武田の旧臣を懐柔する目的で、田野に建立した景徳院の牌子によると、勝頼と共に死んだ人は勝頼、夫人、信勝の他に僧二人、武士三十三人、女子十六名の合計五十四人であり、『甲陽軍鑑』には殉死したのは四十四名とあり、『甲斐国志』には十九名の名が記されている。『信玄全集』には殉

死者として四十七名が記録されている。殉死名もそれぞれで少しずつ違っている。『甲陽軍鑑』その他は、かなり後になって書かれたものであるから、ここでは景徳院牌子によって、田野の露と消えた人々の名をかかげる。

武田勝頼三十七歳、勝頼夫人十九歳、武田信勝十六歳、麟岳大和尚、円首座禅師、土屋惣蔵昌恒、河村下総守、安(阿)部加賀守貞村、温井常陸介、跡部尾張守(勝資)、小宮山内膳友晴、金丸助六郎昌義、小山田平左衛門、小山田掃部介義次、小山田弥介、小山田於児、秋山紀伊守光綱、秋山杢介、小原丹後守忠次、小原下総守忠国、安西伊賀守、岩下総六郎、小原源太左衛門、秋山源三郎景氏、秋山宗九郎、秋山民部光明、秋山宮内、多田久蔵、内藤久蔵、小原下野守、山野居源蔵、神林清十郎、小原清二郎、有賀善左衛門、土屋源蔵、穴沢次太夫、薬袋小助、貫井新蔵。この他十六名の女性の戒名があるが、その名は不明である。当時としてはやむを得ないことであったであろう。跡部勝資は長坂長閑斎と共に武田を衰亡に導いた大悪人とされているが、景徳寺牌子にはその名がちゃんと記されている。

最後に及んで勝頼を裏切った、小山田信茂や小菅五郎兵衛等は、勝頼の死後、織田信忠の呼出しに応じ、人質として嫡男まで連れて古府中に出頭した。恩賞を貰えるものと確信していたのである。彼等は直ちに捕えられて、首を刎ねられた。「ここに古今未曾有の不忠者がいる。どういう顔かよく見て置くがいい」

織田信忠は家臣たちに小山田信茂の顔を見せてやってから首を刎ねたのである。

御親類衆や武田の旧臣で、勝頼に協力せず家に引き込んでいた者の多くは、出てくれば恩賞を与えるという織田信忠の廻状を信じて姿を現わし、首を刎ねられた。記録に残っている大物だけで四十名ほどである。

実際はその十倍か二十倍はあったであろう。武田信豊は信濃の小諸に逃げた。ここでしばらく形勢を見ようと思っていたが、この城にもいち早く敵の手が廻っていて、城代の下曽根信恒に叛かれて殺された。

武田家は新羅三郎義光以来、実に五世紀近くにわたって甲斐を統治していた。それにしては、背徳の渦の中で滅んで行ったその最後の姿はあまりにも哀れであった。

武田龍宝(龍芳)は信玄の次男として生れたが、目が不自由であったから僧となった。信玄は、僧の妻帯を許していた。龍宝にも信道という子がいた。龍宝は目は見えなかったが、目明きよりも行末を見透していた。織田軍からは彼のところにも降伏勧告状が届いた。僧だからいっさいの危害を加えないから、そのままで居るようにと、梅雪の添え書きがあったが、彼はそれを信じなかった。龍宝は織田軍が古府中に侵入する前に家族を安全な場所に避難させ、織田軍が古府中に入ると同時に自刃して果てたのである。

——武田勝頼・完——

あとがき

徳川時代になってから、武田氏は高家として待遇されるようになった。武田信道がこの高家を継いだ。時々テレビや新聞や雑誌などでお目にかかることができる武田昌信氏は武田龍宝から数えて十四代目の武田家当主である。

私が勝頼終焉の地を訪れたのは一昨年の二月十七日であった。狭い谷の道を登って、田野の景徳院の台地に立って見ると、日川沿いのこの渓谷は、人の世からは忘れ去られたように狭い淋しいところのように感じられた。今でこそ、附近には桃畑や桑畑があり、人家もあるが、当時はごく僅かの畑と人家しかなかったに違いない。勝頼の最後の地だけあって、ところどころに碑があったり、案内板が掲げられてあったが、それらに書かれてある内容の多くが後世創作された話であろうと想像されるだけに、ことさら悲しい思いをした。

私はこの谷を半日歩き廻った。午後になり、雲が出、やがて冷い雨となった。一応の取材が終って、勝頼公生害石と書いてある立札の傍に立ったときである。雨が霰(あられ)に変った。取材ノートに書きこんでいるボールペンが使えなくなったほどの気温の急降下であった。この時、私はそのノートにかすれた字で一句を書き残した。

勝頼の涙の霰(あられ)石を打つ　　次郎

小説「武田勝頼」は、「続武田信玄」として七十回にわたって「歴史読本」誌上に昭和四十八年十一月より昭和五十四年八月まで毎回四〇〇字詰三十枚ずつ書き綴ったものである。長い間、資料その他で御援助下さった方々や読者の皆様に厚くお礼を申上げて筆を擱く。

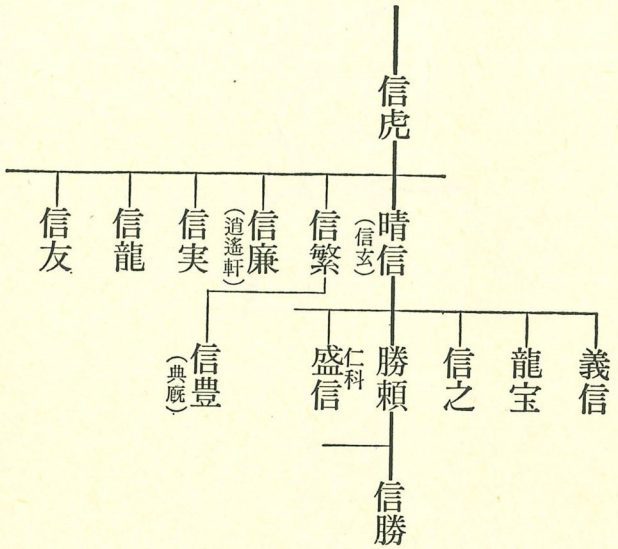
昭和五十五年一月十日

新田次郎

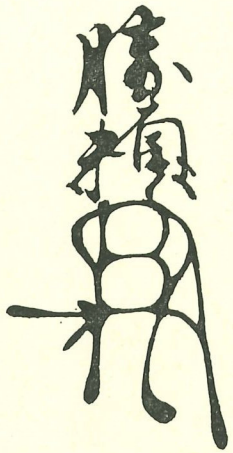
参考文献

『甲斐武田氏』上野晴朗著　新人物往来社
『定本武田勝頼』上野晴朗著　新人物往来社
『武田武士の系譜』土橋治重著　春秋社
『長篠之戦』高柳光寿著　春秋社
『甲陽軍鑑』磯貝正義、服部治則校注　人物往来社
『武田史料集』清水茂夫、服部治則校注　人物往来社
『上杉史料集』井上鋭夫校注　人物往来社
『信長公記』桑田忠親校注　人物往来社
『家康史料集』小野信二校注　人物往来社
『家康の臣僚』中村孝也著　人物往来社
『北条史料集』萩原龍夫校注　人物往来社
『信松尼公記』北島藤次郎著　信松尼公記刊行会
『甲斐叢書』十二巻甲斐叢書刊行会編　第一書房

武田氏略系図



武田勝頼の署名と印判



武田勝頼㈠陽の巻、㈡水の巻、㈢空の巻の各巻布表紙にカラ押しにした文字は、勝頼の署名で、名前の下の文様は花押。

勝頼が弘治三年（一五五七）以降に使用した龍印で父信玄の印をそのまま用いたもの。〈㈠陽の巻のカバーの背、および布表紙の背のカラ押し〉

勝頼が天正三年（一五七五）、長篠の戦いの年から使用した獅子印。〈㈡水の巻のカバーの背、および布表紙の背のカラ押し〉

勝頼が天正八年（一五八〇）以降から使った角印で勝頼とある。〈㈢空の巻のカバーの背、および布表紙の背のカラ押し〉

武田勝頼 (三)空の巻

著者 新田次郎

定価 九八〇円

昭和五十五年五月二十三日 第一刷発行
昭和五十五年七月十五日 第五刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽二丁目一二丁目二一
郵便番号 一一二
電話 (〇三)九四五―一一一一(大代表)
振替 東京八―三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

©新田次郎 Jiro Nitta 1980 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093-306777-2253 (0) (文2)

新田次郎の文芸作品

感動の書下ろし巨編

聖職の碑（いしぶみ）

駒ケ岳稜線上に聳える遭難記念碑に刻まれた11の名。信濃教育界に深い哀しみの影と問題を残した惨劇の実相を描く話題作！**九八〇円**

伝統に生きる男のドラマ

笛師

厳しい世襲の笛師の世界、それゆえに苦難の道を歩んだ父と息子たち——伝統の中に生きる人間・笛師を描いた長編問題作！**八五〇円**

異色長編小説

風の遺産

山を通して触れ合った一組の男と女。冬の谷川岳に挑み山中に閉じ込められた二人。生還を期す彼らを待つ人々の目は……。**八五〇円**

自然破壊への怒りと悲しみ

鷲ケ峰物語

雄大な自然を背景に、微妙に綾なす人間心理の襞を描く中編力作集自然への畏敬の心を失った現代人に残されたものは……。**八九〇円**

最新書下ろし長編

密航船水安丸

密航者82人を連れて新天地カナダへ出帆した及川甚三郎は、ついに日本人の島を……。開拓者の劇的な生涯を描く長編小説。**九八〇円**

定価は改定することがあります

講談社

無敵武田軍団の若き統領武田勝頼にそそぐ深い愛情、透徹の目で得た驚くべき事実と謎の解明。新田次郎の最新、最後の長編！

新田次郎著

武田勝頼

全巻発売中！

(一)陽の巻　信玄よりも恐ろしい武将！織田信長を戦慄させた勝頼とは？

(二)水の巻　戦国最大の長篠の戦。織田・徳川四万三千に挑む武田全軍。

(三)空の巻　武田家新生に賭ける勝頼と対立する武田親類衆激動のドラマ。

各巻・九八〇円

講談社